
アスカ・ブライト！ ～空の軌跡～

朝陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アスカ・ブライト！ ～空の軌跡～

【Nコード】

N7882Q

【作者名】

朝陽

【あらすじ】

使徒レリエルの戦いで、勝負を焦った式号機は使徒の影（本体）に飲み込まれてしまう。初号機も助けに向かったが、同じように飲み込まれてしまい、使徒の体内は異次元空間に通じていた。シンジとアスカの二人がたどり着いたのは剣と魔法の力が支配する不思議な世界。二人は遊撃士のカシウス・ブライトに拾われ、ブライト家の家族となる。そして二人はヨシユアとエステルと出会い、ダブルカップル遊撃士がりべール王国と第三新東京市の危機を救う！

※作者名をハルから朝陽に変更しました。

※新世紀エヴァンゲリオンと空の軌跡（軌跡シリーズ）のクロスオーバー小説です。

※第36話を公開しました。アスカはシンジを夜の露天風呂に呼び出して誘惑する。

リメイク前の作品についてのご案内とお知らせ

<修正履歴>

9／7に新しい29話を作成し、それまで29話だったものを30話に繰り下げ、頂いた感想を参考に内容の微妙な修正を行いました。20話の修正はタイトルに「第二十話」を付け忘れただけの修正で内容に変化はありません。

<リメイク前の作品についてのご案内>

リメイク前の作品『僕のアスカ。太陽のような君。』&『軌跡の戦士エヴァンゲリオン』セットは下記アドレスからご覧になれます。
(作者の作品一覧にもあります)

<http://ncode.syosetu.com/n11241/>

※リメイクに伴う変更点

- ・視点を3人称に変更
- ・進行をスピードに余裕を持つ
- ・主要キャラを絞る

頂いた感想を参考に、この3点について気を付けたいと思います。人数の都合により、出番が削られ全く登場しない原作キャラクターもあると思うのでご了承ください。

ご感想ありがとうございました、この場で厚くお礼を申し上げます。

第一話 エヴァンゲリオン、出現

西暦2015年、日本の領海に突然謎の巨大生物が出現した。

その巨大生物は『使徒』と呼ばれ、倒さなければ『サードインパクト』と言う大爆発を起こされ人類は滅亡すると、国連のトップの内では知られていた。

国連軍は在日アメリカ軍と日本の戦略自衛隊を主力に戦いを挑んだが、使徒の前に敗退。

しかし、その使徒を倒す切り札を持つ、『特務機関ネルフ』と呼ばれる超法規的軍事研究組織の本部が日本には存在していたのだ。

特務機関ネルフは、『エヴァンゲリオン』と呼ばれる巨大人型ロボットのような外見の兵器で襲いかかって来た使徒を倒す事に成功した。

エヴァンゲリオンは、零号機、初号機、弐号機の3機が存在し、そのパイロットは3人とも14歳と言う思春期真っ只中の中学2年生の少女少女だった。

零号機のパイロットは、綾波レイ。

初号機のパイロットは、碇シンジ。

弐号機のパイロットは、惣流・アスカ・ラングレー。

この3人は、ネルフの士官である葛城ミサト1尉の作戦に従い、次々と本部を襲いかかって来る使徒をエヴァンゲリオンで撃退して行った。

物語は、ネルフ本部のある第3新東京市に第14使徒レリエルと呼ばれる使徒が襲来して来た所から始まる……。

<第三新東京市 市街地>

突然、市街地の郊外の上空に巨大な白黒縞模様の球体が姿を現し、浮遊しながらゆっくりとネルフ本部へと接近して来た。

ネルフ本部は巨大な球体は使徒と断定し、エヴァンゲリオン初号機、式号機、零号機の三機による迎撃を決定。

ミサトが立てた迎撃作戦の内容は、先日のシンクロテストで一番の好成績を残したシンジの乗る初号機が最初に攻撃し、零号機と式号機は後方で待機して様子を見えるというものだった。

そしてミサトがシンジにライフルによる遠距離からの攻撃の指示を下そうとする直前、アスカの乗る式号機が初号機の前をさえぎり、使徒の元に突撃した。

『アスカ、あなたはバックアップのはずよ、戻りなさい！』

ネルフ本部で作戦の指揮を執るミサトの声がエヴァ各機に伝えられるが、アスカの乗る式号機は動きを止めなかった。

先日のシンクロテストで好成績を残したシンジが先陣を切るなど、今まで3人の中で一番のエースパイロットだと思っていたアスカのプライドが許さなかったのだ。

式号機は斧の形をした武器を振りかざすと、使徒の本体だと思われる浮遊する球体にジャンプして切りつけた。

しかし、その式号機の攻撃は空を切り、着地した式号機は足元から地面に映る球体の影だと思われた部分に飲み込まれて行った。

『ちょ、ちょっと、コレ、どうなってんのよ！？』

突然の事態にパニックになる式号機のパイロット、アスカの声が通信を通じて初号機に居るシンジ、発令所に居るミサトに伝わった。そのアスカの声を聞いた初号機のパイロット、碓シンジは沈みゆく式号機の元へと走り始めた。

エヴァンゲリオンにはアンビリカルケーブルと言う電源を供給する

ためのケーブルが尻尾のように伸びている。

そのケーブルを引き揚げれば、安全な場所から式号機を引っ張り上げる事ができたのかもしれないが、冷静さを失っていたシンジには思いつかなかった。

さらにシンジは以前、使徒との戦いで式号機が火口のマグマの底に沈みそうになった時、式号機の腕を直接取って助けたと言う事を思い返したのだ。

式号機の方も初号機に向かって手を伸ばし、初号機は式号機の手をつかむ事に成功した。

『シンジ君、式号機を離して撤退しなさい！ あなたまで巻き込まれるわ！』

ミサトの言葉通り、初号機も黒い影に飲み込まれかけていたのだ。しかし、初号機を操るシンジは決して式号機の手を離そうとしなかった。

そして、初号機と式号機は頭の先まですっぽりと黒い影の中に飲み込まれてしまった。

『レイ、アンビリカルケーブルから初号機を引き揚げて！』

『了解……！』

ミサトの指示を受け、零号機は急いでアンビリカルケーブルを引き揚げ始めた。

レイにとってシンジは心を開いた大事な相手。

何としてでも初号機を助けたかったが、その願いは無残にも打ち碎かれた。

引き揚げたケーブルの先には、何も無かったのだ。

『碇君……！』

零号機のパイロット、レイの目から涙があふれた。

＜リベール王国 ヴアレリア湖＞

黒い影に飲み込まれた初号機と弐号機のパイロットであるシンジとアスカは、落ちて行く中で浮遊感のようなものを感じていた。視界一面に広がる闇。

初号機は自然と弐号機に抱きつくような姿勢を取っていた。そして突然視界が明るくなり、着水の衝撃音が辺りに響き渡る。湖の水深は直立した初号機と弐号機が胸の高さまで沈み込む程度のものだった。

エヴァンゲリオンの内蔵電源は空になってしまい、初号機と弐号機のパイロットであるシンジとアスカは機体の首の付け根に当たる部分から機体の外へと脱出し、エヴァの肩の上に乗った。

「な、なんでアタシを助けるなんて余計な事するのよ、おかげでアタまでこの様じゃない」

「ご、ごめん……僕のせいで……」

助けられた事に素直に感謝を示せないアスカは強がってシンジを怒鳴ってしまった。

怒鳴られたシンジも反射的にアスカに対して謝ってしまう。アスカは気分を落ち着かせるために湖の周囲を見回すと、おかしいことに気がついた。

周囲の岸边に高層ビルのような近代的な建築物が見当たらないのだ。透き通るような青い空には鳥が舞い、飛行機の姿すら見当たらない。

「アタシ達、とんでもない田舎に漂流してしまったのかしら？」

アスカはそんな事をポツリとつぶやいた。

エヴァに内蔵された携帯電話も確認してみたが圏外なのか通じない。岸まで泳いで行くにしてもかなりの距離がある。

アスカは諦めてこのまま救助を待つことにした。

そして、シンジとアスカの間の沈黙が気まずい雰囲気を作り上げそうになった時、大きな水音が2人のもとに近づいて来るのが分かった。

その水音の正体は、カシウスの乗るエンジン付きのボートだった。

カシウスはぼう然とするシンジとアスカの目の前で、ボートからエヴァの肩へと飛び移った。

「この湖に落ちて来たデカ物はお前さん達のものか？」

突然話しかけられたアスカとシンジは何の反応を示す事も出来ず、固まるだけだった。

すると、カシウスは困った顔になり、持っていた棒でアスカとシンジの急所を叩いた。

声も出せず体から力が抜けて倒れるアスカとシンジ。

「時間が無くて手荒な方法を取るしかないんだ、すまん」

カシウスはそうアスカとシンジの耳元でささやきかけると、アスカとシンジの体をついでボートに乗せ、ボートを走らせた。

「知らない天井だ……」

シンジが意識を取り戻して目を覚ますと、そこはヴァレリア湖の湖畔に建つ川蝉邸の客室だった。

隣にはアスカが寝かされている。

シンジはアスカが居る事に安心してため息をもらした。

「よお、お前さん、目が覚めたか」

シンジはカシウスに声をかけられて驚いて振り返った。

「まあ、そんなに怯えるな。これからお前さんに事情を説明するから。そうだ、お前さんって呼び続けるのも味気ないから、とりあえず名前を覚えてくれないか？」

カシウスの穏やかな口調にシンジも安心したのか、シンジも素直にカシウスの質問に答えようとする。

「僕の名前は、シンジです」

「そうか、俺はカシウス・ブライトだ」

笑顔のカシウスに伸ばされた手をシンジもつかみ、照れ臭そうに握手を交わす。

これはシンジがカシウスに心を許した瞬間でもあった。

これが、カシウスとシンジの出会いだった。

第二話 カシウスの誓い

<リベール王国 川蟬邸>

「カシウスさんは、どうして僕達を助けてくれたんですか？」

「まあ、遊撃士としての職務だからな」

「遊撃士？」

シンジが困惑した顔でカシウスに尋ねると、カシウスも困惑した顔になる。

「遊撃士を知らないのか？」

「はい、初めて聞く言葉です」

「遊撃士協会はリベール王国はもとより、周辺の国々にも存在する組織だが……お前さん達よっぽど遠くから来たのか？」

「それは分からないですけど、この辺の景色に見覚えが無い事は確かです」

「遊撃士と言うのは、民間人を保護して安全を確保する事を最優先にしているんだ」

「へえ、警察みたいなものですか？」

「警察？ ああ、クロスベルにある組織の事か。そうだな、職務が似たような部分はあるな」

カシウスとシンジが話をしていると、ベッドで寝かされていたアスカが目を覚ます。

「う、うーん……」

寝起きの悪いアスカは、焦点の定まらないしばらく辺りを見回し、

カシウスの姿を見ると人差し指を突き付けて叫ぶ。

「あーっ、人さらい！」

「酷い言われようだな」

「アスカ、この人は僕達を助けて保護してくれたんだよ」

シンジがそう言っても、アスカは聞く耳を持たない。

「きっとアタシ達を拷問にかけてエヴァの秘密を強引に聞きだすつもりよ」

「そんな！」

「アタシ達に手を出したらネルフが黙っちゃいないわよ！」

「やれやれ」

アスカがカシウスに向かってそう言い放つと、カシウスは困った顔でため息をついた。

その直後、カシウスは階下の気配に気が付いたのか、真剣な表情に変わる。

「シンジ、2人で兵士に捕まって牢屋にぶち込まれなくなったらその子を押さえて隠れている」

「はい」

「何よ、まだ言いたい事が……！」

カシウスの口調に鬼気迫る物を感じたシンジは、今までに無い力強さでアスカを強引にベッドの影に押し込んで口を押さえた。

部屋のドアがノックされ、兵士が部屋へと入って来る。

「これはカシウスさん」

「よお、慌ててどうしたんだ？」

「今朝、ヴァレリア湖に巨大な物体が墜落した事件はご存知ですか？」

「ああ、宿屋の主人から聞いた」

「珍しいですね、カシウスさんならすぐに現場に駆けつけて軍と顔を合わせていると思ったんですが」

「そうだな、ああいう手合いは軍に任せた方がいいと思ってな。遊撃士の仕事は民間人の保護が最優先事項だしな」

「普段からそうだとモルガン將軍の機嫌も損なわれずに助かります」

「ははは、考えておくさ。それで、わざわざ俺を尋ねて来たわけは？」

「はい、ヴァレリア湖に落下した巨大な物体は2体とも入口が開いており、中には人が乗れるような操縦席がありました」

「ほう、じゃあお前さん達はその操縦席に乗っていた人間を探しているのか」

カシウスがそうつぶやくと、シンジとアスカは体を震わせた。

「ええ、ですからボートで脱出してこの辺りに潜伏しているのではないかと搜索をしているわけです」

「それでこの川蟬邸にも来たわけか」

「はい、ですからこの部屋も調べさせていただきたいと……」

兵士の言葉を聞いたシンジとアスカは心臓が止まる思いがした。

「待て待て、調べる所が間違っではないかい？」

兵士が部屋に踏み込もうとすると、カシウスはそれを制止した。

「どういう事ですか？」

「ボートで逃げたとは限らないじゃないか」

「やっぱりカシウスさんもそう思われますか！」

カシウスがそう言うのと、兵士は嬉しそうにそう叫んだ。

「ん、どうかしたのか？」

「これは失礼を。実は私もあの巨大な物体に乗っていた人物は湖を泳いで逃げて行ったものだと考えているのです」

「どうしてそう思うんだ？」

「我々も、あの巨大な物体を操縦する事が出来ないかと考えたのですが、操縦席はオレンジ色の血の匂いのする液体で満たされており、不可能でした」

兵士の言葉を聞いたカシウスはかすかに笑いを浮かべた後、大げさに慌てるような表情を作って兵士に告げる。

「きっと、中に乗っていたやつらは伝説の半漁人のようなやつに違いない！ここにこだわるよりも湖の周辺をくまなく探して足跡などが無いか探した方が良いぞ」

「はっ、カシウスさん、素晴らしい助言をありがとうございます！」

兵士はカシウスに敬礼をして部屋の外に出て行った。

そして、川蟬邸の中に居る兵士達に湖の岸辺の足跡を探すように命じたのか、一気に兵士の気配が消えた。

すっかり静かになると、カシウスは安心したようにため息をもらした。

そして、ベッドの影に隠れているシンジとアスカに呼びかける。

「おい、もう大丈夫だぞ」

シンジとアスカはゆっくりと頭を上げた。

「俺にとっても意外だが、兵士達はすっかり半魚人が乗っていると思ひ込んでくれたようだな」

カシウスはとても嬉しそうな顔でシンジとアスカに呼びかけた。

「どうして、アタシ達をかくまったのよ？ 兵士達にばれたらアンタもただじゃ済まなくなるんでしょう？ それに、アタシ達が国の安全を脅かす危険な存在とか、考えたりしないの？」

「いや、俺にはお前さん達が絶対に悪いやつらだとは思え無くてな」「どうしてですか？」

「俺にも、お前さん達と同じ年頃の娘と息子が居てな。兵士達に引き渡すなんてとてもじゃないが耐えられなかった」

カシウスはそう言って、シンジに視線を送り、隣に居るアスカを見つめた。

アスカはカシウスが自分を優しく、そして悲しげな目で見つめているのに気が付いた。

それはまるで娘を氣遣う父親のように感じられた。

アスカ自身は父親の顔を覚えては居ないと言うのに。

「お前さんも名前を覚えてくれるな？」

「……アスカ」

照れ臭い気分になったアスカは、顔を背けてそう答えた。

「そうかよろしくな、アスカ」

カシウスは困った顔になりながらも笑いを浮かべてアスカに話しかけた。

シンジはほっとしたように胸をなで下ろした。

「それでお前さん達、これからどうするんだ？」

「僕達は、ネルフに戻らないといけないんです」

「ネルフ？ 何だそれは、どこにあるんだ？」

「第三新東京市ですけど、カシウスさんはご存じありませんよね」

「ダイサンシントウキョウシ？ カルバード共和国辺りの街か？」

「やっぱり……」

シンジは頭をひねりつつづけているカシウスの姿を見て、ため息をもらした。

そして、隣に居るアスカに問い掛ける。

「電話も無いだろうし、どうやってネルフに帰ろう？」

「……アンタだけで勝手にネルフに帰りなさいよ」

「アスカ？」

「もうネルフに戻ってもアタシの居場所なんて無いのよ！」

「どうしてそんな事を言うんだよ」

「アタシが命令違反したせいで式号機じゃなくて初号機も使徒に飲み込まれちゃったのよ。それに、ミサトはアタシを……」

アスカはそう言って悔しそうに顔を震わせた。

式号機が使徒に飲み込まれる直前、ミサトは初号機に式号機の腕を離して撤退するように命令していた。

もちろん、それは正しい事だとは理解している。

しかし、アスカは見捨てられたと感じているのだと、シンジにも分かった。

「分かった、じゃあ僕もネルフには戻らない」
「シンジ？」

シンジがアスカの手をつかんでそう断言すると、アスカは驚いた顔をしてシンジを見つめた。

「……2人とも帰る当てが無いのなら俺の家に来ないか？」

「カシウスさんの家ですか？ でもご迷惑に……」

「気にするな、家族が1人増えようと、2人増えようと、3人増えようと変わらん」

「3人？」

カシウスの言葉にシンジは頭をひねって聞き返した。

「ああ、俺の息子はな、血は繋がって居ないんだ。3年ぐらい前に遊撃士の仕事の関係で家に住まわせている。でも、今は俺は息子同然だと思っている」

「それって、僕達がカシウスさんの家族になるってことですか？」

「どうだ？」

カシウスに言われたシンジは、カシウスに飛びつき抱きついた。自分の実の父親であるゲンドウに抱きついた事など一度も無い。シンジの目の前に居るカシウスは、本当の父親以上に父親を感じさせるものだった。

「よろしくおねがいします……」

「アスカはどうする？」

カシウスに尋ねられたアスカは顔を赤くしながらゆっくりとカシウスに近づき抱きつく。

「気に入らなかったら、すぐに家を出て行くからね！」

「そうか、失望させないように頑張らないといけないな」

抱きついて来たアスカとシンジの頭を撫でながら、カシウスはもう一言つぶやく。

「もう2度とお前達に悪夢は見させないから……」

第三話 二人の娘

＜ボース地方 川蟬邸＞

カシウスはシンジとアスカに着ていたプラグスーツを隠すフード付きのローブを渡した。

搜索隊の注意が湖の妖怪にそれたとは言えやはりプラグスーツは目立ちすぎるからだ。

「何かダサイわね。ねえ、街に着いたら新しい服を買っていい？」

「はっはっはっ、早速アスカはパパにおねだりか」

カシウスが笑うと、アスカは顔を赤くした。
そんなアスカをカシウスは軽く笑い飛ばす。

「まあ、服よりもまずは腹が減っただろう、ここの飯は美味しいぞ」

3人は下のロビーで夕食を取る事になった。

「この子達の事を黙っていてくれて本当に助かったよ」

「カシウスさんにはいつもお世話になっていきますからね」

川蟬邸の主人である青年はカシウスに笑顔でそう答えた。
ここは兄妹が経営している宿屋で、ヴァレリア湖でとれる新鮮な魚で作られた料理は絶品と評判だった。

「どうした、魚は嫌いか？」

料理に手を付けないアスカを見て、カシウスは声を掛けた。

「えっと、魚は嫌いじゃないんだけど……」

「はいアスカ、魚の骨を取ったよ」

はしで魚の骨を取り終ったシンジがいつものようにアスカに皿を渡すと、アスカは顔が真っ赤になった。

「シンジとアスカはそこまで仲が良かったのか、別に恥ずかしがって隠す事はないぞ」

「アタシとシンジは命令で仕方無く一緒に住んでいただけなのよ！」

カシウスがニヤニヤした顔で言うと、アスカはそう言い返した。
アスカの言葉を聞いたカシウスは少し悲しそうな表情に変え、2人に向かって優しく話しかける。

「もう誰の命令に従う必要は無いんだぞ、お前達は自由だ」

カシウスの言葉を聞いたシンジとアスカは、目を潤ませた。

「じゃあカシウスさんの事……これからパパって呼んで良い？」

「ああ、構わないぞ」

アスカが上目遣いでたどたどしく話すと、カシウスは笑顔で快諾した。

素直にカシウスに甘えた態度を取るアスカに、シンジは驚いてしまった。

他人に心を開く事が無かったアスカの信頼を時間を置かずに得てしまいうカシウスにシンジは尊敬の念を抱くのだった。

「シンジはどうなんだ？」

「僕は……父さんがいますから」

シンジの答えを聞いて、カシウスは少し残念そうにため息をついた。

「この魚、おいしいわね」

「そうだろう、この湖で釣れた魚だから新鮮だぞ」

そんなカシウスを氣遣ってか、アスカが話題を変えた。

「時間があれば湖で釣りを楽しむ余裕があったんだがな。飯を食べたらこの宿屋を出るぞ」

「えーっ、日が沈みかけているのに、夜道を歩けって言うの？」

「今から出れば日没まではボースの街に付けるさ」

兵士達の注意はそらされたが、この宿屋に長居してシンジとアスカが怪しまれるのは良くないと説得されると、2人はカシウスの言葉に従った。

<ボース地方 アンセル新道>

ヴァレリア湖畔とボースの街を結ぶ街道に出たシンジとアスカは、石畳が敷かれた街道の周りから聞こえてくる獣の声に恐怖を感じた。

「野山とかには狼が居るんですか？」

「狼？ 居るかもしれんがぁ、魔獣達の声だ」

「魔獣？」

「来たようだな」

カシウスの言葉通り、3人の側にアンセル新道に出没する魔獣、マッドローバーが姿を現した。

「な、何よこのサボテンの化け物みたいな生物は……！」

「魔獣も知らないのか？」

マッドローバーは怯えるアスカに向かって触手を伸ばして来た！

「きゃあああ！」

カシウスの棒がマッドローバーの触手を受け止める。

「シンジ、アスカを連れて下がっている！」

「わ、分かったよ！」

シンジも腰を抜かしそうになるほど驚いていたが、勇気を出して震える自分の膝を抑えながらアスカの手を引いて後ろに下がらせた。

「せいやっ！」

カシウスは掛け声を出すと、棒に絡まった触手ごとマッドローバーの体を思いっきり地面に叩きつけた！

そして思いっきり潰れたマッドローバーはぐちゃぐちゃになりそれっきり動かなくなった。

「な、何なのあいつ……」

「もしかして、僕らは地球では無い別の世界に飛ばされてしまったのかもしれない」

アスカとシンジは背中に冷汗を垂らしながらマッドローバーの死体

を見つめた。

「大丈夫か？」

「ええ、助けてくれてありがとうございます」

「なあに、民間人を魔獣から守るのは遊撃士として当然の事だ」

「……魔獣ってたくさん居るの？」

「そうだな、セプチウムの豊富な土地には魔獣の巣があるって話だな」

「あのすいません、魔獣について教えてください」

カシウスは歩きながらシンジとアスカに魔獣とセプチウムについての説明をするのだった。

魔獣とは動物や昆虫がセプチウムを吸収して魔進化したような生物なのだと言う。

セプチウムはリベール王国の地面に含まれるエネルギーの結晶体で、多くセプチウムが含まれる場所は鉱脈として人間に利用されている。シンジとアスカは魔獣の話聞いて顔が青ざめて来た。

エヴァ乗る以外は普通の中学生である戦う力の無い自分達が弱肉強食の世界に飛び込んでしまったのだと。

「そんなに気にする事はない。街の中に居る限り魔獣は入って来ないし、街道の導力灯も魔物除けの効果がある。今回はたまたまあの導力灯の効果が弱まっていただけさ」

カシウスがそう言ってシンジ達を励ましながら歩くと、ボース市は目の前に迫っていた。

「やっと街だ」

「さすがに超高層ビルは無いみたいね」

「何か映画のセットみたいだ」

すでに自分達の暮らしている世界とは違う場所に飛ばされたと認識しているシンジとアスカはそれほど驚く事も無く、ボースの街並みを現実として受け入れた。

「ホテルに泊まる前に遊撃士協会に寄るぞ。さっきの導力灯の事を報告しなければならん」

「へえ、遊撃士ってそう言う雑用までするんだ」

「街道を歩いている旅人が魔獣に襲われちゃ危険だろう？ 大事な仕事さ」

ボース市街を歩いて遊撃士協会のある北区に入ると、街の真ん中にある大きな建物がシンジとアスカの目を引く。

「あの大きな建物は何ですか？」

「ああ、あれはボースマーケットと言ってな、商人達が集まる屋根付きの市場のようなものだ。外国からの珍しい工芸品や書物、洋服なんかの取引が活発だな」

シンジの質問に対するカシウスの答えを聞いたアスカが目を見開く。

「アタシ洋服が欲しい！」

「アスカ、わがままを言っちゃいけないよ」

すかさずシンジが止めたが、カシウスはあっさりと笑顔で受け入れる。

「ああ、構わんど。明日の朝、ボースを発つ前に買いに来るか」

カシウスの言葉にアスカは飛び上がって喜んだ。

「カシウスさん、すいません」

「遠慮する事は無い、どうせ2人の服は買わなければいけないと思
っていた所だからな」

「でも……」

「俺はアスカのあんなに嬉しそうな笑顔を初めて見た。シンジもア
スカの笑顔はずっと見て居たいものなんだろう？」

「はい」

シンジはカシウスの好意に素直に甘える事にした。

<ボース市街　ボースマーケット>

ボース市内のホテルに泊まった翌日、カシウスは約束通りシンジと
アスカをボースマーケットへと連れて行った。

並べられている品物の種類は第三新東京市の商店街には遠く及ばな
いものの、シンジとアスカは市場に並べられている品物に胸をとき
めかせた。

目的は洋服だと言う事で後ろ髪引かれる思いでシンジは張り切って
洋服の店に向かうアスカの後をついて行った。

シンジはアスカが洋服を選ぶのをうんざり気味で眺めていたが、カ
シウスは嬉しそうに笑顔で見つめていた。

「この服が可愛いから、気に入っちゃった♪」

アスカが選んだのは、リボンがあしらわれた裾の長めのドレスだっ
た。

「アスカ、それじゃあ歩きにくいよ」

「そうね、ちょっと魔獣が出る街道を歩くのには向いていないかも……」

シンジに言われてアスカがドレスを買うのを諦めようとすると、カシウスがアスカを止める。

「いや、これからロレントの街までは飛行船で帰る事にしたから、ドレスでも構わないぞ」

カシウスの言葉を聞いたアスカは、また嬉しそうに華やいだ笑顔になった。

「俺もドレスを娘に買ってやる事ができて嬉しい限りだ。はあつ、エステルはそう言うのは欲しがらないからな」

そう言ってカシウスは疲れた顔になってため息をついた。

「エステルさんって、カシウスさんの娘さんですか？」

「ああ、丈夫でたくましく育ってくれたのは良いんだが、とんだおてんば娘でな。小さい頃は森に入って虫採りなんかしてばかりだったよ」

『やあ、俺エステル！』

カシウスの言葉を聞いたシンジとアスカはそんなあいさつをするエステルを想像する。

「僕達、仲良くできるかな」

「さあ、分からないわ」

シンジとアスカの期待と不安を乗せて、ロレント行きの飛行船はボース国際空港を飛び立つのだった。

第四話 新しい家族

＜ロレント地方　ブライト家　ダイニングキッチン＞

地方都市ロレントから少し離れた場所に周囲を森に囲まれた二階建ての一軒家があった。

森を切り開いて家を建てようとしたのは林業で財産を築いた商人だった。

ロレントの住民も協力して建てられたその家はその商人の別荘になるはずだったのだが、様々な事情があってその商人は家を手放す事になった。

そこで無人となってしまった家の新たな持ち主となったのがカシウス・ブライトだった。

その家のダイニングキッチンで、少女は退屈そうに窓の外を眺め、少年は椅子に座って本を読んでいた。

少女は、赤い髪とルビー色の瞳を持ち、名前をエステル・ブライトと言った。

カシウスの血の繋がった実の娘である。

少年は、黒髪で琥珀色の瞳を持ち、名前をヨシュア・ブライトと言った。

ヨシュアは3年前にとある事件がきっかけでカシウスと出会い、カシウスの息子としてブライト家で暮らす事になった。

「父さん遅いなあ、ギルドのアイナさんは昨日には戻って来るって連絡があったのに……」

「仕方無いよ、また何か急な仕事が入ったかもしれないし」

「遊撃士の仕事なら、アイナさんに報告が入るはずでしょう!？」
きつとどっかで寄り道しているのよ、あの不良親父」

「でも父さんが帰りを待っているエステルを放って遊びに行くとは

思えないけど」

「はっ、もしかして母さんを裏切って浮気を始めたとか？」

「父さんはまだレナさんを思っている気がするんだけど……」

ヨシユアはそう言って写真立てに飾られているレナの写真に視線を向けた。

カシウスの妻でありエステル之母であるレナは、エステルが小さい頃に命を落としてしまっていたのだ。

「付き合っているならこそそそしないであたし達にも相手を紹介するべきだと思わない？」

「だから、父さんが交際しているって証拠はどこにあるのさ」

すっかり浮気と決めつけているエステルに、ヨシユアはため息をついた。

すると、窓から外を眺めていたエステルが大きな声を上げる。

「あーっ、父さんが帰って来た！」

エステルの声にヨシユアも窓から外を眺めた。

街道から家に向かって帰って来るカシウスは1人では無かった。

赤い髪の少女と黒髪の少年と楽しそうに話しながら歩いていた。

「ロレントでは見覚えの無い子達だけど、どこの子だろう？」

「父さんが旅先で知り合ったのかな」

「きつと、父さんはあたし達に新しい妹と弟を連れて来てくれたのよ！」

「まさか」

自分を強引に家族にしたカシウスの事だ、あり得ない事では無いと

ヨシユアは思った。

しかし、カシウスは遊撃士の仕事で子供達と知り合う事があっても、身寄りの無い子供達は七耀教会などに預けて来ていた。

家にまで連れてくるとは、もしかして何らかの事件に関わっていて保護が必要な対象なのか？

ヨシユアは冷汗を流しながら2人の姿を見つめた。

「そうと分かればさっそく出迎えてあげなくちゃ！」

エステルは嬉しそうに玄関を開けて飛び出して行った。

ヨシユアはため息をつきながらエステルの後を追いかけて家を出た。

＜ロレント地方　ブライト家　正面庭＞

ロレント空港に到着したカシウス、シンジ、アスカの3人はロレントの街を横切ってブライト家へと向かっていた。

街の中を歩くだけで、カシウスがロレント住民達の人気者だと言う事がシンジとアスカには分かった。

そして、シンジとアスカも注目の的になっていて、カシウスの新しい家族だと紹介されると、たくさんの人々が笑顔で2人に声を掛けて来る。

シンジとアスカは戸惑いながらも、愛想笑いを浮かべてお辞儀を繰り返した。

カシウス達はロレントの街のどこにも立ち寄らず、街の外へと出た。

「やれやれ、街に帰る度にこの騒ぎだ。アスカとシンジも疲れただろう？　家までもう少しだからな」

「街の中にあるんじゃないんですか？」

シンジが不安そうにカシウスに尋ねた。

「街から遠く離れて居ないし、近くに魔獣の出る心配も無い。心配はいらないさ」

街道をしばらく歩いて行くと、別れ道に出た。

看板にはブライト家の方向を示す言葉が大きく書かれていた。

アスカとシンジは余裕たっぷりに歩いているカシウスの後ろをついて行った。

すると、森の中から開けた場所に出た。

目の前に2階建ての一軒家が姿を現す。

ブライト家を見たシンジとアスカは感心して声を上げる。

「うわあ」

「おしゃれな家じゃない」

「そうだろう？ 商人の別荘だったからな」

カシウス達が家へ近づくと、突然家のドアが開け放たれ、赤い髪をした少女がいきなり飛び出して来た！

「きゃっ！」

エステルに飛び付かれたアスカが悲鳴を上げた。

「やったあ、あたし妹が欲しかったんだ！」

「は、離してよ！」

驚いたアスカはエステルを振り払おうとしたが、エステルは強い力でアスカを抱きしめていて、引き離す事が出来ない。

エステルはそんなアスカをさらに抱きしめて、ほおずりをする。

「本当、かわいいなあ」

「いい加減に、してよっ！」

アスカが渾身の力を振り絞って突き飛ばすと、エステルはやつと体を離れた。

「エステル、待望の妹が出来て嬉しいのは解るがやりすぎだぞ」

「ごめん、父さん」

エステルを追いかけて家を出て来たヨシュアも姿を現した。

「アスカ、シンジ。紹介するぞ、俺の娘のエステルだ」

「よろしく♪」

カシウスに紹介されて、エステルは元気一杯にあいさつをした。

「で、俺の息子のヨシュアだ」

「よろしくお願いします」

カシウスに紹介されて、ヨシュアは礼儀正しくあいさつをした。

「僕はシンジです」

「……アスカよ」

固い表情ではあったがシンジとアスカがあいさつを返すと、エステルは輝くような笑顔になる。

「じゃあ、あたしが家の中を案内してあげる、行こっ！」

「ちょっと、いきなり走りださないでよ！」

エステルはアスカの手首をつかむと、引きずりながら家の中へと駆け込んで行った。

「はっはっはっ、エステルはすっかりアスカのお姉さん気取りだな」

カシウスはそんな2人の姿を笑顔で見送った。

「それじゃあ、僕はヨシユア……の弟になるのかな」

「僕は誰かに兄さんなんて呼ばれるほどじゃないよ」

シンジが照れながらヨシユアに話しかけると、ヨシユアは首を振って否定した。

「でも、ヨシユアの方が家に長く住んでいるんだし、それに……僕も兄さんと呼べる人が居て欲しいんだ」

「ほらシンジもこう言っているんだ、異存はあるまい？」

「……分かったよ」

ヨシユアが受け入れると、シンジはほっとしたようにため息をついた。

オドオドとしたシンジの態度は昔の自分を思い出させるとヨシユアは感じた。

兄代わりの姉の婚約者に甘え切っていた過去の自分。

今はそれとは違う冷たい感情が自分を支配している。

姉と兄を失ったあの日から。

また、ヨシユアはカシウスとエステルを守ると心に誓ったものの、出会ったばかりのシンジとアスカにはそのような気分にはなれなかった。

しかし、冷たい態度をとってブライト家に波風を立たせる事もあるまい。

そう考えたヨシユアはシンジとアスカに社交的に接する事に決めた。ヨシユアは作り笑いを浮かべてシンジと握手を交わした。

シンジは素直に感激していたが、カシウスはヨシユアの瞳が冷たい光を放っている事に気が付いていた。

「さあ、飯にしよう」

「今日はエステルが作るって張り切っていたよ、ふわふわ卵のオムレツが焼けるようになったって」

「そうか期待させてもらおう」

カシウスはヨシユアの言葉を聞いて笑顔になると、シンジとヨシユアと一緒にブライト家の中へと入って行った。

第五話 アスカの青い瞳の輝きを曇らせていたものは

＜ロレント地方　ブライト家　ダイニングキッチン＞

エステルによるブライト家の中の案内も終わり、ダイニングキッチンに戻ったシンジとアスカは、テーブルを挟んで向き合うように座らせて待たされた。

椅子の数が足りないのでカシウスは自分の部屋から持って来ていた。エステルは台所で夕食を作ろうとフライパンと奮闘していた。

「5人で食べるなんて初めての事かもしれないな。こんな賑やかな日々がこれから続くと思うと、父さんは嬉しいぞ。なんせシェラザードが居なくなってから寂しさを感じていたからな」

「そういえば、シェラザードさんはルーアン支部の推薦状をもらったと聞きましたが」

「ああ、ツァイス支部に転属されたそうだ」

ヨシユアの言葉にカシウスはそう答えた。

「シェラザードさんって誰ですか？」

「えっと、父さんの指導を受けて準遊撃士になった人だよ。小さい頃からエステルのお姉さん代わりをしてたみたいで、去年までは家に良く顔を出していたんだ」

シンジの質問にヨシユアが答えた。

「シェラザードは遊撃士の資格を取るために準遊撃士としてリベール王国の遊撃士協会を回っているんだ」

「準遊撃士って何ですか？」

「16歳になると遊撃士協会の試験を受ける事が許される。しかし、その試験に合格してもなれるのは準遊撃士。まだ見習いに過ぎん。リベール王国にある全部の遊撃士協会に活躍を認めてもらい、推薦状をもらってやっと正遊撃士になれるのさ」

「へえ、遊撃士って凄いんですね」

シンジが感心したように息をついた。

そこに料理を持ってきたエステルが口を挟む。

「軍をクビになった父さんが出来るんだから、そんなたいした事無いんじゃない？」

「エステル、そんな事言っちゃダメだよ。父さんは大陸に数人しか居ないSランクの遊撃士なんだから」

ヨシユアの言葉にエステルは不思議そうに首をかしげる。

「あたしには信じられないのよね、不良親父がSランクだなんて」

「ほら、お前は料理に戻った戻った」

カシウスはエステルを追い払うように台所へと下げさせた。

「あの、遊撃士って護衛をする仕事なんですか？」

「まあ民間人の保護を憲章に掲げてはいるが、それ以外にも人々の依頼をこなすのが主な仕事だな」

「依頼……ですか」

「軍の兵士や警察は治安を守るために働いているが、それだけでは行き届かない事があるだろう？ 護衛はもちろん、輸送、調達、調査……いろいろと人々の役に立てる仕事だな」

カシウスの話を聞いたシンジは目を輝かせてさらに尋ねる。

「遊撃士になるには、どんな事をしたらいいんですか？」

「何よシンジ、遊撃士になりたいの？ シンジが遊撃士になってもせいぜい街の道案内ぐらいが関の山よ」

シンジの言葉を聞いたアスカは吹き出すように笑った。

「じゃあ、アスカはこのまま自堕落な生活を送って無職にでもなれば？」

ムツとしたシンジがそう吐き捨てると、アスカはカチンとした表情になる。

「む、無職ですって！？ アタシはね、ドイツの大学を出ているんだから、シンジとは頭の出来が違うのよ」

「学歴なんてこの世界じゃ何の役にも立たないじゃないか」

「言ったわね！ じゃあ、アタシはシンジを超えるエース級の遊撃士になってやるわよ！」

「はっはっはっ、嬉しい事を言ってくれるじゃないか」

シンジとアスカの言葉を聞いて、カシウスは嬉しそうに微笑んだ。そこへ残りの料理を終えたエステルが料理を運んでくる。

「あたしとヨシュアもね、父さんの指導を受けて遊撃士になりたいと思ってるの」

「パパに懂れて？」

「ちよっと、違うんだけどね」

アスカの質問に答えたエステルの笑顔が少し陰った。

「さあ、冷めないうちにエステル会心のオムレツを食べようじゃないか」

そんなエステルを氣遣うようにカシウスは話題を変えた。

＜ロレント地方　ブライト家　テラス＞

夕食を食べ終えた後、アスカは夜風に当たると言ってシンジと一緒にテラスへと出た。

導力による街の照明があるとは言え、第三新東京市程ではないのだろう。

綺麗な星空が空に広がり、周りを囲む森の木々を撫でる風の音、虫の声が辺りを満たしていた。

「本当に僕達は今までとは違う世界に来てしまったんだね」

「……そうみたいね」

アスカはシンジのつぶやきに同調した。

そして、しばらく沈黙が流れた後、アスカはシンジに声を掛ける。

「アンタ、夕食の時からアタシの顔を見て何をニヤニヤしているのよ」

「……アスカが元気になってくれたと思って」

「どういう意味、アタシはこの通りピンピンしているわよ」

「ううん、使徒に飲み込まれてこの世界に来る前のアスカは僕がシンクロ率を上回ってしまっただけで、トゲトゲしていた」

「あれは……シンジに負けたのが悔しくて」

「ミサトさんに褒められて図に乗っていた僕も悪かったんだ。でも

エヴァのシンクロ率ってさ、本人の努力って言えるのかなって」

「どういう事よ？」

「思いつきり勉強したわけでも、運動したわけでもない。ただエヴァに慣れて来ただけって事じゃないか」

「でもアタシ達にとってはエヴァに乗る事が全てだったじゃない」

「うん、だからこの世界に飛ばされた時、怖かったんだ。僕もアスカも生きる目的を失ってしまうんじゃないかって」

シンジの言葉にアスカは沈黙した。

今まで辺りの環境の変化に驚く事ばかりで気が付かなかったが、それはあり得る事だったのだ。

「それでも僕にも遊撃士になるって目標が見つかって、アスカも遊撃士になるって言うてくれた時、嬉しかったんだ」

「シンジはわざとアタシを挑発する様な言い方をしたのね」

アスカは少しふてくされた顔になって答えた。

「だからもう自分の人生はエヴァに乗る事しかないなんて言わないでよ。シンクロ率が高くなったからって、僕の事を嫌いになったりなんかしないでよ。僕だって好きでエヴァに乗っていたわけじゃないんだからさ……」

「バ、バカっ、何を泣いているのよ！ アタシはもうシンクロ率なんかでアンタを嫌うような心の狭い人間じゃないんだからね！」
「よかった……」

シンジはアスカの言葉にホッとしたように泣き笑いのような顔になり、手で涙をふいていた。

アスカはシンジにハンカチを差し出す。

「手なんかじゃなくて、ハンカチでしっかり涙をふきなさいよ。アタシがシンジを泣かせたと思われるじゃない」

「ごめん……」

シンジはアスカのハンカチで涙をふき終えた後、少し照れ臭そうにアスカに話しかける。

「それとき、ミサトさんの所ではまだ成りきれなかったけど、僕達はここで家族になれるかな？」

「そうね……あんなに頼もしいパパも居るし、エステルとヨシユアも居るんだからきっと平気よ」

「じゃあ、ここで握手をしない？」

「何で握手するなんて言い出すのよ」

「僕とアスカが……遊撃士のライバルになると家族になるための握手。……ダメかな？」

「別にいいわよ」

アスカが差し出した手をシンジは嬉しそうに握り、握手を交わした。少しすねたような表情になってはいるが、アスカのシンジを見つめる瞳からは憎しみの感情が完全に消えていたのを見て、シンジは心の底から喜んだ。

「寒くなって来たわね、家の中に戻るわよ」

「うん」

アスカとシンジは家の中へと入って行った。

その会話を庭の樹の陰で聞いていたカシウスは嬉しそうに微笑んだ。部屋で仕事をすると言ったカシウスは自分の窓から脱出して、アスカとシンジの話を盗み聞きしていたのだ。

「窓から出る時は楽なんだが、入る時が一苦労なんだよな」

壁際に来たカシウスは自分の武器である棒術用の棒を使って上手く自分の体を持ち上げ、自分の部屋へと戻った。

そして自分の机の椅子へと腰を下ろした直後にエステルが部屋に入ってくる。

どうやら危機一髪間に合ったようだ。

第六話 初めての夜、心、開いて

＜ロレント地方　ブライト家　エステル部屋＞

「それにしても、女っ気の無い部屋ね……」

アスカはエステルの部屋を見回してため息をついた。

ベッドには麦わら帽子が出っ張りに引っかけられ、虫取り網が立て掛けられている。

近くの戸棚にはスニーカーが並べられていて、まるで部屋の主は少年のようだ。

部屋の奥には立派な鏡台があるものの、側には棒術用の武器が立て掛けられている。

その反対側には花を活けた花瓶と洋服がしまわれているダンスがあった。

しかし、ダンスの上にはビックリ箱のようなおもちゃが置かれていたのだった。

良く見ると、床にもおもちゃのようながらくたが転がっている。

「まあ鏡台とダンスはなかなかのものじゃない」

「母さんの形見なんだ」

「そうなの、嫌な事聞いちゃったわね」

「別にいいよ」

アスカが謝ると、エステルは首を横に振った。

「着替えはダンスの中に入っているあたしの服を使っていから」
「そう？」

どうせ田舎者丸出しの服だろうとタンスの中をみると、可愛いデザインの服やスカートなどが揃っているのにアスカは驚いた。

「父さんが女の子らしくしろって服を買ってくるんだけど、あたしは外ですぐに汚しちゃうからさ、あんまり着てないんだ」

「もったいないわね」

服やスカートにも興味をそそられたがもう寝る時間なので、目的はシャツや下着類だ。

見慣れた感じの下着類が目に入ると、アスカはホッと息をもらした。次の問題はサイズだ。

アスカは自分のプロポーションには自信を持っている。

同年齢の女子より優れていると思っていた。

エステルに子供っぽい印象を受けていたアスカは下着を付けてみて驚いた。

「アタシとサイズがピッタリ同じじゃない」

「よかった」

アスカは隣に居るエステルの体をしっかりと見つめた。

改めて見るとエステルのスタイルもかなり良いものだった。

「そっか、アタシだけが特別な存在じゃないのね」

アスカは日本に来てから優越感に浸っていた自分の姿を思い返した。ここはもう日本ではないのだ。

そしてドイツも存在しない。

スタイルや学歴に高いプライドを持っていた自分を恥じてアスカは考えを改める事にした。

「そうだ、失礼ついでにちょっと聞いて良い？」

「何？」

「エステルはどうして遊撃士になろうと思ったの？ ほら、夕食の時に聞きそびれたから」

アスカがそう尋ねると、今まで笑顔を浮かべていたエステルの顔がたちまち暗くなった。

初めて見るエステルの辛そうな顔。

自分の質問は地雷を踏んでしまったのだと、アスカは悟った。

「……あたしのせいで、母さんが死んじゃったからなんだ」

驚いて言葉も出ないアスカを前にしてエステルは話し続けた。

エステルが小さい頃、百日戦役と言うリベール王国とその北にあるエレボニア帝国の間で戦争が起きた。

突然の帝国の侵攻に、帝国に近いリベール王国の領土の3分の1近くがあつという間に占領された。

しかし、リベール王国軍のモルガン将軍が小型戦闘飛行艇を使った電撃作戦を展開。

ボース地方とロレント地方を占領していた帝国軍を孤立させ、包囲する事に成功した。

そして終戦間際。

好奇心旺盛だったエステルは、攻めて来た帝国軍の兵士達の姿を見ると、街の住民たちの避難所を抜け出しロレントの街の中央にある時計台に登ってしまったのだ。

エステルが居なくなった事に気が付いた母親のレナは慌ててエステルを連れ戻そうと時計台を駆け上る。

追い付いたレナが時計台の屋上でエステルを抱きしめた時、悲劇は起こった。

包囲された帝国軍の兵士は街のシンボルである時計台に当然猛砲撃

を加えたのだ。

崩れ落ちる時計台。

時計台ががれきの山と化した時、レナは崩れ落ちるがれきからエステルを守るように抱きしめていた。

レナの背中にのしかかった重いがれきは今にもレナをエステルと一緒に押し潰そうとしていた。

レナに守られたエステルは傷一つなかった。

エステルはレナの胸の中で泣きながら一緒に行こうと訴えかけたが、レナは足をがれきに挟まれていて動けなかった。

気が付いて急いで駆け付けたカシウスにレナは胸の中のエステルを預けた。

すると、すぐにがれきは大きな音を立ててきしみ、レナの体を押しつぶした。

エステルは母親の死を目の前で見てしまったのだ。

「あたしが言い付けを破って時計台に行かなければ！ 母さんは死なずに済んだのに、父さんはこんなに悲しまずに済んだのって思った。父さんは自分を責めるなって言っただけ、あたしも何か償いみたいな事をしてみたくなったんだ」

エステルの話を聞き終えたアスカは強いショックを受けた。

そして、目の前に居るエステルにシンジにも話した事の無い自分の本心をぶちまけたい気持ちになった。

目に涙を浮かべながらアスカはエステルに向かって話し始める。

「あのね、アタシもエステルに話したい事があるの」

そういつてアスカは自分の母親である惣流ⅡキョウコⅡツェツペリ博士の事を話し始めた。

キョウコ博士はアスカが生まれる前からエヴァンゲリオンの研究を

していた。

小さい頃のアスカは研究に忙しくあまり顔を合わせる事は無かったものの、会えた時は優しい母親に甘えるママっ子だった。

母親と2人でヒマワリ畑でかくれんぼをして遊んだりもしていた。

しかし、そんなアスカの幸せな日々を打ち砕く不幸が訪れる。

エヴァンゲリオン実験機に被験者として乗り込んだキョウコ博士は、実験の失敗により精神に異常をきたしてしまう。

病院に入院したキョウコはぬいぐるみをアスカと思い込んでしまい、本物のアスカは赤の他人だと思うようになってしまった。

目の前でぬいぐるみを赤ん坊のようにあやす母親を見て、アスカは深い悲しみに襲われた。

アスカはキョウコが自分を見てくれるように必死に話しかけたが、その努力もなかなか通じなかった。

そんなある日、アスカは人類を救うと言うエヴァンゲリオンのパイロットに選ばれたと周りの大人達から知らされた。

「ママ、聞いて聞いて！ アタシ、世界を救うエヴァンゲリオンのパイロットに選ばれたの！ だから、アタシをほめて、アタシを見て！」

そう言って母親の病室に飛び込んだアスカが目にしたのは首を吊って自殺をしていた母親の姿だった。

キョウコは自分の娘だと思い込んでいたぬいぐるみの首をナイフで刺していた。

アスカはキョウコが自分を道連れに死ぬつもりだったと知るとさらにショックを受けた。

「アタシは、ママがいつか元の優しいママに戻るって信じていたのに、最悪な形で裏切られたのよ……」

アスカの話を聞き終わったエステルは、アスカの痛い胸の内が自分の事のように感じられた。

「あたしはたまに見ちゃうんだ、目の前で母さんががれきに押しつぶされて死んじゃう夢」

「アタシもドアを開けたら部屋の中でママが首を吊って死んでしまっている夢を見てしまう事があるわ」

エステルとアスカは顔を見合わせてそんな事を言い合った。

「ねえ、だから今夜は……」

「うん、ギョツとすればそんな夢は見なくなるかも」

「じゃあ、アスカが奥で良いよ」

「わかったわ……」

アスカが先にベッドに横になり、壁に背を付けてエステルを迎え入れるような体勢になった。

そのベッドに飛び込むようにエステルがアスカの隣へと入った。

「この狭さじゃ、仰向けになって寝れないわね」

「うん、でもアスカは温かいよ。それに柔らかくて気持ちいい」

「ちよっと、揉まないでよ」

「ごめんごめん」

「だけど今まで一番安心して眠れそうね」

「あたしも」

アスカとエステルは幸せそうな表情で眠りにつくのだった。

<ロレント地方　ブライト家　ヨシユアの部屋>

ヨシユアの部屋を見回したシンジは部屋の中の物が隅々まで片付けられている事に驚いた。

部屋には必要最低限の物しか無い。

例外として、ヨシユアの趣味である本が置いてある本棚と短剣の手入れ用の道具があったが、本棚は整理されていて、手入れ用の道具はピカピカに磨きあげられていた。

「ヨシユアって、きれい好きなんだね」

「……習慣として身についているだけだよ」

殺風景な部屋の雰囲気と和らげるように観葉植物が植えられた鉢があったがそれ以外は何も無い。

シンジの興味を引くものと言えば本棚ぐらいだ。

「本を読ませてもらっていいかな？」

「構わないけど」

ヨシユアの本棚に納められていた本は、刃物に関する技術書、それと薬草などに関する医術書、戦争に関する歴史書、戦略書と実的なもののばかりだった。

しかし、その中で異彩を放っていたのは推理小説だった。

「ヨシユアって推理小説が好きなんだね」

「別に、そんな事無いよ」

シンジが笑うと、ヨシユアは少し照れくさそうにそう答えた。

ヨシユアが自分に初めて作り笑い以外の感情のこもった表情を見せてくれた気がして、シンジは嬉しかった。

「ヨシュアがベッドで寝なよ、僕は居候なんだから床でいいから」
「いや、君は慣れない環境で疲れているだろうから、ベッドで休んだ方がいい」

何度か同じやり取りを繰り返すうちに、ヨシュアはシンジに苛立ちを感じていた。

自分の部屋に他人が居ると言うだけで、自分の縄張りを侵された気がしてヨシュアは落ち着かなかったのだ。

やっとベッドで寝る事を受け入れたシンジに、ヨシュアは疲れた顔でため息をついた。

「ねえ、エステルってとても明るい子だね」

ベッドに横たわったシンジの言葉を聞いたヨシュアはシンジに軽く怒りを覚えた。

ヨシュア自身は聞かれたら否定するだろうが、やはりエステルに恋心のようなものを持っていたのだ。

「何か、太陽みたいな子だ」

さらにシンジがつぶやくと、ヨシュアはその通りだと思った。

生物が生きて行くためには太陽が必要だ。

人間もその例外ではない。

その太陽を奪おうとする敵が居るなら、排除の対象となる。

ヨシュアはシンジを呪い殺すかのような鋭い視線をシンジに送った。

「ヨシュアはエステルの事が好きなの？」

突然シンジに聞かれて、ヨシュアは驚いた。

動揺を悟られないように深呼吸してからヨシユアはシンジの問い掛けに答える。

「僕は誰かを好きになる感情なんて、持ち合わせていないよ。そんなのはとうの昔に捨てて来てしまったよ」

口に出してからヨシユアは自分が余計な事まで言ってしまった事に気が付いた。

しかし、シンジの返事はヨシユアにとって意外なものだった。

「うん分かるよその気持ち。悲しい事や辛い事があると、他人事のように感じて受け流すしかないんだよね」

「君も、辛い事があったのかい？」

「僕は小さい頃に母さんが居なくなってから、父さんにも捨てられて親戚の伯父さん夫婦の家に預けられたけど、そこでの生活は孤独そのものだったよ」

ヨシユアはシンジはただの気の弱い子供だと思っていたが、少しシンジに対する見方を変えた。

自分と同じような境遇に居るのだとヨシユアは少し親近感を覚えた。

「でも、感情を失くしてしまったはずでも、女の子を好きになるって気持ちに残っているんじゃないかな」

もしかして、シンジはエステルに恋心を抱いてしまったのではとヨシユアは焦った。

自分はエステルの相手にふさわしい人間ではないと自覚して居ても、他の男にエステルを奪われるのは我慢ができなかった。

「僕もアスカの事が好きになっちゃったみたいだから、きっとヨシ

ユアもエステルの事が好きなのかなって」

シンジの言葉を聞いたヨシユアは心の底からホッと安心すると同時に、頭の中で計算を始めた。

シンジがアスカと結ばれてしまえば、シンジはエステルに恋をしてしまう可能性は無くなる。

「僕にどこまでできるかは分からないけど、僕も君がアスカと上手く行くように協力するよ」

「ありがとうヨシユア、心強いよ」

ヨシユアの打算的な申し出とは知らずに、シンジは素直に感激して喜んだ。

「それと僕は、アスカを守るほど強い人間になりたいんだ。遊撃士を目指そうと思ったのはそう言うわけもあるんだ」

シンジの言葉を聞いたヨシユアの目が光を放つ。

ヨシユアはシンジとアスカのような守る対象が増えるのはうんざりだった。

しかし、シンジが足手まといにならない程度に強くなってくれれば自分が護衛で手を焼く事も無い。

そう考えたヨシユアは快くシンジに返事をする。

「うん、僕に教えられる事なら何でも」

「本当にありがとう」

シンジはヨシユアの言葉に感激して再度お礼を言う。

こうしてアスカとエステル、シンジとヨシユアの姉妹兄弟としての生活が始まるのだった。

第七話 新しい生活の始まり

＜ロレント地方　ブライト家　ヨシユアの部屋＞

ヨシユアの部屋のベッドで眠っていたシンジは、疲れて居たはずなのだが、葛城家のいつもの習慣で朝早くに目を覚ましてしまった。シンジが部屋を見回すとヨシユアの姿は見当たらない。

「ヨシユアはもう起きているのかな？」

シンジは隣の部屋で寝ているアスカとエステル、1階の自分の部屋で寝ているカシウスを起こさないように気を遣いながら静かに廊下を歩き、階段を降りた。

ダイニングキッチンにもヨシユアの姿は見当たらない。

するとヨシユアは庭に居るのだろうか？

そう考えたシンジは玄関のドアをそっと開けた。

すると庭に居たヨシユアはシンジの気配に気づいていた様子で玄関から顔を出したシンジをじっと立って見つめていた。

「昨日は疲れていただろうから、今朝はゆっくりでも良かったのに」
「……いつも朝早く起きるのが習慣みたいになっちゃって」

ヨシユアに言われたシンジは照れ臭そうにそう答えた。

「ヨシユアの方こそ、こんな早く起きてるなんて驚いたよ」

「庭で朝の鍛錬をね」

「遊撃士になるって、そんなに大変なの？」

「いや、誰にも邪魔されずに1人で居られる時間が欲しかったんだ」
「エステルって、とってもおせっかいな感じがするからね」

ヨシユアの言葉を聞いて、シンジは苦笑しながらそう答えた。

「そうなんだよ、僕がこの家に着た頃は無理やり虫採りに付き合わせようとするし。僕が無視をしていたら、巨大なカブトムシを捕まえに森へ行っちゃったんだよ」

「エステルってボーイッシュな子なの？」

「うん、腕白小僧って言葉が似合う子だったね。それで森の中で蜂の巣を突いちゃったらしくて、この家の庭まで怒った蜂の群れに追いかけられていたんだ」

「蜂から走って逃げられるんだ」

「木にもたれかかって座っていた僕の手を握って、あそこにある大きな池へと飛び込んだんだ」

ヨシユアは楽しそうな笑顔を浮かべてエステルと出会った頃の事を話していた。

自分を見つめるシンジの目が笑っているのに気付くと、ヨシユアは顔を反らす。

「すっかり話し込んでしまったね。そろそろエステル達を起こさない」と

「目覚まし時計は無いの？」

「タイマー機能のついたオーバル時計は値が張るからね。エステルはメルダース工房でオーバル時計をいじっていて壊しちゃった前科があるし」

「それは大変だね。僕も朝にアスカを起こそうとするといつも怒られるんだ。勝手に部屋に入るなどか、体に触るなどかね」

「僕はエステルの体に触ったりしないし、部屋にも入らないよ」

「へえ、じゃあどうしているの？ おたまでフライパンを叩いて起こすの？」

「そんなことしないよ」

シンジの言葉にヨシユアはあきれたようにため息をついた。
ヨシユアはハーモニカを取り出すと、シンジの顔を見て少し照れくさそうな表情になってからハーモニカを吹き始めた。

少し寂しさを思い起こさせる美しいハーモニカの調べが静かな森に囲まれたブライト家の敷地に響き渡って行く。

シンジはヨシユアの奏でる旋律に聴き惚れてしまった。

「へえ、なかなかのものじゃない」

玄関の扉を開いて、エステルに服に着替えたアスカとエステルが姿を現した。

「今日は起きるのが遅かったじゃないか」

「アスカがなかなか起きなかったもんだからさ」

「ごめん、アスカは朝が苦手なんだ」

「何でシンジが謝るのよ」

アスカはそう言ってシンジをにらみつけた後、ヨシユアに向かって問い掛ける。

「さっきハーモニカで吹いていた曲は何て曲なの？」

「星の在り処って曲だよ」

「ふーん、聞いた事無いけど、シドの曲に似ているわね」

「シド？」

「アスカの好きなアーティストと何だけど……って言っても分からないか」

「本当にシンジ達って凄い遠くから来たのね。王国も帝国も共和国も知らないなんて」

「うん、僕達もどこから来たのかって上手く説明できないんだ」
「さあお前達、朝食が出来たぞ」

4人が庭で話し込んでいると、カシウスが家の玄関からカシウスが顔を出した。

「あ、ごめん、今日はあたしが当番だったのに」
「構わないさ、家に居る時ぐらい家族孝行させろ」

カシウスの作ったホットケーキは焼き具合が絶妙なものであり、アスカとシンジは感激した。

「食事が終わったらさ、庭の池で釣りをしようよ。色々な魚が釣れるから面白いよ!」

「池なのに魚が居るの?」
「どうやら底の方で水路が他の場所と繋がっているみたいだよ」
「エステル、今日は日曜学校のある日じゃなかったのか?」

カシウスに指摘されたエステルはギクリとした表情になる。

「今日はアスカとシンジの面倒を見なくちゃいけないから……」
「そんなの学校を休む理由にはならないよ」
「そうだ、2人を町に案内してあげろ」
「はい」

学校をさぼれなくなったエステルは残念そうな顔でため息をついた。

「学校に行けるの?」
「うん、週に1回七耀教会で授業があるんだよ」

学校と聞いたシンジは目を輝かせてヨシユアに尋ねた。
シンジにとって学校は楽しい場所へと変わりつつあった。
もちろん、人見知りの激しいシンジだが、新しい友達が出来るかもしれないと想像するだけで嬉しさもひとしおだった。
朝食を終えたエステル達は日曜学校の授業を受けるためにロレントの街へと向かう事になった。

<ロレントの街 七耀教会>

期待を胸にロレントの街へと向かったシンジは、教会につくと少しガッカリしてしまった。

エステルに紹介されたアスカは嬉しそうにエリッサとティオと話していたが、シンジは他の同世代の男子と話す機会が無かった。
この世界でもトウジとケンスケのような友達が出来ると期待していたシンジは残念そうにヨシユアに話しかける。

「男の子の友達っていないみたいだね」

「正直女の子の中で男は僕1人だったから、シンジが来てくれて嬉しいんだよ」

「そっか、これからは友達としてでもよろしく」

微笑むシンジが差し出したその手をヨシユアは自然と握り返した。

そして、教会の神父とシスターによる授業が始まる。

日曜授業の内容は宗教倫理学だけでなく、政治経済、自然科学、国語数学など多岐に渡っている事にアスカとシンジは驚いた。

本格的な授業にアスカとシンジは復習に気が抜けないと思った。

しかし、エステルはマイペースに居眠りをしていた。

教師役である神父やシスターはいつもの事なのか、何事も無いよう

に授業を続けた。

「あの、エステルを起こさなくて良いんですか？」

見かねたアスカが神父に忠告すると、神父はエステルが寝てしまうのは退屈な授業をしてしまった自分が原因だと語った。

神父の言葉に、アスカとシンジは首を横に振る。

「そんな事無いですよ、とっても楽しい授業です」

「学ぶ事がどれも新鮮で、分かりやすいです」

アスカとシンジの言葉を聞いた神父は嬉しそうに微笑んだ。

2時間に及ぶ授業を終えて、エステル達はエリツサとティオと共に教会を出た。

「シンジは学校の成績が今一つだったわね、こっちでも苦勞するわよ」

「これからは勉強も運動も頑張るよ、アスカに負けてばかりはいられないし」

「ふふん、せいぜい精進なさい。ちなみに今日の授業はアタシにはバッチリ解ったわよ」

「凄いアスカ、ずっと遠くからロレントに来たばかりなんでしょう」
「とても頭がいいのね」

エリツサとティオに憧れの眼差しで見られたアスカはとても上機嫌だった。

シンジはすっかり元気になったアスカを見て嬉しく思う反面、アスカが図に乗ってしまったのか心配だった。

アスカのプライドの高さが増長してエヴァのエースパイロットだと自負していた時のように傲慢な性格に戻って欲しくは無いと祈った。

授業を終えたエステル達はエリッサの両親の経営する居酒屋アーベントで昼食を取る事になった。

「エリッサはこの看板娘だったのね」

「どう、アスカもこの店で働かない？　きっと人気者になれるわよ」

エリッサの誘いにアスカはまんざらでもない様子だったが、アスカは軽く首を横に振る。

「アタシはもう遊撃士を目指すって決めたのよ」

「アスカは遊撃士になるんだ、凄いわね」

断られたエリッサは残念な表情をしながらも、アスカを応援した。

「そうだ、これから私の家に来ない？　私の家族にもアスカとシンジ君を紹介したいし」

ティオの提案にみんな賛成し、エステル達はロレント郊外にあるティオの家族が経営する農園へと行く事になった。

<ロレント郊外　ミルヒ街道>

エステル達はブライト家に居るカシウスに話してから、ティオの家族が経営するパーゼル農園へと向かった。

カシウスに夕食の当番を任せられたシンジは嬉しそうに歩いていた。アスカはそんなシンジを見て、皮肉めいた声を掛ける。

「前は仕方が無いって感じで料理をしていたのに、今はやけに嬉し

そうじゃない」

「アスカより得意な分野を見せられるから嬉しいんだ」

「生意気ーっ！」

アスカはそう言ってシンジのほおを思いっきりつねった。

「アスカは料理は苦手なの？」

「今までする必要が無かっただけよ」

エリツサに尋ねられて、アスカは恥ずかしそうにそう答えた。

「アスカって貴族のお嬢様だったの？」

「そういうわけじゃないけど、ご飯・掃除・洗濯は毎日僕がやって
いたんだ」

「酷っーい！」

「シンジ君、可愛いそう！」

エリツサとティオが声を上げると、アスカは顔を赤くして叫ぶ。

「これからはやってやるわよ！」

「当たり前だよ」

ヨシユアは少しあきれたやら怒ったような表情でため息をついた。
シンジは苦笑してヨシユアに心の中で謝った。

「大丈夫、家事ならお姉さんが教えてあげるって」

「へえ、エステルがアスカのお姉さんなんだ」

エステルの言葉を聞いたティオが感心したようにため息をもらした。

「ぐっ、何かエステルに教えられるなんて屈辱ね」

やり込められているアスカを見て、シンジは安心して笑顔になった。ここには自分達が心安らげる場所がある。

シンジはそう確信したのだった。

そして、エステル達がパーゼル農園に着くと、ティオの弟と妹がエステル達を嬉しそうに出迎える。

ティオの弟と妹はエステルとヨシユアと同じようにアスカとシンジを姉や兄代わりの存在として慕った。

エステルとヨシユアに妹や弟扱いされたアスカとシンジは自分の妹分や弟分が出来て嬉しそうだった。

こうして、アスカとシンジは暖かなロレントの街の人々に囲まれて新たな生活を始めるのだった。

第八話 遊撃士試験！

＜ロレントの街 遊撃士協会ロレント支部＞

シンジとアスカがエヴァンゲリオンごと使徒の作り出した異次元に飲み込まれて異世界であるリベール王国にやって来てから2年後。アスカが16歳になった日にエステル、ヨシユア、アスカ、シンジの4人は準遊撃士になるための試験を受ける事になった。

試験官を務めるのは1年前から遊撃士協会で4人を指導している遊撃士、シェラザード。

シェラザードはカシウスの指導を受けて準遊撃士になり、1年半前に遊撃士となり、昔からのエステルの姉代わりであり、4人の先輩に当たる。

大酒飲みで陽気にシンジとアスカをからかうような所は2人にミサトを思い出させた。

しかし、シンジとアスカはシェラザードを嫌う事は無かった。

シンジとアスカはシェラザードを姉として慕うようになっていった。

「うーん、このカードは……良く分からないわね」

エステル達がやって来た時、シェラザードは神妙な顔でタロット占いをしていた。

「シェラ姉、おっはー！」

「おはよ、シェラ姉」

「おはようございます」

「……おはよう……ございます」

エステルとアスカ、ヨシユアとシンジがあいさつをしながら階段を

登って部屋へと入って来た。

シェラザードは対照的な4人の様子に苦笑する。

「エステルとアスカは凄い張り切りようね」

「あったりまえじゃん、あたしはずっと遊撃士になりたかったんだから！」

「早く遊撃士になりたいくてウズウズして、16歳になるのが待ち遠しかったわよ」

シェラザードに言われて、エステルとアスカは元気いっぱいにそう答えた。

「ヨシユアとシンジは何か落ち着いた……って言うか、疲れた表情になっているわね」

「ええ、エステルがやっとここまでこれたと安心してらるんです」

「僕は今日は最終試験だっと思うと緊張しちゃって……」

オドオドと答えたシンジの背中を、アスカが思いつき叩く。

「ほら、シャキッとしなさいよ！」

「うわっ、何するんだよ」

「情けないシンジに気合を注入してやってるのよ」

「そうだよシンジ、気合が無ければ出来るものも出来なくなるわよ！」

「エステルは気合だけは有り余っているんだから」

ヨシユアはそう言ってため息をついた。

「さあ、それじゃ始めるわよ。4人とも、席に着きなさい」

シエラザードの言葉を聞いたエステルは顔を青ざめる。

「ええっ、試験ってペーパーテストなの!？」

「違うわよ、とりあえず今までの授業のまとめをするのよ」

「じゃあ試験はペーパーテストじゃないの？」

「ええ、実技試験をしてもらうわ」

シエラザードがそう言うのと、エステルは両手を合わせて祈るようなポーズでつぶやく。

「ああ女神様、^{エイドス}実技試験にして下さって感謝致します」

「あのねえ、試験の内容を決めるのは私なんだけど。筆記試験の方が良かった？」

「アタシはそっちの方でも構わないけど」

「アスカまでそんな事言わないで! お願いします、女神様、シエラ姉様」

そんなエステルを見てヨシユアがこっそりシエラザードに耳打ちする。

「エステルのためにわざわざ骨を折って頂いてすいません」

「遊撃士は実戦力が大事ってことで、カシウス先生にも頼み込んで何とか実技試験だけの最終試験にこぎつけたわよ」

シエラザードの苦勞を知ってか知らずか、エステルは椅子に座りながら元気良く飛び跳ねる。

「さあ、早く試験をやっちゃおうよ!」

「だから、その前に今までの講義のまとめがあるんだって」

ヨシユアはあきれたようにため息を吐き出した。

「今日は居眠りなんかせずにしっかり聞くのよ」

「ういゝっす」

「返事だけは良いんだから」

エステルは興奮していて、今日だけは居眠りをする気配が感じられなかった。

シェラザードは苦笑しながら授業を始めた。

授業内容は100年の間のリベール王国の歴史年表をおさらいし、導力革命、百年戦争、遊撃士教会の成り立ちの基本的な事を抑えるものだった。

「アスカ、導力革命が起こったのは？」

「七耀暦 1150年です」

「そう、今からちょうど50年ぐらい前の事ね」

堂々と質問に答えるアスカに、シェラザードも安心した微笑みを浮かべた。

「エステル、民間人に対する保護義務は協会規約の第何項？」

「第1項！」

エステルが自信満々に答えると、シェラザードを含めて部屋の中に居たシンジ、アスカ、ヨシユアは深いため息をついた。

「第1項は遊撃士の基本理念でしょう。何度言ったら覚えてくれるのかしら」

「正解は第2項だよ」

「まったく、基本3原則すら覚えてないなんて」

「規約を知らない遊撃士として信用されないよ」

「えっ、だって大切な事なんだから第1項に決まってるって普通はそう思うじゃない、そんなのフェイントよ、引っかけよ！」

顔をふくれさせてエステルはそう言い返した。

「でもシェラさん、エステルはスニーカーの銘柄はきちんと覚えられるんですから、やる気があればきつとできるはずですよ」

「はあ、それに期待するしかないわね」

ヨシユアの言葉にシェラザードは妥協したのだった。

その後も授業は続き、エステルは早く終わって欲しいと願っていた。しかし、シンジは授業を聞きながら終わって欲しくないと思っていた。

「実技試験って何をやるんだろう……やっぱり魔獣と戦わなくちゃいけないのかな……」

「シンジも覚悟しなさいよ。どうせ試験じゃ無くても遊撃士になつたんだから、魔獣と戦わなくちゃならないのよ」

青い顔でつぶやいたシンジをアスカはそう言って元気づけた。

エヴァで射撃の練習をした経験のあるシンジは拳銃、アスカはシェラザードに師事して鞭を武器に選んだ。

シンジはまだ自分の銃の腕に自信が持てなかった。

加えて接近戦に持ち込まれたらどうしようかと不安になっていたのだった。

そして、授業が終わったエステル達は戦術オーブメントの使い方を学ぶためにロレントの街のオーブメント工房、《メルダース》工房へと移動した。

戦術オーブメントとはそのスロットに七耀石^{セブチウム}を加工したクオーツを

組み込んで、攻撃・回復・補助などの術を発現させる戦闘用に携帯できるように改良された小型導力制御装置である。

分かりやすく言えば精神エネルギーではなく導力エネルギーを消費する魔法発生装置のようなものだった。

「話し合って、それぞれが得意とするオーブメントを決めなさい。ただし、回復はなるべく全員が出来るようにしなさい」

シェラザードはエステル達に戦術オーブメントのスロットに組み込むクオーツを選ぶように指導した。

クオーツには火・水・風・土の4属性と時・空・幻の3属性の計7属性が存在する。

先にあげた4属性は魔獣の弱点を突きやすい上に回復は水属性のクオーツでしか使えない。

水のクオーツを1個組み込めば、ティアと言う小回復アーツできる術が使える。

シェラザードは水のクオーツを最低1個組み込む事と、火・水・風・土の属性を4人でそろえる事を勧めた。

エステルは火のクオーツを中心とした構成。

アスカは風のクオーツを中心とした構成。

ヨシユアは土のクオーツを中心とした構成。

シンジは水のクオーツを中心とした構成。

4人の戦術オーブメントが決まった所で、また遊撃士協会に戻る事になった。

<ロレントの街 地下水道>

遊撃士協会に戻ったエステル達は、シェラザードから遊撃士手帳を

受け取り依頼についての記録の取り方や報告の仕方についての指導を受けた。

今日の試験の内容とは、シェラザードの出した依頼を達成する事だった。

シェラザードから出された依頼は、地下水路に隠された小箱を回収する事だった。

依頼内容を示す書類には小箱の特徴が詳しく書かれている。

「長丁場になるから、危なくなったら街に戻って来なさい。戦術オーブメントの急速回復はメルダース工房でもらうと良いわ」

「大丈夫よシェラ姉、小箱を回収して来るだけでしょう？」

「そうそう、そんなのちょちよいと終わらせて来るわよ」

エステルとアスカが余裕たっぷりの表情でそう言うと、シェラザードは顔をしかめる。

「地下水道には魔獣も住みついているの、油断しないで」

「はい、僕達が気を付けます」

シェラザードに見送られて、エステル達は七耀教会の裏手にある地下水道へのマンホールの梯子を降りて行く。

地下水道の中は導力ランプが灯っていて、真っ暗ではなさそうだった。

「シンジ、アタシが先に降りるからね」

「どうして、危険だよ」

「バカっ、アタシはスカートを履いているのよ！」

「あっ……」

シンジは顔を赤くしてアスカに先を譲った。

そんなシンジを見てシェラザードは愉快そうに笑い声を上げた。
地下水道は下水や魔獣達の生活臭などが漂い、居心地の良い場所では無かった。

「うっぷ、凄い臭いね」

「アスカ、この程度の臭いでへこたれていちゃ遊撃士になれないよ」
「うるさいわね、シンジのくせに」

余裕たっぷりのシンジの態度にアスカはそう言い返した。

「しっ、魔獣が居るみたいだよ」

ヨシユアがそう言うと、エステル達に緊張が走った。

魔獣に背後を取られると戦いは不利になる。

先にこちらから発見できたのは幸運だった。

「ネズミっ!？」

魔獣の姿を見てアスカは嫌そうな顔になった。

アスカはネズミが苦手なのだった。

しかし、相手が2匹だけだったのを見て、エステル達は勢い付いた。
エステルとヨシユア、アスカとシンジが組んであつという間に巨大ネズミとなった魔獣を退治した。

「よっしゃ、セピスをゲット!」

「この魔獣の骨は料理に使えそうだね」

エステルとヨシユアは悠々と魔獣の死体を解体していった。

セピスとはセプチウムの欠片で、集めてクオーツに加工される。

先ほどの魔獣も元はネズミだった生物がセピスを大量に飲み込むう

ちに魔進化を遂げた物だと推測されている。

アスカとシンジは、恐る恐ると言った感じで顔を少し青ざめながら魔獣の死体を解体し、セピスと骨を回収した。

この世界で生きて行くためには仕方の無い事だとは言え、まだ抵抗を覚えていたのだった。

ともあれ、初戦は無傷の勝利だった。

「さあ、この調子で奥まで進むわよ！」

拳を突き上げてやる気満々でそう宣言したアスカにエステルが声を掛ける。

「ねえ、ちょっと街に戻ろうよ」

「エステル、さっきの戦闘でどこか怪我でもしたの？」

ヨシユアが心配してエステルに尋ねた。

シンジも不安そうにエステルを見つめた。

すると、エステルは顔を赤くしながらモジモジしながら答える。

「朝ご飯を食べたきりだから、お腹が空いちゃって……お弁当も忘れちゃったし、お昼ご飯を食べに帰らない？」

「バカっ、何言っているのよ！」

「そうだよ、お昼ご飯を食べるために依頼を途中で中断する遊撃士なんて聞いた事無いよ」

「それぐらい我慢してよ……」

アスカとヨシユアとシンジに反対されたエステルは、少し落ち込んだ表情をしながら後について行くのだった。

第九話 誕生日プレゼントのワナ

＜ロレントの街 地下水道＞

シェラザードの依頼である目的物の回収を目指して地下水路を進んで行くエステル達。

ネズミ魔獣を倒した後は余裕たっぷりにはズンズンと速足で歩いて行く。

先頭に行くヨシユアにも油断があったのかもしれない。

蛾の群れのような魔獣が突然アスカに向かって飛びかかって来る！

「きゃあああっ！」

驚いたアスカは真後ろを歩いていたシンジに飛びついた。

シンジはアスカに押し倒されるように床に倒れ込んだ。

頭を強く打ちつけて、シンジは気を失ってしまいそうになる。

しかし、シンジの意識を引きもどしたのはアスカの悲鳴だった。

「痛っ！」

蛾の群れの魔獣がアスカの背中を突いていた。

それに気が付いたシンジはアスカを抱き寄せると、自分と体の位置を入れ換えた。

自分の体を盾にしてアスカを守るシンジに、アスカは驚いて目を丸くする。

蛾の群れの魔獣がシンジの背中を突いているのだろう、シンジが苦痛に顔をゆがめた。

「シンジ！」

エステルが棒を振り回して蛾の群れを追い払おうとするが、なかなか上手くいかない。

ヨシユアは戦術オーブメントをかざして、アーツの詠唱を始める。

「こらっ、シンジから離れなさい！」

ヨシユアがアーツを詠唱している間も、エステルは魔獣に向かって武器である棒を振り回し続けていた。

「エステル、そこから離れて！」

ヨシユアに告げられて、エステルは慌てて飛び退いた。

「アクアブリード！」

ヨシユアの戦術オーブメントから水しぶきが上がり、蛾の群れに向かってほとばしった！

そのアーツの攻撃により、蛾の群れの魔獣は倒された。

「武器が当たりにくい魔獣が居るなんて」

「うん、だからアーツで攻撃した方が良い場合があるんだ」

「あたしもアーツが苦手なんて言ってられないか」

ヨシユアの言葉を聞いてエステルはため息をついた。

「シンジ、今回復するから」

アスカは水のアーツであるティアを詠唱してシンジの背中傷を回復させた。

「ありがとう、ずいぶん楽になったよ。でも、アスカの服が汚れちゃったね」

床に倒れ込んで泥だらけになったアスカの服を見て、シンジはそうつぶやいた。

蛾の魔獣の攻撃によって裂かれてしまったのか、アスカの服の背中部分は少しボロボロになってしまっている。

「別にこのぐらいたいした事無いわよ」

アスカは顔を赤くしてシンジを見つめた。
もっとアスカは悔しがると思っていたシンジは不思議に思った。

「それより、シンジの方こそ大丈夫？」

シンジの背中中の傷は直ったが、強く床に打ちつけた後頭部はズキズキと痛んでいた。

アスカに聞かれたシンジは思わず自分の後頭部に手をやってしまった。

それに気が付いたアスカはシンジに近づいてシンジの後頭部に手を重ねる。

「ごめん、アタシが急に飛びついたせいで。シンジの事腰抜けって言えないわね」

そう言って舌を短く出して笑ったアスカの表情を見て、シンジは可愛いと思った。

「さあ、そろそろ行こうか」

「そうだよ、早く試験を終わらせてご飯を食べようよ」

ヨシユアとエステルに声をかけられて、アスカとシンジはパッと体を離す。

「まったくエステルってば、ご飯の事ばかりね」

「はは、そうだね」

アスカとシンジは照れたのをごまかすためにエステルにそうツツコミを入れた。

地下水道を進んで行ったエステル達は通路の突きあたりで古い木箱を見つけた。

「やった、箱を見つけたよ！」

予想外に早く目標物を見つけたエステルは喜びの声を上げた。

「罨や鍵はかかっていないみたいだ」

しかし、ヨシユアが箱を開けると、中に入っていたのはティアの薬が数個とセラスの薬だった。

「どうやら、依頼目標の小箱はこの箱の中には入っていないみたいだね」

「救急箱って書いてある」

木箱にかかれた文字をシンジが読み上げた。

「シェラ姉ったら、紛らわしいことしないでよ！」

怒ったアスカは木箱を思いっきり蹴り飛ばした。
蹴り飛ばされた木箱は壁に激突し、ふたの部分が外れて壊れてしまった。

「アスカ、多分あの箱は遊撃士試験を受ける人達のために代々用意された救急箱じゃないのかな？」

ヨシユアに指摘されて、アスカは顔を青くする。

「ええっ、壊しちゃったよ、どうしようシンジ？」

「素直に謝るしかないよ」

「そうだ、シンジが壊しちゃったことにしなさいよ！」

「ええっ、どうしてだよ」

「だって、シェラ姉もシンジならすぐに許してくれそうじゃない」

「僕は怒られ損じゃないか」

シンジはそう言って顔をふくれさせた。

「ばれた時の方が怖いよ」

「そうだよ、シェラ姉も鬼じゃないって」

ヨシユアとエステルにも諭されて、アスカは自分で謝る事を受け入れた。

「じゃあ、さっきの扉を開けて進むのかな」

「きつとそうだよ」

エステル達は行き止まりの通路を引きかえして鉄格子の扉に手を掛けるが、鍵が掛かっていて開かない。

ヨシユアとシンジは2人で何回も体当たりをするが、扉はびくとも

しなかった。

「じゃあ、残るはあの道しかないわね」

そう言って、アスカは後方に見える水道をまたぐ橋を指差した。

ヨシュアとシンジは早く言ってくれよと言わんばかりにアスカをにらみつけた。

扉に体当たりしたから肩が痛い。

エステル達は立ちはだかるネズミ魔獣と蛾の群れ魔獣を倒し、しっかりと造りの大きめ木箱を見つけた。

「いかにもこれが目標の箱って感じだね！」

「アスカ、もう箱を壊したりしないでよ」

「解ってるわよ」

アスカは不機嫌そうな顔でシンジに答えた。

ヨシュアが箱を開けると、そこには4つの表面が綺麗に磨かれた小さな木箱が入っていた。

箱にはエステル、ヨシュア、アスカ、シンジの名前が書かれた貼り紙が貼られている。

「きっとこれはシェラ姉からあたし達へのプレゼントだよ」

「誕生日プレゼントだね、アスカ」

エステルとシンジは笑顔でそう言って箱を開けようとした。しかし、アスカが叫んで注意を喚起する。

「待ちなさい、これはシェラ姉のワナよ！」

エステルとシンジは驚いてフタにかけていた手をひっこめた。

「アスカの言う通りだよ。依頼には目標の回収だけで、内容物の確認は含まれていないはずだよ」

「じゃあ、箱を開けたら……」

「多分、試験は不合格ね」

「危なかった」

アスカの言葉を聞いて、エステルはホツとしたように胸に手をやって息を吐き出した。

＜ロレントの街 遊撃士協会 ロレント支部＞

地下水道からエステル達が外に出ると、ロレントの街はちょうどお昼時の様子だった。

エリッサの両親が経営する居酒屋アーベントにはランチの客が詰め掛けていた。

そんな人々の姿を羨ましそうに見つめるエステルを急かして4人は遊撃士協会に居るシェラザードの下へと向かうのだった。

シェラザードは4人がそれぞれ持ってきた小箱を丁寧に調べると、にやりと笑う。

「どうやら、開けた形跡はないみたいね」

「ふふん、ワナに引っかけようとしても無駄よ、アタシが居るんだからね」

（……僕もワナだと気が付いたんだけどな）

堂々と言い放つアスカを見て、ヨシユアはため息をついた。

「ほらアスカ、あの事を謝っちゃいなよ」

「分かってるわよ！」

シンジに言い返したアスカは、恐る恐るシェラザードに地下水道に置かれていた古い木箱を壊してしまった事を告げた。

すると、シェラザードはしてやったりとニヤリとした笑みを浮かべる。

「遊撃士協会の備品を壊してしまうなんて、褒められたものじゃないわね」

そう言うと、シェラザードはアスカの名前が書かれた貼り紙の貼られた小箱を手にとった。

アスカ達は不安そうにシェラザードを見つめた。

「それじゃあ、アスカだけは不合格だと言う事で。残念、1人だけ置いてきぼりになっちゃうわね〜♪」

シェラザードがからかうように言うと、アスカはビクツと体を震わせ、目に涙を浮かべた。

その姿を見たシェラザードは慌ててアスカをなだめる。

「ア、アスカ、冗談だから！ 私が悪かったわ、だから泣かないで！」

「別に泣いてなんかいなわよ！」

アスカは手で涙をふきながら、シェラザードに言い返した。

「……さあ、分かっているとは思うけど、その子箱の中身は私からあなた達へ渡すものよ」

「もう開けて良いの？」

「ええ」

エステルの間い掛けにシェラザードがうなずくと、エステル達は小箱を開けた。

中に入っていたのは準遊撃士の紋章だった。

表面には人々を守る象徴としての盾とコテが重なった準遊撃士のシンボル。

背面にはエステル・ブライト、ヨシユア・ブライト、アスカ・ブライト、シンジ・ブライトとそれぞれ名前が刻まれていた。

「あなた達を本日12…30を持って準遊撃士に任命します」

シェラザードがそう宣言すると、エステル達は笑顔になった。

「僕が遊撃士か……」

「信じられないよ」

ヨシユアとシンジは、ぼう然とした様子で手に持った準遊撃士の紋章を見つめていた。

「2人とも辛気臭いわね、もっと喜びなさいよ」

「そうそう、やったー、やつほーい！」

「エステルは喜び過ぎ」

アスカははしゃぐエステルにツツコミを入れた。

シェラザードはそんなエステル達を見て嬉しそうに微笑む。

「さて、お腹もすいたでしょう？ 今日のアスカの誕生日だし、お姉さんがおごってあげるわよ♪」

「やったー」

シェラザードの言葉を聞いたエステルは飛び上がって喜んだ。

「おごるって言っても、《アーベント》のランチじゃない」

「まあそう言いなさんなって。私もそんなに稼いでいるわけじゃないんだから」

「アスカ、夜にご馳走にならない方が良いよ」

「そうね、シェラ姉って酔うと絡んで来るし」

「私が酒乱だって言いたいのかしら？」

シェラザードは少しむくれて否定しないエステル達をにらみつけた。その後エステル達とシェラザードが《アーベント》でランチを食べていると、息を切らせたエリッサがエステル達の席にやって来る。

「大変よ！」

「……何があったの？」

「それがどうやら、ルックとパットが北の門から街の外へ出て行ってしまふのを、街の女の子が目撃してしまったらしいんです！」

シェラザードの質問に対するエリッサの答えを聞いたエステル達は驚きの声を上げる。

ルックはロレントの街で暮らす腕白小僧だ。

きっと同い年の少年パットを半ば強引に連れて行ったのだろう。

「街の外は魔獣が居て危険ですよ」

「ええ、早急に2人を見つけて連れ戻さなければならぬわ！」

ヨシュアの言葉にシェラザードはうなずき、急いで外へと出て行った。

エステル達もあわてて後を追いかける。
見送ったエリツサはエステル達が無事にルックとパットを保護できる事を祈るのだった。

第十話 悲しきヨシュアの誓い、シンジの苦悩

＜ロレント地方 マルガ山道＞

シェラザード達はルックとパットを追いかけてマルガ山道に出たが、2人の姿は見当たらなかった。

「もしかして、かなり遠くの方まで行ってしまったのかもしれないわね」

道端に居る魔獣達をシェラザードは圧倒的な強さで蹴散らして行った。

エステル達はシェラザードの動きに感心しながらも遅れないように付いて行く。

ルックとパットの足取りを追ってマルガ山道を進んだエステル達は分かれ道にたどり着いた。

分かれ道はマルガ鉱山に続く道と翡翠の塔へ続く道へと分かれている。

「どっちにいったのかな？」

「手分けして探しましょう！」

エステルの言葉を聞いて、アスカが提案をすると、シェラザードが呼び止める。

「待ちなさい、翡翠の塔へ向かう道の方に小さな子供達の足跡があるわ」

「凄いシェラ姉、そんなのが解るんだ」

地面を見ていたシェラザードがそう言うのと、アスカが感心したように言った。

「やっぱり遊撃士にはそう言うスキルがあった方が良いでしょう？」
「まああった方が便利なスキルね。先日の雨で道がぬかるんでいたから、よく見ればあなた達にも分かるわよ」

「本当だ」

シェラザードに言われた通りシンジが地面を見ると、他の足跡に混じって小さな子供の足跡があるのが分かった。

マルガ鋤山に続く道の方も念のため調べて見たが、こちらは大人の鋤山労働者の足跡しか見られなかった。

ここでルックとパットの行き先の判断を誤るのは致命的なミスとなる。

足跡から翡翠の塔だと確信したエステル達は走って翡翠の塔への道突き進む。

翡翠の塔とは、リベール王国が誕生するはるか昔、古代ゼムリア文明の時代に建てられた遺跡としてロレントの街の人々に知られていた。

塔の中にあった財宝はすでにトレジャーハンターに荒らされていたが、考古学者や冒険者を夢見る少年達の憧れの的になっていた。

しかし、塔の内部には魔獣が住みついている事は知られていて、定期的に遊撃士が魔獣討伐をしているものの、危険な場所である事には変わりなかった。

翡翠の塔の入り口付近にも、ルックとパットの姿は無かった。

「中に入ってしまったの……?」

「お願い、無事で居て……!」

エステルとアスカは祈るようにそうつぶやいた。

2人に生意気な口を利いていたルックだったが、パットと同じくかわいい弟のような存在だ。

<ロレント地方 翡翠の塔>

翡翠の塔は5階建てで構成されている。

エステル達は塔の1階に踏み込んだ。

「ルックーっ、パットーっ！ 居たら返事なさいーっ！」

エステルが大声で呼びかけ、声が塔の中に響き渡った。

しかし、しばらくエステル達が耳を澄ましても返事は無かった。

「もしかして上の階へ登って行ってしまったのかもしれないね」
「行きましよう！」

ヨシュアがそう言うと、アスカは、はやる気持ちを抑えきれなかったのかシェラザードを追い越して先へと走って行った。

「アスカ、待ちなさい！」

物陰に魔獣が隠れて居たらアスカは不意打ちを受けてしまう恐れがある。

シンジは真っ青な顔をしてアスカの後を追いかけた。

「ねえ、もう帰ろうよ……」

「お宝を手に入れるまで帰らないぞ、エステルやアスカに負けてられるか！」

先行したアスカに、階段の上からパットとルックが言い争う声が聞こえる。

「間に合った！」

2人がまだ無事だと分かったアスカは2階への階段を駆け上がった。そして広間の前を歩くルックとパットの姿を見つける。

「こらっ、2人とも！」

「うわあ、アスカだ逃げろ〜！」

怒ったアスカの顔を見たルックは薄暗い奥の通路に向かって逃げ出してしまったのだ。

「あっ、待ちなさい！」

アスカは慌ててルックを追いかけた。すると、逃げたルックが悲鳴を上げて引き返して来た。ルックは浮遊する猫型魔獣に追いかけられている！猫型魔獣は長い耳を羽のように振動させて飛んでいる。

「うわああ、助けて！」

「このおおっ！」

アスカは鞭を振り回して猫型魔獣を追ひ払おうとしたが、猫型魔獣はなんと6匹も居た。

形勢不利となったアスカは魔獣達に囲まれてしまった。

アスカの背後には怯えて立ちつくすルックとパットが居る。

後ろに下がるわけにもいかなかった。

魔獣達とアスカの距離が縮まり、アスカが自分の身を盾にしてルックとパットを守ろうと覚悟した時、導力銃の音が響き渡った。

下の階から駆けつけたシンジが魔獣達に向かって銃を放ったのだ。決してアスカに当てないように気遣って撃たれた銃弾は、アスカの正面に居た魔獣には直接当たらなかったが、ひるませる効果はあったようだった。

そして、アスカの後ろからシェラザード、エステル、ヨシユアの3人が飛び出して魔獣に攻撃を加える。

「アスカ！」

「助かったわ……」

シンジに声を掛けられたアスカは振り返って安心してため息をもらした。

「すっげー、さすが遊撃士だな！」

安全が確保されたルックは、シェラザード達が魔獣達を倒す姿を興奮して見守っていた。

猫型魔獣は散り散りになって奥の通路へと逃げて行った。

「この馬鹿っ！ どうしてこんな危険な事をしたのよ！」

アスカはそう言ってルックのほおを平手打ちにした。

ルックはアスカに叩かれたほおを押さえながら言い訳をする。

「だって、エステルやアスカ達が遊撃士試験に合格したってウワサを聞いて、負けてられないって思って……」

「だからって、こんなことする事ないじゃない！ もしアンタ達が怪我でもしたら……命でも落とす事があったら……」

そう言って、アスカは涙を流し始めた。

「ご、ごめんアスカ姉ちゃん、二度とこんな事はしないから！」

「ごめんなさい！」

アスカにつられてルックとパットも声を上げて泣き始めた。

シェラザード達は仕方が無いと言った微笑みを浮かべながら3人をなだめながらロレントの街へ戻るのだった。

くロレント地方　ブライト家　ダイニングキッチン>

「それは大変だったな」

エステル達の話聞いたカシウスはそう言葉をもらした。

その日の夕食の席で、エステル達はカシウスに試験合格の報告と、ルックとパットの事を話した。

「アスカは突っ走りすぎだよ、シェラザードさんにも評価を減点さ
れていたじゃないか」

ヨシユアが厳しい口調で責めると、アスカはうなだれた顔になった。
すると、シンジは少し怒った顔になってヨシユアに反論する。

「でも、アスカが早く駆けつけたからルックとパットが怪我をする
前に追いつけたんだし……」

「突入にはタイミングを合わせるのは基本的な事だろう？　現に、
アスカは魔獣に取り囲まれてやられそうになっていたじゃないか」

「そうよね、アタシは遊撃士として失格よね」

アスカがさらに落ち込んだ様子でそう言うと、シンジとエステルは慰めて励まそうとする。

「そんな、失格だなんておおげさだよ」

「そうそう、今日の失敗は明日取り返せば良いじゃない」

その姿をカシウスは嬉しそうに見守っていた。
そして決意したようにゆっくりと話し出す。

「なあ、明日からしばらく家を留守にしようと思うんだが」

「もしかして、依頼が入ったの？」

「ああ、帝国の方で大きな事件が起こった事を告げる手紙が届いた」
カシウスはヨシュアにそう答えて差出人が帝国の遊撃士協会である手紙を見せた。

「今のお前達の姿を見て、俺が居なくても問題は無いかと思ってな」
カシウスがつぶやくように言うと、アスカはカシウスに笑顔を向ける。

「今までアタシ達のために近場の依頼以外は断っていたんでしょ？」

「僕はもう大丈夫です。エステルやヨシュア、ロレントの街の人々が支えてくれるし……」

アスカとシンジはカシウスに安心させるように穏やかな余裕をもった表情をした。

「……ありがとう、パパ」

「ああ、行ってくるよ」

飛びついて来たアスカを抱きながら、カシウスはそう答えた。

「でも、ロレント支部の依頼はどうするの？ 父さんもいくつか引き受けていたんでしょう？」

「それなんだが……お前達に任せようと思ってな」

ヨシユアにカシウスが答えると、エステルは驚きの声を上げる。

「あたし達が父さんの代わりをするの？」

「もちろん、難しい依頼はシェラザードにこなしてもらおうさ」

エステルの質問に答えるカシウスに、アスカは少し心細い表情で尋ねる。

「それで、どのくらいで帰って来るの？」

「そうだな……数ヵ月ぐらい、女王生誕祭が始まる頃ぐらいには帰って来るさ。アスカが寂しがって泣き出さないうちにな」

「パパったら、アタシをそんな子供扱いしないでよ！ シンジもそんなに笑うな！」

カシウスがからかうとアスカは顔を真っ赤にしてシンジを蹴り飛ばすのだった。

＜ロレント地方　ブライト家　テラス＞

夕食が終わった後、テラスに置かれた椅子に座ってカシウスがワインを飲んでいる。

そこへ姿を現したのはヨシユアだった。

「早かったな」

「うん、3人とも話に夢中になっているみたいだから」

カシウスは夕食の時、暗号を使ってヨシユアに合図を送っていたのだ。

テラスで月見酒を飲むと言うカシウスの言葉をエステル達は疑いもなかった。

「そうか、シンジとアスカが来て2年、もうすっかりお前とエステルに馴染んだようだな」

「僕はあの2人に馴染んだわけじゃないよ。あなたが仲良くするように命令したから従ったまでだ」

そう話すヨシユアの瞳には冷たいものが宿っていた。

カシウスはそんなヨシユアの言い方に苦笑しながら話を進める。

「改めて聞いておきたいんだが、あの時の誓い、撤回するつもりはないか？」

「無いよ」

「……そうか」

即答したヨシユアにカシウスは残念そうな顔をしてつぶやいた。

「組織が僕の事を狙ってきたら、あなた達に迷惑をかけないように僕はここを離れる。それが僕がここに居られる理由だから」

「もし、エステルが悲しむとしてもか？」

「僕はエステルを真に幸せにする事は出来ないよ、僕の両手は罪の無い人達の血で汚れているんだから」

「それを言ったら、俺も同じだ。帝国の人間を何人も斬り捨て、時によつては大量に死なせるような作戦も立てた」

「あなたは自分の国の人達を守るために行った事だ、僕とは違う」

「……ふう、やはり何度話し合っても平行線か……」

「話し合いで解決する事じゃないよ」

ヨシユアはそう言って家の中に入ろうとドアを開けると、シンジが立っている事に驚く。

「どうして、ここに？」

「エステルに呼んで来いって頼まれて……」

鋭い目つきでヨシユアに聞かれると、シンジはオドオドしながらそう答えた。

「もしかして、僕達の話聞いていたのか？」

「うん。……ねえ、組織って何なの？ エステルを悲しませるような事は止めた方が……」

「うるさい」

シンジがそう言うと、ヨシユアは小さいが棘のある声でそうつぶやいた。

そして凍り付かせるような瞳でシンジに告げる。

「さっき聞いた話は絶対にエステル達にもらすな、聞かなかった事にするんだ」

シンジが救いを求めるようにカシウスに視線を送ると、カシウスも悲しそうなめをしてうなずいた。

「……分かったよ、誰にも言わない」

「分かればいいんだ」

ヨシユアはそう言うのと、表情を柔らかいものに変えてエステル達の下へと歩いて行った。

シンジは前にミサトに同じような事を言われた時の事を思い出した。ネルフで迷子になったシンジは、ミサトの姿を見つけて後を付けてしまった。

そしてネルフ最深部のターミナルドグマと呼ばれる不気味な場所で見ってしまった白い巨大な人影。

それはネルフの秘密そのものだった。

その場に居合わせたミサトと加持はシンジに見た事は黙って忘れろと真剣な表情で言った。

だからその事はアスカにもレイにも話していない。

「自分に危険が迫ったら、迷惑をかけないように離れる誓いなんて悲しすぎるよ……僕達を頼ってくれても良いのに」

再び誰にも話せない秘密を抱える事になりシンジは重苦しさを感ずるのだった。

<ロレントの街　ロレント空港>

そして次の日の朝、帝国に向かうため飛行船に乗りとうとするカシウスを、シェラザードと一緒にエステル達は見送るのだった。

「シェラザード、後は頼んだぞ」

「お任せ下さい、4人ともビシバシと鍛えますから」

「うえっ」

シェラザードがカシウスに宣言すると、エステルは嫌そうな顔をした。

「シンジ、アスカを頼んだぞ」

「うん、家事や料理をビシバシと鍛えておくよ」

「はは、頼んだぞ」

シンジがシェラザードの真似をしてそう言うと、アスカは顔をふくれさせる。

「むーっ、パパが帰ってきたらビックリさせてやるんだから！」

「楽しみにしているぞ」

「そうだ、お土産忘れないでね！」

エステルがそう言うと、カシウス達は一斉にあきれたようにため息をつく。

「あのなあエステル、父さんは遊びに行くんじゃないんだぞ」

「別に良いじゃん、期待しても」

「はあ……じゃあ、たんまりと報酬がもらえたらな」

「やった！」

ため息交じりにカシウスがそう言うと、エステルは手を打って喜んだ。

そしてカシウスは最後にヨシユアと視線を交わした。

その張り詰めたような雰囲気、アスカは何か胸騒ぎのようなものを感じたが、何も言う事は出来なかった。

飛行船の発車を告げる汽笛がならされ、飛行船と乗り場を結ぶ橋が飛行船のクルーによって取り外される。

カシウスはエステル達に手を振って客室の中へと姿を消した。

大きな音を立てて、カシウスを乗せた飛行船は空に軌跡を描いて飛び立っていった。

第十一話 ヨシュアの光と闇

＜ロレントの街 遊撃士協会＞

帝国に向かって飛び立ったカシウスを見送ったエステル達は、依頼を受けるために遊撃士協会へと出勤した。

掲示板に貼られていた依頼のうち、シェアザードとその他ロレント支部に所属していた遊撃士が引き受け済みのものを除くと残りは探し物の依頼だけだった。

それは街の婦人からで飼い猫が行方不明になったので探してほしいと言う依頼だった。

「なんか、地味でパツとしない依頼ね……」

「アスカ、立派な遊撃士になるためには千里の道も一歩からだよ」

面白くなさそうな顔で不満を述べるアスカをシンジがなだめた。

「そうだ、父さんの代わりに引き受ける依頼があったんじゃない？」「うん、その依頼を先に聞かないと」

エステル達がカシウスの代わりに引き受ける事になった依頼は、友達のティオの農園を荒らす魔獣を退治すると言うものだった。

魔獣は夜に現れて畑の作物を食い荒らし、気が付いたティオ達が追いかけると逃げて行ってしまいうらしい。

まだ人に被害は無いのだが、近隣の農家も困っているので何とかして欲しいと言う事だった。

魔獣が現れるのは夜で、農園へ向かうのは夕方でも構わないと言う事だったので、エステル達は昼間は先ほど掲示板に貼りだされていた依頼をこなす事にした。

「探し物の1つや2つぐらい、さっさと片付けるわよ！」

アスカははりきって街の中へと飛び出して行った。

シンジ達も苦笑しながらアスカについて行った。

エステル達が依頼主の婦人に声を掛けると、婦人の話とはばけた感じで要領を得なかった。

行方不明の猫の特徴を聞いたエステル達は手分けをして街の中を探す事にした。

「やっぱり猫探しなんてつまらないわね……」

アスカは不満いっぱいの様子で街の中を探していると、ルックとパットが駆け回って遊んでいるのを見かけた。

「あっ、アスカ姉ちゃん」

「この前はごめんなさい」

やって来たアスカに気が付いたルックとパットがアスカの側に寄って来た。

「反省してる？」

「うん、この前は姉ちゃんを泣かせてごめん」

アスカに問い掛けられたルックは、真剣な顔でアスカに謝った。

「そうね、女の子を心配させる男の子は悪い子ね」

「だよな……」

アスカに同意されたルックは落ち込んで下を向いた。

そんなルックに向かってアスカは優しく声を掛ける。

「かっこいい男の子って言うのはね、冒険が出来れば良いってもんじゃないのよ」

アスカの言葉を聞いたルックはそっと顔を上げた。

「普段は頼りないかもしれないけど、いざって時は体を張って女の子を守ってあげるのもかっこいいと思うわ」

「それってシンジ兄ちゃんの事か？」

「ま、まあ、シンジはまだまだカシウスさんの足元にも及ばないけどね」

ルックに言われたアスカは顔を赤くしてそう言ってごまかすのだった。

そして街中を駆け回ったエステル達は、路地の行き止まりに探していた猫を追いつめた。

「さて、ずいぶんとてこずらせてくれたわね……」

エステルがそう言って猫に近づこうとすると、ヨシユアがそれを止める。

「力づくで捕まえても、また逃げようと必死に抵抗すると思うよ。ここは僕に任せて」

そう言ったヨシユアは、怯えた瞳でこちらを見つめる猫に向かって、優しい口調で話しかける。

「さあ、こっちへおいで。僕と一緒におばさんの所へ帰ろう」

すると、猫は警戒を解いてヨシユアの胸に飛び込んで行った。
そして安心した様子でヨシユアに抱かれている。

「よしよし、いい子だね」

「これなら逃げる心配はなさそうだね」

ヨシユアに声をかけられてゴロゴロとのを鳴らす猫を見たシンジ
がホッと息をもらした。

「多分、この猫はおばさんの所へ帰ろうとしていたんじゃないかな」
「それって、あたし達が追いかけた事は逆効果だったって事？」

「何よ、それじゃあアタシ達はあのおばさんの勘違いのせいで骨折
り損だったわけ？」

「猫が無事だったから良かったじゃないか」

「シンジは甘すぎるわよ」

猫を無事に届けたエステル達は、依頼主の婦人に感謝された。
あんまり反省しない様子の婦人と猫の様子に苦笑しながらも、エス
テル達は遊撃士ギルドに戻って依頼達成の報告をした。

どんなに小さい依頼でも、正式な依頼として報酬が出るようで、エ
ステル達の遊撃士手帳にも評価が記録された。

エステル達は他に依頼が入っていないか確認したが、特に依頼は無
いようだったので少し早目にパーゼル農園へと向かう事にした。

<ロレント地方 パーゼル農園>

エステル達はパーゼル農園で張り込みをする事にしたが、興奮した

魔獣がティオの家族を傷つけたりしては危険だと言う事で、ティオの両親と幼い弟と妹は街へと避難させた。

ティオはエステル達に協力したいと農園に残って一緒に一夜を明かす事になった。

ティオ達の家族を街へと護衛するために往復して農園に戻った頃には夕方になっていた。

「あー、お腹空いた」

「あはは、エステルったら相変わらずね。じゃあそろそろ、夕食を作っちゃおうか」

農園に着くなりそうつぶやいたエステルに、ティオは苦笑しながら料理に取りかかった。

「僕達も手伝うよ」

「でも、シンジ君達には魔獣退治をお願いしているんだし、私にはこれぐらいしかできる事は無いから」

シンジがそう申し出ると、ティオはそう言って首を横に振った。

「みんなで協力した方が早くご飯が食べられるよ」

「そうよ、エステルの言う通りよ」

「わかった、じゃあヨシユア君とシンジ君は畑から食材を収穫して来てね」

エステルとアスカがそう提案すると、ティオはそれを受け入れた。

「えっ、僕達が料理をした方が良くないかな？」

「失礼ね、アタシだって野菜を切る事ぐらいできるわよ」

思わず本音をもらしてしまったシンジをアスカがにらみつけた。
また怒られて蹴り飛ばされてはかなわないとシンジは急いで畑へと
駆け出して行った。

そして、新鮮な野菜を収穫して来たシンジとヨシユアは椅子に座っ
てエステルとアスカが料理する様子を見ていた。

予想した通り、アスカの切った野菜は不格好な形をしていた。

「アスカ、そんな切り方じゃ煮たときに味にムラが出ちゃうよ」

「うるさい、お腹に入っちゃえば、そんなの同じよ！」

心配したシンジが手を出そうとすると、アスカは包丁を振り回して
抵抗した。

その剣幕にシンジは引き下がった。

「あはは、うちの野菜は新鮮だから、どんな調理をしたっておいし
く食べられるよ」

「ティオ、それってアタシのフォローになって無い……」

そんな不安要素はあったものの、夕食はおいしく出来上がったのだ
った。

5人で夕食を食べた後、魔獣が現れる時間になるまでにエステル、
アスカ、ティオの3人はティオの部屋で少しおしゃべりを楽しむ事
にした。

ヨシユアとシンジは念のために早い時間から外で見張っている事にな
った。

女3人集まればかしまい。

自然と話題は恋の話となった。

「で、アスカはもうシンジ君と付き合いだしたの？ 遊撃士になっ
てからシンジ君の事、見直したって話していたじゃない」

「ふん、見直したと言ってもほんのちよつとだけよ。パパに比べたら情けないっただけありゃしない」

「でも、シンジ君って優しいし、構ってあげたくなるかわいい所があるから、結構持てているみたいよ」

「シンジが持てるなんて10年早いだよ。だからシンジに言い寄る子は排除してやってるの」

「またまたそんな事言って、アスカはヤキモチ焼いているんでしよう」

「あははっ、シンジは持てて大変だね」

エステルがのんきに声を上げて笑うと、ティオとアスカはあきれたようにため息をつく。

「はあっ、大変なのはヨシユア君もでしょう」

「ヨシユアもいろんな娘から交際を申し込まれているらしいわよ。でもみんな断っているって」

「何ですって、あたしの知らないところでそんな事してるなんて、ヨシユアの秘密主義！」

エステルがほおを膨らませて怒っていると、アスカはさらにあきれ顔でつぶやく。

「そんないちいち報告するほどのものじゃないでしょうに」

「だけど、隠す事は無いじゃない」

エステルは少し不機嫌な顔で部屋を飛び出し、外に居るヨシユアに問い詰める。

「ヨシユア、あたし達家族として今まで過ごして来たよね？ あたし……ヨシユアを実の弟のように大切に思っている」

「突然、何を言ってるんだい？」

ヨシユアはきつねにつままれたような顔でぼう然と聞き返した。

「ヨシユアってば、あたしに隠し事をしているでしょ」

「……シンジ！」

エステルがヨシユアに尋ねると、ヨシユアは刺すような冷たい眼差しでシンジをにらみつけた。
にらみつけられたシンジは震えあがった。

「何でシンジが出てくるの？」

「それは……」

「恋の悩みなら、あたしも少しは相談に乗れるかもしれないよ。一応、女の子だし……」

「はあっ!？」

エステルがモジモジしながらそう言うと、ヨシユアは驚きの声を上げた。

「交際を断っているって事は、好きな女の子でも居るの？」

「そ、そんなの居ないよ」

「そう？　好きな子が出来た時は隠さずに相談するのよ!」

エステルはそう言うのと夜の農園に向かって駆け出して行ってしまった。

「隠し事か……」

ヨシユアは悲しげな表情でそうつぶやくと、エステルを追いかけて

追いかけて行った。

取り残されたシンジにいつの間にか来ていたアスカが声を掛ける。

「ヨシユアってば、さっきアンタを呪い殺すかのようにシンジをにらみつけていたわね」

「うん、とっても冷たい目だった」

「アタシ、正直言ってヨシユアは裏があると思うわ」

「アスカ、人を疑うのは良くないよ。ヨシユアは僕達の家族なんだから信じてあげないと……」

シンジはアスカにそう答えて、アスカと一緒にエステル達の後を追いかけるのだった。

第十二話 闇を照らすエステル輝き

<ロレント地方 パーゼル農園>

夜のパーゼル農園は涼しげな虫の鳴き声が響く以外は静かなものだった。

ヨシユアが2人1組になって手分けして探索する事を提案すると、エステル達は賛成し、エステルとヨシユア、アスカとシンジの二手に分かれて回る事になった。

キャベツ畑を見て回ったエステルとヨシユアは、作物を食い荒らししている黒い影を見つけた。

黒い影の正体は毛深い大きなウサギのような魔獣だった。

大きい魔獣が1匹、そして数匹の魔獣と言った編成。

エステル達が近づくと、魔獣達は森の方へと逃げようとした。

しかし退路にはアスカとシンジが立ちはだかっている。

「おっと、こっちは行き止まりよ！」

前後を挟まれた魔獣達はパニックを起こし、エステルやアスカ達に向かって飛びかかって来た！

その魔獣達をエステルとアスカは棒や鞭を使って叩きのめした。

ヨシユアとシンジも魔獣の足を止めるために双剣や威嚇射撃でサポートした。

数分も経たないうちに魔獣達は猫の鳴き声のような悲鳴を上げて倒れ込んでしまった。

騒ぎを聞きつけたティオが家から出て来る。

「この魔獣達が畑を荒らしていたのね」

「これだけ懲らしめてやれば、もう悪さはしないと思うわ」

アスカはティオに自信たっぷりに言い放った。

「じゃあさ、この子達を放してあげるわけにはいかないかな？」

「エステル、また同じ被害が起きたらどう言い訳するつもり？」

「でも……」

「被害の根はここで絶ってしまった方が良いんだ」

ヨシユアはエステルに向かって冷たい目でそう言い放った。

「ヨシユア君、私からもお願いするわ。魔獣だからって命を簡単に奪って良い理由にはならないもの」

「ほら、遊撃士は依頼人の意思を尊重するんでしょう？」

「……分かったよ」

ティオとアスカに説得されて、ヨシユアは引き下がった。

命を奪わずにホッとしたエステルは倒れ伏している魔獣達に話し掛ける。

「さあ、元気になったら森にお帰り」

魔獣達は起き上がって森へと帰ろうとしたが、そのうちの1匹が背後からエステルに飛びかかろうとする！

「エステル、後ろっ！」

シンジの注意も間に合わず、エステルの体には魔獣の爪の痕が刻まれる、と思われたが、絶妙のタイミングでヨシユアの剣がその魔獣の体を切り裂いた。

悲鳴を受けて息絶える魔獣。

ヨシユアの攻撃は急所をとらえ、魔獣の命を一瞬で奪った。

すると、今度は一番大きな体の魔獣が大きな鳴き声を上げてヨシユアに飛びかかる！

エステル達は仕方無く再び魔獣達を叩きのめした。

大きな体の魔獣は虫の息になりながらも、しつこくヨシユアに飛びかかるうしたため、止むを得ず止めを刺した。

2匹の魔獣の死体を見てエステル達は何とも言えない気持ちになる。大きな体の魔獣は他の魔獣達の親だったのだろうか、それとも兄だったのだろうか。

エステル達には分からなかったが、残りの小さな魔獣達は動かなくなった2匹の魔獣を見て悲しげな鳴き声を上げて走り去って行った。

「……魔獣達は家族だったのかもしれないね」

「家族を奪ってしまったアタシ達の事、恨んでるかしら」

シンジとアスカが悲しそうな顔でポツリとつぶやくと、ヨシユアは暗い顔をして話し出す。

「ごめん、僕のせいでみんなに嫌な思いをさせてしまったね」

「そんな事無いわよ、ヨシユアはあたしを守るためにしてくれたんだし」

「エステルに飛びかかった魔獣が悪いのよ」

エステルとアスカが慰めても、ヨシユアはまだ自分を責め続けている。

「僕には可哀想なんて感情が湧かない冷たい人間なんだ……だから魔獣の命もためらわずに奪う事が出来たのさ」

「今日の昼間、ヨシユアは猫を優しく手懐けていたじゃないか。あの時のヨシユアは優しい目をしていた。だから僕はヨシユアは冷た

い人間だとは思えない」

「それは演技だよ。猫を騙すぐらい心のきれいな人間じゃ無くても出来るよ」

シンジの慰めに対しても、ヨシユアは鼻で笑うように言い返した。

「僕はもう、心が壊れてしまっているのかもしれないね」

自分で皮肉を言っつてむなしい笑い声を上げるヨシユア。

アスカとシンジ、ティオはそんなヨシユアを見て疲れた顔でため息をついた。

しかし、エステルは諦めない。

「このバカヨシユア、勝手に自分を決めつけないでよ！」

エステルは怒った顔でヨシユアの目を見つめながら言い放った。

その剣幕にヨシユアはぼう然としながらエステルを見つめていた。

「あたしはヨシユアが家に来てから5年間、家族としてずっと側でヨシユアを見て来た！　そしてヨシユアの良い所も悪い所も何でも知ってるんだから！」

「エ、エステル……？」

「ヨシユアの心が壊れているなんて、誰にも認めさせないんだから！　ヨシユア本人にもね！」

エステルがそう断言すると、しばらく周囲に沈黙が流れた。
アスカ達も固唾を飲んでヨシユアの反応を待った。

すると、ヨシユアはゆっくりと息を吐き出して謝り始める。

「ごめん、さらにエステルを悲しませるような事を言っつて」

「分かればいいの。ヨシユアってばさ、周りに遠慮して1人で抱え込んで隠すタイプでしょう、だから家族としては寂しかったのよね」
「僕は……」

「でも、今日は心の内をこうしてさらしてくれたから、とっても嬉しいんだ」

エステルが笑顔でそう言うと、見守っていたアスカ達の空気もホッと緩んだ。

「エステルってば、そんな恥ずかしいセリフをみんなの见ている前で良く言えるわね」

「昔から正しいと思った事は堂々と言う性格だからね」

アスカの言葉に、ティオは苦笑しながら答えた。

「本当に信頼し合って、パートナーって感じだよね」

「羨ましいでしょう、シンジとアスカもあたし達みたいに仲のいい姉弟になるのよ」

シンジのつぶやきに対して、エステルが笑顔でそう答えると、アスカはあきれた顔でため息をもらす。

「ずっとヨシユアを見ていた割に、ヨシユアの心に気が付かないなんてエステルって相当鈍いのね」

「多分エステルは授業中は熟睡していたからヨシユアが優しく見守っていた事は知らないんだよ」

アスカとシンジは困った顔で見合わせながらそう言い合った。

その日の夜、アスカとエステルはティオの部屋に、ヨシユアとシンジはティオの両親の部屋に泊めてもらう事になった。

ティオの部屋は幼い妹弟と同じ部屋だったので、3人で寝れるスペースがあつたのだ。

「ごめんね、狭苦しいベッドで。妹弟達もまだ私が側に居ないと寂しいって言うのよ」

「あはは、まだ甘えたい年頃だしね」

「一晩ぐらいなら平気よ」

ティオの言葉を聞いて、エステルとアスカは笑ってごまかした。まさか自分達は未だに家では抱き合って寝ているとはとても恥ずかしくてティオには言えない。

その日は幸いにも悪夢を見る事は無かった。

「あのさ、ヨシユア」

「……何？」

部屋で2人きりになるとシンジとヨシユアの間にはぎこちない空気が流れていた。

「大事な人のためならさ、鬼みたいな事も出来てしまうんだよ。だから、ヨシユアは普段から冷たい人間だってわけじゃないと思う」

「……そう言ってもらえると気分がもっと軽くなったよ、ありがとう」

ヨシユアはシンジの言葉を聞いて素直に笑顔でお礼を言うのだった。少しヨシユアも自分に心を開いてくれたとシンジは嬉しくなったが、ヨシユアにも話せない不安がシンジの中に生まれた。

果たして、アスカに危険が迫った時に自分はヨシユアのように割り切った行動がとれるのだろうか。

アスカと共に過ごして2年、シンジにも初めの印象は悪かったアス

カの良い面もだんだんと分かって来た。

やはり、シンジはだんだんとアスカの事は好きで守りたい存在へと変わって来ていたのだ。

アスカが傷つく所は何としても見たくは無かった。

今まで避けていた銃の練習を始めようと決意を固めるシンジだった。

<ロレントの街 遊撃士協会>

パーゼル農園で一泊したエステル達は、ティオの家族をロレントの街まで迎えに行き、送り届けた後で再びロレントの街に戻り、依頼達成の報告を行った。

「……なるほど、そんな事があったわけね」

たまたま遊撃士協会に居合わせたシェラザードは報告を聞いてそうつぶやいた。

「あなた達も勉強になったでしょう、魔獣達の巢の近くでは特に注意する事。親が子を守るために興奮して襲ってくる事もあるからね」
「はい」

シェラザードの言葉にエステル達はうなずいた。

しかし、シンジは浮かない顔をしていた。

それに気が付いたアスカがそっとシンジに声を掛ける。

「どうしたのよ？」

「うん、ちょっと父さんの事を思い出して。父さんは僕の事を守ってくれるのかなって」

「当たり前じゃん、きつと守ってくれるわよ」

「じゃあ僕が居なくなったら事も心配してくれているのかな」

「そうね、きつと心配しているわよ」

「アスカに言われて少し気分が軽くなったよ」

シンジは笑顔になってアスカに答えた。

アスカはシンジの父親のゲンドウはシンジを守るだろうし、居なくなったら心配するだろうと思っていた。

しかしそれはエヴァンゲリオンのパイロットであるサードチルドレンとしての話だと分かっている。

それに引き換え自分は戦うための駒にしか過ぎないとアスカは感じていた。

シンジと初号機には特別扱いだとアスカは感じ取っていたのである。またアスカはシンジに本当の事を告げて失望させる気持ちにはなれなかった。

その反面、まだシンジへの嫉妬のようなものも少しだけ残っていた。せめぎ合う2つの想いがアスカにそのような言葉を言わせたのだった。

「アタシは嘘は言っていない……」

アスカは自分に言い聞かせるようにそうつぶやいた。

エステル達の次の依頼はロレント市長からの物品運搬の依頼だった。

「市長さんからの依頼なんて、引き受けちゃっていいの？」

「簡単な依頼って話だから、あなた達に任せる事にしたのよ」

エステルの質問に対して、シェラザードはそう答えた。

「簡単な仕事ねえ……そう言うのに限って裏があったりして」

「市長さんが僕達に隠し事をする理由は無いと思うけど」

アスカの言葉に、シンジはあきれた顔でため息をついた。

「簡単な仕事だからこそ、油断は禁物よ。気を抜かないでしっかりと依頼をこなして来なさい」

「はい」

シェラザードに見送られて、エステル達は市長邸へと向かうのだった。

<ロレント地方 マルガ鉱山>

市長邸で市長がエステル達に話した依頼内容は、北のマルガ鉱山から大きなセプチウムの結晶を街まで運んで欲しいとの事だった。

その大きなセプチウムの結晶とは緑色に輝く翠耀石^{エスメラス}の結晶であり、アスカとシンジが知っているエメラルドのようなものだと言明された。

寶石の運搬だと言う事でアスカとシンジとヨシユアに緊張感が生まれる。

しかしエステルだけはいつも通りに元気に振る舞っていた。

市長からの紹介状を受け取り、エステル達はマルガ鉱山への道を歩いて行く。

途中のマルガ山道では何事も無くエステル達はマルガ鉱山へとたどり着いた。

「ここから先は関係者以外立ち入り禁止だよ」

「ところがどっこい、あたし達は関係者なのね！」

入口の鋤夫に止められたが、エステルが紹介状を見せると、奥へ行って責任者に直接話して欲しいと通された。

坑道の中に入ると、アスカが顔をしかめる。

「洞くつつて嫌ね、服が土ほこりで汚れちゃう」

「服の汚れを気にする遊撃士なんて居ないよ」

「ヨシユアってば、理解が無いわね」

アスカは顔をふくれさせながらそうつぶやいた。

エステル達が奥に進むと、台車のようなものが数台置かれていた。その先にはレールが続いている。

「どうやら、鋤石を運ぶためのものらしいね」

「ねえ、これに乗った方が速そうだよ」

エステルがそう提案すると、アスカは首を横に振る。

「嫌よ、アタシはスカートだもん」

「じゃあ手で押さえていればいいじゃん」

今日はスパッツをはいて来たエステルは気にしてない様子でそう言った。

「ダメよ、パンツが見えちゃう」

アスカの言葉を聞いたシンジは顔を赤くした。そんなシンジの姿を見たアスカはシンジに向かって思いっきり怒鳴る。

「こらっバカシンジ、アンタ何を妄想しているのよ！」

「でも、歩くとかなり長い距離になるし、乗って行った方が楽そう
だ」

「仕方無いわね……」

ヨシユアの言葉を聞いて、アスカは渋々台車に乗る事に同意した。

「エステル、しっかりとスカートがめくれないように押さえている
のよ！」

「分かってるって」

1台の台車に乗れるのは2人が限界のようなので、アスカとエステル、シンジとヨシユアに別れて乗る事になった。

そこそこのスピードは出るものの、手すりにつかまっていれば危険は無いバランスの取れたものだった。

エステル達は坑道の奥に居た作業員に地下へのエレベーターリフトの鍵を借りてさらに奥へと進む。

台車にも慣れて退屈したエステルは台車についているレバーを操作し始める。

「そうだ、競争しよう！ こうすればスピードが出るかも！」

「ちよっと、エステルっ！」

グングンと加速して行くエステルとアスカの乗る台車。

ヨシユアも加速をしようとレバーに手を伸ばすが、シンジが手を伸ばしてそれを妨害した。

少しの間だけシンジとヨシユアの乗る台車の方が加速が遅れる。

すると、前方に行く台車に乗るアスカのスカートが舞い上がるのをシンジ達は見ってしまった。

「まさか、君がこんな事をするとは思わなかったよ」

ヨシュアはため息をついてそう言葉をもらした。

「……ごめん、僕って悪いやつだよ」

「きっと君の欲望のスイッチが入ってしまったんだと思うよ。魔が差したって事さ」

「アスカがはいていたのは青と白の横縞だったよね？」

「……確認しないでくれるかな。それに、2人の下着なんて毎日洗濯しているから分かっているじゃないか。それより着いた後が大変だよ」

台車の終点で、アスカは勝手にスピードを上げたエステル、そしてシンジとヨシュアに向かってしばらく怒り続けるのだった。

アスカの怒りが治まった後、エステル達はエレベーターで地下に降り、崖に架けられた鉄橋を渡って奥深くに居た責任者の鉱山長に会う事が出来た。

エステル達が市長からの紹介状を渡すと、鉱山長は感心したように息をもらす。

「そんな若いのに遊撃士とは凄いねえ」

「いえいえ、まだ駆け出しの見習いですから」

アスカは謙遜するように受け答えをした。

「それで、セプチウムの結晶はどこにあるんですか？」

「ああ、大事なものだから俺が肌身離さず持っているよ」

ヨシュアの質問に鉱山長は笑顔で答えて懷からセプチウムの結晶を取り出そうとした。

しかし、その時坑道全体を大きな揺れが襲った。
坑道内に作業をしていた鉱夫達の悲鳴が響き渡る！

そしてエステル達の目の前に蟹のような姿をした魔獣が数匹出現した！

「うわっ！」

「魔獣！？」

エステル達は固い甲羅をもった魔獣相手にアーツを詠唱し、すぐに魔獣達を蹴散らす事が出来た。

「ふーっ、お嬢ちゃん達は強いな」

鉱山長はホッとしたように息を吐き出した。

「アタシ達は遊撃士だもの、魔獣なんかに負けてたまるもんですか」

アスカは胸を張ってそう言い放った。

「坑道に魔獣なんて出る事はあるんですか？」

「こりゃ今の落盤で坑道が魔物の巣と繋がっちゃったのかもな」

ヨシユアの質問に鉱山長は腕組みをしながら答えた。

「じゃあ他のみんなを早く助けにいかないと！」

エステルの言葉にヨシユア達はうなずいて、ヨシユア達は走り出した。

しかし、鉱山長が足をもつれさせて派手に転んでしまった。

鉱山長の懷から、緑色をした石が飛び出して地面に転がり出た。

「あっ、宝石が！」

アスカは地面に落ちた緑色の石を拾おうとしたが、その前に別の坑道から顔を出した鉱夫が奪って走り去ってしまった。

「待ちなさいよ！」

「アスカっ、今は泥棒を追いかけるより魔獣に襲われている鉱夫さん達を助ける方が先だよ！」

シンジに呼び止められて、アスカは引き下がる。

「遊撃士は民間人の保護が優先だったものね……」

アスカの顔は悔しさがにじみ出ていた。

鉱山長はそんなアスカを安心させるように声を掛ける。

「心配いらない、先程落とした石はセプチウムの結晶では無くて似た石を別に持っていただけなんだ。本物のセプチウムの結晶は俺が転んでも落ちたり割れたりしないように大切に持っているんだ」

「じゃあ、さっきの泥棒が持って行ったのは……」

「ただの石ころさ。あの鉱夫は見習いで少し前に入っただけなんだから、セプチウムの結晶を狙っていたとはな」

鉱山長はそう言ってシンジとアスカに笑い掛けた。

「思わぬ事で時間をロスしたわ、手遅れにならないうちに坑道に取り残された人達を助けるわよ！」

気を取り直したアスカの号令に続いてエステル達は鉱夫を救うため、

鉦山長を魔獣から守りながら走り出したのだった。

第十三話 可憐な少女ジョゼット登場！！

シンジの一目惚れにアスカはジェニ

<ロレント地方 マルガ鉱山>

エステル達が鉱夫達を救出するために坑道内を走っていると、坑道内にツルハシやシャベルが固い物に当たる音と人が騒ぐ音が響き渡っているのが聞こえた。

鉱夫達も魔獣達と戦っているのだ。

しかし、相手は固い殻を持つ蟹のような姿をした魔獣、物理攻撃は効きにくい。

屈強な体力自慢の鉱夫達も体力が尽きた時にやられてしまうのは時間の問題だった。

エステル達は鉱夫達の声の聞こえる方に急いで駆け付けた。

「おいお前ら、大丈夫か！」

「鉱山長！」

エステル達と同行していた鉱山長が声を掛けると、魔獣と戦っていた鉱夫達は歓声を上げた。

「その魔獣はあたし達に任せて！」

エステルが激しく棒で叩き、シンジが銃を乱射して魔獣達の注意を引きつけている間に、アスカとヨシユアがアーツを詠唱して魔獣達を倒して行く見事なコンビネーションだった。

「お嬢ちゃん達、若いのにやるなあ」

「ふふん、アタシ達は遊撃士だもの、魔獣退治なんてちよいもんよ」

鉦夫達に賞賛されたアスカは余裕の表情だった。

「アスカ、まだ終わっては居ないよ、鉦夫さん達全員を無事に助け出して脱出しないと!」

「分かってるわよ!」

アスカはシンジにそう言い返して新手の魔獣と戦っているエステルとヨシユアにシンジと共に加勢した。

「鉦山長さん、鉦夫さん達はこれで全員ですか?」

「いや、まだ奥に数人残っていたはずだ」

ヨシユアの質問に鉦山長がそう答えた。

しばらく考えたヨシユアはエステル達に2手に別れる提案をする。

「僕とエステルと鉦山長さんと奥の鉦夫さん達を探して来るから、シンジとアスカは助け出した鉦夫さん達を入口のエレベーターの部屋に誘導して欲しい」

「分かったわ」

ヨシユアの作戦にアスカ達は賛成し、シンジとアスカはエレベーターの方へと進んで行った。

しかし、狭い鉄橋の所でシンジとアスカは前方に魔獣の群れが固まっているのを目撃した。

「仕方無いわね、アタシが鞭で魔獣達の動きを抑えているからシンジがアーツで詠唱して攻撃して」

するとシンジはアスカの言葉に異議を唱える。

「そんな、僕が導力銃で魔獣達の動きを抑えるよ！」

「銃で全ての魔獣を防げると思っているの？ アンタは接近戦はまるでダメじゃないの」

「でも、アスカの鞭だって固い甲羅を持った魔獣相手じゃ効きにくいじゃないか」

シンジとアスカが言い争っていると、鉦夫達がアスカ達の前に歩み出て魔獣達の前に立ちはだかる。

「魔獣達を食い止める時間を稼ぐだけなら俺達でも出来らあ。お嬢ちゃん達はアーツで魔獣達を攻撃する事に集中してくれれば良い」

「そんな、僕達の役目はあなた達を守る事です！」

「シンジ、ここは鉦夫さん達の力を借りましょう」

「そうだそうだ、生き残るためなら遊撃士も鉦夫も全力を尽くすのは同じさ」

アスカの言葉に鉦夫達は笑ってうなずき、ツルハシやシャベルを構えるのだった。

そして、鉦山の奥からエステル達が戻って来る頃には、何とか鉄橋周辺の魔獣達を掃討する事に成功していた。

しかし、坑道が魔獣の巣と繋がってしまったのであれば油断はできない。

エステル達がエレベーターの所までたどり着くと、エレベーターが血で汚れている事に気が付いた。

「もしかして、これって……」

「さっきの泥棒が、魔獣に襲われて怪我をしたんだろうね」

シンジの言葉にヨシユアがそう答えた。

魔獣達が一緒に地上階へと運ばれてしまったとしたらさらに事態は悪くなる。

「おい鉱山長、みんな、無事かーっ？」

上の階から鉱夫達が呼ぶ声が聞こえる。

どうやら上の階で魔獣が暴れていると言う事はなさそうだ。

「俺達は、遊撃士達のおかげで全員無事だーっ」

鉱山長がそう返事を返すと、上の階の鉱夫達は嬉しそうに歓声を上げた。

そして数人がエレベーターに乗って地上へと上がって行く。

エステル達は殿しんがりとして最後まで残り、魔獣達を食い止める役目を果たした。

「おい、遊撃士のお嬢ちゃん達、エレベーターに乗り込め！」

鉱山長に声を掛けられ、エステル達はエレベーターに乗って地上へと脱出すると、鉱夫達の熱い拍手に包まれた。

「お前さん達のおかげで、俺達は無事に帰って来れた」

「そんな、僕達の方こそ守って頂いて……」

シンジが自信無さ気にそう言うと、鉱山長は首を横に振る。

「あんな固い殻を持った魔獣相手だと、俺達だけだったらどうなっていた事やら。もっと胸を張っていいぞ」

そして鉱山長は胸の奥深くしまっていたセプチウムの結晶を取り出

すと、シンジの手に固く握らせる。

「お前さんになら安心してこれを任せる事が出来る。市長さんにきつちりと届けてくれよ」

「はい」

シンジは嬉しそうに顔を上げて鉱山長に向かって微笑み、手の中で緑色に光輝く宝石を見つめていた。

先程の偽物の石と違い、暗い坑道の中でも結晶自体が光を放っている感じだった。

「そうだ、ここからこの前入った見習いのやつが逃げて来なかったか？」

「はい、腕にケガをしていたようですが、あつという間に鉱山の外へと逃げて行きやした。よっぽど怖かったんでしょなあ」

事情を知らない鉱夫は鉱山長の質問にそう答えた。

「急いで追いかければ犯人に追いつくかもしれませんが、僕達はこれで失礼します」

「ああ、頑張ってな」

ヨシユアは鉱山長にそう言って駆け足で鉱山を出て行こうとした。

エステル達も慌てて後を追いかける。

シンジもセプチウムの結晶を落したりしないように袋に入れて大事にしまった。

<ロレントの街 市長邸>

ロレントの街に着くまでエステル達は一生懸命に走ったが、結局泥棒に追い付く事は出来なかった。

仕方無くエステル達は追跡を諦め、市長邸にセプチウムの結晶を届ける依頼を優先させてこなす事にした。

市長邸のメイドの話によると、市長は書斎で客人と会っていると言う事だった。

しかし、早く市長に宝石を送り届けたいと思ったエステル達は来客中を承知で市長の書斎の中へと入った。

市長の書斎の中では、市長と学校の制服を着た女子学生が話をしていた様子だった。

その制服は洗練されたデザインで、女子学生も可憐と言う言葉が似合いそうな落ち着いた立ち振る舞いをしていた。

エステル達と目が合うと、穏やかに優しく微笑む。

「頼まれていた品物をお届けにあがりました」

「おお、そうか」

ヨシユアが用件を告げると、市長は安心したような笑みを浮かべた。

「あの、私^{わたくし}がお邪魔なら失礼させて頂きますわ」

「いや、居てくれても大丈夫じゃよ」

椅子から腰を浮かせた女子学生に市長はそう声をかけて引き止めた。

そして、市長は女子学生の素性をエステル達に紹介し始めた。

女子学生の名前はジョゼット・ハール、ジェニス王立学園の生徒だと言う。

ジェニス王立学園とはルーアン市にある全寮制の学園で入学試験はとても厳しく、勉強時間に余裕のある貴族のような裕福な家庭の子供しか入学できないと評判になっていた。

洗練された制服や服装も、王立学園の風格を表していた。
まさに、本物のお嬢様と言った印象を見る者に与えている。
次に市長はエステル達を遊撃士としてジョゼットに紹介した。

「遊撃士とおっしゃいますと、正義のために戦う自由騎士とお聞き
していますわ」

ジョゼットは感激した様子で目を輝かせてエステル達の事を見つめた。

「なんか、そんなに憧れの目で見られると照れちゃうな」

「そうそう、アタシ達はまだ見習いだし……」

エステルとアスカは少し顔を赤らめながらそう答えた。

「そうだ、ジョゼット君にも例の品物を見せてあげたいのじゃが」

「あ、はい、分かりました」

シンジがセプチウムの結晶を袋から取り出してテーブルに置いた。

「まあ、見事な翠耀石エスメラスですわね」

「うむ、これは女王様に献上する素晴らしい細工物が作れそうじゃ」

セプチウムの結晶を見てジョゼットと市長は感激した様子だった。

「なるほど、生誕祭の贈り物でしたか」

ヨシユアは納得したようにそうつぶやいた。

生誕祭とはこのリベール王国の現在の国王であるアリシア女王の誕生日を祝うイベントである。

今年はアリシア王女が60歳の誕生日を迎える節目と言う事で、数カ月後の生誕祭は例年より大規模なものになる。

ロレントでも生誕祭のイベントは行われるが、王都グランセルのイベントはさらに大規模なものだった。

「街の工房に依頼して、女王様が身に付けられる宝飾品にしたいと思っておる」

「出来たらアタシも見てみたいわね」

「わたし私は見れないのが残念でなりませんわ」

市長はテーブルの上に置かれたセプチウムの結晶をつかみ上げると、部屋にあった金庫を開け、その中に結晶を入れる。

「ふーっ、これで一安心じゃな」

そう言って市長は大きく息を吐き出して椅子に腰を下ろした。

「では、そろそろ私は失礼いたしますわ。わたし本日はお話を聞かせて頂いただけでは無くて、素晴らしい物を見せて頂きまして本当に感謝しております」

「いやあ、たいした事はしておらんよ」

「まって、あたし達も一緒に失礼させてもらうわ」

「エステル君達もご苦労さんじゃったな」

エステル達はジョゼットと共に市長邸を出た。

そして、エステル達は市長邸を出た所でジョゼットに宿泊しているホテルの部屋に遊びに来ないかと誘われた。

依頼の達成を遊撃士協会するのが先だとヨシユアは渋ったが、おいしいお菓子と紅茶を淹れると言うジョゼットの言葉にエステルとアスカが陥落した。

アスカが賛成すればシンジも賛成し、賛成3と反対1となり多数決でジョゼットの部屋に寄り道する事になった。ジョゼットは部屋で手作りのお菓子と紅茶をエステル達に振る舞った。

その味は口うるさいアスカがおいしいと認めるほどに素晴らしかった。

おいしいお菓子とお茶でエステル達の話は弾みに弾んだ。

面白い話になると、ジョゼットは口で手を押さえてクスクスと可愛らしく笑う。

そうしているうちに時間は過ぎて行っった。

「ほら、もうそろそろ報告しに行かないと」

「あつ、もうそんな時間なんだ」

ヨシユアに指摘されて、エステル達は長く話し込んでいた事に気が付いた。

「ジョゼットはいつまでロレントに居るの？」

「明日の飛行船で帰るつもりですわ、学校の授業が始まってしましますし……」

「そう、せっかく友達になれそうだったのに残念ね」

「でも、離れてもあたし達ずっと友達よね！」

「ふふ、そうですね」

エステルが元気一杯の笑顔でそう言うと、ジョゼットも穏やかに微笑んで答えた。

「それでは、エステルさん、アスカさん、ヨシユアさん、シンジさん、御機嫌よう」

エステル達は後ろ髪を引かれるような思いでジョゼットの部屋を後にした。

そして、ホテルを出てもシンジだけは思い詰めた暗い表情をしていた。

そんなシンジの様子に気が付いたエステルはシンジに声を掛ける。

「ねえ、もしかしてシンジってば、ジョゼットの事が好きになっちゃったの？」

「何ですって!？」

エステルの言葉を聞いたアスカが、鬼のような形相になってシンジをにらみつけた。

「そ、そんな事無いよ」

シンジはアスカの怒った顔に怯えながらそう否定した。

「隠さなくてもいいのよ、だってシンジはずっとジョゼットの事を見ていたし、今だって寂しそうな顔をしているじゃない」

「それは誤解だよ」

「ふん、どうせアタシはワガママで口より先に手が出るし、笑う時だってお腹を抱えて笑うし、上品でお淑やかとは程遠い存在よ!」

アスカはさらに不機嫌になってそうわめきちらした。

「自分の欠点に気が付いているのなら、直す努力をした方が良くと思うけどな」

ヨシユアはあきれ顔でアスカに聞こえないような小さな声でそうつぶやくのだった。

第十四話 トラブル・メーカー

＜ロレントの街 遊撃士協会＞

エステル達が遊撃士協会に戻ると、シェラザードが少し不機嫌な顔で待ち受けている。

「あんた達、鉱山から戻って来るのにずいぶんと時間が掛かったみたいじゃない」

「えっ……どうして分かったの？」

エステルは驚いた顔でシェラザードに聞き返した。

「鉱夫さん達からお礼の声が届いた時はあんた達を褒めてあげようと思ったけど……寄り道はしないで帰って来なさいね」

「はい、ごめんなさい」

シェラザードが顔をしかめてそう言うと、エステルは気落ちした様子で謝った。

「まったく、エステルがお菓子に釣られるからよ」

「紅茶に釣られたのはアスカも同じじゃないか」

苛立たしげにそうつぶやくアスカをシンジがたしなめた。
するとアスカはますます怒りを増幅させる。

「何よシンジだって、あの娘を見つめてデレデレしてたじゃない」

「だからそれは違うって」

「やっぱり、シンジはジョゼットの事が好きなんだ」

エステルが笑顔でそう言うと、シェラザードは訳が分からないと言った顔で疑問の声を上げる。

「ジョゼット？」

「さつき市長邸で知り合った子で、シンジが一目惚れしちゃったらしいのよ」

「話をこれ以上ややこしくしないでよ」

アスカの言葉にシンジはウンザリとした様子でそうつぶやいた。

シェラザードは怒鳴り散らすアスカを黙らせるようにピシヤリと手を叩く。

「いい加減にケンカは止めなさい。カシウス先生の代理の依頼はまだあるんだからね」

「次の依頼は何ですか？」

ヨシユアがシェラザードに尋ねた。

シェラザードの話によると、リベール通信の記者達の取材協力をするとする依頼で、危険な場所にも行くため腕の立つ遊撃士を希望しているようだ。

「僕達にカシウスさんの代わりは務まるのかな」

「何を言ってるのよ、護衛の依頼ならたった今こなして来たばかりじゃない」

弱気になるシンジに対して、アスカは自信たっぷりに堂々と言い放った。

「でも、あの時は鋤夫さん達に手伝ってもらったんだよ」

「護衛する対象に守ってもらうなんて、あなた達も遊撃士としてまだまだって事よ」

シンジの言葉にシェラザードはニヤつきながらアスカを見つめるのだった。

依頼人であるリベール通信社の記者達はロレントの街のホテルに泊まっていると言う。

具体的な依頼内容は記者達から直接聞いて欲しいとの事で、エステル達はホテルへと向かった。

エステル達がホテルのフロント係に泊まっているリベール通信社の記者達について尋ねると、2人とも外出中だった。

「どうしようか、ジョゼットの部屋で記者さん達の帰りを待っている？」

「エステル、しつこいよ」

シンジはウンザリとした顔でエステルに言い返した。

すると、ホテルのフロント係は思い出したように記者のうちの1人が酒場に行っていると話した。

「それじゃ、さっさと酒場に行くわよ」

「ジョゼットとは会って行かないの？」

エステルがそう言うのと、アスカは鋭い目つきでシンジをにらみつけ、シンジは慌て出す。

「少し前に別れたばかりなんだから、変に思われるじゃないか」

「記者さん達と合流した後で迎えに来てアタシは構わないけど？」

「アスカまで何を言っているんだよ！」

「やれやれ、付き合ってられないよ」

ヨシユアはウンザリとした顔でため息をついて一足先にホテルを出るのだった。

<ロレントの街 居酒屋アーベント>

エステル達が居酒屋に行くと、30代ぐらいのタバコを加えた無精^{ぶしょう}髭^{ひげ}を生やしている男性がカウンターに座っていた。居酒屋の中を見回したアスカはふうっとため息を吐き出す。

「どうやら記者の人は居ないみたいね」

「アスカ、あそこに居る人が記者さんじゃないの？」

エステルがカウンターに座っている無精髭の男性を指差した。

その時店には他に客が居なかったから当然の事だった。

しかし、アスカは嫌そうな顔で首を横に振る。

「だって、リベール通信社の記者さんって腕利き揃いなんでしょう？ あんなだらしなさそうなオジサンに良い記事が書けるわけないって」

「なんだとこのガキ！」

アスカの声を聞いた無精髭の男性は怒った顔で言い返した。

「ガキとは何よ」

「チビだからそう言ったんだ」

「チビですって!？」

チビとはアスカにとって侮辱とも言える言葉だった。

14歳の頃はシンジより高かった身長も伸び悩み、16歳となった今ではブライト家で一番背が低くなってしまった。

アスカに4分の1混じっている日本人の血が影響しているのかどうかは分からなかったが、14歳の時は同じ位の身長だったエステルはアスカより体格が大きくなっていた。

「アスカ、抑えて抑えて」

「すいません、失礼な事を言って」

ヨシユアが無精髭の男性に頭を下げて謝った。

少し離れた場所でアスカがシンジにだけ聞こえる声の大きさでつぶやく。

「失礼なのはそっちじゃないの」

「アスカ、どうしてあの記者さんの事が気に入らないの？」

「だって、無精髭を生やしていてタバコをくわえていて、だらしが無いって感じで、エリート新聞社の記者とはイメージが程遠いんだもん」

「無精髭なら加持さんも生やしていたじゃないか」

シンジの言う加持さんとは、加持リョウジ。

シンジとアスカの居た世界のネルフでは、年の離れた兄のような存在だった。

加持のまとう少しニヒルな雰囲気のアスカは大人の男性の風格だと憧れていた。

「加持さんはカッコイイから無精髭も似合うのよ」

シンジはアスカの答えにあきれると同時に少し安心した。

無精髭の男性は少し加持と似た感じだったので、もしかしてアスカが惚れてしまうのではないかと思ったのだ。

この様子ではアスカは鼻にもかけていないようだった。

「あなたが遊撃士協会に護衛の仕事を依頼していたリベール通信社の記者の方ですね」

「そうだ、俺は敏腕記者のナイアルって言うんだが……」

ヨシユアに尋ねられて無精髭の男性がそう言って名乗ると、アスカは吹き出すように笑う。

「ぷっ、自分で敏腕って言ってる！」

「アスカだってエースパイロットだって言っていたじゃないか」

「う、うるさいわね」

シンジに指摘されると、アスカは顔を赤くして黙り込んだ。

「で、遊撃士協会から来たって事は、カシウス・ブライトはどこに居るんだ？」

ナイアルはそう言って探すように店内を見回した。

「それが、急な用事が入って来れなくなったの」

「おいおい、そりゃないぜ」

エステルがそう告げると、ナイアルはガッカリとした顔でため息を吐き出した。

「でも心配無用よ、あたし達が代わりに来たから」

「お前らみたいなガキの遊撃士で大丈夫なんだろうな」

またガキと言われたアスカはナイアルに怒鳴る。

「アタシ達の腕が信用できないって言うの？」

「そうよ、あたし達は依頼をこなして来たんだから！」

アスカだけでなく、エステルも怒りがこみ上げて来たようだった。

「もし不都合があるなら別の遊撃士を手配しても良いですが、また時間が掛かると思います」

「あゝっもう、仕方が無えな、これ以上宿泊費を増やすわけには行かねえし、我慢してやるか」

ヨシユアが提案すると、ナイアルは渋々エステル達に護衛の依頼を頼む事を了承した。

「こんな態度の大きい依頼人は初めてね」

「そうね」

アスカとエステルは揃って不機嫌そうに顔をふくれさせていた。

シンジは何も起きない事を祈るだけだった。

ヨシユアが依頼の内容をナイアルに尋ねると、ロレントの街の郊外にある翡翠の塔の屋上で写真を撮りたいのでそこまでの護衛を頼みたいのだと言う。

「なんだ、翡翠の塔になら入った事があるし、楽勝よ！」

「ルックとパットを助けた時は2階部分までにしか入っていないじゃないか」

「シンジはいちいち細かいわね、2階も5階も同じよ」

堂々と胸を張ってそう言い放ったアスカに、シンジがツツコミを入れた。

「それで、もう1人の方はどこに居るんですか？」

「オーバルカメラの調整をしに工房に行っているんだが、戻って来るのが遅いな」

「こっちから迎えに行った方が早くない？ 合流してそのまま翡翠の塔へ行ってしまうでしょう」

「そうだな、あいつは道草を食ってばかりだから、嫌な予感がして来たぜ」

アスカの提案にナイアルも賛成し、エステル達はもう1人の記者の居る街の工房へと向かう。

「道草を食ってばかりなんて、どんな人だろうね」

「君とは気が合いそうだろうね」

ワクワクしながら話しかけて来たエステルにヨシユアはそう答えるのだった。

＜ロレントの街　メルダース工房＞

エステル達が工房に入ると、物が壊れるような音と、女性と男性の悲鳴などが聞こえて騒がしい様子だった。

その騒ぎの原因は、工房内を掃除しているらしい眼鏡を掛けたピンク色の髪の若い女性のようなだった。

「うわーん、またやっちゃいました」

ピンク色の髪の女性のお尻が陳列棚に当たってしまったようで、棚にあった置時計が床に落ちて壊れてしまったようだ。

「お、親方、どうでしょう！」

それを見た工房の若い技師がオロオロとしていた。

「お嬢ちゃん、もう掃除は良いから帰ってくれねえか？」

「いえっ、足りないお金の分は働いて返さないと！」

困り顔で頼んだ熟年の技師に対して、ピンク色の髪の女性はそう答えた。

「おいドロシー、お前は店のカウンターのの中に入って何をやってるんだ」

「あ、ナイアル先輩だ、いらっしやいませー」

ナイアルに声を掛けられたピンク色の髪の女性は笑顔でそう答えた。

「何がいらっしやいませだ、このトンチキ娘」

少し苛立った口調でナイアルがそう突っ込みを入れた。

「天然ボケとツツコミって感じよね」

「あはは、アスカとシンジみたいだね」

「「それはエステルとヨシユア」」

アスカとシンジは声を揃えてエステルに言い返した。

「で、改めて聞くがここで何をやっているんだ」

「アルバイトで掃除をさせてもらっているんです」

「はあっ!？」

ドロシーの答えを聞いて、ナイアルは驚きの声を上げた。

「お前、カメラマンを辞めてこの工房で働き出すって言うんじゃないだろうな」

「そんな事ありませんよー、カメラのメンテナンス代が足りなかったので、働いてお返ししようと思っただけなんですー」

「おいおい、金は十分渡してやっただろう」

「隣の雑貨屋さんで買い物した後だったので、足りなくなっちゃったんです」

「また道草を食ったのか」

あきれるナイアルに工房の若い技師が困った顔で声を掛ける。

「その子に掃除を頼んだら余計に散らかってしまっただよ」

「お代はもう良いからそのお嬢ちゃんを早く引き取ってくれねえか？」

「……本当に済まねえ」

工房の熟年の技師にも困った顔で言われたナイアルは謝りながらドロシーを店の外へと連れ出した。

エステル達も何ともいえずに工房を出て行った。

そして、通りに出たドロシーはエステル達に自己紹介を始めた。

ドロシーはリベール通信社に入ったばかりの新米カメラマンで、ナイアルが教育係としてコンビを組んで同行していると言う。

「これが私の相棒のポチ君だよ！」

ドロシーは自分の愛用のカメラを掲げて誇らしげに紹介した。
それを見たエステルは自分の愛用の棒を対抗するように高く掲げる。

「よおしじゃあ、あたしも……」

「エステル、『ボーちゃん』は却下だからね」

「すごいアスカ、どうして分かったの!？」

「エステルの考えそうな事はすぐ分かるわよ」

アスカはあきれた顔でそう言い放った。

＜ロレント郊外 翡翠の塔＞

通い慣れたマルガ山道での護衛は簡単かと思われたが、意外にエステル達は苦戦する事になった。

その原因はドロシーである。

ドロシーは魔獣の迫力ある写真を撮りたいがために、エステル達の護衛をくぐり抜けて魔獣に近寄ってしまうのだ。

植物型の魔獣の攻撃から身を守るためにかばったエステルは、ドロシーの代わりに種を飛ばす攻撃を受けてしまい、おでこが真っ赤にはれてしまった。

「エステルちゃん、大丈夫？」

「お願いだから、魔獣に近づかないでよ」

「うん、エステルちゃんにこれ以上ケガさせるわけにもいかないからね」

自分の身を犠牲にして自分を守ったエステルの姿を見て、ドロシー

はやっと分かってくれたようだった。
そしてエステル達はマルガ山道を進み、翡翠の塔の入口までたどり着いた。

「ほえー、高い塔ですね」

ドロシーが感心したように声を出した。

アスカとシンジは超高層ビルに慣れているものの、リベール王国の人達にとってはこのぐらいの高さでも凄いものなのかと思った。

「いつ見ても古い塔だよね」

「ああ、リベール王国が出来るかなり前、古代ゼムリア文明の時代に作られたものらしい。他の地方にも似たような塔があってな、俺達はその歴史を伝えるための取材をするのさ」

「ふうん、そんな地道な記事も書いているんだ」

エステルのつぶやきに答えたナイアルの言葉を聞いて、アスカはそんな事を言った。

「もちろん、スクープを手に入れるための取材もするが、今回はこいつのお守を髭編集長に押し付けられたからな」

ナイアルは面倒くさそうな顔でそう言い放つと、ドロシーがニコニコした顔で話し出す。

「ナイアル先輩は、初めての取材が失敗して落ち込んでいた私に声をかけてくれて、編集長さんに頭を下げて仕事をさせてもらえるようにお願いしてくれたんですよ」

「ずいぶん2人の言い分が違うじゃない」

「ふんっ」

アスカが冷やかすような顔でそう言うと、ナイアルは顔を思いつきり背けた。

「意外と面倒見の良さそうな人だね」

「うん」

ヨシュアの言葉にシンジはうなずいた。

「よし、じゃあまず塔をローアングルから撮ってみる」

「はい」

「どんな風に写真を撮るのかな？」

エステルが期待の眼差しでドロシーを見つめると、ドロシーはカメラを構えて声を発する。

「良い顔してますねー、目線をこっちにお願いしますー」

「えっ？」

まるで生物を撮るかのようなドロシーの言葉に、エステルは驚き、アスカ達は半ばあきれた顔になった。

「あいつには建物の表情が見えるんだとよ。あんなふざけたような撮り方で、息を飲むような凄い写真を撮る。一種の鬼才だな」

「なるほど」

ナイアルの言葉にヨシュアは感心したようにうなずいた。

「もしかして、ヨシュアも建物に表情があるとかわかるの？」

「実際に何か居るかもしれないわよ、この塔で死んだ人の幽霊とか」

「アスカ、脅かさないでよ」

エステルは意外にも幽霊が苦手だった。
居るか居ないかはつきりしないところがとても嫌らしい。

「終わりましたよ、ナイアル先輩」

「よし、じゃあ塔の中に入るか」

笑顔で報告したドロシーの言葉を聞いて、ナイアル達はそう提案して塔の中に入ろうとした。
しかし、エステルだけは塔に入ろうとしない。

「どうしたの、エステル？」

「え、ええっと……」

ヨシユアが声をかけてもエステルは固まって動こうとしない。

「もしかして、幽霊が怖くて入れないとか言うんじゃないでしょうね」

アスカがあきれた表情でそう言い放った。

「幽霊って、昼間には出ないんじゃない？」

「そ、そうだよね」

シンジがポツリとそうもらすと、エステルは急に元気になって塔の中へと駆け込んで行った。

「どうやら君の言葉が説得力が一番あったようだね」

ヨシユアは苦笑しながらエステルの後を追いかけて塔に入って行った。

残されたシンジ達も続けて塔に足を踏み入れるのだった。

塔の中での魔獣との戦いも、また苦戦する事になった。

ドロシーがフラッシュを付けて撮影するので、魔獣の目をくらませる効果もあったが、エステル達の目もくらんでしまうと言う諸刃の剣だった。

たまりかねたアスカはナイアルにドロシーのカメラを没収させて、塔の中には悲しげなドロシーの声が響き渡った。

そんなこんなで珍道中を繰り広げながらも、エステル達は何とか翡翠の塔の屋上までたどり着いた。

久しぶりに見る青空に、エステル達の心も開放的になる。

「やっぱり、高い所は気持ちいいよね」

「うーん、空気もヒンヤリとしてて清々しいわ」

エステルとアスカはそう言って伸びをした。

しかし、ヨシユアは塔の中に居た時より厳しい表情をしている。

「エステル、アスカ、そこで止まって！」

「どうしたの？」

階段を登って屋上に出ようとした2人は驚いて足を止めた。

ヨシユアは少し抑えた低い声でエステル達に話し掛ける。

「あの柱の陰から、気配が感じられるんだ」

「誰かが隠れているって事？」

「うん、殺気が漂ってくる」

ヨシユアの言葉を聞いて、エステル達はゴクリ吐息を飲んだ。

ひたいに冷汗をいっばいに浮かべてそう言ったヨシユアの雰囲気はただ事ではないからだ。

エステル達はナイアルとドロシーを後ろに下がらせて武器を構えながら慎重に屋上にゆっくりと近づいて行った……。

第十五話 ナイトメア ㄱアスカの悪夢再びㄱ

<ロレント地方 翡翠の塔>

武器を構えたエステル達が屋上へ近づくと、柱の陰から人影が飛び出す！

「お金は渡しますから、命は助けて下さい！ この通りお願いします！」

凄いい勢いで頭をペコペコと下げるローブを着た男性に、エステル達はぼう然として毒気をすっかり抜かれてしまった。

エステルは笑顔に戻って男性に声を掛ける。

「驚かせてごめんなさい、あたし達は遊撃士なの」

エステルがそう言って準遊撃士の紋章を見せると、男性は安心して大きく息を吐き出す。

「ビックリさせないで下さいよ、旅人を狙った強盗かなと思っちゃいました」

「ヨシユアが殺気を感じるなんて言うから……」

アスカはあきれたような顔でヨシユアをにらみつけた。

「ごめん、僕の勘違いだったみたいだ」

ヨシユアは小さな声で謝った。

そんなヨシユアの様子を見たエステルがヨシユアに声を掛ける。

「ヨシュア、顔が青いよ、大丈夫？」

「エステルには隠せないか、屋上に上がってから寒い感じがして気分も悪いんだ」

シンジもヨシュアの言葉を聞いて心配して声を掛ける。

「風邪を引いたの？」

「それはいいませんね、風邪薬を差し上げましょう」

男性は薬瓶を懐から取り出すとヨシュアに手渡した。

薬瓶には七耀教会の印が刻まれている。

「あなたは七耀教会の方ですか？」

「あ、自己紹介が遅れましたね。私は考古学を研究しているアルバと申します。ヨシュアさんの言う通り、私は七耀教会に籍を置いていた事があるんですよ」

「それじゃあ、神父さんだったの？」

「ええ、ですが教会の命で遺跡を探索しているうちに遺跡の抱えるロマンに魅せられてしまいました。学院の方へ転職してしまったわけなのです」

男性がアルバ教授と名乗ると、アスカは憧れの瞳でアルバ教授を見つめているようにシンジには思えた。

「おーい、俺達はもう屋上に出て大丈夫なのか？」

「あつ、ナイアルさん達が居たんだ」

階段からエステル達がアルバ教授と話す様子を見ていたナイアルが大きな声でエステル達を呼ぶと、エステルは慌ててナイアルとドロ

シーを屋上へ招き入れた。

アルバ教授の素性を聞いたナイアルは感心した様子でため息をつく。

「それにしても、魔獣が住みついているこの塔を1人で登ってしま
うなんて、あんた度胸あるな。そこらの遊撃士より強いんじゃない
か？」

ナイアルの皮肉めいた言い方に、アスカはムツとした顔になった。

「いえいえ、私は学院の方から、陽炎かげろうのクオーツがセットされた戦
術オーブメントを借り受けていますから」

アルバ教授は謙遜して自分の装備している戦術オーブメントを見せ
た。

アスカとシンジは興味津々に目を輝かせて食い入るようにアルバ教
授の戦術オーブメントを見る。

「何か、凄そうなクオーツばかりね」

「うん、僕達が見た事の無いものばかりだ」

「陽炎かげろうのクオーツを装備しているとですね、魔獣にかなり見づかり
にくくなるんですよ」

「だからって、1人で魔獣のたくさん居る遺跡に入るなんて無茶よ。
そう言う時の護衛のためにあたし達遊撃士が居るんだからね」

「はい、今度から考えておきます」

アルバ教授はエステルに柔和な笑みを浮かべてそう答えた。

「それで、アルバ教授はどうして1人で屋上に居たの？」

「あの装置を調べに来たのですよ」

エステルの質問にアルバ教授は屋上にある大きな装置のようなものを指差した。

「おっ、あんたもあの装置を調べに来たのか。それで何か解ったのか？」

「いいえ、新たに判明した事実はありませんでした」
「そうか、じゃあ大した記事にはならないな」

ナイアルの質問にアルバ教授がそう答えると、ナイアルはガツカリとした感じでうなだれた。

「この装置って何なの？　大きなオーブメント仕掛けのように見えるけど」

「これはこの塔が作られた古代ゼムリア時代から塔の屋上に設置されている装置のようですね。この翡翠の塔の他の3本の塔の屋上にも同様の装置が設置されているとの報告がなされていますが、ここを含めて全ての装置は機能を停止しているようです。最近動いた形跡もありません」

「そうなんだ」

「ええ、動かす方法が分かればいいのですが」

アスカは装置に興味を持ったのか、アルバ教授と話し込んでいた。そんな2人の様子をシンジは下がってじっと見つめていた。

「よし、まずロレント全体を見下ろすような写真を1枚撮っておいてくれ、後はお前の感性に任せる」

「はい、分かりました」

ドロシーはナイアルの言葉に嬉しそうに答えて、カメラで写真を撮り始めた。

そしてナイアルはタバコをふかしていた。

一方、エステルは顔色の悪いヨシユアの側にずっとついていた。

「エステル、僕はここで休んでいるから大丈夫だよ」

「ヨシユアは無理して強がるから、心配なのよ。その薬を飲んだ方がいいんじゃない？　せっかく貰ったんだし」

「そうだね、気分が悪いのが治らなかったら飲んでみるよ」

自分を気遣うエステルの言葉に、ヨシユアは笑顔で答えた。

エステル達はしばらく屋上に滞在し、ドロシーが写真を撮り終わるのを待っていた。

ドロシーは嬉しそうに写真を撮っている。

「ナイアル先輩、良い写真がいっぱい撮れましたよ！」

「おーし、それじゃあそろそろ帰るか」

ドロシーの言葉を聞いて、ナイアルはそう言った。

アスカも装置を熱心に調べていたアルバ教授に声を掛ける。

「アルバ教授も帰りましょ」

「え、私もですか？」

「1人で危険な所へ置いておくわけにもいかないし」

アスカに言われても、アルバ教授は帰るのを渋っている。

「じゃあせめて、この装置の写真を撮っては頂けませんか？」

「お安い御用です！」

アルバ教授に頼まれて、ドロシーは張り切って装置を撮影した。

<ロレントの街 遊撃士協会>

エステル達がロレントの街に帰って来た頃には、すっかり夕方になっていた。

遊撃士協会で依頼の達成の報告を行ったエステル達。

そして、遊撃士協会に居合わせたシェラザードがナイアルに尋ねる。

「どうでした、この子達の働きぶりは？」

「まあ、正直期待して居なかったんだが、なかなかのもんだったぜ」

ナイアルにほめられて、エステル達は驚いた表情になった。

「意外ね、ナイアルさんが正直にほめてくれるなんて」

「調子に乗るなよ、新米にしてはなかなかやる方だって言ったんだ。お前らなんざ、その《銀閃》シェラザードに比べればまだまだだ」

「分かっているわよ」

エステルはナイアルの言葉にはおを膨らませて答えた。

「それじゃあ、俺達はこの辺で失礼するぜ、ホテルで取材結果をまとめなくちゃならないからな」

「私は工房に行って写真を現像しますね」

ナイアルとドロシーはエステル達に別れを告げて去って行った。

「では、私も失礼します」

「今度は1人で遺跡なんかに行っちゃダメよ」

「はは、分かりました」

「本当に反省しているのかなあ」

エステルは去って行ったアルバ教授の姿を見送ってそうつぶやいた。

「シェラザードさん、次の依頼は何ですか？」

「どうやら、今回の依頼でカシウス先生の代理の依頼は全て終わったみたいね。私もちょうど先生から引き継いだ依頼をこなしたみたいだし、のんびりできそうだわ」

ヨシユアの質問に答えたシェラザードは大きく伸びをした。

「何か、退屈しちゃうな」

エステルはつまらなそうにため息をついた。

「きっと細かい仕事はたくさんあると思うよ」

「そういえばヨシユア、気分は良くなったの？」

「うん、心配をかけてごめんね」

エステルの言葉にヨシユアは笑顔で答えた。

「じゃあ今夜はアーベントで思いっきり飲むわよ！」

「えーっ、シェラ姉ったら酔うと絡むから嫌なのよ、ねえアスカ？」

エステルに声を掛けられたアスカは顔を伏せたまま答えなかった。先程からアスカがいつもに比べて静かすぎる事にエステル達は気が付いた。

「アスカ、調子が悪いの？」

シンジが心配してアスカに声を掛けた。

「うん、さっきから気分が悪くなって来たのよ」

寒気も感じているのかアスカは肩をすぼめて腕を手でさすっていた。

「風邪を引いちゃったのかな」

「じゃあ、この薬は君が飲みなよ」

シンジの言葉を聞いたヨシユアはそう言ってアスカにアルバ教授から受け取った薬を渡した。

「シェラザードさん、アスカの体調が悪そうなので今日はこれで失礼します」

「そう言うことであれば仕方無いわね」

シンジがそう言うと、シェラザードは残念そうに息を吐き出した。

「アスカ、しっかり休んで体調を回復させるのよ」

「うん」

シェラザードの言葉にアスカは答え、エステル達はアスカを気遣いながら家へと帰るのだった。

家へ帰宅したアスカは、夕食を済ませた後に家事をエステル達に代わってもらって、アルバ教授の薬を飲み、エステルの部屋のベッドで早めに眠る事にした。

ベッドに横になったアスカの気分の悪さはさらに強まり、アスカは胸が押しつぶされるような重苦しい気持ちになり、意識を夢の中へと落とした……。

<第三新東京市 市街地>

目を覚ましたアスカは、 自分が見覚えのある第三新東京市の街の中に立っている事に気が付いた。

「アタシ達、戻って来れたの？」

アスカは一緒にリベール王国に飛ばされたはずのシンジの姿を探すが、シンジの姿は無い。

「もしかして、シンジとは離れて飛ばされたのかしら」

アスカは自分の服装を見ると、第壱中学校の制服を着ている事に気が付いた。

鞆を開けると、携帯電話も中に入っていた。

シンジの無事を確認しようと、アスカは電話を掛ける。

しかし、シンジの電話は通じなかった。

もしかして、自分だけが第三新東京市に戻って来たのでは？

シンジとは二度と会う事は出来ないのでは？

そんな不安がアスカの胸の中に芽生える。

「仕方無いわね、とりあえずセルフに戻らないと……」

このままじっとしていると不安に飲み込まれてしまうと感じたアスカは、ミサトの番号へと電話を掛けた。

「アスカ、あなたなの？」

電話口のミサトはかなり驚いている様子だった。

「ええ、心配かけてごめんなさい。今、第三新東京市の街の中に居るわ」

「シンジ君は一緒じゃないの？」

「うん、アタシ1人だけ」

「そう……それじゃ迎えの者を寄こすから、そこで待っていてくれる？　今は手が離せないのよ」

ミサトにそう言われたアスカは胸に痛みを感じた。

どうして、ミサト自身が迎えに来てくれないのだろう。

自分はミサトにとって家族ではなかったのか？

ミサトが感激して来てくれると思ったアスカは、軽い失望をした。

自分より用事の方を優先された事に悲しみを感じたからだ。

しかし、本当に外せない大事な用事があるのかもしれない。

それならば、自分の思っている事は子供のわがままだとアスカは自分に言い聞かせ、ミサトに対していじけてしまった自分を恥じた。

アスカが待っていると、やって来たのは1台の普通の乗用車。

運転手しか乗っておらず、アスカを護衛していたネルフの諜報部員達の姿も見当たらない。

そしてネルフ本部に到着すると再会したミサト達ネルフのスタッフから喜びの声が上がる。

自分の無事を喜んでもらえて、アスカは胸が熱くなる思いがした。

しかし、ネルフの総司令である碇ゲンドウから辞令を告げられると、アスカはショックを受けた。

『セカンドチルドレン　惣流・アスカ・ラングレーをパイロットから解任する』との事だった。

アスカとシンジが使徒に飲み込まれて姿を消した後、ドイツからエヴァ伍号機とフィフスチルドレンである渚カヲルがパイロットとして送られて来たのと言う。

しかも、エヴァ伍号機と渚カヲルのシンクロ率はアスカと弐号機より数段上。

アスカにはネルフが自分を冷遇していた理由がやっとわかった。ネルフにおける自分の存在価値が無くなってしまったのだ。

「アスカ、使徒との戦いは私達に任せて、ドイツのお母さんの所へ帰りなさい」

ミサトは優しい心遣いのつもりで提案したのだろうが、アスカは首を振って拒否する。

ドイツへ戻ってしまったら、シンジとの繋がりが完全に消えてしまう予感がしたのだ。

「嫌よ、アタシは日本に残りたいの」

「どうして、もうあなたはエヴァのパイロットではないのよ？」

アスカはミサトの服をつかんで懇願する。

「お願い、アタシをミサトの家に置いてよ。料理、掃除に洗濯、何でもするから、ワガママ言っただけでミサトを困らせないから！」

ミサトは困った顔をしてアスカを見つめていたが、必死に頼み込むアスカに、ついにミサトの方が折れる。

「分かったわ、司令には私が許可をとって置くわ。今日はとりあえず、家へ帰りなさい」

「ダンケ、ミサト！」

アスカは笑顔になって発令所を飛び出した。

懐かしいコンフォート17にある葛城家を思い出し、胸は高なつて

いた。

しかし、ネルフの連絡通路でファーストチルドレンである綾波レイ、一緒に居るフィフスチルドレンの渚カヲルの姿を見かけると胸が痛んだ。

レイとカヲルはパイロット同士仲が良さそうに話しながら歩いていた。

アスカは冷たい態度をレイに対してとり続けていた事を思い出し、今さら声を掛ける事も出来ずに隠れるようにこそそとレイ達の側から離れて行った。

葛城家に戻ったアスカは自分の部屋のベッドに戻ると、大声を上げて泣き始める。

「どうして、こうなっちゃったのよ！ 悪い夢なら覚めてよ！」

アスカはシンジ、エステル、ヨシユア、カシウスの名前を呼び続けた。

するとアスカの耳に、エステルが自分を呼んでいる声が聞こえて来た。

そのエステルの声はだんだんと大きくなり、アスカの頭の中に響いて行く。

そしてアスカの意識はエステルの声に飲み込まれて行った……。

<ロレント地方 ブライト家 エステルの部屋>

「アスカ、アスカっ！」

アスカが目を開くと、必死にアスカの名前を呼びながらアスカの体を揺さぶっているエステルの姿が目に入った。

「あれ、アタシどうしたんだろう……」

「よかった……」

エステルはホッとしたように胸に手を当てて息を吐き出した。

部屋の中を見回すと、シンジとヨシユアも心配してアスカの側に来ていたようだった。

「寝ていたアスカがうなされていて、起こしてもなかなか起きないから、とっても心配したのよ」

「アスカの目が覚めて本当に良かったよ」

シンジも額にかいた冷汗をぬぐいながらそうつぶやいた。

「よかった、アタシは独りじゃなかったんだ……」

アスカはそう言って、瞳を潤ませた。

「アスカ、どこか痛いのか？」

「ううん、ホッとしたら涙が出て来ちゃった」

シンジに尋ねられて、アスカは首を横に振ってそう答えた。

「もう大丈夫みたいだね」

「アスカ、お休み」

安心したヨシユアとシンジはアスカにあいさつをして部屋を出て行った。

2人きりになった所で、エステルはアスカにそっと尋ねる。

「……またあの夢を見たの？」

「ううん、あの夢とは違う夢。でも、悪夢だったわ」

「そっか、でもこうすればもう大丈夫だよね」

エステルはアスカを抱き寄せて一緒にベッドで眠る事にした。

アスカもエステルも14歳の頃に比べて体格も大きくなっていて少し窮屈さを感じるようになったのだが、アスカは安心して眠れた。

そして次の日の朝、アスカは体も心も元気一杯に回復したのだった。

第十六話 消えたカシウス

＜ロレントの街 遊撃士協会＞

次の日の朝、シェラザードは遊撃士協会に元気な姿を見せたアスカに安心した。

「一晩寝たらすっかり体の調子が良くなったわ。前より元気になったみたい」

アスカはやる気で満ちているようだった。

そして、エステル達が仕事前の朝のブリーフィングをしている所に、息を切らせたロレント市の市長が飛び込んで来る。

「大変じゃあ、ワシの家が空き巣に入られた！」

「「「「ええーっ!？」」「」」「」」」

市長の言葉を聞いて、遊撃士協会の受付に居たエステル達は揃えて大声を上げた。

「朝の教会の礼拝に行って、家を留守にしている間に、金庫に入れておいたセプチウムの結晶が盗まれてしまったのじゃよ」

「それって、あたし達が運んだあの結晶？」

「うむ、君達がせっかく運んでくれたのに、すまないことになった」

エステルの質問に、市長は無念そうに答えた。

「分かった、私が現場検証に向かう。あなた達は入っている依頼を片付けなさい」

「えーっ、アタシ達が関わった事件なんだから、自分の手で決着を付けたい！」

シェラザードの言葉にアスカが不満を述べた。
そんなアスカに向かってシェラザードは言い聞かせる。

「大人数で行って現場を荒らしても仕方が無いでしょう？」
「シェラザードさんお願いです、アスカだけでも連れて行って下さい」

シンジに頼まれてしばらく思案したシェラザードは、アスカとシンジを助手として連れて行く事に決めた。

「アスカ、結晶を盗んだ犯人を突き止めてね！」
「もちろんよ！」

アスカはエステルにVサインをしてそう答えた。
エステルとヨシュアも街の人々から依頼された仕事を3人の分までこなすと張り切った。

<ロレントの街 市長邸>

市長邸に着いたアスカとシンジは、シェラザードに調査の分担を提案された。

事情を市長に聞くのはシェラザードが担当し、アスカとシンジは現場検証を担当する事になった。

シンジとアスカはまず金庫がある市長の書斎を調べる。
部屋は荒らされていたが、シンジとアスカは無くなったものがほと

んど無い事に気がついた。

「空き巣の目的はただ1つ、金庫にあったセプチウムの結晶だったみたいね」

「じゃあ、部屋が荒らされたのはそれをごまかすためだったんだね」

アスカとシンジはそう結論を出すと、金庫を注意深く調べた。すると金庫は傷1つなくこじ開けられた形跡は無い。

「犯人は暗証番号を知っていた人物に間違いないわね」

「市長さん以外に誰か知っていた人は居るのかな」

「それは市長さんの話を聞かないと分からないわね」

次は侵入経路を調査する事にした。

真っ先に確認したのは玄関。

しかし、市長達が教会から帰って来た時には鍵が掛かっていて、市長も鍵を肌身離さず持っていたようなので、玄関の線は消えた。

アスカとシンジが家中を搜索すると、2階のベランダの手すりに何かで引っかいたような傷があり、少しドロで汚れているような痕跡があった。

「侵入経路はここで間違いないわね。何か鉤爪かぎづめのようなものを使って入ったのよ」

「あれ、葉っぱが落ちている」

シンジはベランダに落ちている木の葉を拾い上げた。

「葉っぱなんてどこにでも落ちているでしょ、この家の庭にも木が生えてるし」

「そうだけど、この街に生えている木の葉っぱじゃない気がするん

だ」

アスカにそう答えてシンジはその葉っぱを回収した。
市長邸を調べ終えたアスカとシンジは1階で市長と話しているシェ
ラザードの所へ戻り報告をした。

犯人の狙いと侵入経路を特定したアスカとシンジの働きに、シェ
ラザードは満足した様子だった。

「それじゃあ次は、犯人の正体について考えてみましょう。市長さ
ん、暗証番号が誰かに漏れてしまった可能性は無い？」

シェラザードの質問に対して、市長は首を振った。

金庫を開ける暗証番号は同居している妻やメイドにも秘密にしてい
て、市長の個人データから特定されにくい数字だと言う。

しかも、エステル達がセプチウムの結晶を運んで来るまで金庫は空
っぽで、鍵を掛けずに開け放していた。

「市長さんはエステル達の目の前で金庫の鍵を掛けたんですね」

「うむ、暗証番号を入力して金庫の扉を閉じれば鍵が掛かるようにな
っておる」

シェラザードの質問に市長はうなずいた。

「じゃあ、アスカ達も番号を見たわけね」

「そんな、アタシ達の中に犯人が居るって言うの!？」

アスカは感情的になってシェラザードに言い返した。

しかし、シンジはそんなアスカの肩に手を置いて落ち着かせる。

「アスカ、あの場には僕達と市長さんの他にもう1人居たじゃない

か」

「まさか……ジョゼット？」

アスカが聞き返すと、シンジは真剣な眼差しをしてうなずいた。

「どうやら、そのジョゼットと言う子に話を聞く必要があるそうね」

シェラザードも真剣な表情をしてそうつぶやいた。

アスカの脳裏には清楚な振る舞いで紅茶を入れるジョゼットの姿が思い浮かぶ。

お嬢様と言った感じで、とても泥棒とイメージは結び付かなかった。

「そっか、アンタの方がショックよね、好きだったジョゼットが泥棒だったなんて」

「アスカまでそんな事を言っているのかよ」

アスカがシンジに同情すると、シンジは怒った様子でアスカをにらみつけた。

「ほらほら、ケンカしないの。急いでジョゼットって子を捕まえるわよ。……それでは市長、失礼します」

シェラザードに続いてアスカとシンジも市長にあいさつし、市長邸を出た。

市長邸を出たアスカ達はジョゼットの泊まっていたホテルに向かう。しかし、ジョゼットはホテルをすでにチェックアウトした後だった。

「そういえば、ジョゼットは今日飛行船でルーアンに帰るって話していたわ」

「……空港に急ぎましょう！」

アスカ達は空港へと走り、空港の受付の男性に話を聞くが、ジェニス王立学園の女子生徒は来ていないと言う。

追跡の手を逃れるため着替えた可能性も考えて待合室も探したが、ジョゼットの姿は見当たらなかった。

「もしかして、飛行船に乗るつもりは無いかもしれないわね」

「徒歩で逃げるつもりなのかな」

「搜索範囲を広げる必要があるわ」

とりあえず、アスカ達は街で依頼をこなしていたエステルとヨシユアを遊撃士協会に呼び戻し、今後の搜索について話し合う事にした。

「徒歩でロレントから出るとなると、ボース方面へ行くか、王都方面に行くか、分からないですね」

「ルーアンに帰るって言葉も本当かどうか分からないよ」

「まだロレント地方に留まっているにしても、潜伏場所は色々ありそうね」

「僕達4人だけで探すとなると、大変だね」

シンジはそう言っておでこに垂れて来た汗をふいた。

「バカシンジってば、葉っぱなんかで汗をふくんじゃないわよ」

「あっ、ポケットに入っていたからハンカチと間違えちゃった」

アスカはシンジが木の葉で汗をふいているのを見て、あきれ顔でツツコミを入れた。

「ねえ、それってセルベの葉っぱじゃない？」

「えっ？」

エステルがシンジの持っていた木の葉を見てそう言うと、シンジとアスカは驚きの声を上げた。

「セルベの樹はミストヴァルトの森に生えている大きな樹よ」

「エステルはミストヴァルトの森に虫採りに行っていたから、間違いないと思います」

「この葉っぱは犯人の侵入経路のベランダに落ちていたのよね？」

「はい」

シェラザードが尋ねると、シンジは力強く肯定した。

「とすると、犯人の逃げた先はミストヴァルトの森！」

「そうね。……行くわよ、エステル、ヨシュア、アスカ、シンジ！」

エステル達は気合を入れてミストヴァルトの森へと向かうのだった。

＜ロレント地方 ミストヴァルトの森＞

シェラザードが森の入口を調べると、複数の人間が入ったとみられる足跡を発見した。

これは、逃亡した犯人に仲間が居る事を示している。

犯人達の規模の大きさによっては退却する必要性も出て来た。

エステル達は気を引き締めて森の中に足を踏み入れる。

「ちなみに……この足跡はエステル、あなたの足跡ね？」

「アスカが風邪を引いたから、お見舞いに面白い虫でも見せて元氣を出してもらおうかなと思って」

「虫なんか見て元氣が出るわけないじゃない！」

「蝶とかなら可愛いじゃない」

「まあ、蝶ならいいかもね」

エステルとアスカの会話をシェラザードがさえぎってエステルに尋ねる。

「しっ、静かにしなさい。それよりもエステル、昨日あなたはこの森の中へ入ったのに、怪しい人影は見なかったの？」

「うん、あたしは森の奥へは行かなかったから」

森の中に詳しいエステルを先頭に、セルベの樹のある場所へと向かうエステル達。

しかし、セルベの樹の下には犯人達の姿は見当たらなかった。

「もしかして、東の広場の方に居るのかも」

ミストヴァルトの森を自分の家の庭のように熟知するエステルの案内で、エステル達が森の広場へ行くと、人の話声が聞こえて来た。おうてい

エステル達は樹の陰に隠れて声のする方を見ると、ジョゼットと数人の男性達が話をしている。

なんとジョゼットの手には市長邸から盗まれたセプチウムの結晶が握られていた！

「さすがお嬢、あっさりと獲物を盗んで来るなんて」

「ボクにかかればちよろいもんだよ。あのお人好しの市長なんか、すっかり油断してボクの前で金庫の暗証番号まで見せてくれちゃってさ」

「ははは、そいつは傑作ですね」

ジョゼットと男達は盛大な笑い声を立てた。

エステル達は怒りに駆られて飛び出しそうになったが、シェラザードが押し止めた。

もう少しジョゼット達に関する情報を会話から聞き出したかったからだ。

「でも、遊撃士のやつらはなんか強そうでしたよ？ 鉦山の魔獣達を追い払っちゃったらしいし」

「ああ、キミが失敗して偽物をつかまされた時の話か。おかげでボクはくだらない演技をしなくちゃいけなくなったじゃないか」

「すまねえ、お嬢」

「気にすんなって、あんなやつらたいした事無いからさ。ボクがお菓子と紅茶をご馳走するって言ったら、アッサリついて来たよ。あいつら食い意地が張ってるから餌付けできるんじゃないか？」

またジョゼット達がエステル達の事をバカにすると、ついにエステルとアスカは堪忍袋の緒が切れてしまった。

「食い意地が張っていて悪かったわね！」

「アタシ達をよくだましてくれたわね！」

「げげっ、なんでお前達がここに！」

怒りに燃えるエステルとアスカの姿を見て、ジョゼット達は圧されているようだった。

「演技は上手かったみたいだけど、舞台を降りた後の後片付けが甘かったみたいね。痕跡が残されていたのよ」

シェラザードがジョゼット達に言い放った。

「遊撃士協会の規約に基づき、あなた達を逮捕します」

「もう犯行はバレているんだ、大人しくしてよ」

ヨシユアとシンジも武器を構えて、ジョゼット達に宣言した。

「ふん、あんた達なんかに捕まってたまるもんか！ 行くよっ！」

「「へい！」」「」」

ジョゼットは銃を、他の3人の男達はナイフを構えてエステル達に襲いかかって来た！

エステル、ヨシユア、アスカが前衛の男達をそれぞれ1人ずつ相手にして乱戦になる。

シンジはどの敵を相手にするか迷っていたが、そんなシンジにシェラザードが指示を出す。

「シンジ、アンチセプト！」

「分かりました！」

アンチセプトとは、相手のアーツを一定時間使用できなくするアーツ。

ジョゼットがアーツを唱えようとしているのを見たシェラザードは、ジョゼットのアーツを封じるようにシンジに指示したのだった。

そして、シェラザードに自身もアーツを詠唱し始めた。

しばらくして、シンジのアンチセプトにより、ジョゼットはアーツを使えなくなる。

ジョゼットは舌打ちして、導力銃を抜いて戦闘に参加した。

「エステル、アスカ、ヨシユア、巻き込まれないように下がちなさい！」

シェラザードの言葉を聞いたエステル達は戦っていた男達に背を向けて、思い切り後ろへと移動した。

そして男達の立っている場所に、シェラザードの風のアーツ、エアリアルが炸裂する！

竜巻に巻き込まれた男達の体は空中に少しだけ浮かび上がり、地面へと叩きつけられた。

バランスを崩してしまつて男達はすぐには立ち上がれない。

その隙についてエステル達が戦闘を優位に進めた。

「さあ、これでまともに立っているのはアンタだけになったみたいね」

ムチを構えたアスカがジョゼットにゆっくりと近寄つて行つた。

「うわわ、こっちに来るな、赤毛猿！」

「なんですって！？」

アスカはジョゼットの言葉を聞いて、鬼のような形相になった。

赤毛猿とはレイが使っていたアスカに対する最大限の侮辱の言葉だった。

「そうだ、食べ物に釣られるし、キーキーうるさいし、猿みたいじゃないか！」

「このっ！」

「危ない！」

怒りが頂点に達したアスカがジョゼットに飛びかかろうとした時、近くに居たヨシュアがアスカを抱き寄せて引き下がらせた。

アスカの立っていた場所に、空中から砲弾が降り注いだのだった。

「ありがとうヨシア、助かったわ……」

ヨシアのおかげで砲弾をかわせたアスカはお礼を言った。
驚くエステル達の前に小型の飛行船が降り立った。

「ジョゼット、迎えに来たぞ！」

「キール兄、遅かったじゃないか！」

ジョゼット達は嬉しそうに小型飛行船に飛び乗った。

「しまった！」

「逃がさないわよ！」

シエラザードとエステルが慌ててジョゼット達を取り押さえようとするが、飛行船は飛び立ってしまった。

「セプチウムの結晶は頂いて行くよ、あははっ！」

ジョゼットは勝ち誇った声を残して、飛行船と共に西の空へと姿を消してしまった。

「まさか相手が空賊だったとは、完敗ね」

「くーっ、悔しい！」

「あのボクっ子、けちよんけちよんにしてやるわ！」

アスカとエステルは地団駄^{じだんだ}を踏んで悔しがった。

「どうやらボース地方へ逃げて行ったみたいですね」

「そのようね。でもここで、ずっと立ち尽くしていても仕方が無い

し……遊撃士協会に戻りましょう」

セプチウムの結晶を取り戻せなかったエステル達は気落ちして遊撃士協会に戻るのだった。

<ロレントの街 遊撃士協会>

ジョゼット達を逃がしてしまったとは言え、シェラザードは今回の事件でのエステル達の活躍を高く評価した。

アスカとシンジは市長邸の現場検証は完璧だったと褒められ、エステルとヨシユアによりジョゼット達の逃亡先がミストヴァルトの森だと判明した事も評価された。

「あなた達は4人で1つのチームだなんてつくづく思ったわ。これからも力を合わせて頑張りなさい」

「はい、分かりました」

シェラザードの言葉にシンジはしっかりとうなずいた。

「それにしても、ジョゼットがあんな性格だったなんて想像がつかなかったわよ」

「僕はもしかしてそうじゃないかと思っていたよ」

「鈍感なシンジに分かるわけないじゃん！」

「だって、猫を被っているアスカと同じようにどこことなく無理して性格を作って感じだったから……痛っ！」

そこまで話したシンジはアスカに足を思いっきり踏みつけられた。

「へえ、アスカが猫を被っていた事なんてあるの」

「ずいぶんと昔の話よ、リベールに来るずっと前」

ニヤケ顔で見つめるシェラザードに、アスカは言い返した。

「そうだ、市長さんから感謝状が届いているわよ」

「そんな、あたし達はジョゼット達を逃がしちゃったのに」

「でも、あなた達は犯人の正体を解き明かし、事件を解決させた。それは誇りに思っ
て良いわ」

シェラザードはエステル達に感謝状を見せた。

そこにはエステル、ヨシユア、アスカ、シンジ、シェラザードの名前が書かれている。

「僕達、市長さんに功績を認めてもらったんだね」

「……そうね、大学の卒業証書より嬉しいかもしれないわ」

シンジとアスカにとっては感慨深いものがあつた。

ネルフではエヴァンゲリオンで使徒を倒す事でしか評価されなかったからなのだから。

「遊撃士協会もあなた達の功績を認めているわ。だからほら、私も推薦状を書いたのよ」

シェラザードはそう言うのと、4通の封書をエステル達に手渡した。封筒の裏面にはシェラザードの名前とロレント支部の署名がされていた。

エステル達にさらなる笑顔が広がった。

「でも、これはロレント支部だけでの評価だからね。正遊撃士にな

るにはこの他にボース支部、ルーアン支部、ツァイス支部、グラ
ンセル支部の推薦を受けなければならないの」

「長い道のりになりそうだね」

「それだけ、やりがいがあるって事じゃない」

シンジのつぶやきに、アスカは胸を張ってそう答えた。

「それであなた達、次のステップに移るためにもボース支部に異動
してみない？」

「それってロレントを離れるって事？」

シェラザードの提案を聞いてアスカは不安そうな顔でそう聞き返し
た。

「良いじゃんアスカ、新しい街に行けるなんて、ワクワクして来な
い？」

アスカと対照的に、エステルは素直に嬉しさを表現した。

「でも、パパに聞いてからじゃないと決められないわ」

「カシウスさんなら聞くまでも無く賛成してくれると思うけど、ア
スカは甘えん坊さんね」

アスカの言葉に苦笑しながら、シェラザードは通信機を使い始めた。
通信の相手はカシウスが出張している帝国の遊撃士協会の支部のよ
うだった。

シェラザードはしばらく話していたが、突然驚きの声を上げる。

「ええっ、それは本当ですか!？」

ただ事では無いシェラザードの様子に、エステル達も驚いた。

「……はい、本人達も遊撃士ですから、覚悟はできていると思います」

シェラザードはそう言って通信を切った。

「いったい、何があったんですか？」

「みんな、落ち着いて聞いてくれる？」

ヨシユアに尋ねられたシェラザードはそう言って大きく深呼吸をしてゆっくりと話し始める。

「……カシウスさんが姿を消したみたいよ」

「そんな、パパが!？」

アスカは青い顔をして倒れ込んでしまった。

シンジが慌ててアスカを助け起こす。

「シェラザードさん、カシウスさんが消えたってどういう事ですか!」

「追っていた事件の調査中で連絡が取れない状態になってしまっているのか……それとも考えたくないけど、事件に巻き込まれてしまっているかもしれないわね」

シンジの叫びにシェラザードは考え込んだ顔をしながらそう答えた。しかし、エステルとヨシユアは声を荒げて否定する。

「父さんが簡単にやられるはず無いわよ!」

「エステルの言う通りです、父さんの事件解決能力は人並み外れて

います」

「私も先生を信じるわ。きっとしばらく経った後、何事も無かったかのように連絡してくるわよ」

シェラザードもエステルとヨシユアの言葉にうなずいて、シンジとアスカを励ますように声を掛けた。

しかし、アスカは青い瞳から涙を流して激しく首を横に振って答える。

「アタシ、頭の中が真っ白になって……今は冷静でいられないの……」

リベール王国で巡り合えた新たな家族。

アスカはまたそれを失ってしまうとなれば、ショックは大きかった。

「アスカ、今日の所は家に帰って休みなさい……」

今朝元気を取り戻したと思ったら、またアスカに辛い現実が降りかった。

シェラザードはアスカの姉貴分として、アスカの苦しい胸の内を思いやる。

シンジとエステルはアスカの肩を支えながら遊撃士協会を出る。

アスカの事が心配だったシェラザードも一緒にブライト家まで付き添うのだった。

第十七話 ピンチ！ 遊撃士嫌いのモルガン將軍

くロレント地方 ブライト家 ダイニングキッチン>

シヨックを受けたアスカをエステルの部屋に寝かせたシンジ、ユア、シェラザードの3人は、ダイニングキッチンで憂鬱な顔を突き合わせていた。

エステルはアスカの側に付き添っている。

シンジはキッチンでアスカの大好物であるハンバーグを焼いていた。エステルがアスカを慰めている今、自分にできるのはこれがベストだと考えたのだ。

「カシウス先生の件、アスカは相当応えたでしょうね」

「はい、アスカにとっては初めてできた父親のようでしたから」

「どういう事？」

シンジはシェラザードとヨシユアにアスカの出生の秘密について話した。

アスカには父親が元から存在して居なかった。

アスカの母親は精子バンクで精子を買い、試験管で人工受精をしたとアスカは自嘲気味に話した事がシンジにあった。

エヴァに乗っていれば父親の事などどうでも良いと話してたが、カシウスに心を開いた時のアスカの反応を見ると、そうとは思えなかった。

16歳も年の離れた加持に憧れていた事もあり、アスカは兄だけでなく父親が欲しかったのではないかとシンジは確信していた。

「そうだったの……私も孤児だったから、カシウス先生に父の存在を求めてしまう所があるわ」

「シェラザードさんは小さい頃、サーカス一座で踊り子をしていたんですよね」

「ええ、天涯孤独だと思っていた私を拾ってくれた一座のみんなは優しかったわ……」

ヨシユアにそう答えたシェラザードは昔を懐かしむ表情をした。しかし、シェラザードは寂しそうな表情に変わってため息をつく。

「でも、その家族が失われて、私はカシウス先生に頼るしか無かった。また家族が居なくなってしまうのは悲しい事よ」

「カシウスさんは、僕達を悲しませるような事はしないと思います」

シンジは首を横に振ってシェラザードの言葉を否定した。

「そうね、エステルも言っていたけど、カシウスさんがやられるはず無いって信じないよね」

話しているうちにシンジ特製のハンバーグが焼き上がった。

しかし、食べて欲しい相手であるアスカは部屋に籠ってしまっている。

「こうなったら、ハンバーグが冷めないうちに私がアスカを部屋から引っ張り出して来るわ」

「シェラザードさん、手荒な事はしないで下さい」

シンジとシェラザードが揉めていると、2階から複数の人間が降りて来る足音が聞こえた。

まさかと思ってシンジ達が階段の方に目を向けると、エステルとアスカが笑顔でこちらにやって来るのが見えた。

「あーお腹空いた」

「良い匂い、美味しそうなハンバーグじゃん」

エステルとアスカは驚くシンジ達の目の前で席に座った。

そして、アスカとエステルは勢い良くシンジの焼いたハンバーグを
食べ始める。

「シンジ、今日のハンバーグはしっかり焼けているわね、合格よ」

「あ、ありがとう」

アスカに褒められて、とまどいながらシンジはお礼を言った。

「アスカ……あなた、大丈夫なの？」

「エステルに言われたの、パパの心配をして泣いてばかりはいられないって」

シェラザードに尋ねられてアスカは微笑んだ。

アスカの目には泣きはらした跡があったが、今はすっかり元気を取り戻したようだ。

「明日からの長い仕事に備えて、たくさん食べて体力をつけないとね！」

「仕事って？」

「もちろん、父さんを探しに行く事よ」

「ええっ!？」

堂々と言い放ったエステルに、シンジは驚きの声を上げた。

「エステルはいつも前向きなんだから」

「うん、僕もエステルに助けられたよ」

アスカのつぶやきに、ヨシユアも同意してうなずいた。

「父さんが姿を消したなんて聞いたら黙ってはいられない、あたし達も帝国へ行きたい、良いでしょう？」

エステルがシェラザードに頼み込むが、シェラザードは首を横に振る。

「いいえ、準遊撃士であるあなた達を行かせるわけにはいかないわ」「そんなっ！」

シェラザードがそう言い切ると、アスカは不満そうに言い返した。

「そんな事件を新人のあなた達に任せるわけにはいかないって事」「ううっ、それはそうかもしれないけど」

エステルはまだ納得行かない様子。

「帝国へは私が行くから、任せなさい。先生の身に何かがあったかもしれないのに、弟子の私が何もしないわけにはいかないわ」

「シェラザードさん、よろしくお願いします」

シェラザードの言葉を聞いたシンジが頭を下げて頼み込んだ。

エステル達もシェラザードが直々に向かうと言う事で、納得した様子だった。

「あなた達はボース支部に行つて、正遊撃士になれるように頑張るのよ」

「分かったわ！」

アスカはシェラザードに元気一杯に返事をした。

そして、エステル達は明日のボース地方への出発に向けて準備をするために部屋に戻った。

シンジは元気に立ち直ったアスカの姿を見て、リベール王国で新たな家族が出来た事に感謝していた。

自分だけだったら、アスカにハンバーグを食べさせる事も難しかったかもしれない。

シンジも夕食の片づけを終えて自分の部屋に戻ろうとした時、シェラザードに呼び止められる。

「アスカは元気になったようね」

「はい」

「でもあの子は感情の浮き沈みが激しい所があるから」

シンジにはシェラザードの心配が良く分かった。

アスカは気が強いように見えるが、内面はもろいものだとしんじも気がついていた。

「大丈夫です、アスカは僕と……エステルと、ヨシユアで支えます」

自分一人で支えるとまだ言い切れないシンジだった。

<ロレントの街 遊撃士協会>

いよいよエステル達がロレントの街を離れる朝がやって来た。

帝国とリベール王国との国境の出入り口はボース地方にあるため、シェラザードもボース地方まではエステル達と同行する事になった。

「じゃあ私が仕事の引き継ぎの手続きをしている間、あなた達は2階で待っていなさい」

「シェラ姉、時計台に寄って来て良いかな？ 街に出る前に母さんにあいさつをしておきたいし」

シェラザードの言葉を聞いたエステルが許可を求めると、シェラザードは真剣な表情でうなづく。

「良いわよ、私も手続きが終わったらレナさんによろしくね」

エステル達はシェラザードに見送られて遊撃士協会を出て、ロレントの街の中心部にある時計台へと向かった。

「ねえ、今日は時計台の上に登ってみたい？」

「平気なの？」

「うん、あたしは平気だから」

気遣うようなアスカの質問にエステルはそう答えた。

アスカとシンジがエステルと一緒に暮らし始めて2年間、エステルは木に登る事はあっても、時計台の上に登りたがる事は無かった。高い所が嫌いと言うわけではないエステルが時計台を避ける理由は他にあった。

「うーん、風が気持ちいいし、良い眺めね」

エステルは気持ち良さそうに伸びをして深呼吸をした。

アスカ達はそんなエステルの様子を心配そうに見つめていた。

「そんな顔しないで、あたしは母さんが命を落とした辛い思い出が

あるからこの場所を避けていたんじゃないの」

アスカ達の表情に気がついたのか、エステルはそう説明した。

「じゃあ、どうして？」

ヨシユアが尋ねると、エステルはゆっくりと話し始める。

「ここに来ると、母さんに甘えてしまいそうな気がして……情けな
いって怒られそうな気がしていたから」

「エステル……」

「でも、今日ぐらいは母さんに頼っても良いよね？ 父さんが無事
でいるように母さんをお願いしても」

「もちろんよ、エステルのママが守ってくれば、パパもきっと大
丈夫よ」

アスカはそう言って泣きそうになったエステルを抱き寄せた。

「エステルは、すっかりアスカと心を通わせたようだね」

そうつぶやくヨシユアの表情は嬉しさと寂しさが入り混じっている
ようだった。

シンジはヨシユアにかけるべき言葉が見つからず、複雑な思いで見
ている事しかできなかった。

そして、シンジは自分の母親、碇ユイの事を考えていた。

ブライト家のダイニングキッチンにはエステルの母親、レナの写真
が飾られていて、カシウスはレナが亡くなった後も思い出を大切に
しているのが感じられた。

それに引き換え自分の実の父親である碇ゲンドウは妻であるユイの
写真も形見の品も全て捨ててしまい思い出を忘れ去ろうとしている。

「やっぱり、父さんの考えは間違っているよ」

時計台を去る時、シンジは遠い世界に居るゲンドウを思い浮かべて怒った顔でそうつぶやくのだった。

そして、シェラザードと合流したエステル達は飛行船に乗ってボース市へ行く事になった。

本来ならばシェラザードはエステル達を徒歩でボース地方に行く事を勧めたかったのだが、カシウスの消息を早く調べたい気持ちもあったからだ。

飛行船に乗ったエステル達は住み慣れたロレントの街が小さくなっているのを見て、いよいよ自分達が新天地へ踏み出そうとしている事を実感した。

心の中には不安と期待が入り混じっていた。

<ボースの街 遊撃士協会>

ボース国際空港に降り立ったエステル達はその街の大きさに改めて驚いた。

アスカとシンジは2年前カシウスと出会った直後にこのボースの街を訪れてはいるものの、ロレントの街より規模の大きいボースの街の活気に圧されていた。

事件が無かったら市内観光をしたかったエステル達だが、一刻も早く帝国のカシウスの状況を聞きたいためにボースの街の遊撃士協会に立ち寄る事にした。

しかし、ボース支部の遊撃士協会の受付、ルグラン老人から聞かされた情報はとんでもないものだった。

ボース地方で強盗事件が起こり、犯人の逃亡を防ぐため帝国への飛

行船の国際線と帝国との国境に位置するハーケン門は現在閉鎖されているらしい。

つまり事件が解決しない限り、シェラザードは帝国に行く事すらできないのだ。

「事情を話して通してもらうわけにはいかないの？」

「それは難しいじやろう、ハーケン門を守るモルガン將軍は大の遊撃士嫌いで有名じゃからな」

エステルの質問に、ルグラン老人は残念そうに首を横に振った。

「それじゃ、私達の手で事件を解決させるしかないわね」

腕組みをして考え込んでいたシェラザードはそう言った。

「元とは言えば、あたし達が逃がしちゃったのが原因だしね」

エステルが気合たっぷりにそうつぶやいた。

「今度こそ、ジョゼットの息の根を止めてやるわ！」

「それはやりすぎだよ」

「僕達に許されているのは逮捕までだよ」

アスカの言葉にシンジとヨシユアがツツコミを入れた。

「それで、遊撃士協会にはどれくらいの情報が入って来ているの？」

「残念ながら、遊撃士は捜査の参加を拒否されているのじゃよ」

「何よそれ、軍と遊撃士は協力関係にあるんじゃないの？」

シェラザードの質問に対するルグラン老人の返事に、アスカは怒っ

た表情で聞き返した。

「そのはずなんじゃが、モルガン將軍の遊撃士嫌いは相当のものじゃからのう」

「それでは、打つ手は無いのですか？」

「いや、方法はある。市長がこの事件に関する情報の提供をモルガン將軍に求めているはずじゃ。市長とモルガン將軍は親しい間柄じゃ、市長の使いの者と言えば情報を聞き出せるかもしれん」

ヨシユアの質問にルグラン老人が答えると、エステル達の表情は明るくなる。

「いいわね、その手を使いましょう」

「でも、僕達が遊撃士だとばれたら……」

アスカは乗り気だが、シンジは心配そうな顔で不安を述べた。

「大丈夫よ、あなた達みたいに若くして遊撃士になった子なんてそうそう居ないから、モルガン將軍も遊撃士とは思わないはずよ」

「ふふん、アタシは14歳の時でも試験に合格しただろうけどね」

「たいした自信じゃの」

エステル達は市長に面会し、市長の依頼を受けてモルガン將軍の居るハーケン門へと向かう事になった。

ただし、シェラザードは遊撃士として知れ渡ってしまったので、ハーケン門へはエステル達4人だけで行く事になった。

「シェラザードさんが居ないなんて、不安だね」

「話を聞いて来るだけでしょう、何をビクビクしているのよ」

頼りないシンジの様子に、アスカは喝を入れた。

シンジは『将軍』と肩書きの付く人物がどれほど怖いのか1人で想像して畏怖していたのだ。

「ねえ、将軍と総司令ってどっちが怖いのかな？」

「はあ？ アンタ何をバカな事を言っているのよ」

アスカはシンジの質問に情けなくなっただけ息をつくのだった。

＜ボース地方 ハーケン門＞

市長から依頼状を受け取ったエステル達は、市長の使いを名乗りハーケン門に通じるアイゼンロードの検問をぐり抜ける事に成功する。

アイゼンロードを通る事を許されているのは軍の関係者がほとんど。自分達がモルガン将軍に嫌われている遊撃士だとバレてしまったらどんな目にあわされるか分からない。

そんな針のむしろが敷き詰められているようなアイゼンロードの街道をエステルは楽しそうに、アスカは堂々と、ヨシユアは目立たないように、シンジはオドオドしながら歩いていた。

道中誰にもとがめられることなく、エステル達はハーケン門へとたどり着いた。

エステル達はハーケン門の大きさに圧倒されながらも、モルガン将軍に会うため兵舎の入口に居る衛兵に声を掛けた。

衛兵は閉鎖されているはずの街道からやって来たエステル達を怪しんだものの、市長の依頼状を見ると、今はモルガン将軍は搜索活動の指揮を執って居るため不在と知らされた。

それならばとエステル達は衛兵に勧められたように国境の検問に併

設された休憩所でモルガン將軍の歸りを待つ事にした。

ここまで来て会わずに歸るわけにはいかないと思ったからだ。

エステル達が休憩所に入るとカウンタ―席では金髪の男性が酒を飲んでいた。

その男性の姿を見たアスカは目を輝かせてエステル達に話しかける。

「ねえ、あの人が着ている服ってリベールに居る人と違う雰囲気がない？」

「うん、あれはエレボニア帝国のファッションだね」

アスカの言葉にヨシユアは同意してうなずいた。

「帝国から来た人なのかな」

エステルも興味がありそうな瞳でその金髪の男性を見つめた。

すると、男性の方がエステル達に声を掛ける。

「ごきげんよう、君達はリベールの人かな？　こっちへ来て一緒に飲まないかい？」

「僕達は未成年ですけど、話すぐらいなら」

ヨシユアは男性の誘いにそう答えた。

シンジは男性の事が気に入らなかった。

アスカが憧れの眼差しで男性を見つめている気がしたからだ。

自分は男性に比べて服のセンスも圧倒的に悪く、コーディネートはアスカに任せきりだ。

シンジは自信の無さからアスカと話す他の男性にひがむ部分があった。

狭い休憩所の中で陰悪な雰囲気を作るのも嫌だったので、シンジもヨシユアに続いてエステル達と一緒に男性の側に座った。

男性はオリビエと名乗り、エレボニア帝国からリベール王国に旅行に來た所、足止めを食らっていると話した。

オリビエはすぐにエステル達を遊撃士と見抜いた。

すると、ヨシユアは警戒感をあらわにしてオリビエをにらみつける。

「そんな綺麗な琥珀の瞳でじっと見つめられたら、僕の胸がキュンとなってしまうよ。どうだい、この出会いに感謝して僕とハグでもしないか？」

「け、結構です！」

ヨシユアはそう言ってオリビエから慌てて体を離した。

「えーっ、オリビエさんってその世界の人だったの！？」

エステルの言葉に、オリビエは首を軽く横に振って答える。

「僕は美しいものに目が無いだけさ、美女でも、美少年でもね」

「それじゃ、どうしてアタシ達に声を掛けようとしなのよ！」

「うーん、まだまだ君達は子供っぽい感じがして色気が足りない気がするからな、ヨシユア君に教えてもらおうと良い」

「何ですって！」

男のヨシユアより色気が無いと言われたアスカとエステルはカンカンになってオリビエをにらみつけた。

一触即発の状況に衛兵がエステル達を呼びにやって来る。

帰って來たモルガン將軍がエステル達に会ってくれるそうだ。

シンジは助かったと安堵のため息を吐き出した。

そして、さりげなく付いて来ようとしたオリビエを追い払って、エステル達はモルガン將軍との対面を果たした。

「これが、市長さんからの依頼状です」

エステルから市長の依頼状を受け取ったモルガン将軍はじっとエステルの事を見つめていた。

「あの、どうかしたんですか？」

自分の顔をじっと見つめて来るモルガン将軍をエステルは不思議に思っ
て尋ねた。

「お主、リアンヌと言う名前に聞き覚えは無いか？」

モルガン将軍に尋ねられて、エステルは考え込む。

「リアンヌ……うーん、あたしが小さい頃、家で遊んであげた子の名前に似ているかも。父さんの同僚の人の娘さんだって」

エステルの言葉を聞いたモルガン将軍は目を光らせる。

「やはりお前はカシウスの娘だな！」

「ええっ、どうして分かったの！？」

モルガン将軍の言葉を聞いて、エステルは驚いて聞き返した。

「リアンヌはワシの孫だ！」

そう言ってモルガン将軍は手に持っていた市長の依頼状を握りつぶす。

「身分を偽って情報を聞き出そうとするとは、やはり遊撃士は卑怯

千万だな！」

「アンタが情報を隠すからいけないんじゃない！」

「黙れ！」

モルガン將軍はアスカにそう言い返すと、部屋の外に居る衛兵達に向かつて号令を下す。

「曲者だ！　ここに遊撃士が居るぞ！」

エステル達は武器を構えた衛兵達に取り囲まれてしまった。

モルガン將軍の遊撃士嫌いは有名である。

逃げられないと悟ったエステル達はこれからどうなるのかと恐怖し、青い顔でひたいから冷汗を垂らすのだった。

第十八話 絶体絶命！ 捕まったエステルとアスカ達！

<ボース地方 ハーケン門>

「まさかアタシ達、処刑されちゃうの？」

青い顔でつぶやいたアスカが震えながらギュッとシンジの手を握った。

リベール王国で自分達の居場所を見つけられたと思ったのに、命を落としてしまうのか。

シンジが悔しい気持ちで取り囲む兵士達をにらみつけていると、外が騒がしくなり人影が部屋へと飛び込んで来る。

「その子達に手を出してみなさい、私があなたを許しておかないわ！」

「お主は……銀閃のシェラザード！」

やって来た人影がシェラザードだと分かったと、エステル達は歓声を上げて喜んだ。

「高名なモルガン将軍にご存じいただけるとは光栄ね」

「どうやってここまで入って来た！」

「私も市長の委任状を貰って検問を通らせてもらったわ。嫌な予感がしたからね」

「簡単に遊撃士に検問を通さしてしまうとは……許せん！」

「それはこっちのセリフよ！」

しばらくシェラザードをにらみつけていたモルガン将軍の方がついに折れる。

「ふん、ここで暴れられても面倒だ、調査資料なら後で遊撃士協会宛てに送ってやる、用が済んだならとっとと帰れ」

「用はそれだけじゃないわ、帝国への通行許可を出してほしいのよ」
「何をバカな事を言っている、強盗事件発生中だから国境を閉鎖しているのが分からんのか!」

「緊急事態だから仕方無いのよ、カシウス・ブライトに関する事なんだから」

「何だと!？」

シェラザードの言葉を聞いたモルガン将軍は驚きの声を上げた。
そしてエステル達はシェラザードを交えてモルガン将軍に事情を話した。

カシウスが帝国で消息を絶ってしまったので自分達の手で探したいと頼むとモルガン将軍は腕を組んで考え込んだ。
そしてしばらくした後、モルガン将軍はゆっくりと発言する。

「分かった、ワシもカシウスの事は気にかかる。だが、帝国に行く事を許可するのはシェラザード1人だけだ」

「えーっ、何で!？」

アスカが驚きと不満が入り混じった声を上げた。

「未熟な準遊撃士のお主らを帝国に行かせるわけにはいかぬ」

「モルガン将軍はカシウス先生と親交があったから、エステルの事が心配なのよ」

「ワシがカシウスのやつめと親しかったのは軍人だった頃までだ、遊撃士になった後は知らん!」

シェラザードの言葉に、モルガン将軍は不機嫌そうに顔を背けた。

「カシウス先生の事は私に任せて、あなた達は自分のできる事をやりなさい」

「でも……」

「アスカは私の腕を信用できないの？」

「そんなことないわよ」

アスカが納得した所で、それぞれの方針が決まった。

シェラザードは帝国に行きカシウスの消息を追う。

エステル達はボース地方の強盗事件解決に協力する。

「じゃあね、あなた達も私が居ないからって気を抜かずにしっかりと遊撃士の仕事をこなすのよ」

「シェラ姉も気を付けてね！」

シェラザードはエステル達に見送られてハーケン門を通過して帝国へと去って行った。

「僕達はボースの遊撃士協会へ戻ろうか」

「そうね、強盗事件に関する情報も貰える事になったし」

ヨシユアの提案にアスカがうなずいた。

「あたし、何か忘れているような気がするんだけど」

「きっと気のせいだよ」

エステルのつぶやきに、シンジはそう答えた。

「まったく薄情だね、親しく言葉を交わした仲だと言うのに」

ハーケン門を去って行くエステル達の姿を休憩所の中からオリビエは寂しそうに見送った。

＜ボースの街 遊撃士協会＞

エステル達がボースの街へ戻って来た時にはすっかり日が暮れていた。

強盗事件に関する調査資料は一足先に遊撃士協会に届いていた。資料を読んだエステル達は、明日の朝に対策会議を開く事にして遊撃士協会の2階で眠りに就いた。

「大変じゃあ！」

朝日が昇る前にルグラン老人に起こされたエステル達は、街が騒がしい事に気がついた。

なんと昨日の深夜に新たな強盗事件が発生したらしい。

ルグラン老人によると、営業の終わった北区画にあったボースマーケットとレストラン、南区画にあった武器屋とオーバル工房の鍵を壊して強盗達が商品や金庫を強奪したらしい。

両方の店は無人だったために人的被害は無かったのが不幸中の幸いだった。

目撃者によると強盗達は夜明け前に西の方へ一斉に引き揚げて行ったので、この支部に立ち寄ったアガットと言う遊撃士が追いかけて行ったそうだ。

「僕達も強盗達を追跡しよう」

ヨシュアの提案にエステル達も賛成した。

エステル達は強盗達を追いかけてボースの街の西の門を出るのだった。

しかし、しばらく西の街道を進んで行くと、ヨシユアが突然足を止めた。

「どうしたの？」

「……ここで強盗達の足跡が途絶えている」

シンジにヨシユアはそう答えた。

ヨシユアの言葉通り、エステル達にもそこで足跡の数が急に少なくなっているのが分かった。

「まさか、ここから先は空を飛んで行っちゃったとか？」

エステルが笑いながらそう言うのと、シンジ達は揃ってうなづく。

「相手は空賊だから多分そうだろうね」

「ええっ、本当に空を飛んだの？」

「ロレントで逃げられたばかりじゃない、忘れたの？」

アスカはあきれ顔でため息をついた。

「でも、ボースの街で目撃証言が無いって事は、ここよりさらに西の方へ飛んで行ったんでしょうね」

「そうだね」

アスカの言葉にヨシユアが同意してうなずいた。

「この先はラヴェンヌ山道かクローネ峠に別れているみたいだ、どっちに行けばいいんだろう」

「手分けした方が良いのかな」

シンジとエステルもそうつぶやいて、エステル達がこれからどうしたものかと思案していると、ラヴェンヌ山道の方から背の高い、大きな剣を背中に背負った赤毛の青年が降りて来た。

その赤毛の青年はエステル達の胸に付けられた準遊撃士の紋章を見て声を掛ける。

「お前ら、ルグランじいさんが話していたシェラザードの連れの新米準遊撃士共だな？」

「何よアンタ、偉そうに」

突然上から目線で話しかけられたアスカは少し怒った顔で青年をにらみ返した。

「ダメだよアスカ、先輩の遊撃士にそんな態度を取っちゃ」

シンジは慌ててアスカをなだめるように赤毛の青年の胸に付けられている正遊撃士の紋章を指差した。

「失礼しました、あなたがアガットさんですね？」

「フン、そうだ」

ヨシユアが謝りながら尋ねると、アガットは鼻を鳴らしながら答えた。

「それで、シェラザードのやつもロレントから来たって話だが、お前らと一緒にじゃないのか？」

アガットに尋ねられたエステル達は事情をアガットに話した。

カシウスが行方不明になったと聞いてアガットは驚いた様子だったが、それ以外は落ち着いて話を聞いていた。

「ふーん、あのしぶといおっさんが行方不明だって言うのはいまだに信じられないが、シェラザードなら何かをつかんでくれるだろう」「そうですよね」

アガットの言葉を聞いてシンジは安心したようにため息をついた。

「でもお前達は無駄足だったな。俺は飛行船の目撃情報を聞いてラヴェンヌ村まで行って来たが、どうやら見間違えのようだったぜ」「そうなんですか？」

シンジの言葉にアガットはうなづく。

「ああ、黒い影が村の北西の廃坑の方へ飛んで行ったらしいが、飛行船は見つからなかったぜ」

「では、僕達はクローネ峠の方へ行ってみようと思います」「そっちの方は目撃証言が無いんだぜ？」

ヨシュアの言葉にアガットは怪訝な顔をして尋ねた。

「でも、念のために調べないと」

「へっ、好きにしな」

アガットはそう言って街の方へと戻って行った。

「自分が正遊撃士だからってでかい態度取っちゃって」「あたしの事を素人扱いして滅茶苦茶ムカついたわ」

アスカとエステルはアガットが去った後思い切り不満をもらした。エステル達はクローネ峠を進み、ルーアンとの関所まで行ったが、空賊に関する情報は得られなかった。

このまま手ぶらで街に帰るしかないのかと落胆していたエステル達に、シンジが提案をする。

「街に戻る前に、ラヴェンヌ村の方も調べてみない？」

「どうして、あそこはアガットさんが調べたはずだよ？」

ヨシユアに言われて、シンジは少したじろぐ。

「でも、1人で調べたなら見落としがあるかもしれないし……」

「賛成、賛成！　もし何か情報を見つけたらアガットの鼻を明かせるじゃない」

「うんうん」

アスカもエステルもシンジの言葉に猛賛成した。

「僕は別にアガットさんにやり返そうとは思っていないけど……」

「他に手がかりもないし、行ってみるのも良いかもしれないね」

ヨシユアも賛成に回った事で、エステル達はラヴェンヌ村へ向かう事にした。

<ボース地方　ラヴェンヌ村>

エステル達は険しい峠道を引き返して分岐点へと戻り、また険しいラヴェンヌ山道を登り始めた。

遊撃士になるための修業を積んだとはいえ、これだけの山道を歩くのはアスカとシンジにとっては特に辛いものだった。
第三新東京市で暮らしていた頃はこんなに歩いた事は無い。

「アスカ、大丈夫？」

「シンジの方こそ、へばっているんじゃないの？」

アスカはシンジにそう言い返したが、とても歩くのが辛そうだった。

「それじゃ、あたしがアスカをかついであげるよ」

「エステルも疲れているんでしょう？」

「このぐらい平気だって！」

涼しい顔でアスカを担ぎあげるエステルを見て、シンジはこの世界の住人達との基礎体力の差を思い知らされた。

村に着いた時にはシンジとアスカは体力の限界を迎えていたので、情報収集はエステルとヨシユアに任せてシンジとアスカは村の宿屋で休憩する事になった。

「さてと、片っ端から目撃証言を聞いて行く？」

エステルの提案にヨシユアは首を横に振る。

「まずは村長さんに話を聞いてみよう、そうすれば誰が目撃者か分かるよ」

「なるほど、余計に話を聞く手間が省けるか」

エステルとヨシユアが村長に話を聞くと、目撃者は小さな少年だと分かった。

さらに2人は村長にアガットの知り合いかと尋ねられた。

正確には知り合ったばかりなのだが知り合いだと答えると、村長はエステルとヨシユアに何かを言い掛けて口を閉じた。

エステルとヨシユアは村長の態度が気になったが、無理に尋ねるわけにもいかず、村長の家を出て目撃者の少年を探す事にした。

目撃者の少年は棧橋で孤独に暗い顔をしてうつむいて座っていた。

「君がルウイくん？」

「そ、そうだけど、お姉ちゃん達は誰？」

エステルが少年の名前を呼んで声をかけると、少年は怯えながら返事をした。

「あたし達は遊撃士なの、まだ見習いなんだけどね」

「遊撃士ってアガットにーちゃんと同じ？」

「君はアガットさんを知っているの？」

「うん、アガットにーちゃんは僕達が小さい頃から遊んでくれたんだ、だけど……」

ヨシユアの質問にそこまで話してルウイ少年は暗い顔になって黙り込んでしまった。

これはマズイと話題を変えるためにヨシユアはルウイ少年に優しい口調で再び質問する。

「君が昨日の夜見かけた黒い影の事を教えて欲しいんだ」
「嫌だ！」

ヨシユアに尋ねられたルウイ少年はすねたように顔を背けてしまった。

この反応にはエステルとヨシユアは驚く。

「どうして？」

「だって、お姉ちゃん達もボクが嘘つきだって怒るから」

「もしかしてアガットさんに怒られたの？」

ヨシユアの質問にルウイ少年は振り返ってうなずいた。

ルウイ少年は目に涙をためて今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「お姉さん達は怒ったりしないから」

「でも、アガットにーちゃんは探しても見つからなかったって。だからボクは村の他の子からも嘘つきって言われたんだ」

「それは探し方が甘かったのよ、お姉さん達は4人で探してあげるから、きつと見つけてみせるって」

「本当!？」

「だから、もう泣かないでお姉さんに話を聞かせて」

「うん!」

(……これがエステルの手持っている明るさ……周りのみんなを照らしてくれる)

エステルとルウイ少年の話を聞いていたヨシユアは心の中でそうつぶやいた。

ルウイ少年はエステルとヨシユアに昨日の夜目撃した黒い影の事を改めて説明した。

いつものように夜に家をこっそりと抜け出したルウイ少年は星を見始めてしばらくしてから、黒い影が村の上空を南東から北西に速いスピードで横切って行くのを目撃した。

それで、事件の事を聞いて村にやって来たアガットに誰よりも早く報告したのと言う。

「ありがとう、話してくれて」

「お姉ちゃん、頑張ってたね!」

別れ際のルウイ少年は明るい表情で手を振っていた。

「エステル、あんな約束をしちゃって大丈夫？」

「……やっぱり、まづかったかな」

エステルはヨシュアの質問にごまかし笑いを浮かべて答えた。

「根拠は無かったんだ」

予想していたエステルの答えにヨシュアは苦笑しながらため息をついた。

エステルとヨシュアは宿屋で休憩をしていたアスカとシンジと合流すると、2人にエステルがルウイ少年と交わした約束について話した。

「もうエステルってばそんな安請け合いしちゃって」

「仕方無いよ、それがエステルの良い所なんだからさ」

「アタシだって分かってるわよ」

ヨシュアに説得されて、アスカはそう言い返した。

「でも、もし黒い影が見間違えだったらどうしよう」

「シンジはルウイの話が信用できないの？」

シンジが不安をもらすと、エステルは悲しそうな顔でシンジを見つめた。

「そんな事はないけど……」

「それじゃ、早速村の北西にある廃坑へ向かうわよ！」

張り切っているエステルを先頭にエステル達は廃坑へと向かった。廃坑の途中の道のりには強盗達が居た痕跡は見つけられなかった。そして、廃坑の入口の鉄格子の扉を見たアスカとヨシユアは顔を見合わせてうなずく。

「入口にはしっかりと鍵がかけられているわね」

「どうやら、最近開けられた事もないみたいだ」

2人の言う通り、廃坑の入口の扉には錆び付いた南京錠が鎖で縛り付けられていた。

昔に廃坑になった時のまま放置されているのだろう。

「と言う事は、やっぱり空賊はここに来ていないって事？」

「そんなあ」

シンジが結論を出すと、エステルはガッカリした感じでため息をついた。

「エステル、残念だけどやっぱりアガットさんの調査結果は正しかったみたいだ」

「でもこのままじゃ、ルウイが嘘をついた事になっちゃうじゃない、もうちょっと調べよう」

「気持ちは分かるけど、もう戻ろうよ」

ヨシユアに食い下がって調査を続行しようとするエステルを、シンジが説得しようとした。

諦めきれない様子で廃坑の入り口に近づいたエステルは、何かに気がついた様子でシンジ達に尋ねる。

「ねえ、中から空気が流れ出している気がしない？」

人差し指を口に含んで濡らしたシンジも、エステルという言葉に同意する。

「本当だ、風が吹いているみたいだ」

「廃坑のどこかに地上に通じる所があるのかもしれないわね」

「アガットさんは入口を見ただけで奥まで調べる必要は無いと判断してみたんだね」

アスカとヨシユアの反応も見ても、エステルは嬉しそうな表情になる。

「じゃあ、廃坑の中も調べてみようよ！」

「だけど鍵が掛かっているよ」

シンジにそう言われたエステルは笑顔で装備していた棒を大きく振り上げる。

「それなら鍵をぶち壊して……」

「ダメだよ、村長さんに鍵を借りに戻ろう」

「むー、早く調べたいのに」

ヨシユアになだめられて、エステルは引き下がってラヴェンヌ村へと戻るのだった。

<ボース地方 ラヴェンヌ廃坑>

村長から廃坑の鍵を借りたエステル達は、いよいよ廃坑の中へ足を

踏み入れた。

長い間閉鎖されていた廃坑は静寂に包まれていた。

奥の方へと進んで行くと、前の方から話し声が聞こえて来た。

エステル達は無言で顔を見合わせると声のする方へとゆっくりと歩いて行った。

暗かった廃坑の通路がだんだんと明るくなって行くのにエステル達は気がついた。

やがてエステル達は、山を切り崩した露天掘りがされていた場所へとやって来た。

周りは崖に覆われていて廃坑の入口から見えない地形になっている。

「あれは、ジョゼット達が乗っていた飛行船！」

「どうやら、ビンゴみたいね」

エステルの言葉に、アスカもうなずいた。

目の前で空賊達がのんきに食事をしている。

油断している今のうちにとエステル達は攻撃を仕掛けようと走って接近する。

「こらっ、あんた達！ 年貢の納め時よ、覚悟しなさい！」

「よお、早かったじゃないか」

「へっ？」

その場に居た空賊グループのリーダー、ロレントでジョゼットを迎えに来たキールに親しげに声をかけられてエステルは驚きの声を上げた。

「お前ら、知らせに来てくれたんじゃないのか？」

「何の話よ？」

話がかみ合わず、キールとアスカは首をかしげながら見つめ合った。

「もしかして、本当に俺達を捕まえに来たのか？」

「当たり前よ！」

キールの質問にエステルが武器を構えてそう答えた。

「兄貴、やばいすぜ」

「慌てるな、相手はガキ4人だ、ジョゼットがやられた分をやり返してやる！」

「アタシ達を甘く見ると痛い目にあうわよ！」

キール達は逃げずに襲いかかって来た！

戦闘開始から、キール達は一斉に煙幕花火を投げつけてエステル達の視界を塞ぐ。

しかも、煙幕は目に染みるため、ゴーグルを完全装備した空賊達が有利だった。

「これじゃあ、まともに戦えないじゃない……きゃああ！」

煙の中で空賊の1人にムチを引っ張られたアスカが悲鳴を上げて地面に倒れ込んだ。

そして空賊達に体を取り押さえられた。

「アスカっ！」

シンジが青い顔をして叫びながらアスカの下へ駆けつけようとした。

「おっと動くんじゃない。この娘の顔に傷を付けられなくなったら、大人しくするんだな」

空賊の男がアスカのほおにナイフをかざした。
アスカは恐怖に目を見開いて息を飲んだ。

「分かったよ、だからアスカには手を出さないでよ」

シンジはそう言って持っていた導力銃を地面へと落とした。
エステルとヨシユアも武器を手放して降伏の態度を示した。

「へへっ、こうも簡単に行くとはな」

キールは空賊達に指示して、エステル達の手を縛らせた。

「あたし達をどうするつもりよ！」

「安心しな、身代金を取ったら解放してやる」

エステルの質問にキールはそう答えた。

そしてエステル達は飛行船に乘せられ、倉庫に押し込められた。

キール達の飛行船は小型とは言え空賊達とエステル達や強奪した商品に乗せるだけの余裕はあるようだった。

「遅かったな、王国軍の警戒は解けたか？」

「……軍はラヴェンヌ村方面には空賊は居ないと判断したようだ、
遊撃士の報告によってな」

「遊撃士だと？ 俺達はさっきノコノコとやって来た遊撃士の連中
を振り返ちにして捕まえたんだぞ」

「その遊撃士達より前に目撃証言を元に村を調べていた遊撃士が居
たらしい」

「くそっ、見られていたのか」

「心配には及ばない、目撃者はほんの子供で誰も取り合わなかった

ようだからな」

キールと謎の男のやり取りは倉庫に押し込められたエステル達の耳にも聞こえて来た。

「報告にした遊撃士って多分アガットさんの事だよね」
「んもう、なんてタイミングが悪いのかしら」

シンジの言葉にエステルが苛立った様子で答えた。
この状況では救助が来る事は絶望的だ。

(……この声は聞き覚えがある気がする)

ヨシユアは1人で難しい顔をして考え込んでいた。

「みんな、アタシのせいで捕まっちゃって……ごめん……」

緊張の糸が切れたのか、ついにアスカが泣き出してしまった。

「アスカのせいじゃないよ、あたし達だけで空賊を捕まえようとしたから」

「うん、戻ってアガットさんやモルガン將軍に応援を求めるべきだったんだ」

エステルとシンジが励ましても、アスカはしばらく泣き続けていた。アスカを抱きしめて慰めたかったが、エステル達は縛られているのでそれはできなかった。

そして、エステル達を乗せて飛び立った飛行船はリベール王国軍の目を逃れて空賊のアジトへと戻ったのだった。

<ボース地方 空賊アジト>

エステル達をさらったキールは空賊達のリーダーであるドルンの部屋に顔を出していた。

「遊撃士を誘拐するなんてやるじゃねえか、遊撃士協会からも身代金をとれるな」

キールから報告を受けたドルンは大きな笑い声を出した。

「それじゃあ、早速身代金の受け取りと人質解放の計画を立てないとね！」

側に居たジョゼットが楽しそうに言う、ドルンは怒鳴り出す。

「人質を解放だと？ 何をふざけた事を言っているんだ、遊撃士なんて邪魔なやつは生かしておく必要なんてないじゃねえか」

「ドルン兄、何を言っているのさ！？」

ドルンの言葉を聞いたジョゼットは青い顔で聞き返した。

「目撃者は全て消す。そうすればまだまだボース地方で稼ぐ事が出来るじゃねえか」

「兄貴、そんな血で濡れたミラなんかでカプア家を復興させても……」

「カプア家の復興？ 何を言っている、金さえあれば何でもできる、金が無くなればまた強盗や誘拐でもして金を稼げばいいじゃないか。それがこれからのカプア家の在り方よ」

「ドルン兄、一体どうしちゃったのさ！」

「うるせえ、さっさと身代金を要求して来い！」

キールとジョゼットは不機嫌になったドルンに部屋を追い出されてしまった。

廊下に出たジョゼットは泣きそうな顔でキールにすがりつく。

「ねえ、ボク達はどうしたらいいの？」

「どうしようもねえ、兄貴の言う通りにするしかないさ」

「キール兄までそんな事言うなんて……」

ジョゼットはキールの体を突き飛ばして廊下を駆け出して行った。
目から涙を流しながら走るジョゼットの脳裏にはロレントで会った
エステル達の顔が浮かんでいた。

口ではエステル達の事を嫌っていたジョゼットだが、エステル達の
事を特別に思っていたのだ。

「エステル、アスカ……ボクが助けてあげないと」

ジョゼットはそうつぶやいて、エステル達が閉じ込められている部
屋へと向かうのだった。

第十九話 決死の脱走、ジョゼットの決意（謎の黒衣の女戦士）

＜ボース地方 空賊アジト＞

空賊のキール達に負けて捕らわれの身となったエステル達はアジトの中の一室に閉じ込められていた。

エステル達が閉じ込められた部屋にはテーブルや椅子、ベッドなどが揃っていて、牢屋と言うよりは客室のようだった。

縛られていた縄も解かれたが、エステル達は気が休まらなかった。

空賊達は今のところ自分達には手を出して来ないがいつ自分達の身が危うくなるかわからない。

ヨシユアとシンジは自分がどうなるかと言う不安よりも、エステルとアスカを守れなかった不甲斐なさに怒り拳を握って打ち震えていた。

アスカは体をガタガタと震わせて、放心状態でブツブツとつぶやいていた。

エステルはそんなアスカの手を握ってゆっくりと話し始める。

「アスカ、諦めちゃダメだよ。ここから抜け出せるチャンスがあるかもしれないんだからさ」

「えっ？」

希望を捨てていないエステルの様子に、アスカは驚きの声を上げた。

「そうだよ、ヨシユア？」

笑顔のエステルに同意を求められたヨシユアもアスカと同様に驚いた表情になった。

ヨシユアは怒りで正常に思考できなかった自分に気がついたのだっ

た。

「……うん、君には本当に驚かされるよ、いつも前向きで」

穏やかな笑顔でヨシユアはそうエステルに返事をした。

明るく前向きなエステルの笑顔にアスカもシンジもすっかり落ち着いていた様子だった。

ヨシユア、アスカ、シンジはエステルが居てくれた事に心から感謝するのだった。

武器も戦術オーブメントも取り上げられて丸腰になったエステル達は武力行使はできない。

エステル達が閉じ込められている奥の部屋の手前の部屋では、空賊達がカードゲームをしながら見張りをしていた。

「でも、じっと待っていても無事に解放される可能性は低いわよね？」

「うん、ここは自力で脱出を目指そう」

アスカの言葉にヨシユアがうなずいた。

「でも、どうやってアジトから脱出するの？」

「僕達が連れ去られた小型飛行船を奪って出る事は出来ないかな」

「バカねシンジ、アタシ達は飛行船を運転した事は無いのよ」

エステルの質問に答えたシンジの発案を聞いてアスカがあきれた顔でため息をついた。

「その心配はいらないよ、僕が飛行船を操縦できるから」
「本当？」

ヨシユアがそう言うのと、エステルは嬉しそうな顔になった。
しかし、アスカはヨシユアに疑いの眼差しを向けながらシンジに耳打ちする。

「いったいヨシユアって何者なのかしら、飛行船を操縦できるなんて怪しすぎるわ」

「アスカ、ヨシユアは僕達の家族なんだ、素性なんかどうでもいいじゃないか」

「でも、ヨシユアは明らかに私達に隠し事をしているわ、それも良くない事を」

「アスカ、いい加減にしなよ」

「分かったわよ」

シンジが怒り始めたのを察してアスカは口を閉じた。

まず最初に考えなければならぬのはこの部屋からの脱出だ。

エステル達の立てた作戦は、仮病を使って見張りの油断を誘い部屋の中におびき寄せるものだった。

「でも、誰が病気になったって事にするかが問題だね」

「それは僕達よりもエステルかアスカの方が心配をさせやすいと思う」

シンジのつぶやきにヨシユアはそう提案した。

「じゃあ、アタシがお腹が痛くなった演技をするわね。エステルだと、元気すぎる感じがするもの」

「うん、アスカは猫を被るのが得意だから適任だと思う」

アスカの言葉に即座に同意したシンジはアスカにチョップを食らった。

「アスカもとっても元気一杯に見えるけど」

ヨシユアは冷汗をかきながらそうつぶやいた。

そして、機会をうかがって作戦を実行しようとしたその時、エステル達にとって作戦の障害となる人物が見張り達の前に姿を現した。それは、エステル達の事をよく知るジョゼットだった。

ジョゼットならば、アスカの仮病を見抜いてしまうかもしれない。エステル達はジョゼットが去るまで作戦の決行を延ばす事にした。

「お嬢、人質のやつらに何か用でもあるんですかい？」

「ちよつと、話があるんだよ」

「ふーん、でも妙な真似はしないで下さいよ」

「お嬢はあいつらに情が移っているんじゃないかって、親分から言われてますからね」

「そ、そんなはずないだろう！」

見張りの空賊に少し不信感を持たれてはいたが、ジョゼットはアスカ達の部屋に入ってきた。

ジョゼットは警戒した顔で自分を見つめるエステル達と向き合う。

「思ったよりも元気そうじゃないか」

「いったい、何の用よ」

ジョゼットの軽口のアスカはそう言い返した。

「あんた達、捕まっているのに良くそんなのんきにされてられるね。取引が終わったら用済みだって殺されるかもしれないんだよ？」

「覚悟はできているわよ」

脱走している事を悟らせないように、アスカは気丈な態度で言い返した。

すると、ジョゼットの方が慌てた表情になる。

「そんな、諦めないでよ。まだあんた達が助かる可能性は残っているんだからさ」

そして、ジョゼットは手前の部屋にいる見張りを気にしながら、エステル達に近寄って小さい声でささやく。

「身代金を受け取ったら、ドルン兄はあんた達を始末するつもりでいる。そうなる前にボクが助けてあげたかったんだけど……見張りのみんなに疑われているボクじゃ無理みたいだ……ごめんよ、ごめんよ……」

ジョゼットは涙を流して謝り始めた。

これもジョゼットの演技なのか。

エステル達がジョゼットの真意を測りかねて戸惑っていると、見張りの空賊達の悲鳴が聞こえて来た。

「何があったの!？」

ただ事で無い雰囲気、エステル達が部屋から飛び出すと、黒い服に黒いカブトを見に付けた傭兵が見張りの空賊達の急所を蹴りあげて気絶させていた。

その傭兵は空賊の一員であるジョゼットの姿を見つけると、攻撃を加えようと飛びかかって来た!

しかし、エステルが体を張ってジョゼットを守ろうとすると、その黒い服の傭兵はエステルに攻撃が命中しそうになるギリギリのタイミングで回し蹴りを止めた。

「エステル、どうしてボクなんかをかばったりしたんだよ!？」

「だって、ジョゼットはあたし達を助けようとしてくれたんでしょう？」

「う、うん……」

エステルの言葉に口ごもっているジョゼットに、その黒い服の傭兵は鍵のようなものを渡した。

「これは、『山猫号』の起動キー!？」

「もしかして、僕達の脱走の手助けをしてくれるのですか？」

黒い服の傭兵はヨシユアの問い掛けに無言でうなずき、立ち去ろうとした。

「待って、どうしてアタシ達を助けてくれるの？」

立ち去る黒い服の傭兵の背中をアスカが呼び止めたが、黒い服の傭兵は振り返らずにそのまま姿を消した。

廊下に出ると、黒い服の傭兵は階段を降りて行った。

エステル達は後を追いかけたかったが、ジョゼットの案内する脱出経路の登り階段とは違う方向だったのでそれは出来なかった。

エステル達が閉じ込められた部屋はエステル達を連れ去った小型飛行船『山猫号』の泊められている場所からそれほど遠い場所に無かったのも幸運だった。

見回りや飛行船を見張っていたと思われる空賊達は縄で縛られ、布で口を塞がれていた。

たぶん、黒い服の傭兵の仕業だろう。

「ごめん、ボクはエステル達と行く事にしたから、縄を解くわけに

はいかないんだ」

ジョゼットの親しい間柄だったのか、ジョゼットは悲しそうな顔で拘束された空賊の1人に謝った。

「良いのジョゼット、アタシ達と一緒に行く事になって」

「ここまで大きな騒ぎになったら、ドルン兄もボクを許しちゃうれないよ」

「そんな、君達は兄弟じゃないか」

「無駄話をしている時間は無いよ、早く乗って！」

アスカとシンジの話を打ち切ってジョゼットはエステル達に早く飛行船に乗るように急かした。

そして、エステル達を乗せた飛行船は空賊のアジトから飛び立って行った。

エステル達が脱走した事で、空賊のアジトは蜂の巣を突いたような大騒ぎになった。

そんな様子を冷静に眺める黒い服の傭兵が2人居た。

2人ともカブトで顔が隠されていてその表情は読みとれない。

「遊撃士達が脱走したのはお前の手引きだな」

「やっぱり、バレちゃった？」

男性の傭兵の質問に女性の傭兵はおどけたように答えた。

「計画には遊撃士を誘拐するなんて事は無かったじゃない」

「だが、『マスター』が知れば計画を変更したかもしれないぞ？」

「『マスター』に私の失態と告げ口する気？」

「いや、俺にはそんな義務は無い」

「あなたの方こそ、可愛い”弟”さんが殺されるかもしれないって

焦ったんじゃない？」

「お前は不思議なやつだな。どこまで俺達の事を知っている」

「さあね、ちょっと調子に乗って話し過ぎたみたいね」

2人の黒い服の傭兵達はそれきり言葉を交わさなくなった。

<小型飛行船《山猫号》>

空賊アジトから飛行船で脱出したエステル達だったが、直接モルガン將軍の居るハーケン門に空を飛びながら向かうのは危険すぎた。

そこで、遠回りになるが警戒の薄いラヴェンヌ村方面へ着陸し、そこから歩いてボース市の遊撃士協会へと行く事にした。

飛行船の中では操縦するのはヨシユア、観測をするのはジョゼットが担当した。

「ジョゼット、僕達を助ける事でお兄さん達と敵対する事になってしまうけど、本当に良いの？」

「うん、もうボクはドルン兄について行けないよ」

シンジの質問に対して、ジョゼットはそう答えた。

「ボク達は空賊になってからも、決して人を傷つけるような盗みはして来なかった。だけど、あの黒い服のやつらが着た頃からドルン兄は変わってしまったんだ」

ジョゼットは以前自分達は悪徳商人や貴族からしか盗んで居なかったが、最近になってリーダーのドルンの命令で街の人々の財産も無差別に奪うようになったのだと話した。

「だから、ロレントで宝石を盗む計画が立てられた時はボクが進んで立候補した。たくさんお金が手に入れば、盗み続ける必要もなくなるんじゃないかって。でも、ドルン兄は止めさせてくれなかった。そして今度は誘拐したあんた達の命を奪おうとするなんて……」

兄弟と決別すると決めたジョゼットの胸の痛みは話を聞いていたエステル達にも伝わって来た。

「街に戻ったらボクは捕まって牢屋に入れられちゃうのかな、ハハッ、盗みをしてたんだから当然だよね」

自分を責めて乾いた笑いを浮かべるジョゼットにエステルは首を横に振って否定する。

「そんな事させない、今度はあたし達がジョゼットを助ける番よ」
「そうよ、ジョゼットを軍に引き渡したりはしないわ」

エステルの言葉にアスカも同調した。

「でも、ボクの事がばれたらあんた達だってただじゃ済まなくなるじゃないか！」

「大丈夫、きっと遊撃士協会みんなは解ってくれるよ」

シンジはジョゼットを安心させるように優しく語りかけるのだった。そしてエステル達の乗った飛行船はリベール空軍に発見される事無く、ラヴェンヌ村の近くへと降り立った。

ラヴェンヌ村へと立ち寄ったエステル達は、そこで遊撃士のアガツトと再会した。

<ボース地方 ラヴェンヌ村>

エステル達がラヴェンヌ村の廃坑へ行っただけのまま消息不明となった事を聞いて、アガットは慌ててラヴェンヌ村での再調査を行っていた。アガットはエステル達の無事を喜んだ後、エステル達に頭を下げて謝った。

自分の調査が甘かったせいで、エステル達を危険にさらしてしまった事に責任を感じているのだ。

「俺があの時、ルウイを信じて手を抜かずに調べておけばよかったんだ」

「いえ、僕達が勝手に空賊達を捕まえようとしたのが悪かったんです」

「俺が……」

「僕達が……」

アガットとシンジが我先にと謝り合っているのをしばらく見ていたアスカは、あきれた顔でためいきをつく。

「さっきから謝ってばかりで話が前に進まないじゃない」

「お互いに悪いって解ったんだから、謝るのはもう十分だよ」

「そうだな」

エステルに明るい調子で言われて、アガットとシンジは穏やかな表情で見つめ合った。

出会った頃とは違う一面をのぞかせたアガットに、エステル達は驚いていた。

潔く謝る態度を見せたアガットをエステル達は信頼し、ジョゼット

の事も隠さずに報告した。

怪我の功名だったが空賊のアジトの位置が解ったアガットは感心したようにつぶやく。

「なるほど、霧降り峡谷の奥に隠された遺跡か。軍が搜索を掛けても見つからないわけだ」

「遊撃士協会で犯人を捕まえれば、モルガン將軍の鼻を明かす事ができるわよね！」

「アスカ、軍の協力は必要だよ、自分達だけで捕まえようとしてひどい目にあった事を忘れたの？」

「そうだ、シンジの言う通りだ。それに空賊共を取り逃がしたらやっかいだ」

話を黙って聞いていたジョゼットが不安を口にする。

「でも、ボクが裏切った事を知られたらドルン兄達はアジトを移動させるかもしれないよ」

「うん、その可能性はあるね」

ジョゼットの言葉にヨシユアはうなずいた。

「ジョゼット、他のアジトに心当たりはあるの？」

「分からない、あのアジトに使っていた遺跡だって、黒い服のやつらがドルン兄に教えたものなんだ」

アスカの質問にジョゼットは困った顔で首を横に振った。

「黒い服のやつらって、お前達の脱走を手助けしたって言うやつか」
「アタシ達の前では一言もしゃべった事が無いからどんな奴らかわからないけど、味方なのか敵なのかわからないわ」

「あたし達の事を助けようとしたんだから、きつと味方だよ」

「空賊達の命を奪わなかったから、無駄な殺生を好まない人物だとは思うけど……」

黒い服の傭兵の正体については結局推測の域を出なかった。

空賊達がアジトを移動させないうちに捕まえる必要があると判断したエステル達は、休まずにボースの街の遊撃士協会へ戻る事にした。ジョゼットの事を目撃した事のある兵士などにばれないようにするため、念を入れてジョゼットの服装を変える事にした。

村を回ってアガットが手に入れて来た変装用の服は、よりによってジェニス王立学園の制服だった。

「この制服を着ていれば、空賊の仲間だとは思われないだろう」

「確かに、そうかもしれないけど……」

「どうした？」

微妙な反応を示したエステル達にアガットは首をかしげた。

制服姿のジョゼットに騙された過去をわざわざ話すわけにもいかず、エステル達はアガットの作戦を受け入れるのだった。

「お待たせしました、それでは参りましょうか、エステルさん、アスカさん」

制服に着替えたジョゼットはあの時と同じ猫かぶりの演技をしていた。

<ボースの街 遊撃士協会>

ボース支部の受付に居たルグラン老人は、アガットと共に帰って来たエステル達の姿を見ると、驚きと嬉しさが入り混じった声を上げる。

「お前さん達、無事じゃったか！」

「ルグランさん、心配をおかけしてすみません」

シンジが頭を下げると、ルグラン老人は首を横に振る。

「そんなに謝る必要は無い、こうして帰って来た事だけで十分じゃ」「それが、無事だったとは言えないのよね」

アスカはため息をつきながら、ルグラン老人に空賊に捕まっていた事などを話した。

ルグラン老人はアスカが説明を終えるまでずっと口を挟まずに聞いていた。

アスカの話を最後まで聞き終えたルグラン老人は深々とため息をつく。

「なるほど、そんな事があったのじゃな」

「俺達もまだまだ未熟だと思ひ知らされたぜ」

「ふおっ、ふおっ、アガットにしては珍しくしおらしい事を言うんじゃないな。その空賊の娘を助ける気持ちになったのも反省の気持ちの表れか？」

「どういふことですか？」

「アガットはな、街で悪さをして大暴れをしていた時期があったのじゃ。そこをカシウスのやつにこらしめられて遊撃士にさせられたんじゃない」

「へえ、そうだったんだ」

エステルとアスカはニヤついた顔でアガットの事を見つめた。

「じいさん、その話は今は関係無いだろう」

アガットは少しふてくされたような顔になってルグラン老人の話をさえぎった。

「ボクはどうすればいいの？」

「そうじゃな、遊撃士協会の協力員と言う事にしておけばよからう」
「協力員？」

「人々を守るのが遊撃士の役目じゃが、助けられる事もあるんじゃ。もちろん遊撃士協会から報酬も出る」

「そういえば、僕達もロレントの鉱山で助けられた事があったよね」

ルグラン老人の説明を聞いたシンジがしみじみとそうつぶやいた。

「へへっ、エステル達を助けてあげられる上に報酬をもらえるんだ」
「報酬はついでなんだね」

エステルが嬉しそうにジョゼットに話し掛けると、ジョゼットは顔を赤くする。

「べ、別にあんた達のためじゃないんだからね！」

「もう遅いわよ」

アスカはあきれ顔でジョゼットにツツコミを入れた。

「それじゃあ、早速空賊のアジトに乗り込みましょう！」

「いや、ここはモルガン將軍の軍に任せるんじゃ」

「えーっ？」

ルグラン老人に止められたアスカは不満そうな声を上げた。

「お前さん達自身の手で空賊を捕まえたい気持ちはわかる、しかし包囲作戦は遊撃士より軍の方が優れておる」

「でも、そうしたら手柄が軍の者になってしまいうじゃない」

「アスカ、そんなに手柄にこだわってどうするのさ」

「だって、モルガン將軍に見下され続けるのって、しゃくに障るし」

シンジがアスカの発言をいさめると、アスカは不満そうな顔で言い返した。

「軍でも見つけられなかった隠されたアジトの場所を突き止めたんじゃない、きつとモルガン將軍も遊撃士の功績を認めてくれるじやろうて」

「ルグランさん、ジョゼットの事は……」

「ああ、その所はワシが上手くごまかしておく」

ルグラン老人はエステル達を安心させるように微笑んだ。

空賊達の件をモルガン將軍に任せる事にしたエステル達は疲れた心と身体を休ませながら、報告を待った。

しかし、空賊逮捕の報は聞く事は出来なかった。

空賊達はアジトから逃げ出してしまっていたのだ。

そして、エステル達の元に別の知らせも飛び込んで来た。

空賊をなかなか捕らえる事の出来ないモルガン將軍に苛立った王都の軍が、新設された情報部と言うエリート部隊をボース支部に派遣する事を決定したと言うのだ……。

第二十話 王国軍のエース、リシャール大佐　　そして、水色の髪の少女

＜ボースの街　南区画　市街地＞

捕まって脱走したエステル達の情報により空賊のアジトの場所が判明した。

しかし、モルガン將軍の指揮する国境警備隊が駆けつけた時には、アジトはもぬけの殻だった。

しびれを切らした王国軍の上層部は『情報部』の派遣を決定する。その通知がなされた日の深夜、遊撃士協会とモルガン將軍をバカにするように事件が起きる。

今度は南区画にある商人達の家が強盗に襲われたのだ！

以前の店舗とは違い、人が住んでいる民家が襲われたので、ボースの市民の恐怖はかなり高まった。

エステル達も被害にあった南区画の市街地へ聞き込みに向かった。

北区画からの入口で南区画の市街地を見下ろすと、街には煙が上がっている。

どうやら放火されてしまった家もある様子だった。

怖い思いをしたのか、怯える人々の姿も見える。

「こんなひどい事までするなんて……兄貴達はいったいどうしちゃったんだよ」

ジョゼットは兄達が行った蛮行にショックを受けていた。

「これ以上罪を重ねさせないように、アタシ達が止めないと」

アスカはジョゼットを励ますように、手を強く握りしめた。

エステル達は南区画へ入ろうとしたが、背が高く体格の良い巨漢の

軍の兵士に行く手を塞がれる。

「こら、民間人が入って来るんじゃない！」

「あたし達は遊撃士よ、そこを通して」

「僕達、被害にあった人達から直接話を聞きたいんです」

エステルとヨシユアが頼むと、巨漢の兵士は首を横に振る。

「足を引っ張る遊撃士の手など借りられるか！」

「なんですって!？」

アスカが怒った顔をして聞き返した。

「お前達が無様に捕まったりするから、空賊はアジトを移してしまつたんじゃないか」

「それは、そうかもしれませんが……」

巨漢の兵士に言われて、シンジは落ち込んでうつむいた。

「でも、アタシ達が捕まるまで、アンタ達もアジトの手掛かりすらつかめていなかったじゃない！」

「なんだと、俺達を侮辱する気か！」

怒った巨漢の兵士はアスカの腕をつかんでひねりあげた。

「痛い、離してよ！」

「うるせえ、生意気な小娘め！」

「やめろっ！」

シンジは思いっきり頭突きをしてその巨漢の兵士を突き飛ばした。

体格差があったのだが、シンジに不意をつかれた巨漢の兵士は驚いてアスカの手を離して尻餅をついた。

「アスカ、怪我は無い？」

シンジはアスカを気遣うように声を掛けた。

「うん、アタシはただ腕をつかみ上げられただけだけど……」

「シンジ、アスカ、後ろ！」

「「えっ!？」」

エステルは声に後ろを振り返ろうとする前に、アスカとシンジは立ち上がった巨漢の兵士に突き飛ばされた！

シンジは微妙に体勢を変えてアスカを守る様に下敷きになるように倒れ込んだ。

「ちょっと、何するのよ！」

エステルは怒って巨漢の兵士に武器を突き付けた。

「ふん、未熟な遊撃士のガキが国境警備隊の俺達に勝てると思っているのか？」

巨漢の兵士もエステルに向かって槍を構えた。

「エステル、マズイよ武器を収めて」

「ここまでやられて、黙っていられるもんですか！」

ヨシユアがなだめても、エステルに灯った怒りの炎は鎮まらない。アスカより怒りの沸点が高いエステルは、頑固で冷めにくい所があ

るのだ。

お互いに武器を構えて向かいあったエステルと巨漢の兵士は一触即発の状態になった。

「お前達、そこで何をしている！」

張り詰めた空気を切り裂いたのは男性の声だった。

声の主の方を向くと、そこに立っていたのは精悍な顔立ちの若い将校だった。

「……誰？」

エステルはぼう然とした顔でそう尋ねた。

すると、若い将校の隣に居た赤い髪の女性士官が不機嫌な顔でエステルをにらみつける。

「貴方は新聞などをご覧になっていませんか？　王国軍のエースと呼ばれるリシャール大佐を知らないだなんて！」

「別に構わないさカノーネ君、ボース地方に顔を出すことはあまりないからね」

「大佐がそうおっしゃるのなら……」

リシャール大佐がカノーネ士官に穏やかに話すと、カノーネ士官は黙りこんだ。

そんなカノーネ士官の姿を見てアスカはシンジにそっと耳打ちする。

「あのカノーネって女、分かり易い性格よね」

アスカもね、と言いつうになったシンジは言葉を飲みこんでアスカに同意するようにうなずいた。

リシャル大佐はエステル達の胸に付けられた遊撃士の紋章に気が付く。

「君達は遊撃士だな、どうして街中で武器を構えていたんだ？」

リシャル大佐が厳しい目つきになってエステルをみつめた。

「そ、それは……」

気まずそうに言い淀んだエステルに対し、巨漢の兵士は悪びれる事無く、エステル達を指差してリシャル大佐に言い放つ。

「捜査の妨害をされたので注意をした所、そいつらが手を出して来たんですよ」

「手を出して来たのはそっちが先じゃない！」

「そうよ、痛かったんだから」

エステルとアスカは顔をふくれさせながらそう訴え、また巨漢の兵士との間で言い争いが始まった。

「止めるんだ！」

リシャル大佐が一喝すると、エステル達は動きを止めた。

「我々王国軍は人々の模範を示さなければならないのだぞ、それをふまえた行動をしたまえ」

リシャルが毅然とした態度でそう言うと、巨漢の兵士は舌打ちをしてふてくされた顔で黙り込んだ。

「君達に対して失礼な事をしてしまったようだね」

「ううん、あたし達もムキになってしまったから悪かったわ」

穏やかに謝罪の言葉を述べるリシャールに、エステルもすっかり毒気を抜かれて謝った。

「あの、僕達も昨夜の強盗事件の被害にあった方々に話を聞きたいのですけど……」

リシャール大佐が話の解りそうな人物だと判断したヨシユアがささず声を掛けた。

「ふん、誘拐されるような未熟なガキが捜査なんてできるわけがねえ」

「黙りたまえ！」

アスカが何か言い返そうとする前に、リシャール大佐が大声で巨漢の兵士を制止した。

このままエステル達と巨漢の兵士を側に置いておいては落ち着いて話もできないと判断したリシャール大佐は、巨漢の兵士に立ち去るように命じた。

「へっ、王都でちやほやされているからって、図に乗りやがって」

巨漢の兵士は捨て台詞を吐いてリシャール大佐をにらみつけ、ゆっくりと立ち去って行った。

その姿をエステル達は不快そうな顔でじっと見ていた。

そして巨漢の兵士の大きな背中が見えなくなった所でリシャールはエステル達に声を掛ける。

「重ね重ね失礼をしてしまって、すまない」

「いいえ、あたし達も王国の兵士さんがみんな態度のひどい人だとは思ってないから」

「そう言ってくれると助かるよ」

エステルの言葉を聞いて、リシャール大佐は爽やかな笑みを見せた。

「聞き込みの件だが、今はモルガン將軍の部隊が行っているから、それが終わってからにしてくれないか。モルガン將軍の部隊が引き揚げた後は自由に捜査をしてもらって構わないから」

「そうですか、分かりました。僕達は別の調査をしようと思います」

リシャール大佐の言葉を聞いて、ヨシユアはそう答えた。

「すまないね、モルガン將軍は縄張り意識が強くて困っているんだ」
「本当、父さんと親しくて、家に孫のリアンヌちゃんと遊びに来るぐらいだったのに、どうしてあんなにあたしが遊撃士だって言うところなのかな」

リシャール大佐が愚痴をこぼすと、エステルは考え込むような表情をしてそうつぶやいた。

「君はもしかして、カシウス殿の……？」

「ええ、彼女はエステル・ブライト、カシウスさんの実の娘です」

驚いた顔でエステルを見つめたりリシャール大佐にヨシユアがそう説明をした。

「アタシ達は、カシウスパパに引き取ってもらったんだけどね」

アスカがそう付け加えた。

「そうか、君達は……」

「リシャル様、そろそろお時間が」

リシャル大佐はさらに話をしたい様子だったが、カノーネ士官に止められた。

「おっと、では私達はこれで失礼するよ。私は、軍の縄張り意識を無くして遊撃士ともっと協力して行きたいと思っているんだ。国の平和を守りたいと言う気持ちは同じものだろう？」

「そうですね」

ヨシユア達はリシャル大佐の言葉に強くうなずいた。

リシャル大佐はその返事に満足して立ち去ろうとしたが、遊撃士の紋章を付けていないジョゼットに気がついて尋ねる。

「おや、君は？」

「えっと、ボク、いや、私は……」

思いの外鋭い眼光で見つめられたジョゼットはうろたえてしまった。

「彼女は民間の協力員なんです」

ジョゼットの正体に感づかれないように冷や冷やしながら、シンジがそうフォローした。

「そうか、遊撃士協会は先駆けて垣根を超えた協力体制を構築しているのだな」

リシャル大佐は納得したようにそうつぶやいた。

追及を逃れられたエステル達はほっとして息を吐き出した。

軽くお辞儀をして去って行くリシャル大佐とつき従うようについて行くカノーネ士官の姿を、エステル達は見送った。

「なんか、とってもカッコイイ人だったじゃない」

アスカがそうつぶやくと、シンジは顔を歪めた。

そんなシンジの表情にアスカは気が付く。

「シンジったら、リシャル大佐にコンプレックスを抱いたの？

本当に分かりやすいわね」

「僕には到底無理だよ」

「アンタがリシャル大佐みたいになる必要はないのよ、だって……」

アスカはそこで言葉を止めた。

「何で？」

「自分で考えなさいよ！」

シンジが問い詰めるとアスカは顔を赤くしてそう言い返した。

そして、エステル達はこれ以上ここに居て兵士達に絡まれないように、大人しく遊撃士協会に引き返した。

<ボースの街 遊撃士協会>

国境警備隊の兵士達の事情聴取が終わるまで、エステル達は遊撃士

協会の中で難を逃れる事にした。

エステル達はルグラン老人に南区画で起こった出来事について報告した。

「そうか、お前さん達はリシャル大佐にあったのじゃな」

「ねえ、リシャル大佐ってどんな人なの？　なんか凄そうな感じだったけど」

「ほらエステル、ここに載ってるよ」

ヨシユアは棚からリベール通信を取り出してエステルに見せた。

そこには特集インタビュー記事としてリシャル大佐は情報部を立ち上げる構想などを記者に話していた。

「エステルってば、導力ラジオ欄しか読まないんだから」

「だって、字ばかり読んでいると眠くなっちゃうんだもん」

アスカに追及されてエステルはごまかすように笑いを浮かべた。

これにはジョゼットもあきれ返っているようだった。

「どうして、リシャル大佐達は管轄ではないボース地方までやって来たんでしょうか？」

ヨシユアの質問にルグラン老人は自分の考えを話し出す。

「事件を調査しているモルガン將軍の国境警備隊は古くから軍の中でも精鋭部隊として一目置かれておる。そんなモルガン將軍の国境警備隊が解決できない事件を解決すれば情報部の株は急上昇するじやろうな」

「そして、王国軍のエースの座を取れるってわけか」

アスカはルグラン老人の言葉に納得したようにうなずいた。

「アスカ、まさかこの事件を自分達の手で解決してエース遊撃士とか名乗ろうとしてないよね」

心配になったのかシンジがアスカに声を掛けると、アスカは少し不機嫌な顔になって首を横に振る。

「バカねシンジ、もうアタシはそんな事にこだわらないわよ。もしエースと呼ばれる存在になったとしても、それはアタシ達4人が力を合わせた結果よ」

「ごめん、余計な事を聞いちゃって」

安心したシンジは穏やかに微笑んだ。

ルグラン老人は渋い表情をしながら再び話し始める。

「しかし、情報部の動きはおかしい所があるんじゃない」

「どこがですか？」

ルグラン老人の言葉を聞いてヨシユアが質問した。

「国境警備隊と同時に被害にあった南地区の住民に事情聴取を行うと思ったんじゃないが、その気配が無い」

「同じ軍の仲間だから情報が貰えるんじゃないの？」

「でも、国境警備隊と情報部がライバル関係にあるなら、素直に情報が貰えない事もあるんじゃない？」

「そうじゃな、しかも事件が起こっていない湖の辺りを調べているようじゃ」

エステルの疑問に答えたアスカの言葉に、ルグラン老人はうなずい

た。

「何か深い考えがあるのかな」

「あのリシャール大佐の事だから、何かあると思うけど、見当もつかないわね」

シンジに尋ねられて、アスカは首を振った。

＜ボースの街　クワノ老人の家＞

しばらく遊撃士協会で待機した後、再度南地区に行き聞き込みをしたエステル達は釣りが趣味だと言うクワノ老人から妖怪の話を聞いた。

5階建ての琥珀の塔の屋上から地面に着陸した人影を見たとか、湖の中から半魚人が出現したなどと言う荒唐無稽こうとうむけいで信じがたい話だった。

老人の話を聞いた兵士達も鼻で笑って信じようとしなかったらしい。

「そんなの本当に居るのかしら？」

「本当に見たんじゃ、ワシはボケとらん、信じてくれ！」

怪訝そうにつぶやくアスカに、クワノ老人は必死に訴えた。

「でも、はっきりと見たわけではありませんよね」

「そりゃあ、遠かったからの」

シンジの質問にクワノ老人はそう答えた。

クワノ老人の家を出たエステル達はこれからの方針について話し合

う。

「琥珀の塔と川蟬亭の辺りを調べてみないかな？」

「何を言い出すのヨシユア、アタシ達は妖怪を探している暇なんて無いのよ！」

ヨシユアの提案にアスカは怒って反論した。

「僕も半魚人が居るとは信じられないけど、何か他の人影を見間違えたのかもしれない。例えば空賊達とか」

「なるほど」

ヨシユアの言葉に納得してシンジがうなずいた。

「でも、塔の屋上から飛び降りたり、湖の中から出て来るって、普通の人が出来る事じゃないよね？」

「さすがにそれは完全な見間違えだと思うよ」

エステルにヨシユアはそう答えた。

そしてエステル達は遊撃士協会でルグラン老人に報告した後、ボースの街の南に位置するヴァレリア湖に面する川蟬亭へ向かう事にした。

ルグラン老人は何も事件が起きないのならば、川蟬亭に数日泊まっても構わないと話す。

「でも、ボク達は休んでいる場合じゃないと思うんだけどなあ」

「休息も兼ねた張り込みの仕事と考えてみたらどうじゃ？ 空賊の一味が姿を現すかもしれんぞ」

ジョゼットのつぶやきに、ルグラン老人はそう言って説得した。

ボースの街を出て街道を歩く道すがらシンジの側でアスカがポツリとつぶやく。

「半魚人か……アタシ達がエヴァに乗ってこの世界に來た時の事を思い出すわね」

「そうだね、でもエヴァはあのままにして大丈夫なのかな？」

「平気よ、発見した軍の人達はLCLの事なんか全然分かっていないんだからさ。それにエヴァを動かせるのはアタシ達だけじゃない」

「うん、それに内部電源はとくに切れているから動かせないよね」
2年前、シンジとアスカの乗るエヴァンゲリオン初号機と弐号機がヴァレリア湖に不時着した時、この付近は搜索のため閉鎖されていた。

しかし、不気味な尾ひれのついた半魚人騒ぎもあって数カ月と早めに搜索が打ち切られていた。

エステル達は湖畔にある川蝉亭に向かう前に、脇道にある琥珀の塔も搜索する事にした。

だが屋上まで登っても誰かが潜伏していた痕跡は発見できなかった。

「ここなら街から離れているし、空賊達が隠れている可能性も考えられたんだけどね」

「ハズレか」

ヨシユアとアスカは残念そうにため息をついた。

シンジは首をひねりながらつぶやく。

「じゃあ、あのおじいさんの完全な勘違いだったのかな」

「パラシュートを使えば飛び降りる事は出来るよ」

ジョゼットは空賊は飛行艇から飛び降りて建物の屋上などに侵入す

ることがあると説明した。

「へえ、じゃあジョゼットも高い所から飛び降りる事が出来るんだ」
「ふふん、ボクならこのくらいの高さ、ちよろいもんさ！」

「じゃあ、やって見せてよ」

エステルはそう言って、ジョゼットの体をポンと押した。
よろけたジョゼットは悲鳴をあげながら屋上から落ちそうになった
が、何とかバランスをうまくとって落下は免れた。

「何するんだよ、馬鹿エステル！」

「だって、飛び降りられるって言うから」

「あのな、ボクはネコじゃないんだぞ！ パラシュート無しで降り
られるもんか！」

ジョゼットは額に冷汗を思いっきり浮かべて荒々しく息をしながら
そう言った。

「笑顔でとんでもない事するわね」

「うん、エステルが人を死なせなくて本当によかったよ」

アスカとシンジも青い顔でエステルを見つめた。

「リシャール大佐達は、ここを調べたのかしらね」

「さあ、あのおじいさんの話を軍の兵士の人は取り合わなかったみ
たいだから、報告もされてないんじゃないかな」

アスカのつぶやきにシンジはそう答えた。

ルグラン老人の話だと、情報部の兵士達は湖周辺へと向かったらし
いが、ボースの街やここまでの街道でも会わなかった。

おかしいと思いながらも、エステル達は琥珀の塔を後にして、街道に戻って川蟬亭へと向かった。

物陰に隠れていた水色の髪の少女が立ち去るエステル達の後ろ姿を見つめていた事にエステル達は気が付かなかった……。

第二十一話 家族ということ　くさよなら、また会う日までく

くボース地方　川蟬亭　ロビーく

エステル達が川蟬亭に到着した頃には、すっかりと日が暮れていた。湖畔に建った川蟬亭を見たエステルは感心した様子でため息をもらす。

「へえ、良い感じの宿屋じゃない。こんな所で一日のんびりと過ごしてみたいね」

「アタシも前にパパと泊まった時はゆっくりできなかったわね」

アスカもそう言って少し寂しそうにため息をついた。

「空賊の仲間が現われなかったら、何泊かしても良いってルグランさんが言ってたよね」

「じゃあ、あたしは釣りしたいな！」

シンジの言葉に目を輝かせてエステルは笑顔になった。

「エステル、僕達は張り込みをしに来ているんだよ」

「釣りに夢中になって、空賊の仲間がすぐ側を通っても気付かないって事がありそうだね」

「あたしだって分かってるわよ」

渋い顔をしたヨシユアと、ジョゼットに言われてエステルは口をとがらせた。

川蟬亭の中に足を踏み入れると、カウンターから女将に声を掛けられる。

女将がカシウスと一緒に泊まったシンジとアスカの事を覚えていると告げると、シンジとアスカは驚いた。

そして今度はエステルがカシウスの実の娘と名乗ると、女将は嬉しそうに主人である兄に声を掛ける。

話によると川蟬亭は何回もカシウスによって助けられたらしい。

エヴァ初号機と弐号機がヴァレリア湖に落ちた後、軍による調査でしばらくの間湖が立ち入り禁止となり、川蟬亭の営業も危うくなった。

しかし、カシウスはシンジとアスカを軍の目から反らすために利用した半魚人の話をさらに宣伝に使ったのだ。

シンジ達が逃げのびた後も軍はエヴァの調査を続けていた。

そこで軍は弐号機に残された紅茶色の髪、つまりアスカの毛髪を見つけてしまったのだ。

半魚人の正体は長い髪をした女性と言うウワサが広まり、もしかして同じ色の髪を持つ女性達、ひいてはアスカに追及の手が伸びるかもしれないと心配したカシウス。

カシウスは自分の知名度を利用してヴァレリア湖には美しい人魚が住んでいると、新たなウワサを広めた。

すると、魚料理や湖で釣りができなくても良いから川蟬亭に泊まりたいと言う観光客が途切れる事は無かった。

不気味な半魚人と美しい人魚のウワサは格好の客寄せになったのだった。

しかも、度々半魚人などの目撃談もあってにぎわっているらしい。そんな経緯もあって、カシウスの家族であるエステル達は大歓迎を受けた。

「あんまり目立ちたくないんだけどな、遊撃士がここで見張っているとはばれてしまうと来ないだろうし……」

「だから、遊びに来たって演技をすればいいんだよ！」

「エステルは本気で遊んじゃうでしょ」

困った顔でつぶやいたヨシュアにエステルが笑顔で話し掛けると、
アスカはあきれた顔でため息をつきながらツツコミを入れた。

「でも、少しぐらいなら構わないんじゃないかな、ここで釣りが出
来ないのはかわいそうだし」

「シンジってば優しい！」

「うぷっ！」

突然エステルに抱きかかえられて、シンジは目を白黒させた。

「ちよつとエステル、シンジに何をするのよ！」

アスカは思いつきりシンジの髪を引っ張って、シンジの身体をエス
テルから引き離そうとした。

「痛い、髪の毛が抜けちゃうよ！」

「アスカ、それはやりすぎだよ」

ヨシュアが慌ててアスカを止めようとした。

「にぎやかだね、あんた達は……」

ジョゼットは騒ぐエステル達を見てため息をついた。

そしてエステル達は泊まろうと女将に話を聞くと、驚いた。

なんと遊撃士4人が泊まると遊撃士協会のルグラン老人から予約が
入っていたらしい。

「ずいぶんと手回しがいいのね」

「でも、今の僕達はジョゼットを入れて5人だよ？」

「そう言えばそうね」

感心したようにつぶやいたアスカだが、シンジの言葉を聞いて首をかしげた。

「きっと、アジトを見つけた時にもう事件は解決したと思ったんだろうね」

「そっか……」

ヨシユアの推測を聞いて、エステルは悲しそうにつぶやいた。

幸い、最近は半魚人や人魚などのブームも落ち着いたとの事で、ジヨゼットの部屋もとる事が出来た。

他に泊まっている客は釣り人だけだと言う。

「じゃあ、とりあえず夕食を食べた後、その釣り人のお客さんに何か見えないか話を聞いてみようか」

「そうしようか」

ヨシユアの提案にシンジ達はうなずいた。

「そうと決まったら、ご飯ご飯！」

「その前に荷物を部屋に置いてこないと」

「あたし、お腹が空き過ぎてペコペコ」

そう言ってエステルはロビーの椅子に座りこんだ。

「仕方無いな」

ヨシユアはそう言ってエステルの荷物を手に取った。それを見たシンジもアスカの荷物を運ぼうとする。

「ありがとう、シンジ」

アスカは笑顔でシンジにお礼を言う。

「ヨシユアもシンジも、甘いんだから」

ジョゼットは少しうらやましそうにつぶやいた。

エステル達は川蟬亭の主人の青年が作った鮮魚料理をおいしく食べた。

主人は湖への立ち入り禁止規制が解除されてエステル達に新鮮な魚の料理をご馳走できて嬉しいと話した。

軍による規制が解除された理由は、湖に不時着した巨大な物体を移動させる事が出来たからだと主人が話すと、シンジとアスカは驚いて持っていた茶碗を落とした。

「どうしたの2人とも、そんなに驚いちゃって？」

「あっ、えっと別に何でもないわ……」

「そ、そうだよ……」

エヴァの事を話すわけにもいかないアスカとシンジはエステルにこまかし笑いを返した。

アスカはシンジにそっと耳打ちをする。

「どういう事？ エヴァはアタシ達にしか動かせないはずなのに」

「僕に聞かれても解らないよ」

自分達以外にエヴァを動かすのは不可能だと思っていたアスカとシンジのショックは大きかった。

「2人とも顔色が悪いけど、お腹でも痛くなったの？」

エステルが大声でそう言うと、調理をした川蟬亭の主人まで慌ててアスカとシンジの方を見た。

「そんな事無いわよ、ねえシンジ？」

「うん、料理はとってもおいしいよ」

アスカとシンジは元気に勢い良く料理を口に運んだ。

エステル達が食事が続けていると、宿泊客の中年の男性2人組が釣りから戻って来た。

話を聞くためにもエステルがさりげなく笑顔で声を掛けると、男性達も笑顔であいさつを返した。

釣りから戻って来た中年の男性達は、街で話を聞いたクワノ老人の釣り仲間だと言う。

エステル達はさっそく半魚人の目撃談について尋ねる。

しかし彼らは怪しい人影については見かけてはいないと答えた。

最近ほとんど半魚人の目撃談は減っていて、クワノ老人が久しぶりに半魚人を目撃したと話しているようだった。

「これじゃあ、空賊の手掛かりは期待できないわね」

「いいじゃないか、ルグランさんは僕達を休ませようと思ってきつと川蟬亭を予約してくれたんだろうし」

悔しそうにため息をついたアスカをシンジがそう言って慰めた。

「それに僕は姿を消していた人影が再び目撃されたのも気になるよ」

「最近アジトを移したばかりの空賊達がここをうろついているって事？」

「そう思っている」

アスカの言葉に、ヨシユアはうなずいた。

＜ボース地方 川蟬亭 エステルの部屋＞

夕食をとった後、エステルとアスカ、ジョゼットは4人部屋に、ヨシユアとシンジは2人部屋に別れて寝る事になった。

「まったく、あんた達と一緒にの部屋で寝るとは想像もつかなかったよ」

「あたしもね」

ジョゼットがつぶやくと、エステルは笑顔でそう言った。

「じゃあ、今日は寝るまでたくさん話をしようよ」

「どうしてそうなるのさ？」

笑顔でエステルがそう宣言すると、ジョゼットは疑うような顔で聞き返した。

「だって、あたし達は仲間になるんだからさ、ねえアスカ？」

「う、うん……」

アスカはとまどいながらもエステルの言葉を肯定した。

そんなエステルとアスカの態度に気を許したのか、ジョゼットはゆっくりと自分の事を話し出した。

ジョゼットの兄妹はエレボニア帝国で暮らしていた貴族の一家だった。

しかし、家を継いだ長男のドルンが悪い商人に騙されてしまい、代々受け継いだ財産を奪われさらに借金まで背負ってしまった。邸宅を追い出されたジョゼット達兄妹は空賊をして暮らして行くしか道が残されて居なかった。

空賊の男達の中で紅一点のジョゼットは勝ち気に振る舞う性格になって行った。

最初は退屈そうにジョゼットの話聞いていたアスカも、だんだんと真剣に話に耳を傾けるようになった。

ジョゼットの生い立ちが自分と似ているように思ってたからだ。小さい頃のアスカは、母親に甘えてばかりの少女だった。

母親が居なくなって、アスカは一人で生きて行く決意を固めて自分の性格を強い自分に変えて行った。

「じゃあ、ジョゼットって貴族のお嬢様だったんだ」

「でも、あのまま暮らしていても屋敷での生活が退屈で外に出て行ったかもしれないけどね」

エステルにそう答えるジョゼットの姿を見てアスカは思った。

自分も、母親が側にいても性格は今とあまり変わらなかったかもしれない。

そう思うと、自然と笑いがこぼれた。

「あーっ、ボクにお嬢様なんて似合わないって笑ったな」

「それは違うわよ」

アスカはジョゼットの誤解を解くために自分の事も話した。小さい頃に母親と死に別れてしまった事。

もちろん、エヴァ関係の話はジョゼットに明かしても理解されないだろうと言う事で適当にごまかした。

アスカの話をジョゼットは感心したように聞いていた。

そして、エステル達が話し込んでいる間にすっかりと夜も遅くなつてしまったので、エステル達は眠る事にした。

「ドルン兄、ボクはもういらないの……?」

エステルとアスカが寝静まった後、ジョゼットは目に涙を浮かべて悲しげにつぶやいた。

泣き疲れたジョゼットはそのまま眠りについた。

＜ボース地方 川蟬亭 湖畔の栈橋＞

翌朝、目を覚ましたジョゼットが上げた大きな叫び声によって川蟬亭は騒然となった。

血相を変えたヨシユア達がエステル達の部屋に入ると、パジャマ姿のエステルがごまかし笑いを浮かべながら謝った。

ジョゼットが息苦しさを感じて目を覚ますと、寝ているエステルに抱き締められていたのだ。

「寝る前にね、ジョゼットの方を見たら寂しそうに泣いていたから、慰めようと一緒のベッドに潜り込んだの」

「何でそんな慰め方するんだよ、もしかして同性の子が好きだとか!?!」

エステルの言葉にジョゼットは引いた感じで尋ねた。
しかし、エステルは首を横に振って否定する。

「どんなに寂しくてもね、父さんに抱きしめてもらおうと安心したんだ」

「あんたの親父って、ロリコンじゃないよね」

笑顔でキッパリと言い切るエステルに、ジョゼットは少しあきれたようにため息をついた。

朝食の後、エステル達は釣りを楽しむ事にした。

もちろん、空賊達が現れないか警戒するため、誰かが見張りをする必要はあった。

そこで、アスカはヨシユアを誘って見張り役に立候補した。

アスカはヨシユアを連れて人気の無い外れの栈橋までやって来た。

ここは背の高い木の壁に隠れて、川蟬亭の1階で釣りをしているエステル達からは見る事は出来ない。

「こんな所まで連れてくるなんて、何の話だい？」

「察しはついているんでしょう？」

ヨシユアに尋ねられて、アスカは聞き返した。

「……僕の過去の素性についてだね」

「アンタからは危険な予感がするのよ」

「君の言う事は正しいよ。だから、僕は父さんに誓いを立てたんだ、僕のせいで君達に迷惑を掛ける事が分かったら、姿を消すって」

「えっ!？」

思わずアスカは驚きの声を上げた。

「だから、君がすぐに立ち去れと言えば明日には姿を消すよ」

ヨシユアの言葉を聞いたアスカは真っ青な顔になってヨシユアを引き止める。

「アタシ、そこまでは言っていないわよ！」

そこへ慌てた様子のシンジが、エステルとジョゼットを連れてやって来た。

2人が姿を消した事が気になったシンジ達は木の壁の陰で話を聞いていたのだ。

シンジ達の姿に気がついたアスカが声を掛ける。

「シンジ大変よ、ヨシユアが！」

「アスカ、どうしてヨシユアを疑う事を言っただよ！」

「アタシは、ちょっとヨシユアの事が気になっただけよ……」

怒りをあらわにするシンジに、アスカも泣きそうな顔になって弱々しく言い訳をした。

そして、アスカは少し暗い表情でうつむいているエステルに尋ねる。

「ねえ、どうしてエステルはヨシユアの事をよく知らないのにずっと一緒に居られたの？」

「だって、家族なんだから当然じゃない」

アスカの質問にエステルは顔を上げて晴れやかな笑顔で断言した。

「あたしってば、父さんの事も良く分かっているのよね。でも、同じ家で一緒にご飯を食べたり寝たりしていると、食べ物好みとか、何気ないクセとか、そう言うものが分かりあえるようになってくる。だから、あたしはヨシユアが自分から話したいって言わない限り、聞かないって決めたんだ」

「エステル、君の心の広さには感心するよ」

ヨシユアはそうつぶやいて目に嬉し涙を浮かべてエステルを見つめ

た。

「日本にもさ、『同じ釜の飯をくう』って言葉があるんだ。同じ家で生活して、同じ釜で炊いたご飯を分け合って過ごす事が家族じゃないのかな」

シンジは気まずそうな表情でうつむいたアスカにそっと言葉を掛けた。

「それに僕達だってエヴァの関係で誰かに狙われる事はあるんだよ」

シンジがさらに付け加えて言った言葉に、アスカは目を見開いて息を飲む。

「そうだったわ、アタシは勘違いしていたみたい。アタシ達もヨシユアと同じ立場だったわね」

アスカはそう言ってヨシユアに向かって頭を下げて謝った。

ヨシユアもエステル達に謝って場の雰囲気は何とか和やかなものに戻った。

「家族か……ボクも離れ離れになるのは嫌だよ……」

ジョゼットはそんなエステル達の姿を見て、悲しそうにつぶやいた。

<ボースの街 遊撃士協会>

和やかな雰囲気へと戻ったエステル達は、その後川蟬亭で釣りなど

をして思いっきり楽しんだ。

しかしそんなエステル達の所へ驚くべき報告が舞い込んで来た。

なんとリシャール大佐率いるリベール王国軍情報部の部隊が、空賊達のアジトに踏み込んでドルンや空賊達を残らず捕まえたと言うのだ！

エステル達はすぐにボースの街へと戻り、ルグラン老人から詳しい事件解決の内容を聞いた。

空賊達が逮捕された場所が湖の近くだったと聞くと、アスカはかなり悔しそうな顔になる。

「どうしてよ、アタシ達の方が近くに居たのに！」

「確におかしな話ですね」

ヨシユアもアスカの言葉に同意するように、あごに手をやって考え込むような仕草をした。

「僕達が行った時には王国軍の兵士も、リシャール大佐達も居なかったのに」

「あたし達はずっと川蟬亭に居たけど、来なかったよね」

シンジとエステルも疑問の声を上げた。

「考えられるのは、情報部がかなり以前から新しいアジトの場所を知っていたと言う事じゃな」

「あたし達がクワノのおじいさんから話を聞く前から？」

「うむ、情報部の事じゃ、スパイ活動などもしていたのかもしれないな」

エステルの質問にルグラン老人はうなずいてその様な推測を話した。

「もしかして情報部のスパイって、前の空賊アジトで捕まっていたアタシ達を逃がしてくれた、あの黒い服の兵士？」

「あの人は情報部の隊員だったのか」

アスカの言葉に、シンジはそうつぶやいた。

「だとしたら許せない」

ジョゼットが悔しそうにつぶやくと、ジョゼットに全員の視線が集まった。

「だって、ボク達に宝石を盗んだりするように勧めて来たのはあの黒い服のやつなんだよ！ それからドルン兄達もおかしくなっちゃったし」

「それって、リシャール大佐が空賊達に事件を起こさせて、自分達で解決して手柄にしたって事なの？」

ジョゼットの叫びを聞いたアスカがそう言葉をもらした。

「これ2人とも、めったな事を言うんじゃない」

「そうだよ、あの黒い服の人が情報部の人だって決まったわけじゃないんだから」

ルグラン老人の言葉に、シンジも同意してそう言った。

「それで、空賊達はどうなるんですか？」

「うむ、情報部によってレイストン要塞に連れていかれる事になっておる」

「あのさ……」

ヨシユアとルグラン老人のやり取りを聞いたジョゼットが声を上げる。

「ボクもレイストーン要塞に行きたいんだけど」

「それって、自首するって事!？」

「どうして？」

ジョゼットの言葉を聞いたアスカとエステルが驚きの声を上げた。

「ドルン兄やキール兄が捕まっているのに、同じ罪を犯したボクだけがこうしているわけにはいかないよ。それに、一緒に居たいんだ。家族、だからさ」

エステル達にはジョゼットの気持ちは良く分かった。

それだけに、ジョゼットを引き止める言葉はかけられなかった。

「エステルやアスカ達と一緒にこのままリベール王国と一緒に旅を出来たらどんなに楽しいだろうなって、考えたりもしたよ!」

「……うん、わかってるよ」

エステルはジョゼットの方に手を置いてそう答えた。

「だから、待っているよ」

「えっ？」

エステルの言葉に、ジョゼットは驚きの声を上げる。

「ジョゼットが罪を償って、出て来る日まで待っているから」
「うん、ありがとう……」

アスカも笑顔でそう話し掛けると、ジョゼットは嬉し涙を一杯流した。

そしてジョゼットはエステル達に伴われて、モルガン将軍の居るハーケン門に自首をしに行った。

「やっぱり、遠く離れた家族って心配だよね」

「うん、どこにいるのかな、父さん」

ヨシユアの言葉にうなずいて、エステルは不安そうな眼差しでハーケン門の向こうに広がるエレボニア帝国へ視線を向けた。

「シェラ姉がきつと突き止めてくれるから、アタシ達はパパの無事を信じて待ちましょう」

「うん、そうだね！」

アスカが励ますと、エステルは元気を取り戻して笑顔でうなずいた。

第二十二話 銀髪の少年と黒のオープメント

＜ボースの街 遊撃士協会＞

リシャール大佐の指揮する王国軍情報部が空賊のアジトを突き止め、事件を解決した事はあつと言う間に街中に広まって行つた。

「はあつ、これじゃありシャール大佐達だけで事件を解決したように思われるじゃない」

街で配られたリベール通信の号外を見てアスカは面白くなさそうな顔でため息をもらした。

「でも、事実そうじゃないか」

「僕達が空賊に捕まってしまった事が報道されないだけナイアルさん達に感謝しないと」

「う、それはそうかもしれないけどさ」

ヨシュアとシンジの言葉を聞いて、アスカは気まずそうな顔になった。

「あたし達は縁の下の力持ちで良いってシェラ姉も言っていたじゃない」

「ふおつ、ふおつ、その通りじゃよ」

笑顔でエステルが言った言葉に、ルグラン老人は同意して微笑んだ。

「よしっ、気分を切り替えて依頼をこなしましょう！」

「そうじゃ、失敗した分はこれから取り返せばええんじゃ」

アスカの言葉にルグランはうなずいて、エステル達に遊撃士協会へと入っている依頼の内容を見せた。
空賊事件に関わっている間に他の依頼は保留していたので、依頼が溜まってしまっているようだった。

「うわぁ、休む暇が無さそうだね」

シンジがウンザリとした顔でぼやくと、アスカは首を静かに横に振る。

「忙しい方がいいわ。……だってパパの事を考えずに済むじゃない」
「アスカ……」

アスカの言葉を聞いたシンジは悲しそうな表情になった。
ルグランは依頼が書かれているファイルのうちの1つを取り出すと、エステル達に見せる。

「お前さん達、急いでこの依頼をこなしてくれんか？」

そこには指輪の調査依頼が書かれていた。
依頼人は強盗に遭った南市街の住民で、押し入った空賊に結婚指輪を奪われてしまったのだと言う。
リシャル大佐の部隊により、空賊達は逮捕されたのだが、取り調べで空賊はアジトを移すのが急な話だったので、その時に忘れて来てしまったと話していた。
その婚約指輪はガラス製だったので、空賊も適当に管理をしていたらしい。

「ひどい、その人にとっては大切な思い出の品なのに！」

ルグランから話を聞いたアスカは憤慨した。

「アガットに引き受けてもらおうと思ったのじゃが、手配魔獣も多くてのう。調べる範囲も広い事じゃし、4人で行って来てもらえんか？」

「ええ、もちろんよ！」

強くうなずいて快諾するアスカに、エステル達も賛成した。

「空賊の居た砦まではそれなりに遠い道のりじゃ、それに人氣が無くなる事で魔獣が住みついてしまっている可能性もあるから、気を付けるんじゃよ」

ルグランに見送られて、エステル達は霧降り峡谷の奥にある空賊がアジトにしていた砦へと向かうのだった。

＜ボース地方 霧降り峡谷 空賊砦＞

霧降り峡谷に住む山男ウエムラーの案内でエステル達は苦勞する事無く空賊砦の入口までたどり着いた。

エステル達がお礼を言うと、ウエムラーは遊撃士にはいつも世話になっているからと笑顔で山小屋へと帰って行った。

ウエムラーは遠路はるばる来たエステル達を歓迎し、自分の鍋料理を振る舞おうとしたが、アスカとシンジは危険を感じ取り、頑なに断った。

「せっかくなんだから、ご馳走になれば良かったのに」

朝から歩き通しだったエステルは不服そうに口をとがらせた。

「あの鍋はミサトカレーと同じ匂いがしたわね」

「うん、食べていたらきつとただでは済まなかったよ」

アスカの言葉に、シンジは深刻な顔をして強くうなずいた。

「ミサトカレーって何？」

「えっと、それは……」

エステルに突然尋ねられて、シンジは言葉に詰まった。

分かるように説明するには、シンジとアスカの保護者であった葛城ミサトの事を話さなければならぬ。

シンジとアスカとミサトは、以前は葛城家として家族になろうとしていた。

だが、家族としての関係は長く続かずに終わりを迎えた。

使徒に飲み込まれそうになっているアスカを見捨てるミサトの冷徹な判断に裏切られた気持ちは強かった。

あの時のアスカとシンジは14歳の子供、ミサトは29歳の未熟な大人だったのだ。

シンジもアスカも、カシウスやエステル、ヨシユアと言うブライト家の暖かい家族に触れて、ミサトを恨む気持ちは薄れていた。

しかし、まだミサトを赦して良き保護者として他人に話すのには抵抗を感じていた。

「あたし達の保護者をしてくれた、ミサトがね……」

「話したくないなら、無理しなくて良いよ」

アスカが重い口を開こうとすると、エステルは辛そうな顔をして首

を横に振った。

シンジはアスカの瞳もエステルと同じように悲しそうな光を放っている事に気が付いた。

きつと自分も同じような目でアスカを見つめているのだろうと、シンジは思った。

「あたし達はこれからずっと一緒だもん、慌てなくてもきつと話せる時が来るよ」

エステルが笑顔になってそう言うと、アスカも嬉しそうに泣き笑いのような顔になり、エステルを抱き締める。

「エステル、アンタ良い事言うじゃない！」

すっかり明るい表情に戻ったアスカに、シンジとヨシユアは顔を見合わせて安心して息をついた。

気分が落ち着いてエステル達は搜索を開始する。

エステル達が捕まって居た時は壁に掛けられた松明たいまつの光で明るかった通路も、もぬけの殻となった今では真っ暗だ。

ランプを持ったヨシユアを先頭にゆっくりと魔獣の姿を警戒しながら進んで行く。

しかし、行けども魔獣の姿は1匹も見かけなかった。

「静かすぎる……」

「そうね……」

ヨシユアとアスカは厳しい表情に変わってうなずき合った。

「どうしたの？」

「別に魔獣が居ないからって気にすること無いじゃない」

シンジとエステルは何も気が付いて居ないのか、ポカンとした顔でヨシユアとアスカに尋ねた。

その2人の表情を見たヨシユアとアスカはあきれたようにため息をつく。

「この砦は魔獣達が住処にするのに適した場所だよ」

「何の問題も無ければ魔獣の巣になっていてもおかしくないはずよ」

ヨシユアの言葉に、アスカも同意してうなずいた。

「魔獣が1匹も居ないのは魔獣がここから逃げ出して近寄れないって事なのさ、どうしてか解るかい？」

「うーん」

ヨシユアに質問されて、エステルは首をひねって考え込んだ。

「それは、魔獣達が恐れて逃げ出してしまうほどの危険な”何か”がここに居るって事よ」

「えっ!？」

アスカが低い声で言い放つと、シンジは青い顔になった。

「すぐに引き返した方がいいのかもしれない」

「うん、僕もそう思う」

ヨシユアの提案に、シンジもうなずいた。

しかし、アスカとエステルは不満そうな顔になる。

「まだ指輪を探し始めたばかりじゃない!」

「そうだよ、少しぐらい平気だよ」

だが、ヨシユアはエステルの肩をつかむと、真剣な眼差しで訴えかける。

「僕は、君達を守りきる自信が無いんだ」

「ヨシユア……」

ヨシユアの尋常ではない雰囲気、アスカもすぐに引き揚げる事を了承した。

エステル達が足早に引き返そうとすると、別の通路から走って来た人影と遭遇する。

「きゃあああっ！」

アスカが悲鳴を上げてシンジに飛びついた。

しかし、エステルから発せられた言葉は意外な物だった。

「アガットさん？」

エステルの言葉を聞いたアスカはシンジから体を離してほんと胸をなで下ろす。

「んもう、驚かせないでよ」

「お前が勝手に騒いでるだけじゃないか」

アガットは少しあきれた顔でアスカを見つめた。

「どうして、こちらに？」

「魔獣退治が終わったから見回りに来たただけだ」

ヨシユアの質問に、アガットは不自然に怒った表情を作って答えた。

「こんな人が近寄らない場所を見回り？」

「そうだ、別にお前らを手助けに来たんじゃないんだからな！」

アスカがニヤケ顔で尋ねると、アガットは顔を背けたまま言い放った。

その姿にエステル達から笑いが起こったがヨシユアは緊迫した雰囲気のを緩めずにアガットに尋ねる。

「アガットさん、この砦の静かすぎる雰囲気は妙だとは思いませんか？」

「ああ、俺もそう思って調べた。こっちの部屋へ来い、見せたいものがある」

アガットはそう言って自分がやって来た奥の通路の方の部屋にエステル達を手招きした。

エステル達が部屋に足を踏み入れると、そこは数匹の魔獣の死骸があった。

だがそれよりもエステル達の目を引いたのは、壁に刻まれた多数の真新しい傷だった。

魔獣の爪の引っかかり傷では説明が出来ない、剣で切りつけたような深い跡が付いている。

「俺の剣でも石壁にこれほど鋭い傷を付ける事はできねえ」

アガットは少し悔しそうにうめいた。

「これが魔獣達をこの砦から追い出した原因なの？」

「ああ、多分な」

アスカの質問にアガットはうなずいた。

ヨシユアは付けられた傷跡に指を滑られてつぶやく。

「こんな切れ味が鋭くて、強度の強い剣なんてなかなか無いよ」

「鉄製なら相当重量が無いと無理ね」

武器屋でアルバイトをしていたヨシユアの意見に、アスカも同調して付け加えた。

「アガットさんは部屋をこんなに荒らした人の姿を見たんですか？」

「銀の髪をした怪しい人影がこの部屋に入って行くのを見た」

ヨシユアの質問にアガットがそう答えると、ヨシユアは眼光を鋭くして再び尋ねる。

「その人影はどんな服装をしていたんですか？」

「後ろ姿だけだったが、お前らと同じぐらいの背丈だったな」

アガットからその言葉を聞くと、ヨシユアは安心したような残念なような表情を浮かべた。

シンジとアスカはヨシユアの表情が目まぐるしく変わるわけが解らず困惑した。

「それだけしか判らなかったの？」

「ああ、そいつの姿を追いかけてこの部屋に入った時には姿が消えていたからな」

「そ、それって幽霊？」

アガットの答えを聞いたエステルは怯えてヨシユアの腕に抱きついた。

「もう、だらしが無いわね」

「あたしは幽霊とか、居るんだか居ないんだかはつきりしないのは苦手なのよ!」

あきれた顔でため息をついたアスカに、エステルは顔を赤くして反論した。

「でも、そいつは手には何も武器を持って居なかったぜ」

「それじゃあ、どうやってこんな斬り傷を付けられるのよ!」

「俺に怒ったって仕方無えだろう」

怒鳴ったアスカに手を焼いた感じで、アガットはアスカにそう言った。

「この部屋に傷を付けたのとは別の人じゃないのかな?」

「うん、タイミング的にもそう思えるよね」

シンジの意見に、ヨシユアもうなずいた。

「じゃ、じゃあやっぱりアガットさんがさっき見たって言う銀髪の人影は幽霊……?」

「ちよつとエステル、いつまでヨシユアにしがみついているのよ」

「あ、あはは……」

アスカに指摘されて、エステルはごまかし笑いを浮かべてヨシユアの腕から手を離れた。

とりあえず、脅威を感じる存在は去ったと考えたエステル達はアガ

ツットの協力も得ながら依頼である指輪探しを再開する事にした。
アガットはウンザリとした顔でため息をつく。

「俺も目ぼしい場所は探したんだがな、見つけたのは壊れた掃除機の中に入っていた黒いノートだけだ」

「でも、見落としがあるかもしれないし、僕達でも探してみようよ」

シンジはアスカを励ますために言ったのだが、シンジの空気の読めない鈍感レベルはかなりのものだった。

そのシンジの言葉を聞いたアガットは顔を引きつらせる。

「それは、俺の調査がまだ信用ならないって言いたいのか？」

「ご、ごめんなさい、そんなつもりじゃ」

アガットがにらみつけると、シンジは震え上がって謝った。

エステルがその雰囲気を取りなして、エステル達は砦の部屋の中をまた調べ直す事にした。

しばらく探索を続けた後、エステル達は廊下の角に落ちていた指輪を見つけた。

「これで依頼した人も喜んでくれるわよね」

「うん、きつとそうだね」

アスカが目を輝かせて喜ぶと、シンジは穏やかな笑みを浮かべてうなずいた。

途中であきらめずに探索を続けたかいもあったと言う物だ。

「さあ、早く街に帰ってお昼ご飯を食べよ！」

エステルは大声でそう言って、ヨシユアを少しだけあきれさせてい

た。

目的の指輪を見つけたエステル達が帰ろうとすると、静かな砦の中にエステル達以外の足音が響いている事に気が付いた。

「やっぱり、あたし達以外に誰かが居るのかな？」

「上の階の方から聞こえて来ている」

エステルが尋ねると、ヨシユアはうなずいた。

「……行くぞ」

アガットの提案に、エステル達全員が賛成して首を縦に振った。

エステル達は足音を殺して駆け足で階段を登って行く。

謎の足音の主は、エステル達を誘うようにさらに上へと登っているようだった。

そして、階段を登り終ったエステル達は終点の飛行艇の発着場へとたどり着いた。

砦がある洞くつの斜面に大きく開いた穴から陽の光が差し込んで来る。

飛行艇の発着場の先端には銀髪の少年が静かに待ち受けていた。

銀髪の少年は街の中にも居るような軽装だった。

「……やっと会えたね」

銀髪の少年は階段から登って来たエステル達に向かって穏やかに微笑んだ。

「えっ、誰かの知り合い？」

突然馴れ馴れしく声を掛けられたエステルは、他のメンバーに尋ね

るが、アスカ達はみな困惑した顔をして首を横に振った。

「俺が少し前に見かけた人影は多分あいつだ」

アガットがそう断言すると、アスカ達に緊張が走る。

「アンタ、こんな所で何をしているのよ？」

アスカの問い掛けに銀髪の少年は黙って微笑み、何も答えなかった。そして後ろを振り向くと身をひるがえして姿を消した。

「飛び降りた!？」

「マジかよ!？」

それを目の当たりにしたシンジとアガットが思わず悲鳴を上げた。エステル達は急いで銀髪の少年が飛び降りた場所へと駆けつけて見下ろした。

しかし、その先は切り立った崖になっていて、落ちたらとても助からないと思われた。

「本当に幽霊だったの……？」

エステルは青い顔をしてへたり込んだ。

アスカは銀髪の少年が立って居た場所に、何かが落ちているのに気が付いてひろい上げる。

「何か真っ黒な機械みたいだけど……」

「オーブメントのようだね」

手のひらサイズに収まる黒い反球体の物体を見て、アスカとヨシュ

アは首をかしげた。

「まあいいじゃん、持って帰ってルグランさんに見てもらおうよ」
エステルはアスカから謎の黒いオーブメントをひったくると、腰に付けたポシェットの中へと放り込んだ。

そして砦から出るエステル達の姿を霧の中から見つめる2人の人影があった。

先ほどの銀髪の少年と琥珀の塔に居た水色の髪の少女。

水色の少女は銀髪の少年に抱きかかえられて、エステル達の頭上遥か高くの空中へと浮遊していた。

2人は無言でエステル達の姿が見えなくなるまで見送ったのだった。

第二十三話 オペレーション・ウルフ

＜ボースの街 遊撃士協会＞

早朝の遊撃士協会。

ルグラン老人はカウンターに黒いオーブメントを置いたまま、時々奥の本棚から本を取り出しては調べ物をしていた。そこへ上の階の部屋に泊まっているエステル達が仕事の準備を終えて降りて来る。

「おはよう、ルグランさん！」

エステルの大きな声が部屋の中に響いた。

そのエステルの声を聞いたルグラン老人は嬉しそうに笑う。

「お前さんはいつも元気いっぱいじゃのう」

「朝からうるさくて仕方が無いわ」

ルグラン老人の言葉を聞いて、アスカは皮肉めいた言い方をした。

「でも、元気の無いエステルの姿なんか見たくは無いよ」

「まあ、そりゃそうだけどね」

ヨシユアが穏やかな笑みを浮かべてそう言うと、アスカも同意した。

「それは僕達が持ち帰って来た物ですよね？」

シンジがカウンターの上に置かれたオーブメントを指差すと、ルグラン老人はうなづく。

「うむ、あれから過去に生産されたオーブメント製品を調べてみたんじゃが、よく解らんのじゃよ」

「それって今までないオーブメントって事？」

「原則として全てのオーブメントには生産された場所や日時を示す番号が刻まれているんじゃが、それが無いんじゃよ」

アスカの言葉にうなずいてルグラン老人がそう答えると、ヨシユアも考え込む仕草をする。

「秘密裏に製造された違法なオーブメントと言う事ですか」

険しい顔をして話したヨシユアの言葉に、エステル達にも緊張が走った。

部屋に張り詰めた空気が漂う中、ルグラン老人は静かに話し始める。

「そこでツァイス市の中央工房に居るラッセル博士に、このオーブメントの分析を依頼して正体を暴こうと思うんじゃ」

「ラッセル博士って？」

「リベール王国にオーブメントを広めた博士だよ。オーブメントの父って呼ばれているんだ」

「へえ、そんな凄い人が居るんだ」

シンジの質問に答えたヨシユアの言葉を聞いて、アスカは感心したようにつぶやいた。

「邪魔するぞ」

エステル達とルグラン老人が話していると、入口からアガットが姿を現した。

「おはようございます、アガットさん」

「おう」

アガットはヨシユア達のあいさつに答えながら、ルグラン老人からの話を聞いた。

ルグラン老人はアガットにこの黒いオーブメントをツァイス市に居るラッセル博士に届けて欲しいと頼んだ。

「へっ、それぐらい朝飯前だ、任せておきやがれ」

黒いオーブメントをルグラン老人から受け取ると、アガットは意気揚々と遊撃士協会の建物を出て行った。

そんなアガットの後ろ姿を見て、シンジはうらやましそうにつぶやく。

「良いなあ、アガットさんは。1人で遊撃士の仕事が出来るほど強くて」

「何よシンジ、アタシ達と組んでいるのがそんなに嫌なの？」

アスカに言われたシンジは慌てて言い訳を始める。

「そう言うわけじゃなくて、大事な人を守るぐらい強くなりたいなあって……」

「ふふっ、分かってるわ、ほんの冗談よ」

アスカがそう言って微笑むと、シンジはほっと胸をなで下ろした。そしてルグラン老人は優しく諭すようにエステル達に話しかける。

「まあ、慌てる事は無い。色々な場所で様々な経験を積んでゆつく

りと時間を掛けて強くなって行けば良いんじゃない」

「でも、カシウスさんの安否が分からないと僕達はどこにも行けないじゃないか」

そう言ってしまったシンジは、エステルとアスカを見て焦ったようにまた言い訳を始めようとする。

「あつ、別にカシウスさんが悪いってわけじゃなくて……」

「いいのよ、悪いのは父さんなんだから」

シンジが謝ると、エステルは首を横に振った。

「そうじゃのう、連絡の1つも寄越さんとは」

ルグラン老人はそう言ってため息をついた。

カシウスの事を思い返してしまったのか、アスカは目を潤ませる。

「パパ……」

「あのー、こちらにエステル・ブライトさんはいらっしやいますか？」

気まずい部屋の空気を切り裂いたのは、郵便配達人の声だった。

郵便配達人は空港に到着した郵便物の中に、エステル宛ての手紙があったので届けに来たのだった。

「この手紙……父さんの字だ……」

手紙を受け取ったエステルが肩を震わせながらそうつぶやくと、アスカは驚いてエステルに駆け寄る。

「アタシにも見せて！」

そう言って手紙をのぞき込んだアスカは、目から感激の涙を流し始めた。

力が抜けて倒れそうになったアスカの体をシンジが抱き寄せて支える。

「パパは無事だったんだ……」

「良かったね」

シンジは穏やかに微笑んで胸に抱いたアスカの頭を優しくなでた。カシウスからの手紙には今まで連絡が取れなくて済まなかった事、エステル達がボース地方での事件の解決に貢献した事への喜びの言葉が書かれていた。

「父さん、事件が解決した事を知っているんだね」

エステルがほっとしたようにつぶやいた。

さらに手紙には、カシウスが解決に時間が掛かる依頼を引き受けてしまった事、シェラザードとオリビエの力を借りる事になった事などが書かれている。

シェラザードからもエステル達の所へ戻れない事を謝る言葉が手紙に書き添えられて居た。

そして、カシウスは自分は女王生誕祭の頃にはリベール王国に戻る事、その時にエステル達の成長した姿を見るのを楽しみにしていると手紙を締めくくった。

「ふっ、面白いじゃない、やってやろうじゃないの」

手紙を読んだアスカはそう言って不敵な笑みを浮かべた。

「何をやるって？」

「決まっているじゃない、パパが帰って来るまでに正遊撃士の資格を取って、パパに正遊撃士の紋章を見せるのよ！」

「ええっ!？」

アスカの答えを聞いたシンジは驚きの声を上げた。

「そうと決まれば、このままボース支部でのんびりとはして居られないわ! ルグランさん、何か仕事は無い？」

「すっかり元気になったようじゃな」

目を輝かせているアスカを見て、ルグラン老人は愉快そうに笑った。アスカは気合を入れていたが、空賊の事件が解決した今、ボース地方は平穏そのものだった。

「はあっ、何か大きな事件でも起こってくれないかしら」

「遊撃士の言葉とは思えない発言だね」

アスカが盛大なため息をつくとき、ヨシユアは苦笑しながらツツコミを入れた。

「そうじゃな、ではお前さん達の卒業試験を行う事にするか」

ルグラン老人がそう発言すると、エステル達は驚いて目を丸くした。

「卒業試験……ですか？」

「いかにも。この依頼をこなせたら、ワシはお前さん達にボース支部の推薦状を書くでしょう」

シンジが尋ねると、ルグラン老人はしつかりとうなずいた。
ルグラン老人が提案した依頼の内容は、ルグラン老人をクローネ峠
の関所まで護衛する事だった。

「護衛の依頼か、遊撃士の器量を計るのには最適な依頼だろうね」

ヨシユアは納得したようにそうつぶやいた。

「ようし、やってやろうじゃないの！」

「頑張ろう、おー！」

気合たっぷり意気込むアスカに、一緒になってエステルも元気に
声を上げた。

<ボース地方 西ボース街道>

クローネ峠に行く事になったエステル達は、色々と準備があると言
うルグラン老人と別れて街の西門で合流した。

「さあて、いよいよ試験の始まりね！」

そう言うのにぎりこぶしを作るアスカをシンジがなだめる。

「アスカ、そんなに意識しないでさ、もっと自然な感じで行こうよ。
力を入れ過ぎるといつもの通りの力も出せなくなるよ」

「ふおっ、ふおっ、シンジの言う通りじゃ。先は長い、適度に緊張
を保つようにな」

ルグラン老人は愉快そうに笑いながらアスカに声を掛けた。
エステルとアスカのコンビが先頭を進み、間にルグラン老人を挟み、
後ろをシンジとヨシユアが固める隊列で街道を進んで行った。
西ボース街道では死に際に自爆する魔獣などに遭遇したが、シンジ
とヨシユアがルグラン老人を上手く安全な場所まで誘導した。

「ふむ、ここまでの護衛は合格点じゃのう」

「やった！」

西ボース街道の終点、クローネ峠に差し掛かった所で、ルグラン老人
が声を掛けると、アスカは嬉しそうに飛び上がった。

「だが、本当に依頼人の安全を考えるのなら、必要の無い戦闘を避
けるべきじゃな」

「もう、アスカってば無駄にカッコつけようとするから」

「ゴメン」

ルグラン老人に指摘されて、シンジが困った顔でにらみつけると、
アスカは舌を出して謝った。

「さあ、ここからは険しい道が続くから大変だよ」

ヨシユアがそう言って目の前に広がるクローネ山脈の間を縫うよう
な細い山道を指差すと、エステル達は力強くうなずいた。

狭く曲がりくねった山道では魔獣の襲撃を避ける事は難しく、ルグ
ラン老人が危険にさらされる事もあった。

シンジとヨシユアの体を張ったコンビネーションで何とかルグラン
老人に攻撃が及ばないようにする。

しかし、谷に掛けられたつり橋を渡り始めた時、向こう側に数匹の
狼型の魔獣が現れたのだった。

「待ち伏せ!?!」

前を歩いていたエステルが驚きの声を上げた。

「うわっ、後ろからも!」

シンジが指差す方を見ると、今まで歩いて来た道からも狼型の魔獣が迫って来た。

「こうなったら、正面突破よ!」

「よしっ!」

突撃したエステルに続いて、ヨシユア達も急いでつり橋を渡り、待ち受けていた狼型の魔獣に戦いを挑む!

狼型の魔獣も襲いかかるが、気迫に満ちたエステル達はまったく引かずに狼型の魔獣達を追い散らした。

「シンジ、後ろからまた魔獣達がやって来るわよ!」

「よしっ!」

息を着く間もなくアスカとシンジはつり橋を渡って追いかけて来る狼型の魔獣達に向かって導力銃を撃った。

前を進んでいた狼型魔獣が動きを止める。

その間にエステル達は狼型魔獣達を迎え撃つ準備が整える。

そして、エステル達は被害を出す事も無く狼型魔獣を倒す事が出来た。

「とっさに突撃したのは見事な判断じゃったな」

「そう?」

ルグラン老人に褒められて、エステルは笑顔になった。

「うん、戦力の分散をさせるのは好ましくなかったからね」

「そうだったんだ……」

ヨシユアがエステルの質問に答えると、エステルは驚いたようにつぶやいた。

そんなエステルの表情を不審に思ったアスカがジト目でエステルに尋ねる。

「もしかして、深く考えずに突撃しちゃったんじゃないでしょうね」

「あはは、そんな事無いよ」

エステルはごまかすような笑みを浮かべた。

「まあまあ、エステルの勘は鋭いから」

「それ、フォローになって無い！」

ヨシユアの言葉に、エステルは不満そうな顔でツツコミを入れるのだった。

<ボース地方 クローネ峠・関所>

クローネ峠の難所であるつり橋を越え、所々で襲いかかる狼型魔獣を蹴散らして進んで行ったエステル達は、クローネ峠の関所が見える場所までたどり着いた。

そしてエステル達はすぐに関所の異変に気がついた。

関所の辺りから土煙が上がり、戦いの音が聞こえて来る。

「もしかして、関所もあいつらに襲われているの？」

「うん、僕らを襲ったのは足止めなのかもしれないね」

アスカの言葉にヨシユアはうなずいた。

エステル達はルグラン老人の護衛をしつつ、なるべく早く救援に駆けつける事にした。

「でえええいっ！」

関所の建物の前では、アガットと関所の兵士達が狼型魔獣と戦っていた。

かなり長い間戦っていたのか、アガットは滝のような汗を流している。

「くそっ、こいつら倒しても倒しても歯向かってきやがる！」

「やはり、これだけの人数では突破するのは無理だ」

「おいコラ、諦めるんじゃないええ！」

アガットの隣に居た兵士が弱音を吐くと、アガットはその兵士を怒鳴った。

「やはり、援軍が来るまで関所に閉じこもるべきでは無いですか？」

「そうしたら、怪我をしたやつの治療薬が届くまでかなり時間がかっちまうだろ」

他の兵士がアガットに提案すると、アガットはそう反論した。

突然狼型魔獣の群れに関所が襲われた時、関所を警備していた兵士の1人がかみつかれ怪我を負わされてしまったのだ。

関所を守る兵士達は、分厚い扉を閉める事で狼型魔獣の侵入をとりあえず防いだ。

かみつかれた兵士は傷口から魔獣の感染症にかかってしまう恐れがあったのだが、その治療薬は街に行かないと手に入らない。

関所の通信機で救援を呼ぼうとしたが、何故か繋がらなくなってしまった。

そこで関所に居合わせたアガットはこちらの方から助けを求めに行こうと兵士数人と決死隊を募ったのだが狼型魔獣達に阻まれて先に進めずにいた。

狼型魔獣達とにらみあいを続けていたアガット達だったが、突然に狼型魔獣の隊列が乱れた。

「お前ら！」

「アガットさん！」

互いの姿を見たアガットとエステルは声を掛け合った。

再会も束の間、狼型魔獣達との大乱闘が始まった。

人数が増えたアガット達は次第に取り囲んでいた狼型魔獣達を押し返し始めた。

アガットの攻撃のタイミングと、エステルとヨシユアの息も合ってきた。

シンジとアスカは、ルグラン老人の護衛をしながら、関所の兵士達と共に狼型魔獣の足止めのための射撃をしてサポートした。

やがて、勝てないと判断したのか、ジリジリと退いていた狼型魔獣は逃げて山の中へと姿を消した。

敵の気配が消えると、アガット達は安心したようにため息をつく。

「ふーっ、どうやら終わったようだな。お前らが来てくれて助かったぜ」

「アガットさんに素直にお礼を言われるなんて、くすぐったい感じ

ね」

「うるせえな、俺を何だと思ってやがる。まあ、カシウスのおっさんの手ほどきを受けただけあってそれなりにやるようだって事は認めてやる」

アスカの言葉に少しムツとした表情になりながらも、アガットはそう付け加えた。

「ありがとう、君達が来てくれて助かったよ。さあ、疲れただろう、関所の中へ入って休んでくれ」

兵士達もエステル達にお礼を言い、関所の建物中へと案内した。エステル達は兵士の言葉通り一息入れようとしたが、医務室の中に怪我をした兵士が寝かされているのを見て顔色を変える。

「そうだ、この兵士さんの薬を取りに行けばいけないんじゃない？」

「ああ、それは我々が行くこうと思っている」

兵士がそう言うと、エステルは首を横に振る。

「そう言う仕事は遊撃士のあたし達に任せてよ」

「あなた方は関所の守りを固めて下さい」

「すまないな、本当に助かるよ」

エステルに続いてヨシユアがそう言うと、兵士は感謝の言葉を述べた。

「ルグランさん、すぐに戻る事になって大丈夫ですか？」

「まだまだ、若い者には負けんぞ」

シンジが尋ねると、ルグラン老人は穏やかな笑顔で答えた。

「お前ら、その件は頼んだぞ」

アガットがすでに関所を越える手続きをしているのを見て、エステ
ルが驚きの声を上げる。

「アガットさん、もう行っちゃうの？」

「ああ、早い所こいつを届けてしまいたいからな」

アガットの返事を聞いたアスカはあきれ顔でつぶやく。

「あんなに息を切らして戦っていたのに、とんだ体力バカね」

「お前にバカ呼ばわりされるのは、こいつで十分じゃないか」

「なっ……！」

アガットがシンジを指差すと、アスカは顔を赤くして言葉を詰ま
せた。

ルグラン老人がその様子を見て愉快そうに笑う。

「それでは、例のオーブメントはラッセル博士に届けてくれよ」
「おう」

アガットはルグラン老人の言葉に軽く手を振って、関所の先へと姿
を消した。

そしてその頃、関所の側にある高山から関所を眺める2つの人影が
あった。

1人はエステル達に黒いオーブメントを渡した銀髪の少年。
もう1人はピンク色のスーツを着た緑髪の少年だった。

「どうやら、またオーブメントの回収に失敗したようだね」

「僕が甘かったみたいだ」

緑髪の少年が銀髪の少年に話し掛けると、銀髪の少年はとぼけるような仕草をして言葉を返した。

その答えを聞いた緑髪の少年はおかしくて仕方が無いと言った様子で笑い出す。

「君はわざと手を抜いているんじゃないのかな？」

「そう思うなら報告するかい？」

銀髪の少年が尋ね返すと、緑髪の少年は笑って答えなかった。そして、関所から出て来たアガットの姿を見つけると遊びにでも誘うかのように声を掛ける。

「どうやら、まだ取り戻す機会はありそうだよ」

「そのようだね」

銀髪の少年はそう答えて緑髪の少年と一緒にアガットの後ろ姿を追いかけるのだった。

第二十四話 思い込んだら一・直・線！

＜ルーアン地方 マノリア間道＞

ボース地方のクローネ峠の関所からルーアン市に向かうための海岸沿いへの道、マノリア間道。

マノリア間道を歩いていたアガットは、クローネ峠とマノリア村の中間に差し掛かった所で、狼型魔獣達に取り囲まれた。

「ちっ、やつらの狙いは俺だったのか」

遊撃士と言う職業は事件を解決するのが目的だが、依頼人に感謝される場合もあれば、退治した相手やその関係者に逆恨みされる場合もある。

しかし、アガットは今までこれほどしつこく命を狙われるような事に心当たりは無かった。

こうなったら、多方向から攻撃を受ける覚悟で一角を切り崩すしかない。

”肉を斬らせて骨を断つ”だ。

アガットが覚悟を決めたその時、大きな爆発音が鳴り響いた！

何者かが導力砲を撃ったのだ。

取り囲んでいた狼型魔獣の内、右手前方の魔獣が驚いて陣形を崩すのを見て、アガットはその地点へ飛び込んで狼型魔獣を蹴散らした。そして、着地したアガットは背後に導力砲を撃った人物が立っている気配を感じて振り返った。

するとそこにはツナギを着て頭に帽子、額にゴーグルを掛けた金髪の小さな少女が立っていた。

年は10歳そこそこに見えるその少女が導力砲を構えて居るのを見て、アガットは驚いて声をかける。

「こらチビスケ、こんな所で何をしてやがる」

「あ、あのー、この先にある灯台から囲まれているのを見て、助けに行かなきゃって思っ、そのう」

アガットに声を掛けられた少女はおどおどしながらそう答えた。

「助けに来ただと？ お前みたいなチビスケがふざけた事を言ってるじゃねえ！」

「ふ、ふええっ!？」

少女の言葉を聞いたアガットがさらに凄んで少女をにらみつけると、少女は悲鳴を上げて泣き始めてしまった。

その少女の姿にアガットは戸惑ってしまった。

さらにアガット達の背後からは狼型魔獣達が襲いかかろうとしている。

「ちっ」

舌打ちをしたアガットは座り込んで泣き始めてしまった少女を抱いて持ち上げると、少女がやって来た道の方を走って狼型魔獣達から逃げ出した。

「えええっ!？」

アガットに抱きしめられて居る事に気がついた少女は泣くのを止めて驚きの声を上げた。

そして、少女を抱えたアガットは道の行き止まりにあった灯台までたどり着いた。

灯台の入り口のドアが開け放してあるのに気がついたアガットは、

急いで灯台の1階に駆け込むと、内側から扉を閉めた。
アガットの後から追いかけて来た狼型魔獣は厚い鋼鉄製の扉にぶち当たった。

「こ、怖いよお……」

少女は狼型魔獣が扉に体当たりする音に頭を抱えて怯えていた。
扉の鍵を閉めたアガットは滝のような汗を流し、息を弾ませている。
抱いて運んで来た少女の体は軽いものだったが、導力砲の重量も加えるとそれなりに重かったのだ。

自分の呼吸を沈めながら、アガットは頭の中で落ち着いて考えを巡らせた。

狼型魔獣は建物の中へと入って来れないだろうが、このままでは自分達も出る事が出来ない。

前に関所に閉じ込められた時と同じだ。

いや、関所の兵士が居ない分だけさらに状況は悪い。

アガットは少女が持っている導力砲に目を付けた。

自分は導力砲を扱う事は出来ない。

この少女の力が必要だと考えたアガットは少女に声をかける。

「おいチビスケ、いつまで怯えてやがる」

「ご、ごめんなさい、私、助けに行かない方が良かったですね」

アガットに声をかけられた少女は沈んだ顔でそう言って、再び泣きそうになった。

「……そんな事はない、お前が来てくれて助かった」

「えっ？」

落ち着いた声でアガットが言うと、少女は驚いた表情で顔を上げた。

視線が合ったアガットは真剣な目で少女を見つめて声を掛ける。

「チビスケ、あいつらを追い払うためにも力を貸してくれないか？」
「はいっ！」

アガットの言葉を聞いた少女はぱあっと明るく華やいだ笑顔になる。その明るい笑顔に、アガットはエステルの事を思い出して心の中で苦笑する。

「いいか、まず扉に体当たりを繰り返しているやつらを灯台の屋上から狙い撃ちするんだ。そうすれば、やつらは警戒して近づいて来なくなる」

「はいっ、分かりました！」

少女は目を輝かせてアガットの言葉にうなずいた。

「そして、次は俺が扉を開けて外に出る。そうすれば、残ったやつらは俺を目がけて集まって来るはずだ」

「でも、私と導力砲を運んだけど、大丈夫ですか？」

「ふん、遊撃士の体力をなめんな」

少女に尋ねられて、アガットは鼻を鳴らしてそう答えた。

「じゃあ頼んだぜ、チビスケ」

少女はアガットの言葉にうなずいて、灯台の上への階段を登ろうとしたところでアガットの方を振り返る。

「私はチビスケじゃなくて、ティータです」

ティータはそう言って、階段を駆け上がって行った。

<ボース地方 遊撃士協会>

クローネ峠の関所からボースの街へ引き返し、七耀教会で薬を貰って再びクローネ峠の関所に戻ろうとしたエステル達はルグラン老人に呼び止められ、遊撃士協会の受付へと入った。

そして、ルグラン老人は4通の封筒を取り出すと、エステル、ヨシユア、アスカ、シンジにそれぞれ自分で手渡した。

「ルグランさん、これって……」

「うむ、ボース支部の推薦状じゃ」

アスカが目を輝かせて尋ねると、ルグラン老人はそう言ってうなずいた。

「お前さん達がクローネ峠の関所に行ってからまたここに戻るの
手間じゃろう？ そのままルーアン地方へ向かえば良い」

「心づかい、ありがとうございます」

ルグラン老人にヨシユアはお礼を言った。

「いやいや、本当は関所に着いた時に渡すつもりじゃたんだが、あ
のような事が起こってしまったからのう」

「アガットさん、たった1人で大丈夫かな？」

「重剣のアガットって呼ばれるぐらい強いんだから、自信があるん
じゃないの？」

ルグラン老人の言葉を聞いてシンジが不安そうな顔でつぶやくと、アスカはそう言い放った。

「そうか、アガットさんってとっても強そうだからね」

そう言ってシンジが暗い表情になると、アスカは例によってシンジのコンプレックス病が始まったとため息をつく。

「だからって、シンジがアガットみたいに強くなる必要は無いのよ」
「ううん、僕は大切な者を守る様になりたいっていうかさ……」

シンジは首を振ってアスカの言葉を否定した。

「シンジがすぐに強くなっちゃったら、アスカは側に居られなくなっちゃうから嫌なんだよね」

エステルが笑顔でツツコミを入れると、アスカは短い悲鳴を上げた後、顔を真っ赤にして口ごもってしまった。

シンジの顔にもそのアスカの赤みが感染^{うつ}った。

そんなアスカとシンジの姿を見て、ルグラン老人は愉快そうに笑う。

「互いに足りない部分を補うのも大切な事じゃ。それに、誰かを頼るのは恥ずかしい事では無い。アガットのやつもその点は分かっているはずじゃ」

「ふーん、アガットさんが誰かを頼るなんて事あるんだ」

エステルはいまいちピンと来ないと言った表情でそうつぶやいた。すると、壁に掛かった時計を見たルグラン老人が思い出したかのようにエステル達に声を掛ける。

「おっと、すっかり引き止めてしまったようじゃな。お前達、関所に薬を届けなければいかんのじゃろう」

「そうだ、兵士さんが待っているんだっけ」

ルグラン老人に言われたエステルは気がついてそうつぶやいた。

「ではルグランさん、僕達はこれで失礼します」

「ルーアン支部での活躍を祈っておるよ」

「バイバーイ」

ヨシユアとエステル達はルグラン老人に手を振って遊撃士協会を出て行くのだった。

<ルーアン地方 バレンヌ灯台>

灯台の中に逃げ込んだアガットは、ティータとの連係で狼型魔獣の数を減らして行った。

その様子を少し離れた場所から見つめる2人の影があった。

「惜しかったね、もう一步の所まで追いつめたのに」

「そうだね、こんな所で小さな救援が入るなんて予想外だったよ」

ピンク色のスーツを着た緑髪の少年に話し掛けられた銀髪の少年は笑みを浮かべて答えた。

その銀髪の少年は少しも悔しそうな表情を浮かべていなかった。

「おやおや、全滅しちゃったよ」

「どうやら、また失敗してしまっただけだ。これには参ったね」

アガットとティータに蹴散らされてしまった狼型魔獣達を見て、緑髪の少年は他人事のように楽しそうに笑った。

銀髪の少年も同じように笑みをこぼした。

「こんなに早くやられてしまうとは思わなかったよ、さすが遊撃士は強いねえ」

「なるほど、今回の件はあの魔獣の戦闘力を試すのが目的だったみたいだね」

緑髪の少年の言い方に気がついたのか、銀髪の少年は納得したようにそうつぶやいた。

その言葉が的を射ていたのか、緑髪の少年はからかうような笑みを浮かべて銀髪の少年に話す。

「追撃の任務は別の人物が引き継ぐ事になったから、君は愛しい天使の元に戻ると良いよ」

「……そうさせてもらうよ」

銀髪の少年は不快な表情になってその場から立ち去った。

それは彼が滅多に見せないものだった。

「君がわざとアレを渡したって事はとくに気が付いているのにねえ……」

緑髪の少年はそうつぶやくと、銀髪の少年に続いて姿を消した。

2人が姿を消した後、バレンヌ灯台の入口に姿を現したのはアガットとティータの2人だった。

灯台を立ち去ろうとするアガットに、ティータは名残惜しそうに声を掛ける。

「アガットさん、もう行っちゃうんですか？」

「ああ、仕事の途中だしな」

「で、でも、あんなにたくさんさんの魔獣と戦った後だし、少しぐらい休んで行っても！」

「だから、遊撃士の体力をなめんなって」

ティータが慌てた様子で引き止めようとするが、アガットは聞き入れようとはしなかった。

灯台から離れて行くアガットを見て、ティータは灯台の外へと飛び出した。

それを見たアガットが声を荒げてティータを怒鳴りつける。

「こら、出て来るな！　まだやつらの仲間が残っているかもしれないんだぞ！」

「で、でもお」

「ほら、灯台守のじいさんが戻って来るまで大人しく待ってろ。照明オーブメントの修理をするために来たんだろう？」

アガットはティータのほおをそっとなでると、ゆっくりと灯台から離れて行った。

「アガットさん……」

ティータは撫でられたほおに手を当てて顔を少し赤らめアガットを見送るのだった。

<ルーアン地方　マノリア間道>

クローネ峠の関所に治療薬を届けたエステル達は、そのままルーアン地方へ向けて出発した。

関所の兵士達に休んでいかないと勧められたが、エステル達はまだ見ぬ未知の世界へ行ってみたいと言う気持ちであふれていたのだった。

険しい山道も高まったテンションの前では疲れを感じさせなかった。そして、行く手にそびえ立っていたクローネ連峰の山壁が途切れると、目の前には夕暮れの赤く染まった海が広がっていた。

「うわあ、海だ！」

エステルは感激して走り出して行ってしまった。

「こらっ、独断専行はやめなさい！」

アスカも慌ててエステルを追いかけ行った。

ヨシユアとシンジも、アスカとエステルを追いかけようしたが、思わず歩みを止めてしまった。

夕焼けに照らされて赤く染まるエステルとアスカの顔。

赤くキラキラと光りを反射する海と、潮風になびくエステルとアスカの紅茶色の髪のコントラスト。

いつもより際立ったエステルとアスカの絵画のような美しさに、2人は魅了されてしまった。

「ほら2人とも、何をぼーっと突っ立っているのよ、さっさと来なさい！」

「風がとっても気持ち良いよ！」

「う、うん」

「わ、分かったよ！」

アスカとエステルに声を掛けられたシンジとヨシユアは視線を合わせて微笑むと、アスカとエステルが立っている場所へと向かった。

「新しい地方に来れたからって、油断しないの」

「そうだよ」

「思いつきはしゃいでいるのは、エステルの方じゃないか」

アスカ達がそう言い合いながら歩いていると、マノリア間道の別れ道を示す看板が見えて来た。

道はマノリア村とバレンヌ灯台へと別れているようだった。

エステル達がマノリア村への道を進もうとした時、ティータが灯台に続く道の方から歩いて来たのだった。

ティータはエステル達に気が付くと声を掛けて来る。

「すいません、背の高い赤毛の男の人を見かけませんでしたか？」

「ううん、あたし達は見て無いけど」

「そっか、もうとっくに行っちゃったんだ……」

エステルの答えを聞いたティータはガツカリとした顔になった。肩を落としたティータにヨシユアがそっと声を掛ける。

「それよりも、君みたいな女の子が1人で居るなんて危ないよ。街まで送ってあげようか？」

「あのう、あなた達は？」

「アタシ達はね、遊撃士なのよ！」

「まだ見習いだけどね」

ティータが尋ねると、アスカは堂々と、シンジは少し控えめな笑顔で答えた。

「依頼人を街まで護衛するのはお手のものよ、アタシ達に任せなさい！」

「えっと、遊撃士さんってタダで護衛もしてくれるんですか？」

自信満々に胸を張って宣言するアスカを見て、ティータがヨシユアに尋ねた。

「うん、街に居る時は別だけど、遊撃士協会には『民間人の保護』と言う規約もあるから、危険な場所で人にあったら護る事が義務付けられているんだよ」

「そうなんですか！」

ヨシユアの言葉を聞いたティータは目を嬉しそうに輝かせた。

「そう、だからアタシ達と一緒に……」

アスカはそこで驚いて言葉を切ってしまった。
ティータは信じられない速さでアスカ達の前から走り去ってしまった。

「アタシ、あの子を怖がらせたりしちゃったのかな？」

「いや、別にアスカは悪くないと思うけど」

エステル達はティータの行動に頭をひねりながらマノリア村へと向かうのだった。

＜ルーアン地方 マノリア村＞

クローネ峠の関所とルーアンの街の中継地点に位置するマノリア村。ボースの街から休まず歩いて来たエステル達はここで一泊する事にした。

宿屋の主人から絶景スポットを紹介されたエステル達は宿の名物である『特製弁当』を買って、夕暮れの海が眺められるベンチに腰掛けて夕食を食べる事にした。

「ねえ、他の人からだど、アタシ達ってダブルデートをしているように見えると思わない？」

「そ、そうかもね」

アスカが耳元で小さな声で言うのと、シンジは顔を赤くして答えた。シンジをからかったアスカは楽しそうに笑っていたが、隣りのベンチに座っているエステルとヨシユアを見ると、表情が凍りついた。なんと、エステルはヨシユアが差し出したスプーンを口にくわえていたのだ！

「あ、アンタバカア！？　ななな何を恥ずかしい事してんのよ！」
「だって、ヨシユアの食べているパエリアがおいしそうだったんだもん」

エステルはちっとも悪いと思っていないのか、晴れ晴れとした笑顔でそう答えた。

ヨシユアはあきれ果てた顔でため息をついた。

アスカはチラリとシンジの方を見た。

シンジが持っているのはアスカと同じサンドイッチがメインのメニューだった。

「シンジ、アタシもパエリアが食べたいから買ってきて」

「えっ、それってまさか、アスカも……?」

さすがに露骨なタイミングすぎたのか、シンジが顔を真っ赤にして聞き返した。

「うるさいわね、とっとと買っ来なさい!」

同じく顔を真っ赤にして目をつぶって叫ぶと、シンジは慌てて買いに走った。

ヨシユアはシンジの立場に心の底から同情するのだった。

「うわっ!」

「きゃっ!」

道を急いで走っていたシンジは、同じく道を歩いていた紺色の髪の少女とぶつかってしまった。

その少女はスカートの制服を着ていたので倒れた拍子にスカートが少しめくれてしまった。

シンジの視線に気がついた少女は慌ててスカートに手をやって隠す。

「もしかして、見えました?」

「い、いや見えて無いよ!」

顔を赤くしながらそう言ったシンジは、見えていたと告白したようなものだった。

次の言葉が出て来ずに黙って見つめ合う少女とシンジ。

そこへ何と間の悪い事かアスカが姿を現す。

「戻って来るのが遅いと思ったら女の子をナンパしてるなんて!」
「ち、違うんだ、誤解だって!」

「じゃあ、何で見つめ合って顔を赤くしているのよ!」

シンジの言い訳も空しく、アスカのパンチがシンジに向かって飛んだ。

「あ、あの……本当に誤解なんです……けど」

少女の細い声はアスカに届く事は無く、結局シンジはアスカのパンチやキックを何発も食らってしまったのだった。

第二十五話 クラム、逃げ出した理由（わけ） 同情もお金も要らない

＜ルーアン地方 マノリア村＞

シンジとぶつかった少女が顔を赤くしていた理由を説明すると、アスカの誤解は解けた。

しかし、誤解が解けたとは言ってもシンジの置かれた状況が好転するわけは無かった。

「何をスカートの中をのぞいてなんかいるのよ、スケベシンジ！」
「痛たたっ！」

アスカに耳をつかみ上げられて、シンジは悲鳴を上げた。

そんな2人の様子を、少女は戸惑った顔で見つめ続けるばかりだった。

少女の見ている前で、アスカはさらにシンジへの尋問を続ける。

「アタシの下着を洗っている時も、イヤらしい目で見てるんでしょ
う」

「えっ、その男の方が下着を洗っていらっしゃるのですか？」

アスカの言葉を聞いた少女が、顔を赤らめてそう言った。

「それは、アタシ達が一緒に住んでいるから仕方の無い事なのよ」

失言をしてしまったと気がついたアスカは慌てて言い訳をした。

すると、少女は憧れの視線をアスカとシンジに向けて話し掛ける。

「お2人とも、私とたいして変わらない年齢としの様ですけど、恋人と

して暮らしていただけるなんてしっかりしていらっやいますね」

「違いますよ、僕達は家族なんです！」

「まあ、結婚していらしたんですね、失礼しました」

シンジの力一杯の否定の意味を、少女は逆方向に勘違いしてしまった。

「ほら、変な事言うから誤解されちゃったじゃないバカシンジ！」

アスカは怒鳴ってシンジの頭をまた叩いた。

「あの、そんなに叩いたりして大丈夫ですか？」

「いつもの事ですから」

あまりにアスカに叩かれたりされているシンジを心配して少女が声を掛けシンジが笑顔で答えると、アスカは不機嫌な顔になった。

エステル達は少女の誤解を解くために、ブライト家の家族構成の説明を兼ねて自己紹介をした。

「血が繋がって居ないのに家族なんですか、私達の家と似ていますね」

「アンタの家って？」

「あっ、失礼しました」

アスカに質問されて、今度は少女が自分達の紹介を始めた。

少女の名前はクローゼ。

ここルーアン地方にあるジェニス王立学園の生徒で、その学生寮で暮らしている。

クローゼの家族はこのマノリア村とジェニス王立学園の間に位置するマーシア孤児院に居る。

昔、クローゼが肉親とはぐれてしまった時に世話になったようで、院長先生は自分の母親代わり、孤児院の子供達は自分の弟や妹と言える存在なのだそうだ。

「へえ、あたし達って似た者同士だね」

クローゼの話聞いたエステルは、感心してため息をもらした。

「君はどうしてこの村に？」

「あっ、帽子をかぶった小さな男の子を見かけませんでした？」

ヨシュアに尋ねられて、クローゼは自分の目的を思い出して尋ね返した。

「あたしは見て無いけど、誰か知ってる？」

エステルがアスカ達を見回して質問すると、アスカ達は首を横に振った。

「早くその子を見つけないとヤバイわよ、もうすっかり日は暮れているし」

アスカの言う通り、辺りは夜になっていた。

クローゼの顔がさっと青ざめる。

「ああ、クラム……」

「あたし達も一緒に探すよ！」

「ありがとうございます……」

倒れそうになったクローゼは体を支えたエステルにお礼を言った。

「その子は、確かにこの村の中に居るのね？」

「はい、魔獣がでる街道には出ていないと思います」

アスカの質問に、クローゼはうなずいた。

「どうしてその子は居なくなってしまったの？」

「実は……」

エステルに尋ねられて、クローゼは事情を話し始めた。

クローゼは用事で村へやって来たのだが、その少年クラムもついて来てしまったのだと言う。

そして、村の商人がクローゼにマーシア孤児院への寄付金を渡した時、商人はクローゼ達に対してあわれみの言葉を掛けた。

すると、クラムは怒ってどこかへ姿を消してしまった。

「どうしてクラムが怒り出してしまったのか私には解りません。私がいくら名前を呼びながら探しても出て来てくれないんです」

「それって、避けられてるって事？」

「やっぱり、そうですねか……」

アスカに言われて、クローゼは悲しそうな顔をして落ち込んでしまった。

そんなクローゼを励まそうとシンジが声を掛ける。

「見つけて話をすれば、大事に思う君の気持ちを分かってもらえるはずだよ！」

「そうでしょうか？」

「うん、きっと伝わるから……」

シンジは家出をして第三新東京市から去る決意をした時、ミサトに
駅で抱きしめられた事を思い出した。

あの時からシンジはミサトが自分を大切な家族だと思ってくれていると信じる事ができたのだ。

だからシンジはミサトが家族では無く、軍人としての冷徹な判断で
アスカを見捨てる命令をした事がショックだった。

「そうですね、諦めてはいけませんよね。私もクラムを探します」

クローゼはシンジの目を見つめて強い意志を示した。

そして、エステル達は手分けをしてマノリア村の中を探し始めたの
だが、それほど時間の経たないうちにヨシユアが隠れているクラム
を見つけた。

「うわぁ、何でお前はこんなに早くオレを見つけれらるんだよ！」

上手く隠れたつもりだったクラム少年はヨシユアに見つかって驚い
た。

「職業病かな、こう言うのには鼻が利くんだよ」

ヨシユアは少し悲しそうな表情でクラムに答えると、クラムの腕を
つかんでエステル達を呼び集めた。

「クラム……！」

クローゼは目に涙をためてクラム少年に話し掛けるが、クラム少年
は目を合わせようとしない。

そんなクラム少年に真剣な顔をしたシンジが話し掛ける。

「逃げちゃダメだ」

「べ、別に逃げてなんて無いぞ！ オレは怒っているんだ！」

クラムが怒鳴ると、シンジは首を強く振って否定する。

「いや、理由も言わないなんて、逃げているのと同じだよ。クローゼさんに怒っている理由を話さないで、何の解決にもならないよ？」

「ちっ、分かったよ、うるさいな」

クラムは気に入らないように舌打ちをしながらも、クローゼに怒っている理由を話し始める。

「クローゼ姉ちゃんも、オレ達を貧乏でかわいそうな子供達だと思っ
っているんだろ」

「えっ……！？」

「やっぱり貴族やお金持ちの学校に通っているクローゼ姉ちゃんも、あの商人のおじさんと同じで俺達の事を見下しているんだろう！」

「そんな、私は見下してなんか……！」

クラムが自分の思いを吐き出すと、クローゼは大きなショックを受けた。

クローゼが否定しても、クラムは聞き入れないでさらに声を荒げる。

「じゃあ、どうしてあの商人のおじさんからお金を受け取ったりしたんだよ！」

「そ、それは……」

言いくるめられたクローゼは言葉に詰まってしまった。

クラムは黙ったままのクローゼに悔しさをさらにぶつける。

「オレ達は孤児院の生活が楽しいんだ！　　可愛いそうだななんて同情されても迷惑なんだよ！」

「そ……そんな……」

クラムの言葉に打ちのめされたクローゼは膝を折って地面に着いた。すると、黙って話を聞いていたアスカは不機嫌そうな顔でクラムに詰問する。

「偉そうな事を言ってるけどさ、アンタ達は自分達の力だけで生活してるの？」

「そうさ、孤児院には畑だってあるし、ニワトリも育てているんだぞ！」

「食べ物はお給自足できるとしても、アンタの着ている服とか靴とかは寄付じゃないの？」

「うっ、それは……」

アスカに指摘されて、今度はクラムが言葉を詰まらせる番だった。

「覚えておきなさい、アンタ達は色々な人達に守られて生きているのよ。身の程を知りなさい！」

「う、うわぁ！」

アスカに思いつきりにらまれて、クラムは悲鳴を上げた。

「アスカ、さすがにやりすぎだよ」

「あっ、つい熱が入っちゃったわね」

エステルに止められて、アスカは冷静さを取り戻した。

そして、シンジは座り込んでいたクローゼに穏やかな笑顔で声を掛ける。

「さあ、今度はクローゼさんが自分の思いを話す番だよ」

「でも、私が今さら話しても無駄です」

クローゼが悲しそうに目を反らすと、シンジは真剣な顔をして首を横に振る。

「逃げちゃダメだ」

シンジの言葉を聞いて、クローゼは驚いてシンジの目を見つめた。

「ここで逃げたら、もっとお互いの心が離れて行ってしまうよ。二度と仲直りする事が出来なくなってしまうかもしれない」

「……はい」

クローゼはシンジに向かってしっかりとうなずいて、クラムと顔を合わせて優しく話し掛ける。

「ごめんね、私も孤児院の子達を助けてあげるなんて考えを持ってしまったかもしれない。でも、私が孤児院に通うのは家族が、帰る場所が欲しかったから……寂しかったからなのよ……」

「クローゼ姉ちゃん……」

目に涙を浮かべて訴えかけるクローゼの姿を、クラムは戸惑った顔で見つめた。

「私はね、何年か前に孤児院のテレサ院長にお世話になった事があるの。私の本当のお母様は、私が小さい頃に亡くなってしまって、テレサ院長は私のお母様のように暖かくしてくださいました」

話しているうちに感情が高ぶり、クローゼは声を荒げた。
クローゼが母親を失っていると言う生い立ちを聞いたエステル達は驚いた。

「私の通っている学園も、家柄によつての差別が少なからずあります。孤児院の子達は私を身分の差なんて関係無い家族だと、思ってくれていると思ったのに……」

そう言つてクローゼが自分の思いをクラムにぶつけると、今度はクラムの方が打ちのめされたような表情になる。

「ごめんよクローゼ姉ちゃん、オレも悪かったよ……」

シンジは泣いているクローゼの背中に優しく声を掛ける。

「クローゼさん、抱きしめてあげなよ。そうすれば、気持ち言葉よりも伝わるからさ」

「はい……」

シンジの言葉を聞いて、クローゼはゆっくりとクラムの方へ歩いて行った。

クラムもクローゼの方へと近づいて行く。

そして、2人は固く抱き合うのだった。

その姿をエステル達はじっと見守っていた……。

<ルーアン地方 マーシア孤児院>

翌日、マノリア村に泊まったエステル達はクローゼによつてマーシ

ア孤児院に招待された。

マノリア村の通信機でルーアンの遊撃士協会に連絡を入れると、受付職員のジャンは快く許可を出してくれたのだ。

ルーアンの遊撃士協会に着いた後はその分もしっかり仕事をしてもらうとの事だった。

「では、エステルさん達はこちらでゆっくりとして居られるんですね」

「うん、お休みを先にもらっちゃった」

クローゼの質問にエステルが答えると、クローゼはとても嬉しそうな笑顔になった。

クラムを筆頭とするマーシア孤児院の子供達も、エステル達の来訪を歓迎した。

「昨日はクラムがご迷惑をおかけしたようですいません」

「ごめんなさい」

院長であるテレサ院長はクラムと一緒にエステル達に頭を下げた。

「何でも、あなたがクローゼとクラムの仲を取り持って下さったとか」

「いえ、僕は自分の感じた事を口にしただけです」

テレサ院長に言われて、シンジは照れ臭そうな顔をして答えた。

「私達が孤児院の子達を助けているなんて、ごう慢な考えでした。逆に、私の方が孤児院の子供達に助けられていたんですね」

クローゼはしみじみとした様子でそう言った。

孤児院の子供達は、無邪気な笑顔を浮かべてエステル達に近づいて来た。

エステル達は孤児院の子供達の遊び相手をする事になった。

「私が本当の意味での孤児院の家族になれたのは、シンジさんの言葉のおかげです。勇気がありなんですネ」

「だからそれは僕が逃げて後悔してしまった事を思い返したただけなんですよ」

「まあ、シンジさんも？」

熱い視線をシンジに向けてシンジと話すクローゼ。

それに気が付いたアスカは、ムツとした気分になったが、孤児院の子供達に恐い顔を見せるわけにもいかず、気持ちをこらえて笑顔を作った。

エステル達は孤児院の子供達に遊撃士の仕事での体験を話し、子供達も目を輝かせて楽しそうに聞いていた。

部屋の中に甘い匂いがしてくると、クローゼはオーブンから焼き立てのチーズケーキを取り出し、テレサ院長がハーブティーをテーブルに並べる。

「どうぞ召し上がってください、昨日のお礼です」

「うわぁ、おいしそう！」

エステルが机の上に置かれた大きなチーズケーキを見て歓声を上げた。

「エステル、がつついちゃダメだよ」

身を乗り出してチーズケーキを見つめているエステルをヨシユアがあきれ顔で注意した。

「こんなに大きいチーズケーキですから、大丈夫ですよ。お腹一杯食べて行って下さいな」

テレサ院長は穏やかな笑みを浮かべながらエステル達に告げた。

「シンジさん、このチーズは私が焼いたのですが、お口に合いましたか？」

「うん、とってもおいしいよ」

「よかった」

シンジの返事を聞いてクローゼは嬉しそうな顔を赤くした。

そのシンジの言葉をアスカは心の中でつばを吐き捨てながら聞いていた。

アスカはシンジがチーズやケーキはそんなに好きでは無かった事を知っている。

「お菓子を作る子ってどう思います？」

「い、良いんじゃないかな」

シンジの答えを聞くと、クローゼは嬉しそうに微笑んだ。

アスカはそんな2人のやり取りを横から憎らしげに見ていた。

クローゼの気品あふれる仕草はぶりっ子だからかう事の出来るものではない。

きっと幼い頃からしつけられていたのだろう。

それに対して自分は……。

アスカはコンプレックスを感じてため息をついた。

「僕達はこれからしばらくルーアン市の遊撃士協会に所属する事になりますから、お困りの事がありましたらいつでも言ってお下さい」

「まあ、こちらこそ、いつでも遊びにいらしてください。お茶とチーズケーキを用意して歓迎しますわ」

ヨシユアが別れ際のあいさつに、テレサ院長もそう返した。

「クローゼのチーズケーキってとってもおいしかったよね、アスカ？」

「え？ ええ」

エステルに言われてアスカは驚いた後うなずいた。

差し出された大きなチーズケーキはエステルのドカ食いと、アスカのヤケ食いによってほとんどの部分が消化されたのだった。

「じゃあ、僕はこれで……」

「シンジ兄ちゃん、またな」

「待って下さい！」

クラムに手を振って孤児院を立ち去ろうとしたシンジをクローゼが呼び止めた。

驚いたエステル達は足を止めてクローゼの方を振り返った。

「あの、私にルーアンの遊撃士協会までの道案内をさせて頂けませんか？」

「でも、学校の方は大丈夫なの？」

アスカが聞き返すと、クローゼは軽く首を横に振る。

「あ、学園の方には夕方に帰ると言っておりますので問題ありません」

「そっか、じゃあ一緒に行こう！」

「はい」

笑顔で差し出されたエステルの手を、クローゼも笑顔を浮かべて握った。

「ほら、アスカもクローゼの手を握っちゃいなよ」

「わ、わかったわよ」

アスカはおそろおそろクローゼの手を握ると、意外とクローゼの手が固さを持っている事に気が付いた。

想像ではクローゼは貴族の令嬢と言うイメージだったので、アスカは驚いてクローゼに尋ねる。

「ねえクローゼ、アンタ何かやってるの？」

「ふふ、分かってしまいましたか。私はフェンシングを少々たしなんでいるのです。と言ってもまだまだ精進が必要なのですが」

「へえ、そういうわれてみれば手の豆の跡とかそんな感じだよね」

アスカの質問にクローゼが答えると、エステルが感心したようにうなずいた。

「アスカさんも、何かされているようですね」

「え、ええ、導力銃を少し……」

エヴァンゲリオンの専属パイロットをやっていましたと言う事が出来ず、アスカは適当にごまかした。

「それで、アスカさんにお聞きしたいのですが、シンジさんとは付き合っているんじゃないのですか？」

「な、何を言ってるのよ！ シンジはただの家族に決まってるじゃ

ない！」

クローゼに直球で質問されて、アスカは力一杯に否定した。

「でも、お2人は好きだから側に居らっしゃるんですよ？」

「アタシとシンジが付き合うなんて、ありえないわよ！」

なおも食い下がるクローゼに、アスカはさらに声を荒げた。

「そうなのですか……」

クローゼはホツとしたように息を吐きだした。

「ねえ、クローゼはシンジのどの辺が好きになったの？」

「はい、まずは優しい所です、他にも……」

エステルに尋ねられたクローゼは、説明を始めた。

しかし、この時のアスカは気が付いていなかった。

シンジとの付き合いを否定する言葉、そして付き合う気持ちが無い
と言う言葉をシンジに聞かれてしまっていた事を。

「そんな落ち込まないでよ、アスカが照れ隠しに心にも無い事を言
うって事は君も知っているだろう？」

「そうだよね……」

ヨシユアに慰められたシンジは悲しげな瞳でそう答えるのだった。

第二十六話 月夜に舞う天使達

＜ルーアンの街 市街地＞

クローゼに道案内を頼んだエステル達は、昼近くにルーアンの街に到着した。

ルーアンの街並みは観光に力を入れているだけあって、大通りは美しい景観だった。

「うわぁ、ウィルヘルムスハーフェンみたい！」

アスカはルーアンの街を見ると、嬉しそうに歓声を上げた。そんなアスカの言葉を聞いて、クローゼは首をかしげる。

「ウィルヘルムスハーフェンって何ですか？」

「あ、えっと……アタシが前に行った事がある港町の名前よ」

ドイツの港町の名前だと言っても通じないと思ったアスカは、適当にそう答えた。

「そういえば、アスカさんとシンジさんはとても遠くの国から来られたって話でしたね」

「そうそう、そうなのよ！」

クローゼが納得したように言うと、アスカもその言葉に賛成した。

「へえ、アスカとシンジがやって来た国か、あたしもいつか行ってみたいな」

「エステルさんは遊撃士なのですから、出来ますよ。でも、私は…

…」

クローゼはそう言って表情をわずかに曇らせた。
そして、思い詰めたような表情をしてアスカに尋ねる。

「アスカさんは、元の国に帰りたいと思う事は無いのですか？」

クローゼに質問されて、アスカはドイツや第三新東京市の事を思い浮かべた。

ドイツの母親や、加持、そしてミサトの姿が頭をよぎる。
しかし、アスカは首を横に振ってクローゼに答える。

「アタシはこのリベールが新しい故郷だと思っているわ。だって、新しい家族もできたから」

アスカが柔らかい笑みを浮かべてエステルを見つめると、エステルは照れ臭そうに頭をかいた。

シンジもアスカと同意見だった。

しかし、シンジは第三新東京市の事がまったく気にならないわけでは無かった。

自分達が居なくなった後、ネルフに残ったエヴァは零号機だけ。

レイは1人で使徒と戦う事になる。

その不安をアスカに話すと、アスカはネルフも新しいエヴァやパイロットを補充するから問題は無いだろうと答えた。

確かにその通りかもしれないが、シンジはレイが新しいパイロットと上手く信頼関係を築けるのかなど心配は尽きなかった。

「こちらがルーアンの遊撃士協会です」

クローゼが目の前建物を指差してエステル達に告げた。

話しながら歩いているうちに、ついにエステル達は遊撃士協会にたどり着いたようだ。

「じゃあ、中へ入ろうか」

「待って！」

遊撃士協会のドアを開けようとしたヨシユアをエステルが呼び止めた。

どうしたのかとエステルにヨシユア達の視線が集まる。

「あのさ、仕事を始める前にお昼ご飯を食べない？ 街道を歩いていたらお腹が空いちやった！」

「孤児院でチーズケーキをご馳走になったじゃないか」

ヨシユアがあきれ顔でためいきをついた。

「甘い物は別腹って言うじゃない、ねえアスカ？」

「用法が明らかに間違ってるし。エステル、それはアンタが大食いなだけよ」

アスカの賛成が得られないと、エステルは拝み倒すようにヨシユアに訴えかける。

「たっぷり仕事をさせられる前にたっぷり食べておきたいのよ、お願い！」

「腹が減っては戦はできぬって言葉もあるし、お昼を食べても良いんじゃないかな」

「分かったよ」

「わーい！」

シンジの口添えもあって、ヨシユアは昼食を取る事を承知した。

＜ルーアンの街 カジノバー・ラヴァンタル＞

昼食を取るためにエステル達は手近なレストランへと足を踏み入れた。

しかし店の中に入った時、エステル以外は店の雰囲気驚いてしまった。

店のカウンターでは昼間から酒を飲んでいる青年達が居ただ。

「クローゼ、このお店ってどうなってるの？」

「さあ、私は入った事ありませんから……」

アスカに尋ねられて、クローゼは困った顔で答えた。

「別の店に行こうか？」

「えーっ、あたしはあの料理が食べたい」

シンジが提案すると、エステルは特別メニューが書かれた板を指差した。

そこには『特盛り海鮮リゾット 30分で食べ切れたら お代は無料!』と書かれている。

「まさか、あれに挑戦するつもりなの？」

「もちろん、ご飯もお腹一杯食べられて、しかもお金を払わなくて良いなんて、凄いいお得だよ！」

不安そうに尋ねたシンジに、エステルは笑顔でうなずいた。

そして、アスカ達が止める間もなくエステルは店のマスターに大きな声で『特盛りリゾット』を注文してしまった。

店の客達からどよめきの声上がる。

エステルがテーブルに着いてしまったので店を出るわけにもいかず、他のメンバー達もそれぞれ料理を注文した。

『特盛りリゾット』を食べるのが少女だと知ると、店の客達から笑いが起こる。

「へっ、あんなガキが時間内に食べられるはずが無え」

酒を飲んでいた青年達もバカにしたようにエステルを見ていた。

ここは2階にカジノが併設された酒場だ。

昼間はランチを提供しているが基本的にやって来る客のほとんどがギャンブル好きだ。

勝てば無料になると聞いてたくさんの客が挑戦して来たが、達成できなかった者は居なかった。

「第1の理由は、ボリュームの多さだ。あの大量の米を胃袋に収められるやつはそうそう居ない」

「第2の理由は、辛さ。カルバード共和国から仕入れたトウガラシを大量に使っているから、見た目まで真っ赤だ」

「第3の理由は、あの熱さだな。分厚い鉄製の皿に入れられているから、簡単に料理が冷める事は無い」

「当たり前だ、今回も頂きだな！」

青年達に声を掛けられたマスターも、自信たっぷりに笑ってエステルが食べるのを見守っていた。

しかしエステルの快調な食べっぷりを見ているうちに、マスターの顔色は青白くなって行く。

エステルは普通に食事を楽しむように制限時間内に『特盛りリゾット』を平らげてしまった。

「おじさん、これでただになるんでしょう？」

「ああ……」

笑顔でマスターに勝利宣言をするエステル。

マスターはぼう然とした様子で答えたが、酒を飲んでいた青年達は怒ってエステル達のテーブルに近づいて来る。

「こらぁ！」

エステルをかばうようにヨシユアが青年達の前に笑顔を浮かべて立ちはだかる。

「驚かせてすいません、エステルの舌と胃袋は特別なんです」

「ふざけるな！」

青年達の1人がヨシユアの体を突き飛ばした。

「ヨシユア！」

店の壁に叩きつけられたヨシユアにエステルが駆け寄った。

「アンタ達、いきなり何するのよ！」

アスカが声を荒げて怒った顔で青年達をにらみつけた。

「アスカ、騒ぎを起こしちゃマズイよ！」

シンジが肩に手を置いて止めようとするが、アスカはまったくシンジの方を向こうとはせず、にらみ合いを続けた。

「どうしよう、このままじゃケンカになっちゃうよ……」

不安そうな声をシンジが上げたその時、緊迫した空気を切り裂く侵入者が店に現れる。

「君達、一体何をしているのかね！」

「げ、ダルモア！」

入って来るなり大声で注意をしてきた壮年の男性を見て、青年達は嫌そうな声を上げた。

「こ、これは市長……」

「外を歩いていたら、騒がしい声が聞こえて来たのでね」

マスターがカウンターから出て来てやって来た壮年の男性に頭を下げて謝りながら事情を話し始めた。

話を聞いた壮年の男性はエステル達に申し訳なさそうな顔で頭を下げる。

「君達に不快な思いをさせて済まなかったね。この店のマスターには厳しく注意をして置くから、どうかお許し頂きたい」

「いえ、別にアタシ達は……」

アスカはすっかり怒気を抜かれてしまった。

「誰？」

「ルーアン市長のダルモア様です」

エステルの質問にクローゼが答えた。

男性から感じられる気品と威厳は市長だと言われて納得できるとエステル達は思った。

マスターはアスカ達に迷惑を掛けてしまったお詫びとして、エステルだけでなくアスカ達の食事代も無料にしてくれた。そしてエステル達はダルモア市長と一緒に店を出る。

「この店は素行の良くない若者達が巢食っている場所なのだ」
「そうだったのですか」

ダルモア市長の言葉を聞いて、クローゼは案内役を果たせなかった事を悔いているようだった。

「クローゼさんが悪かったわけじゃないよ」

シンジは気落ちしたクローゼを励ますように声を掛けた。

「料理はおいしかったのに」

エステルは本当に残念そうな顔でつぶやいた。

「君達はルーアンに観光に来たのかね？」

「いえ、僕達は遊撃士です」

「あたし達、ロレントから来ました」

ダルモア市長に尋ねられて、ヨシユアとエステルが準遊撃士の紋章を見せて答えた。

「おお、ジャンが話していたロレント支部からやって来る有能な遊

撃士とは君達の事だったのか」

「そんな、有能だなんて……」

シンジが戸惑ったようにダルモア市長の言葉を否定するが、市長はそんなシンジの態度をさらに気に入る。

「いやいや、これでルーアン市の平和は安心だ。それでは私はこれで失礼するよ」

ダルモア市長はそう言って、エステル達の側から立ち去って行った。

「僕達が有能だなんて、何かの間違いじゃない？」

「きつとそう言ってアタシ達をおだてて持ち上げて、仕事をたくさんさせようって考えよ」

「ひえー、それは大変ね」

シンジとアスカのやり取りを聞いて、エステルはたまらず悲鳴を上げた。

「たくさんご飯を食べたんだから、その分仕事もしないとダメだよ」

ヨシユアはエステルにそう声を掛けるのだった。

<ルーアンの街 遊撃士協会>

昼過ぎにルーアンの遊撃士協会へ入ったエステル達は眼鏡を掛けた青年に迎ええられる。

「やあ君達、遊撃士協会ルーアン支部へようこそ。僕は受付を預かるジャンだ、よろしくね」

「どうも」

明るい調子で言われて、エステル達は頭を下げた。

「さてと、ずいぶんと羽を伸ばせたみたいだし、これからたくさん働いてもらうよ?」

「うっ……」

ジャンの言葉を聞いたエステルが思わず顔をしかめた。

「あの、私が無理を言って引き止めたんです」

クローゼがそう言ってエステル達の遅刻を擁護しようとする、ジャンは手の平を前に突き出して止める。

「君がかばう必要は無いよ、エステル君がラヴァンタルの『特盛りリゾット』に勝った事は評判になっているからさ」

「えっ、もうウワサになっているの?」

ジャンの言葉を聞いて、エステルは驚きの声を上げた。

「あそこのマスターはあの料理を使ってお金を稼いでいたからね。食べられそうな相手に対しては、食べられないように邪魔もしていたらしい」

「それはひどいわね」

話を聞いたアスカは鼻息を荒くして怒った。

「マスターも君のような女の子が相手だったから、油断したんだろう。やり返してくれて感謝するよ」

そう言ってジャンは自分のポケットから100ミラ硬貨を取り出してエステルに渡した。

「このお金は？」

「僕からの報酬だよ。個人的な物だけだね」

「もしかして、ジャンさんもあのリゾットに挑戦したんですか？」

「ああ、情けない事に邪魔されるほどでは無く負けてしまったんだけどね」

シンジの質問にジャンは苦笑しながら答えた。

「それでは、私はそろそろ学園の方へ戻りますね」

「今日は案内してくれてありがとう」

「いえ、大した事もできなくてすいません」

クローゼはエステルに笑顔で返した。

「でも、1人で大丈夫？」

「はい、剣とアーツを少々使えますから」

シンジが尋ねると、クローゼは制服のポケットから伸縮式の突剣と戦術オーブメントを取り出した。

それを見たエステル達はおおっ、と歓声を上げた。

「クローゼ君はこのギルドに学園や孤児院からの依頼を連絡しに来てくれるんだよ。特に孤児院は通信機が無いからね、助かっているよ」

「そんな、それほどでも……」

ジャンの言葉にクローゼはやりわりと首を横に振った。
クローゼが帰った後、エステル達は遊撃士としての仕事を始めた。
そして1日が終わり、明日も今日と変わらない1日が始まるとエステル達は思っていた。

<ルーアン地方 マーシア孤児院>

その日は雲一つなく晴れ渡った夜だった。

限り無く新月に近い細い三日月が放つ光りも、優しく闇夜を照らし窓を通して室内へと差し込んで来る。

2階の自分の部屋で眠りに就こうとしたテレサ院長は窓の外に細い筋が浮かび、影が出来ているのに違和感を感じた。

雲にはおかしな形だ。

いや、雲では無い、下の階から煙が上がっているのだ！

そして焦げ臭いにおいが部屋の中に充満する。

テレサ院長は確信した、火事だ！ この孤児院が燃えている！

子供達を助けなければ！

同じ2階にある子供達の部屋に駆け込んだテレサ院長は子供達を叩き起こし、子供達と一緒に階段を降りる。

しかし、1階に降りたテレサ院長は息を飲み、子供達から悲鳴が上がる。

孤児院からの出口である玄関には行く手を阻むように燃え盛る薪まきが山積みにされていたのだ。

「ああ神よ、せめてこの子達の命だけはお助け下さい……」

テレサ院長が祈りをささげたその時、入口付近の建物が扉と燃え盛る薪の山を巻き込んで衝撃を受けたように吹き飛んで消滅した。大きな音に驚いたテレサ院長と子供達が思わず目を閉じる。再び目を開いた時、目の前には水色の髪の少女が立っていた。少女の白い透き通るような肌は月明かりに照らされて、幻想的な美しさを作っていた。

「あなたは、女神さまが遣わした天使様なのですか？」
エイドス

「もう大丈夫」

テレサ院長の質問に少女は答えず、穏やかな笑みを浮かべて話し掛けた。

いつの間にか孤児院を焼いていた炎も消えていた。そして、少女はゆっくりとその場を立ち去って行く。

「オレ達を助けてくれてありがとう！」

クラムが少女の背中に声を掛けた。

少女は振り返えず、その姿は小さくなり闇へと消えた。

「……お待たせ」

マーシア孤児院から立ち去った少女は、街道で待っていた銀髪の少年に声を掛ける。

その少年の肌は少女と同じく白かった。

「さあ、デートの続きをしようか」

少女は少年の言葉に黙ってうなずいて差し出された少年の手を取った。

「ふふ、この力にはこんな使い方もできるんだよ」

手を繋いだ少年と少女は細い三日月が浮かぶ夜空へとフワリと飛び立って行った。

第二十七話 僕にもできること、君にしかできないこと

＜ルーアンの街 遊撃士協会＞

ルーアンの遊撃士協会に来て初めての朝を迎えたエステル達は、突然部屋に現れた受付のジャンに起こされた。

いつもより早い時間に起こされたエステル達は眠い目をこすっている。

「んもー、一体何があったのよ？」

「昨日の夜、マーシア孤児院が火事にあっただけらしい」

「ええっ!？」

ジャンから話を聞かされたエステル達はすっかり目を覚ましたようだ。

アスカは血相を変えてジャンに詰め寄る。

「孤児院のみんなは無事なの？」

「ああ、昨日の夜中、マノリア村に来たみたいだ。今はマノリア村の宿屋の大部屋に居るようだよ」

「よかった」

ジャンの言葉を聞いて、エステル達はホッと胸をなで下ろした。

「それで、君達には火災現場の調査をお願いしたいんだ。何しろ放火の疑いがあるからね」

「放火だって!？」

放火と聞いたシンジ達は顔色を変えた。

「何でそんなひどい事が出来るのよ!」

「犯人を許せないわ!」

エステルとアスカはカウンターを激しく叩いて怒りをあらわにした。

「犯行の証拠は時間と共に失われてしまう、だから出来るだけ早く現場を調べて欲しいんだ」

「解りました」

ジャンの言葉に、ヨシユアはすっかりとうなずいた。

そしてジャンは困った顔になってエステル達にさらに話を続ける。

「連絡をくれた宿屋の主人も不思議がっていたんだけど、テレサ院長達がおかしな事を言っているらしいんだ」

「おかしな事って?」

「”天使”を見たって……」

「天使!?!」

アスカの質問にジャンが答えると、エステル達は驚きの声を上げた。そしてエステル達は難しい顔をして話し合う。

「天使なんて居るのかな?」

「僕達も七耀教会の伝承で聞いたぐらいだよ」

シンジが疑問をつぶやくと、ヨシユアはため息をつきながらそう答えた。

「じゃあショックでそんな幻想を見てしまったのかしら」

アスカはあごに手を当てて考え込む顔をしながらそうつぶやいた。

「だから、現場の捜査が終わったらその足でマノリア村に居るテレサ院長に話を聞いてくれないか」

「慎重に話を聞かないといけないね」

ジャンの依頼を聞いて、シンジは顔を引き締めてそうつぶやくのだった。

仕事着に着替えたエステル達は朝食も取らずに急いで遊撃士協会を出て行った。

ルーアン市の西門を出て、メーヴェ海道に差し掛かったエステル達の目に飛び込んで来たのは、息を切らせて走って来るクローゼの姿だった。

「クローゼ！」

「あっ、エステルさん!？」

エステル達の姿を見たクローゼは少しだけ安心した顔を見せた。

「クローゼもマーシア孤児院の火事の話聞いて来たの？」

エステルが尋ねると、クローゼは表情を固くしてうなづく。

「はい、朝の講義が始まる前に学園長先生から聞かされました。それで、先生や子供達は無事なんですか？」

「ジャンさんがマノリア村の宿屋の大部屋にみんなが居るって言うていたわ」

「よかった……」

アスカが答えると、クローゼは安心して大きく息を吐き出した。

「それで、僕達はこれから孤児院の調査に行く所なんだけど、クローゼさんも来るかい？」

「はい、是非ご一緒させて下さい」

ヨシュアの誘いに、クローゼは力強くうなずいた。

＜ルーアン地方　マーシア孤児院＞

エステル達がマーシア孤児院に着くと、そのひどい様子に驚いた。孤児院の畑の植物は焼き払われ、食料を入れているタルも黒く焼き焦げていた。

さらにミルクを入れた金属缶はなぎ倒されて中身がほとんど出てしまっている。

飼われていたニワトリの姿は1匹も見られない。

……この荒らされようはただ事ではない。

犯人は徹底的に破壊しているように見えた。

焼き焦げた孤児院の建物を見て、クローゼは感情が込み上げてしまったのか涙を流し始める。

「ひどいです、ここは私達の思い出の場所なのに……」

クローゼは膝を折って顔を伏せながら泣き続ける。

シンジとエステルが前に倒れそうなクローゼの体を両側から支えた。ガレキの片付けに来ていたマノリア村の男性達もどう慰めて良いのか遠巻きにして眺めていた。

ヨシュアとアスカはクローゼをシンジとエステルに任せて孤児院の調査を始める。

「辺り一面に漂う油の匂い、これは放火に間違いないわね」

アスカは焼き焦げた畑に鼻を近づけるとそう結論付けた。
同じく畑の地面を見ていたヨシユアもつぶやく。

「足跡から見ても、複数犯の仕業だ」

「そうね、短時間でこれだけ荒らしたんだから間違いなさそうね」

ヨシユアの言葉にアスカもうなずいた。

孤児院の庭の調査を終えたヨシユアとアスカは孤児院の建物の調査を開始したが、玄関の状態を見てとても驚いた。
何かが爆発した跡が残されていた。

玄関の屋根や扉は焼け落ちたのではなく衝撃によって吹き飛んだのだと解ると、ヨシユアとアスカは青い顔になる。

衝動的な犯行に爆弾を使う事はあまりない、つまり計画的なものだと言う事になってしまう。

しかも、爆弾は個人で簡単に作れる物でも無い、組織的な犯人となってしまう。

ヨシユアとアスカは頭に浮かぶ嫌な予感を振り払いながら、入念に孤児院の建物を調べて行く。

すると、火元が爆発地点と別の場所にもある事が解った。

ヨシユアはその火元となる場所を指差してアスカに話し掛ける。

「この壁が特に激しく焼き焦げている。油を建物の周りにまいて、ここに薪を積んで火を付けたんだらうね」

「じゃあ、爆弾は念を入れるために使ったのかしら？」

ヨシユアとアスカは顔を合わせて考え込んだ。

そして、ヨシユアは再び爆発があった地点を調べた後、アスカを手

招きする。

「多分、爆発は消火するために起こしたんだと思う」

「えっ、じゃあテレサさんや子供達を助けるために起こしたって事？」

「うん、爆発のタイミングやベクトルから判断してもその可能性が高いよ」

アスカの質問にヨシユアは強くうなずいた。

「それじゃあ、爆弾を持ってきたのは”天使”って事になるわね」

”天使”は伝承の存在かもしれないけど、救援に駆けつけた人物が居る事は確かだよ」

顔を突き合わせて考えたアスカとヨシユアは調査に一定の結論を出した。

アスカがクローゼの方を見ると、シンジがクローゼの側を離れて孤児院の建物のガレキの中を探している姿が見えた。

現場保存が捜査の基本だと知っているアスカは、シンジの行動を注意する。

「シンジ、勝手に現場をいじらないでよ、犯行の跡が解らなくなっちゃうじゃない！」

「あっ、ごめん。テレサさんやクラム君達に思い出の品物を持って行きたいと思って」

シンジはそう言って、ガレキを動かしたり焼き焦げた物を調べる作業を止めようとしめない。

自分の注意を聞いていないと思ったアスカは再びシンジに向かって怒鳴る。

「現場を荒らすなって言うのが解らないの!？」

「アスカこそ、思い出の品物だけでも取り戻したいって言うクローゼさんやテレサさん達の気持ち解らないのかよ!」

シンジがアスカに怒鳴り返すと、クローゼは驚いて顔を上げてシンジとアスカに訴えかける。

「別にいいんです、私のワガママなお願いなんですから!」

しかし、シンジは首を横に振り固い表情をしてゆっくりと話し始める。

「……僕は母さんの顔を知らないんだ。父さんが写真とか形見の品を全部捨ててしまったからね」

「そんな!」

クローゼが驚きの声を上げてシンジを見つめた。

アスカもエステルもヨシュアもこの事は知らなかったので、驚いて息を飲んだ。

「クラム君達はまだ小さかったから、前の院長先生だったジョセフさんの顔を覚えてはいないと思うんだ。それに、クローゼさんやテレサさんのためにも写真や形見の品が残って居たら探してあげたいんだ」

「あ、ありがとうございます……!」

クローゼは涙を流してシンジにお礼を述べた。

そして、エステルもシンジに加勢してガレキを退け始める。

「よし、あたしも協力するわ！」

「こらっ、証拠がダメになっちゃうって言ってるでしょう!？」

エステルに向かって怒鳴るアスカの肩にヨシユアが手を置いてなだめる。

「もう調査は終わったんだから、良いんじゃないかな」

「わ、解ったわよ」

ヨシユアに言われて、アスカは黙り込んだ。

そんなアスカの姿を見たシンジは面白くない顔をしてつぶやく。

「僕の言う事は聞かないで、ヨシユアの言う事なら聞くんだね……」

しばらく搜索を続けても、孤児院にあった物はほとんど焼き焦げていて持ち帰れるようなものは見つからなかった。

ガレキを退ける作業に疲れたアスカがついに音を上げる。

「あーっ、もう！ ガレキを退けても出て来るのは焼き焦げたガラクタばかりじゃない、いい加減諦めましょうよ！」

しかしシンジはアスカの言葉に首を横に振って探し続ける。

そして何かを閃いたように明るいい顔をして大きな声で言う。

「そうだ、きつと重いガレキに押し潰されて地面に埋まって居れば、焼けずに無事な物があるかもしれない」

「アンタって本当に頑固ね。あのロボット騒ぎの時だってさ、脱出カプセルを探そうとしていたし」

アスカがあきれ顔でため息をついたが、シンジは無視してガレキを

片付けている男性達に声を掛けた。

シンジに声を掛けられた男性達は、シンジが大きめのガレキを指差すのを見て、困った顔になった。

しかしエステルも協力を申し出ると、その場に居た全員で力を合わせて大きなガレキを退ける事になった。

そしてガレキを退けた後の地面を掘り起こすと、土の中に埋まっていた写真立てを見つける事が出来た。

写真立てはガラス部分にひびが入っているだけで、中の写真はほとんど無傷だった。

それはテレサ院長の夫で、数年前に事故で亡くなった前院長のジョセフの写真だった。

「ああ、良かった……」

クローゼは目を閉じてその写真立てを胸に抱きしめた。

「大切な物が見つけられて良かったね」

「はい、ありがとうございますシンジさん！」

「そんな、みんなが協力してくれたおかげだよ」

クローゼにお礼を言われたシンジは照れ臭そうにそう返した。

アスカはますます不機嫌な顔になる。

「ほら、現場の調査が終わったんだからテレサさんに話を聞きに行くわよ！」

「アスカ、一体何をそんなに怒っているのさ？」

「ふんっ！」

アスカはシンジを思いっきりにらみつけるとさっさと歩き出してしまった。

シンジは首をかしげながらアスカの後を追いかける。

「ねえヨシユア、アスカはどうして怒っているの？」

「さあ、女心は複雑だとしか言いようが無いね。僕達が口を挟む事じゃないよ」

エステルは質問にヨシユアはそう答えて、クローゼと3人でアスカとシンジから少し後れて歩くのだった。

＜ルーアン地方 マノリア村＞

エステル達がマノリア村の宿屋に到着すると、1階のロビーでは火事のウワサ話で持ちきりだった。

居ても立ってもいられなくなったエステル達はすぐに2階への階段を駆け上がり、大部屋の扉を開けた。

クローゼは部屋の中に居る元気な孤児院の子供達の姿を見ると目を潤ませる。

「みんな、無事だったのね……」

「クローゼ姉ちゃん……」

クラム達も嬉しそうにクローゼに駆け寄って抱きついた。

エステル達は落ち着いている孤児院の子供達の様子を見て不思議に思った。

火事にあっただのだからもつと怯えているのかと思ったのだ。

「クローゼお姉ちゃん、あたし達、天使様に助けてもらったの」
「凄い綺麗なお姉ちゃんだったのー」

孤児院の子供達は嬉しそうにクローゼに話した。
テレサ院長が穏やかな口調でエステル達に説明を始める。

「私達が火事に巻き込まれそうになった時に、助けてくれた方が居るのです。信じられない事にあなた達と同じ年頃の女の子でしたわ」
「本当に天使を見たんですか？」

「ええ、本物の天使様かどうかは判りませんが、私達にとっても優しい微笑みを見せて下さいました」

ヨシュアの質問にテレサ院長はウツトリとした表情を浮かべてそう答えた。

もう少し詳しい話をテレサ院長から聞こうとした所で、エステルのお腹の虫が盛大な鳴き声を出す。

「ねえ、あたし達、朝ご飯も食べて無かったし、下の食堂で何か食べない？」

「そうですね、ではこの場は私にお金を出させて下さい」

エステルの提案にクローゼはうなずいてそう申し出ると、シンジは自分の分は自分で出すと遠慮をした。

しかし、クローゼはじつとシンジの目を見つめて訴えかける。

「お願いです、シンジさんのおかげで私達は救われたんです、お礼をさせて下さい」

「う、うん」

クローゼの意思の強さに圧されてシンジがうなずくと、クローゼは嬉しそうな顔になった。

宿屋の食堂で食事をしながらテレサ院長や孤児院の子供達から”天

使”の詳しい特徴を聞いたエステル達。

”天使”はエステル達と同じ位の少女で水色の短めの髪、白い肌で赤い瞳の色をしていたと言う。

話を聞いたアスカとシンジは頭の中にレイを思い浮かべた。

しかし、この世界に来たのは自分達2人だけのはず。

もしレイであればシンジに声を掛けるはずだとシンジは信じていたので、その考えを否定した。

シンジとアスカはお互いの考えが同じかどうか聞きたかったが、何となく話しにくい雰囲気だった。

そんな時、宿屋の入口に姿を現したのはダルモア市長だった。

ダルモア市長はテレサ院長と孤児院の子供達の姿を見ると、嬉しそうな声を上げる。

「おお、みんな無事だったかね！」

「はい、ご心配をおかけしました」

テレサ院長はダルモア市長に深々と頭を下げた。

「まったく、ジョセフの愛した孤児院がこんな事になってしまおうとはな」

ダルモア市長は悲しそうな顔をしてため息をついた。

そしてダルモア市長はテレサ院長達と一緒に居るエステル達に気が付いて声を掛ける。

「確か君達はこの事件の調査をしてきているそうだね、調査状況を聞かせてくれないか？」

「はい、では2階の部屋で……」

返事をしたヨシユアはエステルとシンジにテレサ院長と孤児院の子

供達、クローゼを任せてヨシユアとアスカ、ダルモア市長の3人で2階の大部屋へと向かった。

2階の大部屋でヨシユアとアスカはダルモア市長に孤児院での調査結果を話した。

テレサ院長達が目撃したと言う”天使”に関しては、ダルモア市長に詳しい事を話さなかった。

逆にダルモア市長を混乱させてしまうと思ったし、何となく話す気持ちになれなかったのだ。

2人の報告を聞いたダルモア市長は深いため息をつく。

「何と、そんな事になっていたとは……」

「犯人は複数犯だと思われませんが、犯行時間が夜中だけあって目撃者も居ない状況です」

「せめて、テレサさんと孤児院の子供達を助けた人が見つかれば、その人から聞けるかもしれませんけど……」

ヨシユアとアスカの言葉を聞いて、ダルモア市長は持っていた鞆からバンダナのようなものを取り出す。

「実は孤児院の近くでこれを拾ったのだが、手がかりになるかな？」

「このバンダナがどうかしたの？」

「ほら、昨日の昼間に酒場でエステルに突っかかって来たやつらが頭に巻いていたじゃないか」

バンダナを見たアスカが疑問の声を上げると、ヨシユアはそう説明した。

「そうだ、あの酒場にたまっている彼らには手を焼いているのだよ」

ダルモア市長はそう言って深いため息をついた。

「ヨシュア、どう思う？」

「うーん、他に手がかりが無い以上、彼らを当たってみようか」

アスカとヨシュアが話していると、1階から騒がしい音が響いて来た。
た。

何が起こったのかとドアを開けると、階段の方からクラムの大声が聞こえて来る。

アスカ達は急いで階段を降りた。

すると、宿屋の1階の食堂ではシンジがクラムを抱き止めていた。

「離せシンジ兄ちゃん、俺はあいつらをやっつけに行くんだ！」

「ダメだ、君を行かせるわけにはいかないよ」

暴れるクラムをシンジは後ろから必死に抑えつけようとしていた。
その姿を見てアスカがエステル達に尋ねる。

「何があったの？」

「クラム君が2階に登って、あなた達の話聞いてしまったみたいなんです。それで、孤児院を燃やした犯人をやっつけるって怒り出してしまっ……」

アスカの質問に、クローゼが困った顔をして答えた。

「すまない、私が余計な事をしてしまったようだ」

「別に、市長さんは悪くないわ、善意で言ってくれた事なんだし」

頭を深々と下げたダルモア市長にアスカはそう言った。

「テレサ先生を、俺達の母ちゃんを泣かせるやつらは許しちゃおけ

ないんだ!」

拳を握りしめてそう叫ぶクラムに向かって、シンジは優しく話し掛ける。

「君が怪我をしたって知ったら、テレサさんをもっと泣かせてしまう事になるけど、それで良いの?」

「うっ、そ、それは……」

クラムは自分を心配するテレサ院長の顔を見つめて言葉を詰まらせた。

「それに、孤児院に放火した犯人をこらしめる事は僕にも出来るけど、テレサさんの側に居て守ってあげる事は君にしか出来ないんだ」
「分かったよシンジ兄ちゃん」

クラムがシンジの言葉にうなずいて体の力を抜いて大人しくなると、テレサ院長やクローゼ達はホッとした表情を浮かべた。

「シンジさんのおかげでクラムが無茶をせずにすみました」

「いえ、僕はそんな……」

テレサ院長とクローゼ、クラムの3人にお礼を言われたシンジは顔を赤くして照れ臭そうに答えた。

「では、僕達はこれからルーアンの街に戻って彼らから話を聞いてみようと思います」

「よろしくお願いします」

ヨシユアがテレサ院長に向かってそう言うと、テレサ院長は深く頭

を下げた。

テレサ院長と孤児院の子供達はマノリア村の門までエステル達を見送ってくれた。

「シンジ兄ちゃん、絶対に孤児院をひどい目にあわせたやつらをやっつけてくれよ！」

「うん、約束するよ」

クラムとシンジは固い握手を交わしたのだった。

ダルモア市長とはルーアンの街まで同行する事になった。

マノリア村からルーアンの街に向かう途中で、アスカは憂鬱な顔をしてポツリとつぶやく。

「アタシは……自分勝手な振る舞いばかりしているけど、シンジに守ってもらう価値はあるの？」

そのアスカの声はシンジの耳には届かなかった。

＜ルーアンの街 カジノバー・ラヴァンタル＞

ルーアンの街に着いたエステル達は、酒場の前でダルモア市長と別れた。

「それでは、酒場での事情聴取は君達に一任するよ」

「はい、分かりました」

ダルモア市長にシンジはしっかりとうなずいた。

「今の段階では任意で話を聞きただけだからね、注意してよ」
「何であたしとアスカを見ながら言うのよ？」

エステルは少し不機嫌な顔をしてヨシユアに答えた。

そして、酒場の中へと入ったエステル達はバンダナの持ち主である青年グループ《レイヴン》と対面した。

昼過ぎだと言うのに、彼らは酒を飲んでグダグダとしていた。

「だから、アンタ達が昨日の夜どこに居たか話せて言ってるの！」
アスカが大声で尋ねても、レイヴンの青年達は無視して答えなかった。

「お嬢ちゃん、こいつらは昨日の夜もここで酒を飲んでいたんだ」
「全員ずっと居たとは限らないでしょう？ アンタが目離れた事もあるかもしれないし」

マスターに言われて、アスカはそう反論した。
そしてエステルもバンダナを握りしめてアスカに加勢する。

「そうよ、じゃあどうして孤児院の近くにこのバンダナが落ちてるのよ！」

「孤児院に放火した犯人は自分達だって認めなさいよ、この卑怯者！」

「なんだと！」

エステルとアスカが2人で叫ぶと、レイヴンの青年のうちの1人が怒った顔で言い返した。

こうならないように店に入る前に注意をしていたのに。
ヨシユアは天を仰いでため息をついた。

すると、店の隅に座っていた女性客から声が上がる。

「何ようるさいわね、ゆっくりと食事もできないじゃないの」

「ふん、これからこのガキ共にお仕置きをしてやるんだ、邪魔するんじゃねえ！」

「アタシ達ガキですって!? アンタ達こそ、仕事しなさいよ！」

女性客の言葉にレイヴンの青年がそう答えると、アスカはさらに怒った顔で叫んだ。

「お仕置きですって? 面白そうね、私も参加させてもらおうかしら」

女性客はムチを鳴らしてからゆっくりとエステル達の方に振り返った……。

第二十八話 ドキドキ学園生活！

くルーアンの街 カジノバー・ラヴァンタル>

「お仕置きですって？ 面白そうね、私も参加させてもらおうかしら」

「ふん、あんたに手伝ってもらうまでもないさ」

レイヴンの青年は女性の言葉にそう答えた。

「うわっ！」

その直後に悲鳴を上げて倒れたのはエステル達に詰め寄っていたレイヴンの青年の方だった。

女性の放ったムチが青年を直撃したのだ。

「てめえ、何しやる！」

「何って、お痛が過ぎる子にお仕置きをしてあげたのよ」

そう言って薄暗い酒場の隅から姿を現したのはボース地方でエステル達と別れたシェラザードだった。

「シェラ姉！」

シェラザードの姿を見たエステルは嬉しそうな声を上げた。

「シェラ姉は、パパと一緒に帝国に居たんじゃないの？」

「そうだったんだけど、事情があってね」

アスカが尋ねるとシェラザードはそう答えた。

そして、ムチを構えてレイヴンの青年達の方を見据えて言い放つ。

「積る話は、この子達にたっぷりとお灸を据えた後にしましょうか、ウフフ……」

「ひ、ひええっ!」

シェラザードの鋭い眼光ににらまれたレイヴンの青年達は冷汗を流しながら悲鳴を上げた。

「さあ、あんた達、知って居る事を洗いざらい吐いてもらおうじゃないの。吐くのが胃液しかなくなるぐらいに空っぽになるまでね!」
「あの、お客さん店の中で暴力行為は止めて……うわっ!」

危険を感じて止めようとした店のマスターが振り下ろされたムチに驚いて後ずさった。

もうすっかりレイヴンの青年達の酔いは覚めてしまい、エステル達も手出しができないシェラザードのワンマンステージが始まった。
シェラザードはムチを使って脅しつけながら、孤児院の放火に関する質問を浴びせる。

余計な口答えをした者には容赦無くムチの一撃が飛んだ。

「遊撃士が暴力を振るっていいのかよ!」

「うるさいわね、こうでもしないとあんた達は本当の事を話さないでしょう?」

そんなレイヴンの青年達とシェラザードのやりとりを見て、エステル達はシェラザードの真の恐ろしさを知った。

遊撃士になるための指導を受けている時、シェラザードはムチを使ってエステル達を脅しつける事はしたが、ムチをエステル達の体に

叩きつける事は決してしなかったのだ。

見ているエステル達も恐怖を感じるような尋問の時間が終わると、シェラザードはため息をつく。

「これだけキツイ目にあわせても、放火への関与を認めようとしな
いなんて……きつとこいつらは放火の犯人じゃないわ」

「ええっ、でも証拠があるじゃない！」

アスカはそう言って、ダルモア市長から受け取ったレイヴンのメン
バーの証であるバンダナを突き出した。

しかし、シェラザードは厳しい顔をして首を横に振る。

「それはあくまで状況証拠よ。さらに、この酒場のマスターの他に
この店で飲んだくれていた連中を見たって目撃者が現れば、アリ
バイは完璧だわ」

シェラザードの言葉を聞いたアスカは悔しそうに肩を落とした。

レイヴンの青年達の尋問を終えたシェラザードはエステル達を伴っ
て遊撃士協会へと戻る事にした。

酒場のマスターは引きつった笑みを浮かべて、今回のシェラザード
の食事代を無料にすると申し出ると、シェラザードは満足した笑み
を浮かべて「また来るわ」と言って酒場を後にした。

その後マスターとレイヴンの青年達によって店の前に大量の塩が撒
かれたのだった。

＜ルーアンの街 遊撃士協会＞

「そっか、ダルモア市長が言っていたロレント支部出身の凄腕遊撃

士ってシェラ姉の事だったのね」

「ははっ、そう言う事だったんだよ」

アスカのガツカリしたつぶやきに、受付のジャンは愉快そうにそう言った。

「まさか、自分達の事かもしれないと少しでも思ったのかしら？
それはうぬぼれてものよ」

「僕達はまだ正遊撃士のみなさんの足元にも及びませんからね」

「何よシンジったら、いい子ぶりっこしちゃってさ」

シンジの言葉にアスカはつまらなそうにそう言った。

「でも、レイヴンが犯人じゃないとするとまた最初から犯人探しをしなければいけないね」

「そうね、とりあえず何から始めた方が良さと思う、シェラ姉？」

「その事だけど、あなた達にはこの放火事件の捜査から外れてもらうわ」

ヨシユアのつぶやきをきいたエステルがシェラザードに質問すると、シェラザードはそう言い放った。

「ええっ、どうして!？」

納得がいかなかった感じで、アスカはシェラザードに詰め寄った。

「あなた達は感情的になりすぎているのよ。だから冷静な判断が出来るずに早急に犯人を決めてしまおうとするミスを犯す。捜査の足を引っ張るだけだわ」

「だけど僕達も、放火をした犯人を許してはおけないんです。クルマ君と約束したんだ、僕達が犯人をこらしめるって」

正論を説くシェラザードだったが、シンジが強い意志を示してなおも食い下がった。

シェラザードはシンジの成長を内心喜んだが、それをひた隠しにして受付のジャンに尋ねる。

「正遊撃士と準遊撃士の希望する仕事がかち合った時、優越されるのはどちらと規約で定められているのかしら？」

「それは正遊撃士だね」

ジャンはため息をつきながらシェラザードにそう答えた。

「だけど、アタシ達にも分担できる捜査はあるんじゃないの？」

「悪いけど、この事件は私が追っている事件ヤマと関係があるのかもしれないのよ。だから余計な手出しをして欲しくないの」

アスカの申し出も、シェラザードは固く拒否する姿勢を見せた。

「もしかしてその事件が帝国からこちらに戻って来た原因ですか？」

「そう、カシウス先生に頼まれて追跡調査をしているのよ」

ヨシユアの質問に、シェラザードはそう答えた。

カシウスの名前が出て来た事で、シェラザードの抱える事件の大きさを知ったエステル達は引き下がるしか無かった。

悔しそうな顔をするエステル達に、受付のジャンが声を掛ける。

「そうだ、君達に新しい仕事があるんだ」

「どんな仕事ですか？」

「今月の末に行われる、ジェニス王立学園の文化祭を手伝って仕事さ」

ヨシユアに尋ねられたジャンはそう答えた。

「それって、遊撃士の仕事なの？」

「地域の住民と交流を図る事も遊撃士の立派な仕事さ」

あきれた顔でぼやいたアスカをジャンはなだめた。

ジャンの言葉にヨシユアは納得したようにうなづく。

「広報活動みたいなものですね」

「それに文化祭では孤児院の子達を招待して元気付けようと、クローゼ君も頑張っているようだから、君達もぜひ協力してあげて欲しい」

「でも、僕は放火した犯人をこの手で見つけたい気持ちもあります」

ジャンの説明を聞いたシンジは未練を残した様にそう言うと、ジャンはシンジの目をじっと見つめて話す。

「孤児院を放火した犯人を見つける事はシェラザードにだって出来る。クローゼ君に協力して孤児院の子供達を楽しませる事こそ君にしか出来ない事だろう？」

「そうですね」

今度こそシンジは納得したようにうなずいたのだった。

<ルーアン地方 ジェニス王立学園>

遊撃士協会からジェニス王立学園に向かったエステル達は、学園の正門で待っていたクローゼと合流する。

「学園長先生から皆さんが来るって連絡を受けて、すぐにでも会いたくなって授業を抜け出してここまで来ちゃいました」

クローゼは「皆さん」と言っているが、その瞳はじっとシンジを見つめていた。

アスカはそのクローゼの表情を見抜いて不機嫌な顔になる。

「授業をサボるなんて、不真面目よ」

「先生にお願いして、皆さんを迎えに行く許可は出させて頂いたんです」

「それなら問題無いね」

何が「問題無い」よ、とアスカは心の中でつぶやいた。

クローゼはエステル達を学園の中へと案内する。

正門と校舎の間にある広い校庭は授業中だと言う事で人氣が全く無かった。

校舎に足を踏み入れると、廊下も教室から漏れ聞こえて来るわずかな声以外静まり返っている。

エステル達は私語の1つも出来ないぐらいに緊張した。

クローゼが学園長室のドアをノックすると、中から老人の声が返って来た。

「失礼します」

クローゼはそう言って学園長室のドアを開け中に入る。

エステル達もクローゼに続いて部屋へと入った。

「学園長先生、遊撃士の方々がお越しになりました」

「いやあ、その若さで遊撃士と言うのは大したものだ」

立派な椅子に腰かけて、博士帽を頭にかぶった白髪と長い白い髭を生やした老人、コリンズ学園長はエステル達の姿を見て感心したようにつぶやいた。

「初めまして、学園長先生。あたし達遊撃士協会から来ました！」

エステルのその言葉を筆頭に、エステル達はそれぞれ自分の名前を名乗った。

コリンズ学園長はエステル達に学園祭が終わるまでの期間、ジェニス王立学園の制服の支給、学食の無料利用、宿泊場所となる寮の提供などを申し出た。

「これだけ厚遇してもらったら、それに応えないといけないね」

ヨシユアはエステルにそう声を掛けた。

「学園長先生、アタシ達、頑張ります！」

「君達が劇を盛り上げてくれる事に期待しているよ」

アスカが力一杯宣言すると、コリンズ学園長は穏やかな笑みを浮かべてそう言った。

そこで授業終了のチャイムが鳴る。

生徒達の歓声が上がリ、すぐに廊下が騒がしくなった。

「それでは学園長先生、私はエステルさん達を生徒会室に案内するので失礼いたします」

「うむ」

「失礼します」

クローゼに続いてエステル達もコリンズ学園長に頭を下げて学園長室を退出した。

廊下に出たクローゼは見かけないエステル達を連れているので注目を集めた。

質問責めにされると思ったエステル達だったが、遠巻きに見ているだけで誰も生徒は声を掛けては来なかった。

行く手を塞いでいた生徒もクローゼが近づくとさっと道を開けた。

エステル達はその様子に違和感を覚えながらもクローゼの後を追って行った。

校舎を出て、隣接するクラブハウス棟へ入ると、1階は学食と購買があった。

クラブハウス棟は2階建てで、2階には部活動用の男女更衣室と生徒会室と資料室があるらしい。

エステル達がクローゼに案内されて生徒会室に入ると、部屋には眼鏡を掛けた少女と紫の髪の少年が机の上の書類を見ながら話し合いをしていた。

2人は部屋に入って来たクローゼ達に気が付くと顔を上げてクローゼとエステル達を見つめた。

「ジル、ハンス君、お待たせ。遊撃士の皆さんを連れて来たわよ」

「うわぁ、4人も来てくれるなんて助かる〜！」

「これで役者不足も解消されそうだな」

クローゼの言葉に、眼鏡少女と紫の髪の少年は歓声を上げた。

そして眼鏡少女は生徒会長をしているジル、紫の髪の少年は副会長のハンスと自己紹介をした。

「今度の文化祭は社会科・人文科クラス共同で歴史劇をやる事になったのよ」

「クローゼ君の提案だね。これは文化祭が盛り上がる名案だと思うたよ」

「そんな、私は孤児院の子達が喜んでくれそうなものを考えただけです」

ジルとハンスに言われて、クローゼは照れ臭そうな顔で軽く首を横に振った。

「それは、孤児院が火事になった後に考えたの？」

「だから、脚本すら決まっていない状況なんだ」

シンジの質問にハンスはごまかし笑いを浮かべて答えた。
ハンスの言葉を聞いたアスカがあきれ顔でため息をつく。

「それじゃ手伝いようが無いじゃない」

「脚本の方も手伝ってよ、ね？」

ジルはアスカ達に拝むように手を合わせて頼み込んだ。
放課後の時間、エステル達は生徒会室に籠って夕方になるまで劇の脚本について話し合ったが、決める事は出来なかった。

「もう、今日の所はこの辺にしましょう。慣れない環境でエステルさん達も疲れただろうし」

「まあ、明日になれば名案が浮かぶかもしれないしさ」

ジルとハンスの提案により、その日の話し合いは打ち切りとなった。
エステル達は学食で夕食を摂る。

この学食では食事の注文にチケット制を使っていて、手元にチケット

トの半分が残るので何を食べたのか後でも判る仕組みだ。

エステル達の食事代が精算されると聞いたハンスはうらやましがる。

「なあ、俺の食事代も払ってくれよ」

「生徒会の役員が不正行為をしないの」

ハンスの言葉にジルがツツコミを入れた。

「クローゼさんも生徒会の役員なの？」

「いえ、私はフェンシング部に所属しながら生徒会のお手伝いをしているんです」

クローゼはヨシユアの質問に答えて、ジルとハンスと親しくなったきっかけになった出来事を話し始めた。

それはサボりの常習犯だった前の生徒会長を捕まえるのに協力した事で、その逃亡劇の内容は面白く、夕食の席を盛り上げるのに充分だった。

「アスカは注文したメニュー」お嬢様プレート”を食べていたが不満そうに声をもらす。

「このハンバーグ、もうちょっと脂っこさが欲しいわね」

「さっぱりとした味で私は好きなのですが、アスカさんの口には合いませんでしたか？」

”お嬢様プレート”を勧めたクローゼが不安そうな顔をして尋ねた。

「アスカはね、シンジが作ったハンバーグじゃないと満足しないんだよ」

「バ、バカっ、ばらすんじゃないわよ！」

エステルがクローゼにそう言うと、アスカは顔を赤くしてエステルに注意した。

「へえ、それはお熱い事で」

ジルもニヤケ顔をしてアスカを見つめた。

「シンジさんは料理をなさるんですか？」

「うん、自己流だけだね」

「それでは、今度は私に料理を教えてくださいませんか？」

「きっとクローゼさんの方が上手いと思うから僕が教える事は無いと思うよ」

クローゼの質問にシンジは照れ臭そうに答えた。

アスカはクローゼが目を輝かせてシンジを見つめているのが気に食わない。

余計な事を言わなければ良かったとアスカは思ったのだった。

そして、エステル達は男子寮と女子寮に別れてそれぞれ眠りにつく事になった。

就寝前、女子寮に居るエステル達はヨシユアとシンジの話で盛り上がった。

「じゃあエステルさんはヨシユアさんとき合っていないのですか？」

「うん、恋人ってよりは弟みたいなものだから」

クローゼの質問にエステルは迷いもせずになぜいた。

その様子にジルが思わず深いため息を吐き出す。

「で、アスカもシンジ君の事を恋人として認めたくないわけだ」

「まったく、女の子に見境なくデレデレするんだから」

「おやおや、それってヤキモチですか？」

「違うわよ、同じ家族として恥ずかしいと思っているだけよ！」

ジルに対してアスカは強く否定した。

そのアスカの言葉を聞いたジルはニヤリとした笑いを浮かべてクローゼに話し掛ける。

「それじゃあクローゼにもシンジ君の恋人になれるチャンスがあるんだ、良かったじゃん」

「そ、そんな、私は……」

「別にアタシはシンジが誰と付き合おうが気にしないわよ」

アスカはこの後、勢いで言ってしまった自分の言葉を激しく後悔する事になった。

その一方、男子寮のシンジとヨシュアとハンスの3人は、劇の脚本について雑談を交わしていた。

王立学園の文化祭にふさわしく、さらに孤児院の子供達を楽しませる事が出来る物。

ヨシュアとハンスは童話や歴史物など様々な話を挙げていたが納得がいかないようだった。

「少し、外の風に当たって頭を冷やして来る」

「僕も行くよ」

そう言って、ハンスとヨシュアは寮の外へと出て行った。

部屋に残ったシンジは昼間のクローゼの笑顔を思い浮かべていた。

シンジは第三新東京市に居る間は、女子に持てたと言う経験は無かった。

レイもシンジの事を好いているようだったが、それは明確な恋とは

違う気がしていた。

リベール王国にやってきてからも、エステルも、その友達のエリッサとティオもシンジに恋愛感情を抱いた様子は見られなかった。

しかしシンジはクローゼから自分に対する好意のようなものを自分を見つめる瞳の輝きや自分に向けられる笑顔から感じ取っていた。

シンジはこの世界に来てからの努力が認められた気がして嬉しい気持ちができる半面、困ってしまった。

今までずっとアスカを見つめ続けて来たシンジは、アスカが照れを隠すために素直な事が言えない事は知っている。

だが、ストレートに好意を示してくれるクローゼも魅力的に感じたのだ。

シンジは、アスカとクローゼの間で心が揺れている自分に気が付いてさらに戸惑った。

自分が好きになる相手を選ばなくてはいけなくなるとは思ってもみなかったのだ。

シンジがそんな事を考えていると、部屋へ慌てた様子のハンスとそれをなだめるヨシュアが戻ってきた。

「聞いてくれシンジ、俺達はさっき”天使”に会ったんだよ!」

「天使だって!？」

ハンスの言葉を聞いて、シンジは驚いて聞き返した。

確かテレサ院長や孤児院の子供達も火事の時に天使を目撃したと言っていたはずだった。

「うん、テレサさんから聞いた特徴と一致していたよ。多分、同じだと思う」

「ヨシュア、本当にあの子を知らないのか? 向こうは嬉しそうな笑顔を浮かべて近づいてきたじゃないか」

ハンスが尋ねると、ヨシユアは首を横に振った。

「暗がりには居た僕を誰かと勘違いしたんじゃないのかな。僕の顔を見た途端、驚いた顔になって立ち去って行ったし」

「ヨシユアに良く似たやつと言えば、シンジか？」

「僕はそんな子は知らないよ！」

ハンスに言われて、シンジは力強く否定した。

「でもなあ、本当にキレイな白い肌をした子だったよ。まるで、月から降りて来た女神様の使いのようだったよ」

「それなら、今頃月に帰ってしまっているかもしれないね」

ハンスの言葉を聞いて、ヨシユアは苦笑しながらツツコミを入れた。

「そうだ、僕が知っている話に『かぐや姫』って話があるんだけど劇の脚本に使えないかな？」

シンジがそう言って日本に伝わる物語であるかぐや姫のあらすじを話すとハンスとヨシユアは興味を持ったようだ。

そして翌日にエステル達にかぐや姫の話をする、アスカはシンジより詳細にかぐや姫の物語の説明をした。

アスカから話を聞いたジルは興奮したように叫ぶ。

「時の権力者を影ながら批判するために書いた物語だなんて、燃える展開ね！」

「ああ、しかも物語の形を採っているから子供達にもわかりやすいな」

ハンスも詳しい内容を知って改めて感心したようにつぶやいた。

「でも、良くそんな話をご存じですね。雰囲気からしてカルバード共和国のお話ですか？」

クローゼに質問されて、東方のカルバード共和国のさらに東の国から伝わる物語だとシンジとアスカはごまかした。

そしてクローゼも賛成し、エステル達が文化祭でやる芝居の演目は『竹取物語』に決まった。

「さっそく今日の授業が終わったら配役を決めたいな」

「それに物語の最後はハッピーエンドに変えた方がスツキリとするわね」

ハンスとジルは朝からやる気に満ち満ちている様子だった。

それからエステル達は学園祭の準備の仕事に専念する事になった。

シェラザードがルーアン支部にやってきた事で余裕ができたと言うジャンの計らいだった。

午前中は教室で授業を受け、昼食を食べ、放課後は劇の練習に励む日々。

エステルとヨシユアは初めて体験する学園生活を新鮮な気分で楽しみ、アスカとシンジは久しぶりの学校生活を懐かしむように満喫した。

そしてエステル達はあつという間に文化祭の日を迎えたのだった。

第二十九話 謎めいた少女レン

＜ルーアン地方 ジェニス王立学園 講堂＞

学園祭の日の早朝、エステル達は演劇が行われるステージの最終チェックを行っていた。

演劇に使うセットや大道具、小道具、照明や衣装の確認を終えるとジルは解散を宣言した。

参加していた生徒達は歓声を上げて講堂を出て行った。

たくさんの生徒達が大道具や衣装作りなどに協力してくれたのだが、役者の方は恥ずかしがって立候補してくれなかった。

長いセリフのある主要な役やナレーションは全て発案者であるジル達ができる事になってしまったのだ。

ジルとハンス、クローゼは生徒会活動で、エステル、ヨシユア、アスカ、シンジは遊撃士の仕事で人と話す事は慣れていたので、舞台に立つ事はそれほどプレッシャーにはならなかったので引き受けた。エステル達はセリフを覚えるために練習を重ねて来ていたのだった。学園祭の開始を告げるアナウンスが流れると、残っていたエステル達も練習を切り上げて外へと出た。

校門が開け放たれ、校内へと入って来る観光客達を見てエステルは興奮した顔で腕まくりをする。

「さあて、まずは全ての屋台を回るわよ！」

「たくさん食べすぎて、衣装が入らなくなってもアタシは知らないわよ」

「大丈夫、その時は気合で何とかするって」

全然自重する気配を見せないエステルに、アスカはため息をついた。

「じゃあ、私達はこれで」

「あら、一緒に学園祭を回るんじゃないんですか？」

ジルがそう言ってエステル達と別れようとする、不思議そうな顔でクローゼが尋ねる。

「俺達は学園長先生に呼ばれているからな。ヨシユア、シンジ、例の件は頼んだぜ」

「ああ、ミステリアスな雰囲気にする美人さんを見つけたら教えるよ」

「まったく、何を頼んでいるんだか」

ハンスにヨシユアが返事するのを聞いて、ジルはため息をついた。

「あの、私は行かなくてもいいのでしょうか？」

「孤児院の子達も学園祭に来るんでしょう、相手をしてあげて」

クローゼにジルはそう答えると、顔をぐっと近づけて耳打ちする。

「それに邪魔が居るとは言え、好きな男の子と学園祭を見て回れるチャンスよ、思い出作りにはぴったりじゃない」

「あっ……」

ジルに言われてクローゼは顔を真っ赤にした。

校舎の方へと駆けて行くジルとハンスを見送ったエステル達は、クローゼに案内されながら屋台を巡る。

「このクレープ美味しい、全種類の味を食べちゃおうかな」

「そんなに飛ばしていると、食べられなくなるわよ」

「5人居るんだしさ、みんなで別の味を注文して分け合えば良いじ

やない！」

アスカに言われたエステルは名案を思い付いたと明るい顔でそう言った。

「でも、クレープはちぎって食べにくいじゃないかな。手がベチャベチャになっちゃうよ」

「別にかじりつけば問題無いわ」

シンジが困った顔でそう言うと、エステルはサラッとそう答えた。すると、クローゼが顔を赤らめる。

「それって、間接キスになってはしませんか……？」

「エステルは無防備過ぎるのよ！」

アスカも怒ってエステルの案は却下された。

「よお、お前達も学園祭に来てたのか」

「あーっ、エステルちゃん達だ！」

エステル達がクレープ屋の屋台で話しているとリベール通信の記者であるナイアルとカメラマンのドロシーのコンビが話し掛けて来た。ロレントの翡翠の塔での取材案内をしたのがきっかけで知り合い、それからボース地方の事件などで顔を合わせていた。

「ん？ お前達、どうしてジェニス王立学園の制服なんて来ているんだ？ 遊撃士を辞めて学園に入学したのかよ」

「うわー、制服姿もキュートですよ！」

エステル達の服装を見て気が付いたナイアルが不思議そうに尋ねた。

ドロシーも笑顔でエステル達の制服姿をカメラに撮っていた。

「いえ、僕達は遊撃士の仕事で学園祭の手伝いをしているんです」

「ふーん、遊撃士ってのはいろんな事をするんだな」

「ナイアルさん達も学園祭の取材ですか？」

ヨシユアが尋ね返すと、ナイアルはニヤリとした笑いを浮かべる。

「ああ、やり手の生徒会長が居るって話を聞いてそっちも取材しようと思うんだが、もう1つ重要な事件^{ヤマ}があつてな」

「何なの？」

「ふっ、それは今の所秘密だ。次回のリベール通信を見て俺のスクープに驚くなよ！」

アスカの質問にそう宣言したナイアルは、ドロシーと共に行ってしまった。

「まったく、ケチよね。ああ言われたら気になるじゃない」

「記者の方ですから仕方無いのかもしれませんがね」

クローゼは不機嫌そうな顔をしてつぶやくアスカをそう言ってなだめた。

ナイアル達と別れたエステル達は、屋台巡りを続けた。

「私が所属させて頂いているフェンシング部では、アイスクリームを作っているんですよ」

クローゼがそう言ってエステル達をフェンシング部の屋台まで案内した。

するとそこには女性客を中心とした行列が蛇のようにうねっていた。

その行列を見たアスカは感心したようにつぶやく。

「ふうん、凄い人気じゃない」

「これは楽しみだね！」

エステルはよだれを垂らさんばかりに舌なめずりしていたが、シンジは消極的な表情でぼやく。

「並んでまで食べたくはないかな、僕は甘い物は好きじゃないし」

「このアイスクリームはさわやかな甘さで、冷たいのに頭が痛くならない特別な製法で作られているんです、是非食べてみてくださいさ
い」

「それなら食べてみようかな」

クローゼはきつとアスカとエステルのためを思ってシンジを説得したのだろうが、アスカはクローゼに説得されてしまうシンジを見てイラだった。

アスカの買い物に付き合わされる時、シンジは待たされる場合には不満そうな顔をするのだ。

「何よ、デレデレして鼻の下を伸ばしちゃって」

行列で待たされることもあり、アスカのいらだちは倍増するのだった。

＜ルーアン地方 ジェニス王立学園 クラブハウス前＞

屋台を回り終えたエステル達が手に入れた食べ物を分配しようとカ

フェテラスに向かうと、アルバ教授と小さな少女と言う妙な取り合
わせの姿があった。

アルバ教授の姿を見つけたアスカが声を掛ける。

「あれ？ アルバ教授、こんな所で会うなんて奇遇ね」

「いやあ、紺碧の塔の調査に来ていたのですが、ちょうど学園祭の
時期と重なりましたので寄らせて頂きました」

「へえ、アルバ教授が学園祭を楽しむなんて、意外な気がするけど」

「社会科の展示を見に行きましたが、学生さんにしては良く調べて
ありました。私は考古学が専門ですが、かなりの物でしたよ」

「ありがとうございます、あそこの展示は私達のクラスの展示なん
です」

アルバ教授に褒められて、クローゼは嬉しそうにお礼を言った。

「それで、そこに居る子はアルバ教授のお子様ですか？」

「いえいえいえ、とんでもない」

ヨシユアに尋ねられて、アルバ教授は首を激しく横に振って否定し
た。

アルバ教授は紫色の髪で白いドレスを着て椅子に座ってアイスを食
べている少女の方を見て困った顔で話し始める。

「どうやらこの子は親御さんとはぐれて迷子になってしまったよう
なのです」

アルバ教授がそう言うと、少女は澄ました感じで首を横に振って否
定する。

「違うわ、レンは迷子じゃないわ。隠れんぼをしているだけなんだ

から」

「なんか、生意気そうな子ね」

落ち着いて物怖じしない少女を見て、アスカはため息を吐き出した。

「えっと、レンちゃんはここにお父さんかお母さんと来たのかな？」

「そうよ、パパとママに連れて来てもらったの」

エステルの質問に、レンは平然と答えた。

それでも心配そうな顔をしてシンジが尋ねる。

「こんな人の多い場所ではぐれちゃって、お父さん達も君を探しているんじゃないのかな」

「だから、レンはかくれんぼをしているの。そしてこのおじさんとデートしているのよ」

「デート？」

「そっ、誘拐だって騒がれたくなかったら、アイスをおごりなさいってね」

「それって脅迫じゃないの」

レンの言葉にアスカはあきれた顔でため息をついた。

「はは、私もこの通り扱いに困ってしまっているのですよ」

アルバ教授はそう言って乾いた笑い声を立てた。

「さあレンちゃん、おじさんを困らせちゃいけないし、パパとママを心配させちゃいけないわ。2人の特徴を教えてくださいるかな？」

「いやよ、パパもママもレンの自由にさせてくれないもの」

エステルが笑顔を向けてレンに声を掛けるとレンはプイツと横を向いて答えた。

そんなレンの姿を見て、クローゼは心配そうな表情でつぶやく。

「もしかして、この子のご両親に辛い目にあわされていて帰り辛いのかもしねえね」

「そんな事無いわ、レンのパパとママはとっても優しいもの」

レンは首を振ってクローゼの言葉を否定した。
すると、怒った顔をしたシンジがレンの目の前に近づく。

「じゃあ、さっさとお父さんとお母さんの所へ戻りなよ」

「ちよっとお兄さん、何をそんなにムキになっているのかしら？」

レンがからかうような口調で答えると、シンジはレンの腕を強くつかんだ。

思わずレンは痛そうに顔を歪める。

「嫌っ、放して！」

「世の中にはお母さんやお父さんに甘えたくても甘えられない子がたくさんいるんだよ。それなのに君はそんなワガママを言っぜいたくて……贅ぜいたく沢すぎるよ」

「シンジ……」

「シンジさん……」

シンジの言葉を聞いたアスカとクローゼは目頭が熱くなった。

「……分かったわよ」

そしてレンも素直に両親の特徴を話し始めた。

レンの両親はクロスベルの貿易商人であり、ルーアンに商談に来たついでに学園祭に娘のレンを連れて来たのだと言う。

しかし、商売上の付き合いのある人達と顔を合わせたため、娘の相手を満足にしてあげられなかった。

それでレンは両親の側から離れて自由に学園祭を見て回りたかったのだと話した。

「でも、この人混みじゃ探すのも苦労するわね」

「手分けして探すしかないと思う」

エステルがぼやくと、ヨシユアはそう言って励ました。

「これは、空から探した方が早そうですね」

クローゼがそうつぶやいて口笛を吹くと、白い鳥が飛んで来てクローゼの肩に止まった。

それを見たレンが歓声を上げる。

「すごいじゃない！」

「これはシロハヤブサですね。ここまで人に慣れているとは珍しい」

白い鳥を見たアルバ教授は感心してつぶやいた。

クローゼは白い鳥をシロハヤブサのジークだと紹介をする。

「ジークは私のお友達のような存在なんです」

エステル達が見つめる前で、クローゼはジークにレンの両親について説明した。

それはまるで人間相手に話すような感じだったのでエステルは驚いてクローゼに尋ねる。

「ジークって人間の言葉が分かるの？」

「完全に分かっているかは分からないのですが、意思を通じ合わせる事はできるんです」

クローゼは笑顔でエステルの質問に答えた。

ジークは鳴き声を上げると人混みの方へと飛び立って行った。

「さあ外はジークに任せて、私達は屋内を探しましょう」

「なるほど、中へは入り辛いわね」

クローゼが提案すると、アスカは納得したようにうなずいた。

「じゃあクローゼさんはジークが戻って来た時にすぐに分かるようにここに居てくれるかな。校舎の中へは僕達が行くよ」

「わかりました」

ヨシュアの言葉にクローゼは了解してうなずいた。

手分けして屋内を探すと言っても男子寮と女子寮は封鎖され、講堂は午後の演劇の時間まで立ち入り禁止だ。

残るは校舎とクラブハウスだけ。

混んでいるとは言え、クローゼを除いたエステル達4人でもそんなに時間を掛ける事無く探せる範囲だった。

しかし屋内ではレンの両親の姿を見つける事は出来なかったので、エステル達はクラブハウス前へと戻った。

すると、クローゼの肩にはジークが止まっていた。

「ジークがレンさんのご両親を見つけたようです」

「本当？」

半信半疑の声を上げるアスカ。

そのアスカの声に答えるかのようにジークは鳴き声を上げ、飛び立って行った。

「ジークが案内してくれるそうです、行きましょう」

クローゼに言われて、エステル達はレンを連れてジークの後を追いかけた。

そしてレンは無事に両親と再会できたのだった。

＜ルーアン地方 ジェニス王立学園 校舎＞

レンの両親が見つかったので、エステル達は学園祭を楽しむ事に戻る。

屋台を回り終ったエステル達は今度は屋内の展示物を見て回る事にした。

すると、正面入口の所でテレサ院長とコリンズ学園長、ダルモア市長が話している場面に出くわした。

その側ではクラム達が少し退屈そうにテレサ院長の話が終わるのを待っていた。

「テレサ先生、来て下さったんですね」

「ええ、私達も楽しみにしていましたので」

テレサ院長はクローゼに穏やかな笑みを浮かべて答えた。

シンジ達は待っているクラム達の退屈を紛らわせるためにお守役を買って出た。

お礼を言ったテレサ院長は安心した表情でダルモア市長達との話を

続ける。

「テレサ先生達は、何の話をされていたんですか？」

「孤児院を失った私達がこれからどうするべきかを話し合ってたのです。いつまでもマノリア村の宿屋の方にご迷惑をおかけするわけにはまいりませんし」

「そうですね」

テレサ院長の答えを聞くと、クローゼは悲しそうな顔をしてうなずいた。

「それで、市長さんの御厚意で王都で暮らせるようになったのです」「えっ？」

テレサ院長の言葉を聞いて、クローゼは驚いて手で口を押さえた。するとダルモア市長はクローゼに事情を説明する。

「王都に我がダルモア家の所有する別邸があつてね。たまに見て回ってくれる管理人は居るのだが、やっぱり住み込みで管理してくれた方が家が痛まないからね」

「でも、それでは市長さんにご迷惑が掛かりませんか？」

「いやいや、草むしりや屋根裏部屋の掃除など、孤児院の子達にも仕事をして頂けるのだから私も助かるのだよ」

クローゼの言葉にダルモア市長は笑顔で首を横に振って否定した。

「でも王都に行ったら、あの修道院はどうなるのですか？」

「私達がダルモア市長の御厚意に対してお返しできるのはあの修道院の土地しかありませんし」

「そんな……」

テレサ院長の答えにクローゼはショックを受けたようだった。気落ちしたクローゼの姿を見て、コリンズ学園長は何かを思いついたような表情になる。

「急用を思い出したので失礼するよ」

コリンズ学園長はそう言うのと慌てた様子で立ち去って行った。

「学園長先生、どうかなされたんでしょうか？」

「さあ、分かりません」

ダルモア市長に尋ねられて、テレサ院長はわけが分からないと言った感じで首を横に振った。

「それで、いつルーンを発たれるのですか？」

「今日の学園祭から宿に戻ったら、出発の準備を始めようと思います。そして明日には王都に行く予定です」

「そ、そんなに早くですか!？」

クローゼは大きな声を上げた。

シンジと話していたクラム達も驚いてクローゼの方を見た。そして、涙を流し始めたクローゼに心配そうな顔で尋ねる。

「クローゼ姉ちゃん、どうして泣いてるんだよ!？」

しかし、クローゼは顔を伏せて泣いてばかりでクラムの質問に答えられない。

騒ぎ始めたクラム達にエステルが笑顔で声を掛ける。

「そうだ、あたし達午後から講堂で演劇をやるんだよ。みんな、見て来てくれるよね？」

「エステル姉ちゃん達、劇をするの？」

エステルの言葉に驚いてクラムはエステルに尋ねる。

クラム達は目を輝かせて「戦いのシーンはあるの？」「キスシーンはあるの？」などとエステルに質問を浴びせた。

そして、エステル達がクラム達と話している間にクローゼは気持ちを落ち着かせる。

「すみませんテレサ先生、取り乱してしまって」

「ごめんなさいね、このようなタイミングで話してしまった私も悪かったわ」

「いえ、もう大丈夫です」

テレサ院長もクローゼに謝ると、クローゼは落ち着いた様子で首を横に振った。

そして、テレサ院長はクラム達と共にエステル達に手を振って別れを告げ学園祭の人混みの中へと消えて行った。

「では、私も行くでしょう」

「ありがとうございます」

クローゼはダルモア市長に頭を下げてお礼を言った。

テレサ院長が立ち去った方向を心細い表情で見つめるクローゼにシンジが励ましの声を掛ける。

「クラム君達を楽しませる演劇を精一杯やる。それが僕達にしかできない事だし、僕達がやらなければいけないことだよ」

「そうですね」

シンジの言葉にクローゼは笑顔でそう答えた。
アスカはそんなシンジとクローゼの仲の良い姿を見て胸がムカついて来るのを感じた。

シンジの優しさはアタシの物だったのに。

エステルは自分にとっても大切な家族だからまだシンジが優しくしているのに耐えられた。

だが、クローゼは赤の他人だ。

そしてエステルはシンジに恋愛感情を抱かないだろうと安心してアスカは見ていられたが、クローゼは明らかにシンジに好意を持っている。

しかもシンジはクローゼの気持ちに気が付いていながらシンジに優しくしている。

もしかして、シンジはクローゼの気持ちを受け入れるつもりなのではないかと考えると、アスカは胸が締め付けられる思いがした。

「アスカ」

「アタシは平気だから」

ヨシュアに声を掛けられて、アスカは歯を食いしばりながらそう答えた。

強がっているアスカの体が細かく震えている。

ヨシュアは落ち着かせるためにアスカの手を握ろうとして差し出した自分の手を引っこめた。

アスカが一番慰めて欲しい相手はシンジのはずだ。

しかしシンジはクローゼと話し込んでいてさすがのようにシンジを見つめるアスカの視線に気が付かない。

自分に打つ手が無いと知っているヨシュアは深いため息をつくのだった。

第三十話 **Falling from the moon** (月から舞い降りた)

※この演劇は「竹取物語（かぐや姫）」を参考にしています。（話の内容は変えてあります）

＜ルーアン地方 ジェニス王立学園 講堂＞

これから始まる演劇のために暗くされた講堂。
開演のブザーが鳴り、幕が引き上げられる。

観客の前にステージ上の林の中に見立てられたセットがさらされた。
ステージの中央には目立つように黄金の樹が置かれていた。

黄金の樹を見た観客から歓声と拍手が起こった。

そして斧を持ったハンスがスポットライトを浴びながら舞台袖から歩いて出て来る。

木こりは中年の男性と言う設定なので、ハンスは付けひげを付けていた。

男子生徒が出て来ると同時にアスカのナレーションが入る。

「昔ある所に、木こりのハンスと言う男が居ました。彼は木を切り倒して様々な木工品を作る事で生計を立てていました」

木こり役のハンスが黄金の木に近寄ると、根元には赤ん坊をイメージした人形が置かれていた。

「おや、この子は……?」

ハンスは赤ん坊を拾い上げて周囲を見回すが、辺りに人の姿は無い。

困り果てたハンスはその赤ん坊を家へと連れて帰る事にした。

「きっとこの赤ん坊は子供が出来ない私達夫婦を憐れんで、女神様エイドスが授けて下さったに違いないわ」

ハンスから話を聞いた妻のジルは、自信たっぷりにそう言い切った。

「どうしてそう思うんだい？」

「だって、あなたがいつも木を切りに行く林の中に居たんでしょう」
「なるほど、それもそうだな」

ジルの話にハンスも納得したようにうなずいた。

そして再び状況を説明するためのアスカのナレーションが入る。

「拾われた赤ん坊は、夫婦にとっても可愛がられて育てられました。
そしてハンスが木を切りに山に入る度に、黄金の樹が生えているようになりました。金色に輝く珍しい木工品を売ってハンスの家はだんだんとお金持ちになって行きました」

ナレーションが終わると、ステージを照らすライトが消えてセットや配役の変更が行われた。

ライトが点いた時、大きな屋敷の室内のセットの真ん中には白いドレスをクローゼが立っていた。

そのクローゼの姿に観客達から再び拍手が巻き起こる。

そして、アスカのナレーションで場面の解説がされる。

「16年の時が経ち、赤ん坊はとても美しい少女に成長しました。
養夫婦は少女を家の外に出さないほどに大切にしていました。少女は高名な神官に格調高い名前を付けてもらいましたが、それを短くして”クローゼ”と呼ばれる事を望みました」

ステージでは、クローゼの成人を祝って宴会が行われていた。養父のハンスと養母のジルもとても嬉しそうにしている。

「クローゼの美しさの評判は世間に広まり、身分の高い人も低い人もクローゼに恋焦がれ、妻にしたいと思うようになりました。しかし、クローゼは屋敷の奥深くの部屋に隠れて滅多に人前に姿を見せません。城壁をよじ登って中を覗き込んでも、クローゼの姿を見る事は出来ませんでした。みんなクローゼの姿を一目でも見ようとハンスの屋敷の周りで見張っていました。中には長い間泊まり込む人まで居ました。屋敷に仕える人達にクローゼへの伝言を頼んでも取り合ってくれません。本気でクローゼの事を好きではなかった人達は、そのうち諦めて帰ってしまいました」

アスカのナレーションの間、ステージは暗転して場面の切り換えが行われた。

ステージが明るくなった時、ハンスとジル、クローゼと向かい合う形で立っていたのはエステルとヨシユアの2人だった。演じる役のためにエステルは男装していた。

状況を説明するためにアスカのナレーションが始まる。

「ですが、2人の貴公子だけはクローゼの事を諦めませんでした。その2人の姿を見て、ハンスとジルはクローゼに言いました。私達はこのままで育てる事はできた、しかし、私達も年老いてしまった。いつまでも一緒に居てあげたいが、人間いつかは死んでしまう、それは叶わない。ここは一つ信頼できる男性と結婚して私達を安心させて欲しいと。育ててくれた恩もあるので、クローゼは断りきれませんでした。それにクローゼは自分の実の子供のように可愛がってくれた養父母の事が好きだったのです。クローゼは2人の貴公子と会う事にしました」

アスカのナレーションが終わると、立っていたエステルにスポットライトが当てられた。

エステルはクローゼに向かって礼儀正しく一礼すると、自己紹介を始める。

「私はブライト家のエリオットと申します。今日はクローゼ様にお目にかかれて光栄です」

次に隣に立っていたヨシユアにスポットライトが当てられた。

ヨシユアは髪をかきあげる仕草をして、少し気障きせうな感じでクローゼに一礼すると、同じく自己紹介を始める。

「僕はアストレイ家のヨシユアでございます。今日の出会いに感謝致します、麗しきクローゼ様」

自己紹介を終えたエリオット（男装したエステル）とヨシユアの2人は、クローゼの前で自分の特技をアピールし始めた。

エステルが見事な棒術を披露すると、観客達から拍手と歓声が起こる。

そして、その興奮が冷めやらぬうちにヨシユアはハーモニカで『星の在り処』を吹き始めた。

柔らかな優しい旋律が講堂の中を満たすと、観客達は静かに目を閉じてヨシユアの演奏に聞き惚れた。

演奏が終わると、今度はしっとりとした感じの拍手が起こった。アピールを終えたヨシユアは、クローゼに向かってひざまずいて告げる。

「どうです、クローゼ様。私の愛の深さが分かっていたただけでしようか」

「何を言う、クローゼ様への愛の強さなら私も負けてはいない!」

怒った顔のエステルが話に割って入った。

問い掛けられたクローゼは困った顔でエステルとヨシュアに答える。

「私にはあなた方のどちらの方が優れているか、劣っているかなんて決める事は出来ません……」

すると、今度はヨシュアとエステルの間で言い争いが始まる。

「それでは、古来よりの作法に則り決闘のつと デュエルで勝負を決めることに致しましょう」

「望む所よ、どっちが強いか見せてやろうじゃない!」

すっかりいつもの口調で話してしまっているエステルに、観客からも失笑がもれた。

しかしエステルとヨシュアの戦いが始まると、緩んだ空気は吹き飛び、講堂は緊迫した空気に包まれた。

遊撃士だからこそ出来る本物の武器を使った真剣勝負。

短い双剣を持つヨシュアはエステルの懐に斬り込もうとする。

エステルは長い棒を振り回してヨシュアを近づけないようにする。

お互いの武器がぶつかる音が講堂に響き渡る度に、観客はゴクリとつばを飲み込んだ。

ヨシュアは左右に揺さぶりを掛けてエステルの側に近づこうとするが、エステルは間一髪でヨシュアをはね退ける。

戦いが長期化すると、今度はヨシュアの方が息を切らし始めた。

エステルの振りまわす武器がヨシュアを追いつめる!

しかし、2人の戦いはクローゼの声によって止められる。

「止めてください、これ以上私のために争わないで下さい!」

クローゼに言われたエステルとヨシユアは武器を収めてクローゼの方を向いた。

ジルが心配そうな表情を浮かべてクローゼに尋ねる。

「そうは言うがクローゼ、お前の相手を決めないわけにはいかないんじゃないかい？」

「それでは、私が望む物を持って来て下さい。それを見て、私は結婚のお相手を決めましょう」

「なるほど、それは名案だ。それなら恨みっこなしだ」

クローゼの案に、ハンスも強く賛成をした。

話をハンスから伝え聞いたエステルとヨシユアも納得したようにならずいた。

納得したエステルとヨシユアの様子を見てクローゼはエステルに向かって話す。

「それでは、エリオット様には霧深い山に潜んで人々を恐れさせている竜を退治して、その竜の角を取って来て頂きましょう」

「……竜ですか？」

クローゼの言葉を聞いて、エステルは驚いて目を見開いた。

「私の夫となるには勇気を示して頂かなければなりません。それとも、竜が相手では恐いのですか？」

「そんな事はありません、竜なんか簡単に倒してご覧に入れましょう」

クローゼが尋ねると、エステルは堂々と胸を張って答えた。
エステルが条件を飲むと、今度はクローゼはヨシユアに向かって話

し掛ける。

「ヨシユア様には遙か西の海を越えた黄金の国にあると言う、黄金のリンゴを取って来て頂きます」

「雲をつかむような話ですね」

クローゼの話聞いたヨシユアはあきれた顔をしてつぶやいた。

「あなたに英知があれば見つけれられると思います。それとも、探すうともしないで諦めますか？」

「いえ、クローゼ様がおっしゃるのならきっと存在するでしょう。探し出してみせますよ」

クローゼに尋ねられると、ヨシユアは柔らかな笑みを浮かべて優雅な仕草でうなずいた。

そしてエステルとヨシユアは屋敷の外へと出て行った。

2人が居なくなった後、ハンスはクローゼに尋ねる。

「どうしてそんなに出来そうもない事を言うんだ。そんなにまでして、結婚をしたくないのか？」

「いえ、お父様、決してそのような事はありません……」

疑うような目を向けるハンスに、クローゼは弱々しく否定した。

「あなた、エリオット様とヨシユア様のお帰りを待ってみようではありませんか」

ジルはハンスをそう言って説得したのだった。

そして舞台は暗転し、背景セットはハンスの屋敷の中から霧に包まれた山の中へと変化した。

「エリオットは早速竜が住むと言われる山へと登りましたが、なかなか竜は見つかりませんでした。竜は滅多に人前に姿を現さないのです」

アスカのナレーションが流れている間、棒を構えたエステルは辺りを見回す仕草をしていた。

「うーん、何かを退治して帰らないとクローゼ様に合わせる顔が無いなあ」

エステルが山の中を歩き回る演技をすると、背景は朝、昼、夕方、夜、夜明けと何回も切り替わって行った。

「どうしてもクローゼと結婚したいと思っていたエリオットは諦めずに山の中に居ました。そのウワサを聞いたヨシユアはエリオットを蹴落とすための策略を思い付きました」

アスカのナレーションが終わると、舞台袖からヨシユアはエステル背後に姿を現し、そっと大きな角を置いて去って行った。振り返ったエステルは、置かれた角を見ると驚いて拾い上げる。

「こ、これはきつと竜の角に違いない！ でも、竜はいったいどこへ？」

エステルが周囲を見回しても竜らしき生き物の姿は無い。

「しかしクローゼ様は竜の角を持ってくれば良いと言われた。これを持って行けばすぐにでも結婚を許していただける！」

エステルは嬉しそうに興奮した様子で山を降りて行った。
そしてステージは暗転し、アスカのナレーションが入る。

「エリオットは真面目でしたが、少し知識に疎い所がありました。
エリオットはヨシユアの企み通り、水牛の角をクローゼの所へ退治
した竜の角として持って行ってしまったのです。怪しいと思ったク
ローゼがエリオットが出会ったはずの竜について尋ねると、エリオ
ットは口ごもってしまい何も答える事が出来ませんでした。エリオ
ットは山で偶然拾った角である事を白状し、クローゼに許してもら
うように頼みましたが、クローゼはエリオットの話を聞こうとし
ませんでした。エリオットはそれ以上何も言う事が出来なくて、屋
敷を出て行きました」

アスカのナレーションが流れている間、セットの組み換えが行われ、
再びステージがライトで照らされた。
すると、今度の舞台はガラス工房の様だった。
状況を説明するため、アスカのナレーションが流れる。

「ヨシユアは策略でエリオットを蹴落とした後、国王様に西の海を
渡り新大陸へと行くと行って港を出港しました。港にはクローゼの
家に仕える人々もたくさん見送りに行きました。しかし、黄金郷の
国など存在するはずがないと思っていたヨシユアはこっそりと地元
の街へと戻っていました。そして人々の目に触れないように工房を
作って、細工職人達を雇って招き入れました。ヨシユアは家の財産
をつぎ込んで材料の黄金を集めて、秘密の工房で細工師達に黄金の
リングを作らせました」

ヨシユアは出来上がった黄金のリングを細工師役の男子生徒から受
け取ると、満足したように微笑む。

「クローゼ様から聞いたのと、寸分違わぬ出来だな」

「はい。中也純金で出来ていますから、偽物だとばれるはずありません」

「そうだな」

ヨシユアは細工師の言葉にうなずくのだった。

「それからヨシユアは珍しい品物を取り寄せ、西の大陸から航海をして戻ってきたように装いました。実際に船を海に数ヵ月浮かべてくたびれさせるなど、ヨシユアの策略には抜け目がありません。ヨシユアが黄金のリングを持って戻ってきた事を家の者から聞いたクローゼは、このままでは自分は結婚させられてしまうと思って胸を痛めました」

アスカのナレーションの間、セットの変更が行われ、場面はハンスの屋敷の中へと切り替わった。

長旅で疲れた服装をしたヨシユアは堂々とした姿でクローゼに黄金のリングを献上した。

その様子を見たハンスは上機嫌でクローゼに告げる。

「ヨシユア様こそ真の勇者、このような方に嫁ぐ事は幸せこの上ない事だろう」

「はい……」

クローゼは浮かない表情でハンスの言葉に答えた。

「さっそく、婚礼の儀をとり行わなければなりませんね」

ジルも嬉しそうに言ってクローゼの結婚式の手配をしようとした。しかしその時、ハンスの屋敷へ侵入者が現れ、クローゼとヨシユア

の間に割って入った。

その侵入者は、ヨシユアが黄金のリングを作らせた細工師達だった。余裕を持っていたヨシユアの顔色がさっと青ざめる。

「無礼な、お前達は、何者だ！」

ハンスに問い掛けられ、細工師達のリーダーは口を開く。

「私達はヨシユア様に命じられてその黄金のリングを作りました」
「何だと!？」

細工師達のリーダーの言葉を聞いたハンスは驚きの声を上げ、クローゼの顔がパツと明るくなる。

そしてクローゼは勝ち誇ったような笑みでヨシユアに告げる。

「この私に偽物をつかませてだまそうとするなんて、あなたの愛が偽物なのだと証明されましたね」

ヨシユアは何も言い返す事が出来ず、悔しそうな顔で屋敷を立ち去った。

「あなた達には感謝致します。良く真実を告白して下さいました。私はもう少しであの不屈きな者に騙されて結婚する所でしたわ」

クローゼは嬉しそうにそう言うと、細工師達にたくさんの褒美を与えて帰した。

そして画面は暗転し、アスカのナレーションが始まる。

「この後しばらくして、ヨシユアの姿も、細工師達の姿も知り合いの前からすっかり存在を消してしまい、2度と現れなかったそうで

す」

アスカのナレーションの後、明るくなったステージに姿を現したのは、王子の格好をしたシンジだった。

エステルとヨシユアよりも身分の高そうな服装をしたシンジに、観客達からの拍手と歓声が投げ掛けられる。

そして、ここからナレーションの声はアスカからヨシユアへと変わる。

「クローゼの評判は、国王様の息子の王子様にまで届きました。エリオットとヨシユアが自分の身を滅ぼしてまで求婚したクローゼはどんなに美しい女性なのかと王子様は気になりました。ハンスの家に使者を出してクローゼを城にまで連れて来させようと思いました。しかしクローゼは使者の求めに応じず、家を出ようとしませんでした。怒った使者は城に帰って王子に命令に従わないクローゼを死刑にしようように進言しました。王子はさすがにそこまでするのはかわいそうだと言って、使者をなだめました。そして王子はハンスに貴族の位を与えてハンスにクローゼを城に連れて来させようと考えました」

ヨシユアのナレーションが終わると、スポットライトを浴びて立っていたシンジは舞台袖へと引っ込み、ステージ全体が照らされて、ハンスの屋敷の中の場面になった。

ハンスはクローゼの手を引いて連れ出そうとするが、クローゼは抵抗する。

「どうして、このような名誉ある王子様の申し出を断るんだ」

「私はお城にお仕える気はありません。どうしても言うのなら私は自分で命を断ちます」

ハンスの言葉にクローゼがキツパリと言い切ると、ハンスは困った顔をしながらもクローゼの手を放した。

「この子は山の中で拾われた子だから、普通の子と感覚が違うんだろうね。王子様にもそう話すしかないよ」

ジルはため息を付きながらハンスをそう言ってなだめた。

そしてステージの照明が落とされ、ヨシユアのナレーションによる状況説明が始まる。

「どうしてもクローゼの姿を見たくなくなってしまった王子は、ハンスの屋敷まで自分から行く事にしました。部下の策により、王子は狩りの途中を装いハンスの屋敷の庭先を通り掛かる事にしました。そしてハンスの方もクローゼに月が綺麗だからと庭で月を眺めるように勧めました」

ヨシユアのナレーションが終わると、淡いライトに照らされたクローゼの横顔の幻想的な雰囲気観客達からも感嘆のため息がもれた。ステージ全体が明るくなると、そこはハンスの屋敷の庭で、暗かった空間に王子役であるシンジが立っていた事が明らかになる。

「ああ、ウワサ通りの何て美しい方なんだ」

シンジはクローゼを見つめるとそうつぶやいた。

シンジの姿を見たクローゼは屋敷の中に戻ろうとするが、シンジはクローゼの手をつかんで引き止めた。

「待ってよ、どうして僕の気持ちに応えてくれないんだ!」

シンジの質問にクローゼは背中を向けたまま答える。

「私がこの国で生まれた人間ならば王子様の命令に従わない理由はありません。ですが、私はそうでは無いので王子様にお仕えする事は出来ません」

「僕はどうしても君を連れて行きたい」

シンジがクローゼをつかむ手に力を込めてそう言うと、クローゼは大きな声で叫ぶ。

「お止め下さい！ それならば私は舌をかみ切って死ぬ覚悟でございます」

「わ、分かったよ。君を連れて帰るのは諦める。だけど、せめて君の顔を見る事だけは許してくれないか」

シンジが慌てて手を放してそう言うと、クローゼはゆっくりとシンジの方へと振り返った。

しばらくの間、シンジとクローゼは見つめ合った。

そして名残惜しそうにしながらも、シンジはクローゼの前から立ち去った。

暗くなるとヨシュアのナレーションが始まる。

「王子はクローゼと会う機会を作ってくれたハンスに感謝してたくさんのご褒美をあげました。それから王子とクローゼはときどき会うようになりました。それから数年経った頃から、クローゼは空に浮かぶ月を眺めては悲しそうな顔をするようになりました。クローゼに仕える召使いが尋ねても、クローゼは理由を話しません。親であるハンスやジルが尋ねても同じでした」

ヨシュアのナレーションが終わり、舞台はそのままハンスの屋敷の庭になった。

月を眺めるクローゼが悲しそうに声を上げて泣いている。

召使い達はどうしたらよいか分からず遠巻きにクローゼを見つめていた。

慌てた様子でハンスとジルがクローゼに近寄って尋ねると、クローゼは涙をふきながらハンスとジルに話し始める。

「ずっと前から話そうと思っていたのですが、話せばお父様とお母様を嘆き悲しませる事になるだろうと思って黙っていました。でももう時間が無いのでお話ししなければなりません。私は事情があつて月の国からやって来たのです。そして私が月に帰らなくてはいいけない時が迫って来ました。この月の15日に月の国から迎えがやって来て、私は避ける事が出来ず帰る事になるでしょう」

クローゼはそう言うと言と激しく泣いた。

話を聞いたハンスは悔しそうに声を荒げて嘆く。

「あんなに小さかった子を自分の背に並ぶ位にまで育てたのに、誰が迎えに来ると言うんだ、許さない」

「そうよ、そんな事をされてしまつては私が死んでしまうわ」

ジルも泣きながらそう叫んだ。

観客席からもすすり泣く声が聞こえた。

「私は月の国にいる父と母の顔を知らず、お父様とお母様を本当の両親の様に思っていました。ですから月に帰るのが嬉しいはずはありません」

クローゼもハンスとジルと抱き合つて一緒に泣いた。

そして舞台は暗くなり、ヨシユアのアレーションが始まる。

「この話を聞いた王子は、クローゼと少し会っただけの自分ですえなかなか忘れる事は出来なかったのに、毎日のように顔を合わせているご父母の悲しみはどれほどのものか、と考え、たくさんの兵士を引き連れてハンスの屋敷に向かいました」

ナレーションが終わり、明るくなるとたくさんの騎士役の男子生徒達がステージを埋め尽くしていた。

観客達からも驚きと期待の歓声上がる。

「これほどの人数が居れば、月の国の兵士に負ける事はないでしょう」

「ありがとうございます、これなら安心です」

王子役の新ジが堂々と言い切ると、ハンスは安心したような表情になって感謝した。

しかし、クローゼは悲しそうな顔でハンス達に話す。

「私を守って戦おうとしても、月の国の方々には勝てません。弓矢で射ようとしてもそれは無理な事です。それに月の国の方々がいらしたら、戦おうとする気持ちすらなくなってしまうでしょう」

「私達からクローゼを奪おうとする者なんて、ひっ捕まえてさらし者にしてくれるわ」

クローゼの言葉を聞いてジルは怒りに燃えた顔でそう言い放った。そんなジルをなだめるようにクローゼは優しい口調で話し掛ける。

「そんな恐ろしい事をおっしゃらないで下さい。お父様、お母様、今まで私に優しくしてくれたご恩をお返しもせずにお別れするのが何よりも悲しいです。ここ数日の間も、もう少しだけこちらに居させて頂きたいとお願いしたのですが、聞き入れて頂けませんでした。

お父様、お母様が天寿を全うするまでお側に居られないのが何よりも心残りでございます」

「悲しい事を言わないでくれ、月の国の使者がどんな強さであろうと、お前を連れて行かせたりはしないぞ」

ハンスは怒った顔でそう言うと、月をにらみつけた。

そしてステージは暗くなり、ヨシユアのアレーションが始まる。

「クローゼ達が別れを惜しんでいる間に、約束の時が来てしまいました」

ステージがまぶしい程の照明の光に包まれ、光が治まった時にはステージに月の国の使者役的女子生徒達が現れていた。

その演出に観客達から拍手が起こる。

騎士達は突然現れた月の使者達に攻撃を仕掛けるが、矢は外れてしまい、剣ははじき返されてしまう。

月の使者達が騎士達に人差し指を向けて魔法のようなものを唱えると、騎士達は気絶してバタバタと倒れ込んでしまった。

そしてステージ上にはクローゼを乗せるための馬車が姿を現した。

王侯貴族が乗るような立派な装飾がされた馬車だ。

さらに屋敷を取り囲む月の国の使者の行列の間から、月の女王役のアスカが出て来ると、観客達からどよめきが起きた。

黄色いドレスに身を包んだアスカはクローゼとは違う魅力を持っていた。

「ハンス、出て来なさい！」

アスカが命じると、反抗的だったハンスも操られているかのように屋敷から出て来てアスカの前にひれ伏した。

「この大バカ者、お前は誠実な人間だったから助けてあげようとクローゼを預けたのに、多くのお金を得たら人が変わったようになってしまった。クローゼは罪を科せられたために、下界に降ろされたのだ。罪を償う期間は終わったのでこうして迎えに来ているのに、邪魔をするとは何事ですか。早くクローゼを連れて来なさい」

「私達はクローゼを育ててもう20年近くにもなります。どうか愛しい我が子を私達から奪わないで下さい」

アスカの言葉を聞いて、ハンスはそう言って頼み込んだが、アスカは返事をしない。

そんなアスカの前に立ち塞がったのはシンジだった。

「クローゼは僕が守る、お前なんかには渡すもんか！」

「この愚か者、あれだけの差を見せつけられながらもまだ歯向かう気ですか！」

そしてステージ上ではシンジとアスカの戦いが始まった。

お互い得意な武器は導力銃だったのだが、この場合はシンジが剣、アスカは槍を使って殺陣^{たて}を演じた。

2人とも遠距離武器だけでは無く、接近戦用の武器を使えるようになりたいとエステルとヨシユアに頼んで指導を受けていたのだ。

腕は未熟だったが、それは2人のコンビネーションで補ってカバーした。

シンジが剣を振って奮闘しても、だんだんとアスカの槍に追い詰められて行った。

そしてシンジとアスカの戦いを制止したのは、屋敷から出て来たクローゼだった。

「止めてください！ 私は月の国へと帰りますから、これ以上私のために争わないで下さい！」

「さあクローゼ、私達の国へと帰りましょう」

クローゼの姿を見たアスカは、クローゼにそう呼びかけた。

クローゼを引き止める事はもう無理だと分かったハンス達は声を上げて泣き始めた。

そのハンスの姿を見たクローゼはハンスに近づき、優しく声を掛ける。

「お父様、私も立ち去るのは辛いのです。せめて、私が月へと帰って行く姿だけでも見送って下さい」

「嫌だ、こうなったら私達もクローゼについて行って月まで追いかけるぞ」

ハンスがわがままを言うのと、クローゼの心も揺れ動いて困った顔になった。

アスカはクローゼの前にそっと菓の入った壺を差し出す。

「その菓をお飲みなさい。そうすれば下界の汚れもすっかり清める事が出来るでしょう」

「ごめんなさい、少しお待ちください」

クローゼは首を横に振って菓を飲むのを拒否すると、シンジの方を向いて話し始める。

「こんなにたくさんの方を遣わしてまで私を引き止めようとして下さったお気持ちはとても嬉しく存じ上げます。私が王子様の求めに応じられなかったのも、この様な事情があったからなのです。ご納得できない事だろうと思いますが、私の事を無礼な者だと心に止めて下されば幸いです」

クローゼは黙ったままのシンジにそう言い終ると、アスカの方を向いた。

しかし、クローゼはもう一度シンジの方を振り返って叫ぶ。

「私も、あなたの事が好きでした！ 決して結ばれない運命だと知っていても！」

「クローゼ！」

シンジが叫ぶ目の前で、クローゼはアスカから渡された忘却の薬を飲み干した。

するとクローゼから悲しみの表情が消え、クローゼはあっさりと馬車に乗り込んでアスカ達と一緒に月へと帰って行った。

ステージが暗転すると、観客達も深いため息をついて講堂の中は静まり返った。

そしてヨシュアのアレーションが語られる。

「ハンスとジルは、とても悲しんで病に伏せてしまいました。王子様も食べ物かのどを通らないほど悲しみ、好きだった琴も弾かなくなってしまうました。王子様は臣下に尋ねました、この国で一番空に近い山はどこか、と。臣下が山の名前を答えると、王子様は騎士を引きつれてその山へと登りました」

ステージが再び明るくなると、場面は山の中になっていた。

騎士達が見守る前で、シンジは空に向かってクローゼの愛を訴えかける。

陽が沈んでもシンジはクローゼへの愛の言葉を空に向かって話し続けた。

すると空が光り、辺りは激しい光に包まれた。

空から淡い光に包まれた純白のドレスを着たクローゼがゆっくりと降りて来ると、観客達から激しい拍手が湧き起こり、講堂の中は拍

手と歓声の轟音でいっぱいになった。

忘却の薬を飲んでも、クローゼはシンジへの思いを消せなかったのだ。

下界を眺めて悲しむクローゼの姿を見て、ついにアスカの方が根負けしてシンジの居る下界で暮らす許可を出したのだった。

クローゼとシンジは嬉しそうな笑顔になって抱き合い、見守る騎士達も拍手で祝福する。

そして幕が下り、物語は終わった。

＜ルーアン地方 ジェニス王立学園 生徒会室＞

演劇が終わり着替えたエステル達は生徒会室で休憩を取った。

「いやあ、今回の劇は大成功だったな」

「うんうん、ラストの場面なんかお客さんがすっかり引き込まれていたわね」

ハンスの言葉にジルは同意してうなずいた。

「それにしても、ヨシユアの悪役の演技は上手かったよね。実はヨシユアって悪い性格だったりして」

「勘弁してよ」

「あはは、冗談だってば」

エステルは笑い飛ばして、ヨシユアの微妙に影がある表情には気が付かなかった。

「でも、クローゼのお姫様の姿は本当にハマり役だったな」

「そんな、私なんか大した事ありません」

ハンスに褒められて、クローゼは顔を赤くしてうつむいた。

「クローゼとシンジはお似合って感じがしたわよ、このまま付き合っちゃえば？ アスカもそう思うでしょう」

ジルがアスカに尋ねると、アスカは何かをこらえるように体を震わせながら無理やり笑顔を浮かべて答える。

「そ、そうね、シンジとクローゼはお似合い……ね……」

アスカはそう言うと、暗い顔をして生徒会室を飛び出して行ってしまった。

「アスカさん!？」

クローゼが驚きの声を上げた。

シンジは出て行ったアスカを追いかけてようと、生徒会室を出て行くとする。

しかし、そのシンジをクローゼが引き止める。

「シンジさん、アスカさんを……お願いします」

「うん」

クローゼが自分の気持ちをこらえてそう言うと、シンジはうなずいた。

「クローゼさん、ごめん」

シンジはクローゼに謝ると、クローゼの手を振り払って生徒会室を出て行った。

シンジが出て行った後、クローゼの体から力が抜け、クローゼは床にしりもちをついた。

「シンジさんの心の中ではアスカさんがいっぱい、私が入る隙間などありはしないですね」

「クローゼ、あなたが気持ちをしっかり伝えれば、シンジ君だって振り向いてくれるかもしれないわよ」

心配して声を掛けたジルに、クローゼは笑顔を作って見せる。

「良いんです、シンジさんに私のわがままを言って困らせたくはありません」

「うーん、劇の配役は違う方が良かったのかな」
「月の女王を希望したのはアスカなんだから、しょうがないじゃない」

ハンスのつぶやきに、ジルはそう答えた。

様子を黙って見ていたエステルは悲しそうな顔でポツリとつぶやく。

「誰かを好きになるって、辛い事もあるんだね」
「そうだね」

エステルの言葉に、ヨシユアはうなずいた。

＜ルーアン地方 ジェニス王立学園 旧校舎＞

生徒会室を飛び出したシンジは、わき目も振らず文化祭でにぎわう校舎を抜けて旧校舎へと向かった。

アスカは人目を避けた場所に居ると思ったからだ。

シンジの予想通り、アスカは旧校舎の崩れ落ちた塀に背中を向けて座っていた。

静かにアスカに近づいたシンジは優しくアスカに声を掛ける。

「アスカ」

「シンジ!？」

シンジに声を掛けられたアスカは驚いて立ち上がった。

そしてすねた表情になってシンジに言う。

「こんな所に居ないで、クローゼの側に居てあげたらどうなの？」

アンタにはクローゼみたいな優しい子が恋人になった方が良いのよ」

「アスカは本当にそう思っているの？」

シンジがアスカの目を見つめて尋ねると、アスカは表情を崩して泣きながらシンジに抱きつく。

「アタシは……シンジの隣にずっと居たいの……だから……アタシを置いて行かないで」

「うん、クローゼさんの気持ちは分かったけど、ごめんなさいって断ったよ」

シンジの言葉を聞いたアスカは驚いて体を離してシンジに問い掛ける。

「それって本当なの？ シンジがクローゼを振ったなんて信じられないけど」

「うん、これからずっとアスカの側に居るよ、一緒に遊撃士になろうって約束したじゃないか」

「そうよね、勝手に居なくなるなんて承知しないんだから！」

アスカは笑顔になって再びシンジに抱きついた。

そのアスカとシンジの姿を旧校舎の陰から眺める銀髪の少年と水色の髪の少女の姿があった。

「どうやら2人とも、素直に自分の気持ちを打ち明けられたようだね」

「本当に良かったわ」

少年の言葉に、少女は嬉しそうにうなずいた。

「それにしても、この場面を用意するのは手間が掛かったよ」

少年は少しウンザリとした感じのため息をついた。

いくら旧校舎が人気が無いと言っても無人だったわけではない。

旧校舎で昼寝をしていた学生、駆け落ちしていたカップル、悲しそうな顔で旧校舎に向かうアスカを見てナンパをしようとして居た青年などは少年と少女によって排除されていたのだった。

少女は抱き合っているアスカとシンジの姿を見て、嬉しそうにつぶやく。

「私達は講堂でのお芝居には参加できなかったけど、この旧校舎でのお芝居には参加できたから、楽しかったわ」

「それなら僕はナレーションでもしようか」

「悪乗りするのは止めて。私達の任務はこの旧校舎に誰も近づけない事」

「はいはい、分かってるよ」

少女と少年はしばらくの間、旧校舎の見張りを続けた後、誰にも気づかれる事無く帰って行ったのだった。

第三十一話　ダルモア市長襲撃事件！　そして明かされた陰謀

＜ルーアン地方　ジェニス王立学園　生徒会室＞

シンジとアスカが照れた顔をしてエステル達の居る生徒会室に戻ると、ヨシユアとエステルは安心した笑顔を浮かべる。

「よかった、仲直りしたんだね」

「あたし、アスカは家族としてシンジの事を好きなんだと思ってた。でも、それだけじゃなかったんだね。あたしってそういう方面には鈍感だから、気が付いてあげられなくてごめんね」

「ううん、素直な態度になれなかったあたしも悪かったのよ」

凹んだ顔でため息を吐いて謝ったエステルを、アスカは明るい調子で答えて許した。

シンジはジルとハンスとクローゼの姿が見えない事に気が付いてヨシユアに尋ねる。

「ハンス達はどこへ行ったの？」

「学園長先生に呼び出されてね、学園長室へ向かったよ」

「何かあったの？」

「さあ、心当たりが無さそうだったけど」

ヨシユアの答えを聞いて、アスカが尋ねると、ヨシユアはそう答えた。

「じゃあみんな揃ったし、学園長室に行ってみようよ」
「そうだね」

エステルの提案にヨシユアは賛成した。

しかし、アスカとシンジは少し気まずそうな顔になる。

「アタシ、クローゼとどう顔を合わせたらいいいのか分からないわ」

「僕もあんな事があった後だからね」

そんなアスカとシンジをエステルは笑顔で励ます。

「大丈夫だって、あたし達とクローゼは友達なんだから」

「まったく、竹を割ったような性格のエステルがうらやましいわ」

アスカはそう言って笑うのだった。

エステル達が学園長室に入ると、なんとそこには涙を流すテレサ院長がコリンズ学園長達に囲まれて立っていた。

泣いているテレサ院長の姿を見たエステルは驚いて尋ねる。

「テレサ先生、いったいどうしたんですか!？」

「ごめんなさいエステルさん、私はとても嬉しくて泣いているのです」

「どういう事ですか？」

ヨシユアが尋ねると、ハンスがテレサ院長の代わりに答える。

「凄いんだよ、コリンズ学園長の提案で学園祭に来た人達から孤児院を助けるために募金をしたんだけど、なんと100万ミラも集まったみたいなんだ」

「100万ミラ!？」

ハンスの言葉を聞いたアスカは驚きの声を上げた。

「そこでその予算を使って市の方で孤児院を再建する事になったのだよ」

「本当にありがたい話です」

ダルモア市長が説明すると、テレサ院長は感激して何度も頭を下げた。

「これでテレサ院長やクラム君達とまた一緒に居る事が出来るんだね」

「良かったじゃない」

「はい」

シンジとアスカが声を掛けると、クローゼは笑顔でうなずいた。

＜ルーアン地方 ジェニス王立学園 正門＞

学園祭も終わり、エステル達は帰ろうとするテレサ院長と孤児院の子供達、ダルモア市長を正門まで見送りに行った。

マノリア村に帰るテレサ院長達の護衛はシェラザードが、ルーアン市に帰るダルモア市長の護衛はルーアン支部所属の遊撃士カルナが護衛を引き受けた。

「シンジ、ヨシユア、誰だよあの美人は？ あんな知り合いが居るなら俺にも紹介しろよ」

シェラザードの姿を見たハンスは興奮した様子でシンジ達に声を掛けた。

「まったく男ってやつはだらしないんだから」

面白くなさそうな顔でジルははしゃぐハンスの姿を見た。

そして、胸元の大きく開いた服を着て褐色に肌が焼けているシェラザードの姿を見るとため息をついてつぶやく。

「まあ、色気が感じられる大人の女性って所は否定できないわね」

「ふふ、かわいい坊やね」

「生徒会副会長、ハンスです！ よろしくお願いします！」

シェラザードが薄笑いを浮かべながらハンスに声を掛けると、ハンスは嬉しそうに顔を赤くしてあいさつをした。

ハンスがシェラザードを相手にデレデレしていると、導力銃の発射音が辺りに鳴り響く。

驚いた事に導力銃で空砲を撃ったのはカルナだった。

「時間が圧しているんだ、私達は先に行かせてもらおうよ」

「すみませんでした」

カルナの鋭い眼光ににらみつけられたハンスは冷汗をかきながら謝った。

「カルナ、あんたも大人気ないじゃない」

「ふん、どうせ私は色気の無い女だよ」

シェラザードが苦笑しながらそう言うと、カルナは不機嫌そうな顔で鼻を鳴らした。

「では私はこれで失礼するよ」

「はい、ルーアンまでの道中、お気を付け下さい」

「心配はない、寄付金の入った袋は遊撃士の方が守って下さいますから」

クローゼの言葉に、ダルモア市長はそう答えて悠然と去って行った。そしてエステル達はテレサ院長やクラム達とも別れを告げる。

「今日はずっと楽しかった。劇もとっても面白かったぜ！ シンジちゃんはお本物の王子様みたいだった！」

「ありがとう」

クラムに褒められて、シンジは笑顔を浮かべてお礼を言った。テレサ院長もあらためてエステル達にお礼を述べる。

「火事の件ですっかり落ち込んでしまった子供達も、こうしてとても元気になってくれました。さらに孤児院を建て直す資金まで下さるなんて。いくらお礼をしても足りないぐらいですわ」

「じゃあ今度あたし達が孤児院に寄った時、チーズケーキをご馳走してよ」

「ええ、喜んで」

「まったくエステルって食い意地が張っているんだから」

「アスカもでしょ」

シンジがアスカにそうツツコミを入れると、大きな笑いが起こった。そして、シェラザードに付き添われてテレサ院長と孤児院の子供達はマノリア村に向けて出発する。

「クローゼ姉ちゃん、またな！」

「うん、またね！」

「またね」と孤児院の子供達とあいさつが出来て、クローゼは本当

に嬉しそうだっただ。

しかしそんな時、ルーアン市に向かったはずのダルモア市長が息を切らせてやって来る。

「た、大変だっ！」

「市長さん!？」

血相を変えたダルモア市長の姿を見て、エステルは驚きの声を上げた。

ダルモア市長の説明によると、カルナとルーアン市への帰路を歩いている途中に黒装束の男達に襲われたのだと言う。

黒装束の男達はカルナを気絶させると寄付金100万ミラの入った袋を奪って逃げて行ったらしい。

「カルナさんは無事なの？」

「分からない、私はこうして逃げて来るのが精一杯だったのだ、すまない」

アスカに尋ねられて、ダルモア市長は辛そうな顔をして答えた。

「じゃあ、カルナさんを助けに行かないと！」

エステルがそう言って正門を飛び出して行った。

ヨシユア達は慌ててエステルの後を追いかけた。

「私も孤児院の子達をマノリア村に送り届けたら後から追いかけるから、無理するんじゃないわよ！」

シェラザードがエステル達の背中に向かって大声で呼び掛けた。

「ああ、なんと言う事でしよう……」

エステル達が飛びだして行った後、テレサ院長はそうつぶやいて倒れ込んでしまった。

「テレサ先生!？」

「うわっ!？」

クローゼとクラムが驚きの声を上げた。

「これはいかん、テレサ院長を医務室へ」

「はい」

コリンズ学園長がそう命じると、ジルとハンスはテレサ院長の体を支えて医務室まで連れて行こうとする。

「すいません、ご迷惑を掛けて……」

「疲れが出たんじやろう、今はゆっくりと休みなさい」

か細い声で謝るテレサ院長に、コリンズ学園長はそう言った。

悲しみに打ちひしがれる孤児院の子供達の姿を見ていたシェラザードは、静かな闘志を燃やしてクローゼに話し掛ける。

「エステル達の後を追いかけるわよ」

「はい、シェラザードさん」

クローゼはシェラザードの瞳を見つめ返してしっかりとした口調で返事をする、正門を飛び出してシェラザードと共にエステル達の後を追いかけるのだった。

<ルーアン地方　メーヴェ海道>

エステル達が森を抜けると、海岸沿いの街道に気を失って倒れている遊撃士のカルナを見つけた。

カルナの姿を見つけたエステル達は慌ててカルナに駆け寄った。

「どうやらカルナさんは強力な睡眠薬をかがされたみたいだ」
「睡眠薬!?!」

倒れているカルナの脈をとったヨシユアの言葉に、アスカは驚きの声を上げた。

「うん、カルナさんの体からかすかに漂って来る匂いからしても間違いないと思う」

「それで、カルナさんの命に別条はないの?」

「ただ眠らされているだけだ。多分、後遺症とかも無いタイプだよ」

心配そうに尋ねたシンジの質問にヨシユアが答えると、エステル達は安心してため息をもらした。

カルナの安全が確保されたエステル達は襲った人物達の痕跡を探すが何も見つからなかった。

「悔しい、カルナさんを襲った黒装束の男に関する何も証拠を見つけないなんて!」

「仕方無いよ、それよりもカルナさんをギルドまで連れて行かないと」

シンジがそう言ってアスカをなだめていると、ジェニス王立学園の

方からシェラザードとクローゼが向かって来た。
不思議に思ったエステルがクローゼに尋ねる。

「あれ、もうテレサ先生達を村まで送って来たの？ 早かったわね」
「違うんです、実は……」

クローゼがテレサ院長が倒れてしまい、孤児院の子供達は学園の寮に泊まる事になった事を説明すると、アスカは怒りに体を震わせる。

「テレサ先生をそんなに悲しませるなんて、犯人は絶対に許せないわ！」

その場に居たエステル達も気持ちは同じだったが、落ち着いて気絶したカルナをルーアン市の遊撃士協会へと運ぶのだった。

ルーアン支部の遊撃士協会の受付に居たジャンは気絶したカルナを連れて姿を現したエステル達を見て驚いた。

驚くジャンにエステル達は事情を説明してカルナを協会の2階の部屋に寝かせてもらった。

そしてジャンを交えてエステル達は協会の受付で市長襲撃事件について話し合った。

「うーん、市長が見たって言う黒装束の男達だけど、ルーアン市では目撃情報がないなあ」

「市長さんは黒装束達の男は自分を追いかけて来ないでルーアン市の方へ行ったから自分は助かったと話していたけど、どういうことかしら」

ジャンの話聞いたシェラザードが考え込んだ仕草でそうつぶやいた。

すると、協会の外に出ていたクローゼがジークを肩に乗せて入って

来る。

「みなさん、ジークが市長さん達が襲われる場面を目撃していたようなんです」

「何だって!？」

クローゼの言葉を聞いたシンジは驚きの声を上げた。

そしてクローゼはその場に居るエステル達に説明を続ける。

「市長さんを襲った犯人は、レイヴンの人達だそうです。先ほど倉庫街の方へ戻って行くのもジークが目撃しています」

「やっぱり、怪しいと思ったのよね」

「ちよつとアスカ、市長さんの証言よりこんな鳥の与太話を信じるわけ？」

クローゼの話聞いてつぶやいたアスカにシェラザードがあきれた顔で声を掛ける。

「ジークは凄いですよ、学園祭で迷子になった子の両親を見つけたりしたんですから」

シンジはそう言ってシェラザードに反論をした。

「他に手がかりも無いんだ、ここは1つ、調べてみてはもらえないかな？」

「ジャンまで何を言い出すのよ」

シェラザードはジャンにそう言い返したが、他に打開策が無かった事もあり、シェラザード達はレイヴン達の居る倉庫街へと向かうのだった。

<ルーアンの街 倉庫街>

「やっぱり、カルナが街の不良達ごときに後れを取とは思えないのよ」

渋々と言った感じでシェラザードは倉庫街へ行く事を了承したのだが、まだ疑っている様子でそうつぶやいた。

「居酒屋でシェラ姉に会った時もレイヴンのやつらは相当ビビっていたもんね」

「また取り調べればはつきりするわよ」

シェラザードとエステルの話を聞いて、アスカは気合たっぷりになう言い放った。

エステル達がレイヴン達が根城とする倉庫に近づくと、やけにテンションの高い笑い声が中から聞こえて来る。

どうやらレイヴン達は派手に騒いでいる様子だった。

アスカはあきれた顔でつぶやく。

「まったく、いい気なものね」

「また、驚かせてやりますか」

シェラザードは自信満々にそう言って倉庫の中へと一番乗りを果たした。

しかし、レイヴン達はシェラザードの姿を見て怯えるどころか平然としている。

「何だあ俺達の邪魔をするとはいい度胸じゃないか」

「そうだそうだよっちなえ」

「覚悟しろよー」

「何よこいつら、イツてしまっているわ!」

逆に得体のしれないレイヴン達の様子に恐ろしさを感じたのはシェラザードの方だった。

襲われそうになったシェラザードのピンチに、エステル達も倉庫の中へと突入した。

狂った様子のレイヴン達は明らかに戦闘能力が向上していた。

エステルが振り回す棒も力づくではね退け、ヨシユアよりも動きが早い。

しかし、ジークがレイヴン達の動きを乱すように飛びまわると、アスカとシンジはレイヴン達が直線的な動きしかできない事に気が付いて導力銃でレイヴン達を上手く誘導した。

レイヴン達がおびき寄せられた所にクローゼとシェラザードの範囲アーツ攻撃が炸裂した。

「痛い、痛てえよー」

「か、体が動かねえ」

強烈な烈風に体を浮かせられ、床に叩きつけられたレイヴン達は悲鳴を上げてのたうち回るうちに理性を取り戻して行った。

重傷を負ったレイヴン達にエステル達が手当てを施すと、レイヴン達は素直にシェラザードの事情聴取に応じた。

レイヴン達は港で黒装束に身を包んだ謎の男に「強くなれる薬」を貰ったのと言う。

その薬を飲んだ後から気持ちが大きくなり倉庫で騒いでいたのだった。

そしてどんな相手にでも勝てる気がしていたので、シェラザード達

にも襲いかかってしまったのだと言うのだ。
レイヴン達の話聞いたアスカがつぶやく。

「それじゃあ、カルナさんを襲ったのはレイヴンじゃないって事？」
「薬をレイヴン達に与えた黒装束の男って言うのが怪しいわね。レイヴンの服装は割合簡単に真似できるみたいだしね」

「なるほど、レイヴンに変装してさらに追跡するジークの目をごまかしたわけですね」

シエラザードの推理を聞いて、ヨシユアは感心してつぶやいた。

「それじゃあ、その黒装束の男をやっつけに港に行きましょう！」
「そうだね、逃げられないうちに急ごう！」

エステル達の言葉にシンジもうなずき、エステル達は夜の帳とぼりに包まれたルーアンの街を港に向かって駆けて行った。

＜ルーアンの街　ルーアン港＞

エステル達がルーアンの港に着いた時、黒装束の男が青い髪の青年と話していた。

青い髪の青年の姿を目撃したクローゼは驚いた顔になる。

「あの青い髪の方は、市長秘書のギルバードさんです」
「えっ、どうして市長秘書がこんな場所に居るのよ」

クローゼの言葉を聞いたアスカが驚きの声を上げた。

「そんなの直接聞けばいいじゃない」

エステルはそう言って武器を握る手に力を込めた。

「待ちなさい、ここはあいつらのやり取りを聞いて情報を集まるのよ」

シェラザードがそう言ってエステルを止め、エステル達は物陰に隠れて黒装束の男とギルバードの話を聞く事にした。

「ふふ、これでいざとなったら罪をまたレイヴンのやつらにかぶせる事が出来る」

「なかなか考えたものだな」

青い髪の青年が笑みを浮かべると、黒装束の男はつぶやいた。

「お前の姿を目撃したあの遊撃士の証言から、バレる事はないんだな？」

「安心しろ、たとえ目を覚ましていても何が起こったか一切覚えていない。それに俺はレイヴンの服装をしていたからな」

「そ、そうだよな、ははは！」

黒装束の男が答えると、青年は愉快そうに笑った。

「声が大きい、誰かに聞かれたらどうする」

「す、すまない」

黒装束の男に指摘されると青年は謝った。

「それで、約束通りこの袋は報酬としてもらって構わないんだろう

な？」

「ああ、正直100万ミラは惜しいが、口止め料とでも思ってくれ
100万ミラと聞いて、エステル達は寄付金の入った袋の事だと思
った。」

「しかし分らん、こんな手まで使ってどうして孤児院を潰そう
とするんだ？」

「ふふ、それは市長の壮大な計画が関係しているのだよ」

黒装束の男が尋ねると、ギルバードは胸を張って答えた。

「計画だと？」

「市長は景観の良いあの沿岸の土地一帯を高級別荘地にして国内外
の貴族の方々に売却しようと考えておられるのだよ」

「なるほど、それであの孤児院が邪魔になったか」

「ああ、ガキ共の騒ぎ声が聞こえるだけで別荘地としての価値は半
減するからね」

ギルバードはまるで自分が偉いかのように黒装束の男にダルモア市
長の計画を披露した。

「……そんな理由で孤児院のみんなを苦しめたんですか」

「何だ君は!？」

「クローゼっ!」

耐えきれずに物陰からクローゼが飛び出してしまった!

クローゼの姿を見たギルバードが驚きの声を上げた。

驚いたシンジが思わず叫んだ。

「私達の思い出を焼き尽くして灰にして……子供達から笑顔を奪ったその行為、断じて許すわけにはいきません！」

「まさか、市長が黒幕だったなんてね……！」

「さああんた達、覚悟はできてるんでしょね！」

クローゼに続けて、アスカとエステルが姿を見せると、ギルバードは動揺して黒装束の男に命令する。

「しまった、姿を見られた、こうなったらあいつらを皆殺しにしろ！」

ギルバードに言われた黒装束の男はエステル達に向かって剣を構えた。

「さあ、相手をしてやろう」

「いくらアンタが強いと言っても、6人が相手じゃ不利なはずよ」

「いや、きつとはったりじゃないよ」

アスカの言葉に、ヨシユアがそう答えた。

すると、黒装束の男はアスカに向かって突進して来た！

ヨシユアとシェラザードが2人掛かりで黒装束の男の攻撃を防ぐ。

「ほらアスカ、気を抜くんじゃないわよ！」

シェラザードがアスカに注意を促した。

「ほう、俺の攻撃に反応する事が出来たか、なかなかやるな」

黒装束の男は感心したようにつぶやくと、後ろに飛び退いてエステル達と距離を取る。

そして、エステル達は黒装束の男を追い詰めようと前進した。

「おっと、こいつの命が惜しかったら動かずにいるんだな」

すると、黒装束の男は短剣を取り出し、ギルバードのど元に突き付けた！

「な、何をするつもりだ！ 僕は雇い主だぞ！」

「契約は先ほど終了したはずだ」

うろたえるギルバードの問いに黒装束の男はそう答えた。

「そんな下手な演技が通用すると思っているのかしら？」

シェラザードがそう言うと、黒装束の男はギルバードの腕を斬りつけた。

血が噴き出して、ギルバードはパニックに陥る。

「うわあ、血が、僕の腕がああっ！」

「ちっ、本気みたいね」

シェラザードは悔しそうな顔で舌打ちをした。

「しばらく後ろに下がってじっとしててもらおうか」

黒装束の男がそう言うと、エステル達は手出しができず、にらみつけるしかできなかった。

「そろそろ迎えが来る時間だな」

黒装束の男はそうつぶやいた。

すると、黒装束の女性が乗って来た小船が近づいて来て接岸した。

「今日は遅刻はしなかったようだな」

黒装束の男性の言葉に、黒装束の女性は黙って頭をかく仕草をした。そして黒装束の男性が乗ると小船はゆっくりと岸から離れて行く。

「逃がさないわよ！　こうなったら、あたしも飛び込んで捕まえてやる！」

「止めなよエステル、夜の海で潮の流れで沖に流されたら助からないよ」

後を追いかけてようとしたエステルをヨシユアが押し止めた。

「お前達は、俺よりも先に捕まえるべき相手が居るだろう！」

黒装束の男が大声でそう言うと、エステル達は気が付いたようにギルバードに近づいた。

血がしたり落ちる腕を手で押さえながらゆっくりと逃げようとしていたギルバードはエステル達の姿を見るとギクリとして足を止めた。

そしてエステル達の前で土下座を始める。

「許して下さい、全ては市長に命令されてやった事なんです！」

「アンタは市長の悪事を知っていながら黙っていたんでしょ？　それなら同罪よ！」

シンジはアスカがギルバードに向かってそう言い放つ姿を見て、第三新東京市の中学校に通っていた時の事を思い出した。

クラスでいじめが起こった時、アスカは転校生だったにも関わらず、アスカはクラスメイト達の前で堂々と言い放ったのだった。

「いじめを見て見ぬ振りをしている子達も、いじめに参加しているのと同じだ」と。

シンジは心の中でそう思った事はあったのだが、他人に対して言う事はできなかった。

誰だってクラスメイト達から嫌われるのは避けたいと思うのが普通だと考えるものだとしんじも思っていた。

この時シンジはアスカを「気の強いワガママな女」見ていた自分を恥じて、勇気のある女の子だとアスカに憧れの気持ちを持つようになった。

ギルバードが思い付く限りの言葉を使って謝っていると、アスカはいらだった声でクローゼに提案する。

「コイツは口ばかりでまるで反省していないわ、思いっきり痛い目にあわせてやりましょう」

「ひ、ひええっ！」

アスカの言葉にギルバードが怯えて悲鳴を上げると、シンジはアスカの前に立ちはだかる。

「止めなよアスカ、相手が悪人だからってどんな悪い事しても良いなんて考えるなんて、自分達が悪人と同じになってしまうよ。僕はアスカにそんな事をして欲しくないんだ」

「わ、分かっているわよ、ちょっと脅してみただけよ！」

シンジがそう言うと、アスカは顔を赤くして口ごもった。

クローゼもシンジの言葉にハッと気が付いた表情になった。そしてクローゼはギルバードに近寄ると優しく声を掛ける。

「ギルバードさん、顔をお上げになってください」

「おお、許してくれるのか！」

安心してギルバードが顔を上げると、そのギルバードの頬ほおにクローゼの平手打ちが決まった。

ギルバードは何が起こったのか分からないと言った表情で打たれて赤くなったほおを手で押さえた。

「クローゼさん、怒りを抑えてくれたんだね」

「はい、でもスツキリしました」

シンジが声を掛けると、クローゼは晴れやかな笑顔で答えた。
エステル達はそんなクローゼの姿を見て胸をなで下ろした。

「でも、気を抜いてはダメよ。本当に捕まえるべき黒幕はまだ居るんだから」

「そうですね」

シェラザードの言葉にヨシユアはうなずいた。

「それにしても市長さんがこんなひどい事を企んでいるなんて、怒るよりもあきれた気持ちの方が強いです」

「待つてなさいよ、すぐに逮捕してやるんだから」

クローゼが疲れた表情でつぶやくと、エステルは握りこぶしを作ってそう言った。

「残念だけどエステル、そう言うわけにはいかないのよ」

「えーっ、どうして!？」

シエラザードの言葉にエステルは驚きの声を上げた。

「遊撃士は国の政治に干渉してはならないって規約があるんだ。だから遊撃士は政治家である市長を逮捕できないんだよ」

「民間人に直接危害を加える現行犯でも無い限りね。市長が今回の事件は秘書が勝手にやった事だと話して関与を否定すれば、手出しできないのよ」

「そんな、何とかできないの？」

ヨシユアとシエラザードの説明を聞いて、エステルは悔しそうにつぶやいた。

「そうだ、軍の人達なら逮捕できるんじゃない？」

「なるほど、それは良い案だね」

アスカが提案すると、シンジは感心してうなずいた。

「とりあえず、ギルドに戻ってジャンに相談しましょう。その秘書さんの手当てをして軍に引き渡さなくちゃならないし」

「は、反省してます、許して下さい！」

シエラザードににらまれたギルバードはそう言って謝り出した。

「もう遅いわよ、牢屋の中でゆっくりと反省しなさい！」

アスカがそう言い放つと、ギルバードは落ち込んだ顔になって黙り込んだ。

そしてシンジが寄付金の入った袋に気がついて拾い上げる。

「あれっ？ 寄付金の入った袋が置いてあるよ」

「ええっ、アイツ置いて行ったの!？」

アスカが心底驚いた声を上げた。

「良かったねクローゼ、これで孤児院を建て直せるよ」

「はい……」

エステルが笑顔で声を掛けると、クローゼは目に涙を浮かべて嬉しそうにうなずいた。

「でもどうしてあの黒装束の男は100万ミラもの大金に手を付けなかったのでしょうか？」

「もしかして、その必要が無かったのかもしれないわ。目的もよく分からないし、これは手ごわい相手ね」

ヨシユアの質問に対してシェラザードは考え込む仕草をしてそう答えた。

「シェラ姉がパパに追跡調査を頼まれたって、もしかして黒装束のやつらの事？」

「ええそうよ、カシウス先生と一緒に戦った時もね、戦闘能力が高められている帝国軍の兵士と戦った事があるのよ」

アスカが尋ねると、シェラザードはうなずいた。

そしてエステル達はギルバードの身柄を拘束して、遊撃士協会へと帰った。

その帰路の途中、クローゼはジークを呼び出すと、そっと頼み事を伝える。

クローゼの頼み事を聞いたジークは夜空へと飛び立って姿を消したのだった。

＜ルーアンの街 遊撃士協会＞

マーシア孤児院放火犯の一味であるギルバードを捕まえ、遊撃士協会まで連行したエステル達。

夜も更けてきたのだが、エステル達は休むわけにはいかなかった。真の黒幕であるダルモア市長を追い詰めなければならないからだ。しかしギルバードは市長に指示されたと自供しているが、市長は関与を否定している。

ギルバードの身柄を引き取りに来た軍の関係者もダルモア市長逮捕に至る証拠を見つけられないでいた。

「このままじゃダルモア市長逃げられちゃうわ」

「そうだね、王都に別邸があるって話だし」

悔しそうにつぶやくアスカにヨシユアも同意してうなずいた。

「それにダルモア市長はまた孤児院再建を妨害してくるかもしれないません」

「巻き込まれるテレサさんやクラム君達がかわいそうだよ」

クローゼの言葉にシンジは悲しそうな顔をしてつぶやいた。

「うーん、こうなったらダルモア市長を突いて挑発して現行犯逮捕させるか」

シェラザードのつぶやきを聞いて、ジャンがシェラザードに提案をする。

「それよりも、別のアプローチから市長に迫った方が良いんじゃないかな」

「別のアプローチ？」

「リベール通信の記者のナイアルだよ。彼は市長の身边を探っているようだから何かをつかんでいるかもしれない」

「じゃあ、アタシ達が連れて来る！」

ジャンの言葉を聞いたアスカはエステルと一緒にホテルに泊まっているナイアルを迎えに飛び出して行ってしまった。

「まったく、じっとしてられない子達ね」

その行動力にシェラザード達は顔を見合わせてため息をついた。そしてそれほど時間が経たないうちに服を濡らしたナイアルが頭をハンカチでふきながらアスカとエステルに引きずられてやって来た。辛そうな顔をしているナイアルにジャンが気さくに声を掛ける。

「やあ、わざわざ済まないね、ナイアル」

「畜生、こっちは酒を飲んで寝てたっていうのに水まで掛けて起こしやがって」

「叩いても起きなかったから悪いのよ」

「そうそう、水を掛けて起こした方が良いつて言ってくれたのはドロシーさんだし」

ナイアルのぼやきに悪びれた様子も無く言い返すアスカとエステル。

「だからってバケツはないだろう！」

「ごめんなさいね、エステルは加減を知らないから」

「ほらほらアスカ、それぐらいになさい」

まだ続きそうなナイアルとアスカの言い争いをシェラザードが止めた。

「それでナイアル、君は優秀な記者だからダルモア市長について何かつかんでいるんじゃないのかい？」

「俺に飯のタネとなるネタを話せてか？　いくらお前の頼みだからって、そりゃあ無理な話だ」

ジャンが尋ねるとナイアルは取りつく島もない様子で答えた。

「ふん、どうせロクに情報がつかめないもんだから飲んだくれていたんでしょ？」

「何を、こうなったら話してやらあ！」

アスカが挑発すると、ナイアルは集めた情報を洗いざらい話し始めた。

数か月前、ダルモア市長はカルバード共和国の株取引で大損をして借金を背負ってしまったらしい。

そして市長はその借金を返済するために市の予算を横領してしまったそうなのだ。

それを隠すため、市長はマーシア孤児院のある辺り一帯を別荘地にして国内外の貴族に土地を売却し、造成工事に必要だと資金を集める計画を立てたらしい。

「ま、造成工事が行われなかったら市長は詐欺罪として訴えられる事になるんだろうけどな」

「お金を掛けないで工事をして切り抜けるつもりなんですか」

ナイアルの言葉を聞いてヨシユアはそう推理した。

「それで、近々市長邸で貴族向けの別荘地販売についての説明会があるそうだ。だから市長は今逃げるわけにはいかないのさ」

「そうなんだ」

ダルモア市長がすぐに逃亡できないことを知って、シンジ達は安心してため息をもらした。

ジャンは感心したようにナイアルに声を掛ける。

「うん、さすがナイアルだ。それだけの状況証拠があれば、秘書の件も含めて軍の人達を説得できる」

「ちっ、せっかくのスクープだったんだぜ」

「あーあ、結局軍の人達に手柄を持って行かれてしまうのね」

ナイアルとアスカは面白くなさそうな表情になった。

「自分達の手で解決したかったけど、仕方無いよ」

シンジがそう言ってアスカを励ました。

そんなアスカ達にジャンは笑顔で声を掛ける。

「なんの、アスカ君達にも活躍の場は残ってるよ、それもスクープになるほどね」

「本当!?!」

「マジか?」

ジャンの言葉を聞いてアスカとナイアルは目を見開いて驚いた。

＜ルーアンの街　ダルモア市長邸＞

翌日ダルモア市長は自分の邸宅に貴族を招いて説明会を開催した。予定の日より繰り上げて行われたため、参加者は予定より少なかった。

それでも強行したのは、秘書のギルバードが捕まった話が広まる前に契約をまとめて資金を手に入れてしまおうと考えたようだ。

秘書ギルバードが捕まった話が街に広まらなかったのはジャンの作戦でもあった。

秘書逮捕をリベール通信の号外スクープの記事にしようとしていたナイアルは、市長逮捕直後の独占インタビューと言う大きな獲物を用意する事で口止めた。

「まったく市長も小心者なんだから、解りやすい行動を起こしてくれるわね」

エステル達を率いるシェラザードはダルモア市長邸を眺めてそう言い捨てた。

早朝からダルモア市長邸を見張っていたシェラザード達は数人の貴族らしい人間が入って行くのを確認していた。

「シェラザードさん、そろそろよろしいのではないでしょうか？」

「そうね、契約が決まって市長も油断している頃でしょうね」

クローゼに声を掛けられたシェラザードはそう答えた。

ダルモア市長逮捕の時にはクローゼも同行したいと申し出ていたのだ。

「じゃあ、市長邸に乗り込むわよ」

「おーっ！」

シェラザードの号令にエステルが拳を天に振り上げ、^{とき}鬨の声を上げた。アスカもエステルと同じく拳を天に突き上げた。

「女性陣は元気だよね」

「うん、でも僕もダルモア市長を捕まえられとなると正直血が騒ぐんだ」

苦笑したヨシユアにシンジはそう答えた。

突然市長邸を訪問したエステル達6人の遊撃士の姿を見て、使用人達は驚いた。

戸惑いながら執事が市長は来客中で会う事ができないと告げると、シェラザードは緊急の用事で市長に呼ばれてやって来たと告げた。すると執事は納得した様子でエステル達を市長の部屋へと通した。堂々としたシェラザードの振る舞いに執事はシェラザードの言葉を信じて疑わなかった様子だ。

アスカは笑いを浮かべてシェラザードにそっと耳打ちする。

「ハツタリが上手いわね、シェラ姉は」

「あなた達と育ちが違うからね。私は嘘を上手くつかないと生きていけなかったのよ」

「あっ、ごめん」

シェラザードがイヤミで返すと、アスカは自分の発言を恥じて謝った。

自分は小さい頃母親を失ってしまったが、孤児とはならなかった。エヴァンゲリオンのパイロットとしてネルフに手厚く保護された自分はそれなりに恵まれていたのだと思い返した。

シェラザード達が勢い良くドアを開けて説明会が行われている市長の執務室に入ると、部屋に居た市長と貴族達は驚いてシェラザード

達を見つめた。

「何だね君達は、今我々は大事な商談の最中なのだぞ、邪魔をしないでくれたまえ！」

ダルモア市長が少し怒った口調で入ってきたシェラザード達を追い払おうとした。

シェラザードはダルモア市長の言葉を完全に無視して部屋の中央へと歩み出て、訳が解らずぼう然としている貴族達に向かって大きな声で語りかける。

「お集まりの皆様、ダルモア市長との契約は少しお待ち頂けないでしょうか？」

「遊撃士が口を挟む問題ではないだろう！」

ダルモア市長は声を荒げてそう言うが、すでに貴族達はシェラザードの言葉に耳を傾けようとしていた。

そしてシェラザードは貴族達の目の前で、ダルモア市長の企みを順序立てて話し始めた。

ダルモア市長が株取引で大損をして借金返済のため市の予算を使い込んだ事。

その穴埋めをするために進行中だった別荘地建設計画を利用した事。孤児院を立ち退きさせるため秘書に犯罪行為を行わせ、それが露見した事。

最後にダルモア市長が集めた資金を別荘地建設に使うつもりが無い事を結論付けると貴族達は疑いの眼差しでダルモア市長を見つめた。

「みなさん、流言に騙されてはいけません、あの遊撃士は証拠も無く言っているのです」

ダルモア市長は何とか貴族達の気持ちを繋ぎ止めようと誠実な人間を演じて訴えかける。

貴族達はダルモア市長とシェラザードのどちらを信じればいいか迷っている様子でボソボソと話し合うと、ダルモア市長に先ほどの契約締結は破棄にして、契約は後日にして欲しいと困った顔で申し出た。

「そ、そんな……」

膝を折って崩れ落ちるダルモア市長。

そんなダルモア市長にクローゼが近づいて問い掛ける。

「どうしてご自分の財産を使って借金を返そうとは思わなかったんですか？ 例えばこの家は売ればかなりの額ミラになると思いますが……」

「私が先祖代々受け継いだダルモア家の財産を手放したりできるものか」

「自分の家を守るためなら、他人の家を奪っても構わないと言うのですか？ テレサ先生や子供達は思い出の詰まった、あの孤児院を失ったのですよ？」

「うるさい！ この栄光あるダルモア家の邸宅と、あんな薄汚い孤児院を一緒にするなあっ！」

クローゼに向かって怒鳴り返すダルモア市長の醜い形相は、すでに温厚な市長としての面影は全く無かった。

貴族達もダルモア市長の豹変ひょうへんに驚いていた。

「こうなったら、全員地獄に送ってやる！」

ダルモア市長はそう叫ぶと、部屋の奥の壁につけられたスイッチを

押した。

すると壁と一体化していた隠し扉が開け放たれ、地獄の番犬を思わせるような姿をした魔獣が3匹飛び出して来た！

驚いた貴族達は腰を抜かしたり、気絶してしまった。

「信じられない、家の中に魔獣を解き放つなんて！」

「現行犯ね、これで遠慮無く市長を逮捕できるってもんよ」

シンジとは対照的に、アスカは少し嬉しそうに腕を鳴らした。

出現した3匹の魔獣は悲鳴を上げ続ける貴族達に気が付いて襲いかかろうとする。

そのうち1匹をシェラザードとクローゼが立ちはだかつて受け止めた！

残りの2匹はさらに貴族達の方へと近づいて行っただけで、エステルとヨシュア、アスカとシンジが貴族を守りながら戦う事になった。

エステル達が相手をした2匹の魔獣はそれぞれ物理攻撃に弱く・アーツに強い、物理攻撃に強く・アーツに弱いと特徴が分かれていた。それを見抜いたヨシュアはエステルと共に片方の魔獣に物理攻撃を加え、アスカとシンジにはもう片方の魔獣にアーツ攻撃をするように指示した。

弱点を突かれた2匹の魔獣はほぼ同時に大きな鳴き声を上げて倒れ伏した。

「ざっとこんなもんよ！」

勝利宣言をしたアスカ達に、助けられた貴族達がお礼を述べた。

しかしシェラザードとクローゼが戦っていた魔獣が突然素早さを増す。

「くっ、こいついきなり強くなったわよ!？」

「大丈夫ですか、シェラザードさん！」

速さで優位性を持っていたシェラザードは魔獣の爪によって傷を負わされた。

クローゼはシェラザードの回復のためにアーツを詠唱するだけで手一杯となってしまうた。

そこへ他の2匹の魔獣を倒したエステル達が駆けつけアスカとシンジが回復役になり、前衛の4人掛かりで取り囲んで最後の1匹を倒したのだった。

「何だと……1匹1、000万ミラもした帝国産の軍用犬が……」

ダルモア市長は目の前で起こった光景が信じられないと言った様子でつぶやいた。

「さあ年貢の納め時よ、覚悟しなさい！」

「ふっ、お前達遊撃士では私を逮捕することなどできないはずだ」

シェラザードが鞭を構えてそう言うと、ダルモア市長は開き直った。

「アンタバカ！？ 遊撃士はね、民間人に危害を加えようとした人間は誰であれ現行犯逮捕できるのよ！」

「国政に携わる者として、勉強不足だったようですね」

「良いことを聞かせてもらった、つまり現行犯でなければいいのだな？」

アスカとクローゼの言葉を聞いたダルモア市長は不敵な笑みを浮かべて大笑いをした。

そんなダルモア市長の様子を見て、シェラザードがあきれたように尋ねる。

「どうしたのよ、恐怖でいよいよ頭がおかしくなってしまったんじゃないでしょうね？」

「別におかしくなってるなどおらんよ。こうなったら奥の手を使わせてもらうまでだ」

ダルモア市長は短めの魔法の杖のような物を取り出すと、大きな声で言い放つ。

「呪縛の光よ！ 彼の者達の動きを封じたまえ！」

まばゆい光が部屋の中を照らすと、エステル達の体は石像のように硬直してしまった。

「か、体が動かない……」

「いったい、どうなっているのよ！」

シンジとアスカが苦しそうな声を出すと、ダルモア市長は得意気に持っていた杖の解説を始める。

その杖はダルモア家に伝わる家宝であり、一定の範囲内の生物の動きを完全に封じてしまう効果がある。

「こんな強い魔力を持つアーティファクトを個人所有しているなんて、それだけで重罪よ」

「ふん、この杖さえあれば教会の連中も私に手出しできまい」

シェラザードに対して、ダルモア市長は自信満々に言い放つと、今度は導力銃を取り出した。

「目撃者さえ居なければ、後はどうにでもなる」

ダルモア市長はそう言って、動けないエステルに近づきエステルの頭に銃を突きつけた。

エステルの顔が恐怖で青ざめた。

すると、ヨシユアが冷たい低い声でダルモア市長に語りかける。

「エステルに手を出すな……地獄の底まで追いかけて八つ裂きにしておいてやる……」

「ひいっ……!!」

凍てつくようなヨシユアの瞳ににらまれたダルモア市長は目を見開いて、額からは大量の冷汗を流し始めた。

「ヨ、ヨシユア!？」

エステルが驚きの声を上げた。

「く、くそっ、お前から始末してやる……!!」

ダルモア市長は震える手で銃口をヨシユアの方へと向けた。

「だ、ダメっ、ヨシユアが死んじゃったらあたし、どうしたら良いかわからないよ!!」

「ふう、どうやらギリギリ間に合ったようだね」

エステルが目を閉じてそう叫んだ時、銀髪の少年が部屋のドアを開けてゆつくりと歩きながら入ってきた。

その少年はエステル達に黒のオーブメントを預けた少年だった。

「大丈夫、君の愛しい人を殺らせはしないよ」

少年はそう言ってエステル達に向かって微笑みかけた。
ダルモア市長は自在に歩き回る少年の姿を見て、半狂乱になる。

「どうしてお前は動けるのだ！ 不気味なやつめ！」

ダルモア市長の放った銃弾は、少年の前に展開された薄いオレンジ色の光の壁に跳ね返された。

シンジとアスカはそのオレンジ色の光の壁に見覚えがあった。

使徒とエヴァが持っていたATフィールド。

ではこの少年は使徒なのか？

シンジとアスカの頭の中にそんな考えが浮かんた。

「じゃあ、この杖はもらって行くね。さようなら、闇の誘惑に負けた弱者よ」

穏やかな笑顔を浮かべた少年はそう言ってダルモア市長からアーティファクトの杖を取り上げると、部屋から出て行ってしまった。

部屋の中に居た誰もがぼう然として少年の消えた部屋の出口を見つめていた。

そして我を取り戻したエステルとヨシユアがダルモア市長に声を掛ける。

「さてと、よくもひどい手であたし達をいたぶってくれたわね……」

「ただでは済みませんよ、覚悟してください……」

愛しい相手を極限状態にさせられたエステルとヨシユアは他のメンバーより激しい怒りの表情でダルモア市長に向かって武器を構えて詰め寄った。

「わ、私は決して捕まらないぞ！」

ダルモア市長はそう言うと、魔獣が出てきた奥の部屋へと逃げ込んだ。

エステル達もあわてて後を追いかける。

「脱出用の通路があるなんて……！」

先頭に行くエステルが外に出た時、ダルモア市長は船着き場に止めてあったヨットに乗り込み逃げようとしていた。

「逃がさないわよ！」

エステルはエンジンのかかったヨットへと飛び乗った。

続けてヨシュアもダルモア市長のヨットに乗りようとしたが間に合わなかった。

仕方無く他に船着き場に置いてあったボートに乗ってヨットを追いかける。

「ええいつ、しつこいやつめ！」

ダルモア市長は船体の後ろに飛び乗ったエステルに向かって銃を乱射した。

「うわわっ！」

驚いたエステルはバランスを崩し、その体は海へと沈んだ。

「エステルーっ！」

奇跡的にもエステルは潮流に流される前にボートで追いかけてきたヨシユアに引っ張り上げられた。

「あ、ありがとう、助かったわ」

「まったく、1人で追いかけるなんて無茶しないでよ……」

ヨシユアはエステルを怒るよりも、エステルを救出する事ができて安心してゐる気持ちの方が強い様子だった。

エステルは遙か遠くへ逃げてしまったダルモア市長のヨットを見てつぶやく。

「ダルモア市長、逃がしちゃったね」

「エステルだけの責任じゃないよ」

元気が無さそうなエステルをヨシユアは優しく励ました。すると、エステルは笑顔でヨシユアを見つめてささやく。

「ねえヨシユア、助けに来てくれた時の必死なヨシユアの顔、とっても嬉しかったよ」

「な、何を恥ずかしい事を言ってるのさ」

ヨシユアとエステルを乗せたボートが船着き場に戻ると、アスカ達は笑顔でエステルとヨシユアを待っていた。

「ごめん、ダルモア市長を取り逃がしちゃった」

「そっか、それは残念ね」

アスカは口ではそう言うが、表情は明るかった。そんなアスカ達の笑顔を見てエステルは首をかしげる。

「みんなどうしたの？ 逃げられて悔しくないの？」

「それよりもエステルが助かった事の方が嬉しいんだよ」

「エステルが海に落とされたのを見た時はアタシ達もショックで動けなかったわ」

「ヨシユアさんがエステルさんを救い上げるのを見て安心しました」
「みんな、ありがとう……」

シンジとアスカとクローゼの言葉を聞いて、エステルは胸に手を当てて感激した様子だった。

ホッと安心したエステルは気が付いたようにつぶやく。

「あ、そうだ、ダルモア市長から杖を取り上げてあたし達を助けてくれたあの人はどこに行っただろう？」

「姿を消してしまったようですね。まさか、あの方がテレサ先生がおっしゃっていた“天使”なのかもしれません」

クローゼがエステルの言葉を聞いて答えると、アスカは顔をしかめる。

「怪しい存在には間違いないわよ、油断ならないわ」

「そうだね」

アスカとシンジが真剣な顔で見つめ合うと、エステルは慌てて銀髪の少年の擁護に回る。

「あたし達を助けてくれた命の恩人に、そんなこと言っちゃダメよ」
「そうだね、悔しいけど僕達だけだったらやられていたかもしれない」

「そりゃあそうだけど……仕方ないわね」

エステルとヨシユアに言われて、アスカは渋りながらも納得した。シンジも困った顔でため息をついてうなずいた。

「気になる存在なのは確かだけど、今回は命を助けてもらったし、詮索せんさくはしないことにするわ。私達は彼を見なかった、それで良いわね？」

「はい、私も報告する必要はないと思います」

シェラザードのつぶやきに、クローゼも穏やかな笑顔で同意した。

「でも、やっぱり逃げられたのは痛かったわね。あそこまでしぶといとは思わなかったわ」

シェラザードはダルモア市長が乗ったヨットが消えた方向を見て悔しそうにつぶやいた。

＜ルーアンの街 飛行船発着場＞

ダルモア市長を後一步の所で逃がしてしまった事を気落ちしながらジャンに報告していたエステル達だったが、驚くべき知らせが入った。

レイストン要塞を発進したりベール王国空軍の警備艇が海上を逃げるダルモア市長のヨットを捕獲したと言うのだ。

軍の司令官が事件解決に協力した遊撃士達にお礼を述べたいと言うので、エステル達はジャンと共に発着場まで呼び出された。

ついでに決定的瞬間に立ち会えなかったナイアルもせめて記事になるだけのネタを集めようとドロシーを連れてエステル達に同行した。

「やあ、事件を解決した遊撃士とは君達のことだったのか」

発着場に姿を現したのはリシャル大佐とカノーネ士官だった。

「じゃあ、ダルモア市長を捕まえたのはリシャル大佐だったの？」

「たまたまレイストン要塞に居たものだからね」

エステルの質問にリシャル大佐はうなずいた。

「どうやら、女王親衛隊にも連絡が入っていたようですが、私達が止めましたわ。何でこの事件の事を知ったのかしら、不思議な事もありますわね」

カノーネ士官はそう言っただけでクローゼの方をチラッと見つめた。

クローゼは気まずそうに目をそらしてうつむいた。

「それで、ダルモア市長は罪を認めたの？」

「いや、それが彼は自分の意思で行ったものでは無いと言い張っているんだよ」

「えっ、誰か他に市長を操っていた黒幕が居るって事？」

シェラザードの質問にリシャル大佐が答えるのを聞くと、アスカは疑問の声を上げた。

「黒装束の男に出会って、計画を聞いた当たりから、だんだんと自分の欲望が抑えきれなくなって操られるように放火などを指示してしまっただけだね」

「何よそれ、ひどい言い訳じゃない」

「レイヴンの連中と似ているわね、黒装束の男と出会ってからおかしくなるなんて」

リシャル大佐とアスカのやり取りを聞いて、シェラザードは考え込むようにつぶやいた。

「私もダルモア市長が接触した黒装束の男に興味を持って追跡調査をしているのだけど、なかなか情報が集まらなくてね」

「リシャルさん達でも苦戦するほどなんですネ」

ヨシユアがそうつぶやいたところで話が途切れたと察したナイアルはここぞとばかり、リシャル大佐に声を掛ける。

「そうだ、これから大佐を取材させては貰えませんか？ 情報を提供したのに逮捕されたダルモア市長にインタビューができなくて弱っているんですよ」

「君も逮捕に協力してくれたそうだね？ それではこちらも協力しないわけにはいかないな」

「マジっすか!？」

リシャル大佐の答えを聞いたナイアルは嬉しそうな顔になった。

「発着場で立ち話も何ですから、あちらの建物の中で取材をお受けしたらいかがでしょうか？」

「そうだな」

カノーネ士官の提案に、リシャル大佐はうなずいた。

そして去り際にシェラザード達に声を掛ける。

「事件の調査結果は後ほど遊撃士協会宛てに文書で送らせてもらおうよ。君達も報告をしてくれるとありがたいのだが」

「もちろんさせていただきます」

シェラザードの返事を聞くと、リシャール大佐は満足したような表情でカノーネ士官とナイアル、ドロシーと共に去って行った。

リシャール大佐達が去って行くと、シェラザードはエステル達に告げる。

「それじゃあ、私はカシウス先生に黒装束のやつらの事を報告しに戻るわ」

「えーっ、シェラ姉と一緒に居られると思ったのに」

シェラザードの言葉を聞くとエステルはつまらなそうな顔をして不満の声を上げた。

そんなエステルに向かって、アスカが少しあきれたように声を掛ける。

「アタシ達は遊撃士になるための旅をしているのよ？ シェラ姉が居たら修行にならないじゃない」

「ふふ、アスカは解ってるみたいね」

アスカの言葉にシェラザードは満足したように微笑んだ。

「でもシェラザードさんが居ないと少し不安だよ」

「そんな事ないわ、あなた達の戦い振りを魔獣との戦いで見せてもらったわ。見事なものね、合格点よ」

シンジのつぶやきにシェラザードがそう言って太鼓判を押すと、エステル達は照れくさそうな表情になった。

「うん、これだけの活躍をしたのだから、ルーアン支部の推薦状を出さなければいけないね」

「やったわ！」

ジャンもシェラザードの意見を聞いてエステル達をほめると、アスカは喜びの声を上げた。

自分達の頑張りが認められたエステル達も嬉しそうな表情になった。しかし、クローゼだけは悲しそうな顔になってポツリとつぶやく。

「みんな、行ってしまうんですね……」

「クローゼ……」

そのクローゼに気が付いたエステルも落ち込んだ表情になった。すると、クローゼは慌てて笑顔を作って明るい口調でエステル達に話し掛ける。

「出発する日が決まったら教えてください！ ジルとハンス君と一緒に見送りに行きますから！」

クローゼはそう言うのと、勢い良く発着場を飛び出して行った。出会いと別れが必然である正遊撃士を目指す旅だとは言え、クローゼの背中を見送ったエステル達には寂しさが広がるのだった。

第三十三話 エリカ・ラッセル博士の大暴走

くツアイス地方 カルデア隧道^{すいどう}>

少し時間を戻してエステルやアスカ達がルーアン地方で活動しているところ、アガットは一足先にツアイス地方へと向かっていた。

自分が狙われていると知ったアガットは飛行船で移動した場合、逃げ場が無い上に乗客を巻き込んでしまうかもしれないと考えて徒歩で行く決断を下した。

カルデア隧道の途中で誰かが追いかけて来ている気配を感じたアガットは足を止める。

「はあはあ、やっと追い付けました!」

「チビスケ、こんな所まで何やってんだ?」

追跡者の正体がティータだと判ると、アガットは緊張を緩めて息を吐き出した。

「えっとその、アガットさんにツアイスの街まで護衛をお願いしたくて……」

「そんなのルーアンの遊撃士協会に頼みやがれ」

「受付の人に尋ねたら、アガットさんはもう出発しちゃったって聞いて……それで……」

ティータの話聞いて、アガットはウンザリしてため息を吐き出した。

しかしその時辺りに狼の鳴き声が響き渡り、狼型魔獣が姿を現した。その狼型魔獣に2人とも見覚えがあった。

ルーアン地方のバレンヌ灯台の前で襲って来た魔獣だ。

アガットの嫌な予感は的中してしまった。

「ちっ、しつこいやつらだな」

「アガットさん……」

アガットの側に居るティータが怯えた様子でアガットの服をつかんだ。

ルーアン地方とツァイス地方を結ぶカルデア隧道は、廃坑を利用してトンネルにした珍しい街道だ。

街道の両脇に導力灯はあるが、それ以外の場所は真っ暗に近い。

2人は行く手と来た道を狼型魔獣の群れに塞がれてしまい、身動きが取れない。

そして前と違うのはさらに大きな剣を持った黒装束の男が後ろから追いかけて来た事だった。

「さあ、例のオーブメントを渡してもらおうか。そうすれば、命までは奪わん」

「くっ……」

密閉されたトンネルの中では、ティータの導力砲で煙幕を張る方法が使えない。

アガットが直進して狼型魔獣の包囲を突破するにしても、ティータは素早く走る事は出来ない。

黒装束の男は勝利を確信したような口調で言い放つ。

「遊撃士は民間人の保護を最優先とするのではなかったのか？」

「アガットさん、私が追いかけて来なければ逃げられたのに、本当にごめんなさい……!」

ティータは目に涙を浮かべてアガットに泣きついた。

アガットは悔しそうな顔をして胸元からルグラン老人から預かった黒いオーブメントを取り出す。

「こいつを渡せば、おとなしく引き上げるんだろうな」

「ああ」

黒装束の男は事もなげにうなずいたが、アガットはまだ渡すのをためらった。

「早くしろ、俺はお前達の死体からオーブメントを回収しても構わないのだぞ」

「くっ」

「ご、ごめんなさい……」

黒装束の男がそう言うと、アガットは舌打ちしてティータはさらに泣き続けた。

その時、大きな音がトンネル内に轟き激しい土煙がアガット達の方に向かった！

同時に魔獣達の悲鳴が上がる。

「な、何だ!？」

土煙が晴れ渡ると、目の前に現れたのは一台の白い車だった。

その暴走車に何匹かの魔獣はひかれてしまったようだ。

車には『ZCF』と書かれたエムブレムが貼られている。

運転席のドアを勢い良く開けて飛び出して来たのは白衣を着た金髪の女性だった。

金髪の女性は鬼のような形相で叫びながら懷から機関銃を取り出して乱射する。

「私のティータを泣かせるやつはどこだ！」
「うおっ！」

アガットは飛び退いて至近距離からの攻撃を交わした。

「ひええっ!？」

ティータは腰を抜かして座り込んでしまった。

「今だ、行くぞ！」

暴走車の乱入によって魔獣の包囲が解け、近くには機関銃をぶっ放す鬼のような女性が現れたとあって、アガットはティータの手を取って逃げ始めた。

「こらっ、待ちなさい！」

金髪の女性は車に再び乗り込んでアガット達を追跡した。
無視された形になった黒装束の男はアガット達が走り去った方向を見てため息をついた。
魔獣の包囲から脱け出したアガットとティータだったが、さらなる危機を迎えていた。
後ろから白い暴走車がアガットを叩きのめそうと追いかけて来ているのだ。

勢い余って何度も壁に激突しても暴走車は追撃の手を緩めない。

「何者だ、あの金髪鬼は！」

「え、えっと、あの人は……私のおかあさん……です」
「な、何だどっ!？」

アガットの驚きの声は背後から迫る車の音にかき消された。
運転席でハンドルを握るティータの母親の目は車のライトのように
光を放っている。

蛇行していた車はアガットの姿を見つけると、一直線に加速して突
っ込んで来た。

アガットとティータがそれぞれ横に飛び退いて交わすと車は突き辺
りの壁に正面衝突した！

大きな揺れがトンネルを襲う。

そして車のボンネットは潰れてしまっていた。

「あ痛たた……」

運転席からティータの母親がはい出した。

ティータは慌てて母親に駆け寄る。

「だ、大丈夫、おかあさん！？」

「もう、エアレックスの関所まで車で迎えに行くと言っていたの
に、どうして隧道の中に入ったりしたの？」

「それは、えっと……」

「そっか、ママに会いたくて待ちきれなくなったのね！」

鬼のような形相していたティータの母親は、笑顔になってティータ
に頬ずりした。

そんなティータの母親の豹変ぶりをアガットは口を開けて見つめて
いる。

「何ですか、今の大きな物音は！」

「ふえっ、マードック工房長さん！？」

街道の終点、ツァイスの街の入口である中央工房の階段から、地下

のトンネルへと降りて来たマードック工房長の姿を見たティータは驚きの声を上げた。

「エリカ博士、また貴女の仕業ですか！」

「新型車の走行テストをしていたのよ」

マードック工房長の質問に悪びれる事もなく答えるティータの母親であるエリカ博士。

「ツアイス中央工房（ZCF）の技術の粋を凝らした車が……完成してから数時間しか経っていないと言うのに廃車同然に……」

ボロボロになってしまった車を見て、マードック工房長は倒れてしまった。

「おい、どうなってやる！」

アガットは倒れたマードック工房長を支えながらエリカ博士に尋ねた。

すると、エリカ博士はまた目を光らせてアガットをにらみつける。

「そう言えば、あんたはティータをいじめていた男！　よくもティータを泣かせてくれたわね！」

「ち、違うの、アガットさんは私を守ってくれたんだよ！」

ティータはあわてて人差し指をアガットに突き付けて興奮するエリカ博士をなだめた。

そして必死にエリカ博士にさっきの狼型魔獣の襲撃の事を説明した。

「ふーん、まあ一応お礼は言っておくわ。ティータを助けてくれた

様だし」

ティータの話を聞き終わると、エリカ博士は落ち着いた。
と言うよりも、怒ったエネルギーを発散させてすっきりさせた様だった。

「それで俺はルグランの爺さんに言われてラッセル博士に会いに来たんだが……」

やっと用件が言えるとアガットはホッとしたように話を切り出した。

「ふっ、あのじいさんなら外国へ行ってて居ないわ！ だからティータは私が独り占めできるのよ」

「お、おかーさん……」

アガットはティータに頼ずりするエリカ博士にツツコミを入れる気力も無くなってしまった。

「おいおいマジか、じゃあコイツはどうするんだよ」

「私が話を聞いわ、その代わりにあんたは壊れた車の修理を手伝いなさい」

「あんたが壊したんだろ!？」

まだ気を失っているマードック工房長を担ぎながらアガットはエリカ博士達に続いてツァイスの街の入口へと入って行ったのだった。

＜ルーアン地方 エアールレツテンの関所＞

ダルモア市長逮捕の事件はルーアンの街にすぐに広まり、リベール通信でも大々的に報じられ国民達の知る所となった。

コリンズ学園長が市長代理となり後に市長選を行う事を宣言すると、ルーアン市民は混乱する事無く落ち着いた。

しかし学園長と市長を兼任する事になったコリンズ学園長は忙しくなり、ジェニス王立学園の教職員やジルやハンス、クローゼ達生徒会も一丸となってコリンズ学園長を支えた。

エステルやヨシユア、アスカやシンジ達も遊撃士の仕事で出来る範囲で学園長や市長の業務を手伝った。

そしてコリンズ学園長を支えるスタッフ達も増えて仕事に慣れ始めた頃、エステル達はジャンに呼び出されてツァイス支部に行くように勧められた。

出発する事になったエステル達はジル、ハンス、クローゼを学園まで迎えに行き、道中別れを惜しみながらエア||レットンの関所に到着した。

関所で手続きをして、見送りが許されるカルデア隧道の入口でエステル達とクローゼ達は向き会った。

「うわあ、綺麗な滝だね」

「ルーアンって、景色の良いところが多いわね」

シンジとアスカは名勝地と言われるエア||レットンの滝を眺めてため息をついた。

「どうやら、新しい市長候補の人はルーアンの観光を進めて行く方針みたいよ」

「まさか、孤児院を潰して別荘地を建てようとかするんじゃないわよね」

ジルの話を聞いて、エステルは眉をひそめた。

「コリンズ学園長は元の場所に孤児院を再建する事を許可してくれ
たし、そんな事にはならないと思うよ」

ヨシユアがそう言ってエステル心配を否定した。

「孤児院はやっとガレキの後片付けが終わった所だけど、さすがに
建物が出来上がるまでルーアンに居るのは無理だったね」

「本当にこれでお別れなんて残念です」

シンジのつぶやきにクローゼが答えると、アスカは少し顔の表情が
固くなった。

「まあ、二度と会えなくなるってわけじゃないんだ。正遊撃士にな
ったら、自由に行き来できるんだろう？」

「うん、支部の都合にもよるけどね」

ハンスが尋ねると、ヨシユアはうなずいて答えた。

「正遊撃士になれば、また孤児院に顔を出しても良いかな？ ク
ラムにも会いたいし」

「はい、いつでもお待ちしています」

見つめ合って話すシンジとクローゼの姿に、アスカは不機嫌な顔に
なった。

そんなアスカをヨシユアは困った顔でため息をついてなだめる。

「アスカ、せっかく友達と別れる場面なんだからそんな怖い顔をし
ていちゃダメだよ」

「あっ、ごめん」

ヨシユアに指摘されたアスカは謝って表情を緩め、クローゼに向かつて手を差し伸べる。

「クローゼ、またね！」

「はい、アスカさん」

クローゼはホッとした表情でアスカと握手を交わし、シンジは安心して胸をなで下ろした。

笑顔で手を振って去って行くエステル達がカルデア隧道の中に姿を消すと、クローゼは寂しそうな顔でため息をつく。

「ふう、やっぱり近くに居ると意識をしてしまいます……」

そのようなクローゼの顔を見てジルはクローゼに声を掛ける。

「クローゼ、あんたやっぱりシンジ君の事……」

「ううん、私にとってシンジさんは勇気を教えてくださり、優しさを見せて、そして思い出をくれた大切な方です」

クローゼは震える声でそう言うときスカートを手で握り締めてキュッと唇をかんだ。

ジルがクローゼの背中を抱いて穏やかな口調で声を掛ける。

「そんなに強引に気持ちを整理しようとしなさんなって。長い時間が必要な事もあるよ」

ジルの言葉にクローゼは黙ってうなずいた。
ハンスも大きいため息をつくのだった。

第三十四話 アスカ、母への想い

＜ツァイス地方 カルデア隧道＞

クローゼ達に別れを告げて、ツァイスの街へ向かってエステル達は歩いていった。

まだ見ぬ未知の地方への旅に心を弾ませ飛び跳ねながら歩くエステルとは対照的に、シンジは何度も後ろを振り返りため息をついている。

そんな浮かないシンジの様子を見てアスカが少し不安そうな顔で尋ねる。

「シンジ、やっぱりクローゼの事が気になってるのなら、今から引き返せば間に合うかもしれないわよ？」

アスカに言われたシンジはあわてて首を振って否定する。

「違うんだ、なんだか学校生活が懐かしく感じられてさ。僕は毎日学校に通ってたわけだし」

「へえシンジとアスカはそんなに勉強してたんだ、もしかして学者さんにでもなるつもりだったの？」

「別にそう言うわけじゃないけど、受験勉強のためかな」

「受験勉強？」

「中学を卒業して高校に入るためには試験を受けて合格しなくちゃいけないのよ、そのために勉強するのよ」

「高校に入ったら何をするつもりなの？」

「それは大学に入るためにまた受験勉強するのよ」

「じゃあ大学の次はどうするの？」

「……何も考えて無かったよ」

不思議そうに尋ねるエステルに、シンジは戸惑い気味に答えた。
シンジの言葉を聞いたエステルはあきれたようにつぶやく。

「それじゃ別に勉強なんかする必要ないじゃない」

「エステル、遊撃士だって仕事の合間に勉強しなくちゃいけないことはあるよ」

ヨシユアがため息をつきながらエステルにツツコミを入れた。

「確かに勉強は学校に限らずにどこでも出来るよね。流されるままに学校に通っていた僕は無気力に生きていたのかもしれない」

「アタシもプライドだけのためにドイツの大学で工学博士号を取ったけど、ほとんど役に立ってないわね」

シンジが寂しそうに言うと、アスカも少し落胆したようにつぶやいた。

「いいじゃないか、その経験が思わぬ所で役に立つかもしれないし」
「そうだよ、そんな過ぎた事を振り返ってイジイジするよりも前を見つめて歩いて行こうよ！」

ヨシユアに慰められて、エステルに励まされたアスカとシンジは明るい表情になった。

元気を取り戻してしばらく進むと、地面がズタズタに荒れているのに気が付いてエステル達は息を飲む。

「何かが派手に暴れた跡みたいだけど……」

「魔獣でも出たのかな？」

「いいえ、これは自動車のタイヤの跡だわ」

シンジの疑問に答えたエステルの言葉をアスカはそう断言した。
エステルは不思議そうに首をかしげてつぶやく。

「自動車ってナニ？」

「地面を高速で走る鉄製の乗り物だよ。確かクロスベル自治州で多く走っていると思うけど、リベール王国ではほとんど見かけないね」
「面白そう、あたしも乗ってみたいな！」

「エステルが運転したらきつとひどい事になるわよ」

ヨシユアの答えを聞いてエステルが目を輝かせてそう言うと、アスカは冷汗を浮かべながらそうツツコミを入れた。
先に進んでタイヤの跡を追いかけて行くと、自動車は高速で壁に体当たりしながら蛇行している様子が見られた。

それは自動車が何者かを激しく追い回し、体当たりをしようとしていた事を物語っている。

こんな狭い坑道で暴走車に遭遇してしまっただけは逃げ場が無い。

自動車が身近にあるシンジとアスカは交通事故の恐ろしさを知っている。

シンジはアスカと手を繋いで慎重に進んで行く。

自動車をよく知らないエステルとヨシユアもシンジ達の雰囲気にもまれたのか口数は減り厳しい顔つきになった。

「大きな物音が聞こえたらすぐに横穴に飛び込む、良いわね？」

実際に車が猛スピードで突っ込んできたならそれで間に合うのか疑問だったが、アスカの言葉にエステル達はうなずいた。

エステル達はビクビクした足取りで街道をゆっくり進む、そして終点が見えた所で車が見当たらないとホッと胸をなで下ろして深く息を吐き出した。

しかし破壊の爪跡が残るツアイスの街の入口を見てエステル達は息を飲む。

階段付近の壁が大きく凹んで重くて固い塊が衝突した跡が残っているのを見て、シンジは青い顔でつぶやく。

「これってすごい勢いで車が正面から激突した跡だね？」

「ええ、きっと車は潰れちゃっていると思うわ」

アスカはシンジの言葉に強くうなずいた。

だが周囲に車の残骸は見られない、きっと衝突事故から時間が経って片付けられてしまったのだろう。

エステル達はツアイスの街入口と書かれた看板の側にある階段を登ってツアイス中央工房の地下通路へと足を踏み入れた。

<ツアイスの街 市街地>

中央工房の地下通路に入ったエステル達は案内板に従ってエレベータへ乗り込み、1階へと移動した。

マルガ鋳山のリフトしか見た事の無いエステルは部屋ごと移動するエレベータに驚いた。

エレベータから降りたエステル達はツアイス中央工房の正面玄関へと出た。

受付嬢のヘイゼルに遊撃士協会の場所を教えてもらって外に出ると、街の中央にある長いエスカレータにエステルはまた目を丸くしている。

「エレベータにエスカレータなんて、ネルフの事を思い出しちゃうわね」

「そうだね、ツァイス中央工房の大きさはネルフ本部の建物に比べたら小さいんだろうけど」

アスカに話し掛けられたシンジはそうつぶやいて遠くを見つめる目になった。

「シンジ、ファーストの事を思い出したんでしょう」

「あつ、ご、ごめん……」

「別に謝らなくても良いわよ、アタシだってそうなんだから」

レイはジュースの自動販売機があるリフレッシュコーナーや職員用の食堂、パイロットの控室で休憩している姿は見た事が無い。だからレイと話す場所は必然的に移動中のエレベーターやエスカレーターになっていた。

「ねえ、あの影のような使徒の中がこんなに良い世界に通じているんだったら、ファーストの乗る零号機も引っ張り込んで上げたらよかったかもね」

「どうして？」

「アタシ、この世界に来てエヴァの呪縛から解放されて、さらにいろいろな人達に出会ったから、こうして心を開く事が出来たんだと思う」

「そうだね、遊撃士になって生きるって目標も出来たし」

「だからファーストもこっちの世界に来れば、もっと笑ったり生き生きと明るくなれるんじゃないかって思うのよ」

「うん、僕も綾波の笑顔を見た事があるけど、とっても穏やかで綺麗だったな」

「どうせアタシの笑顔は綺麗じゃないわよ!」

シンジがそう言ってウツトリとした表情になると、アスカは不機嫌

な顔になって思いっきりシンジのすねを蹴り飛ばした。

エステルとヨシユアはいつものケンカが始まったと生温かい目で見つめている。

そしてエステル達は遊撃士協会へと到着した。

ツアイスの遊撃士協会の受付には着物のような服を着た落ち着いた感じの黒髪の女性が静かに立っている。

「あの、あたし達は……」

「貴方達はエステル、ヨシユア、そしてアスカにシンジね」

「えっ、どうして僕達の事が分かったんですか？」

エステルが声を掛ける前に黒髪の女性が先に言い当てたので、シンジは驚いた。

「ルーアン支部のジャンから詳しく貴方達の特徴を聞いていたからよ」

「なるほど」

「私はツアイス支部の受付を担当するキリカ、お見知り置きをお願いするわ」

「よろしくお願いします」

キリカが折り目正しいあいさつをすると、ヨシユアもお辞儀をした。そしてキリカはエステル達に書類を差し出して転属手続きをするように勧める。

「貴方達の仕事なんだけど、特に緊急の仕事は入っていないの。だからまず街を回りながら細かい仕事をこなしてもらおう事になるわ」

「はい、分かりました」

キリカの言葉にシンジはうなずいた。

「と言ってもこの街の仕事のほとんどは中央工房に関わるものになると思うわ」

「どういう事？」

「だから、この街の市長は中央工房の責任者であるマードック工房長が兼任している特殊な事情があるの。そうだ、まずはマードック工房長に着任のあいさつをしてらっしゃいな」

アスカの質問にキリカは答えると、紹介状を書いてエステルに手渡した。

「その紹介状を渡せば工房長さんは会ってくれるはずよ」

「ありがとうございます！」

紹介状を受け取ったエステル達は善は急げとばかりに中央工房に戻り、マードック工房長との面会を果たす。

「なるほど、君達が今度ツァイス支部へやって来たと言う遊撃士の子達か。人手が増えてくれて助かるよ」

「ツァイスの街の仕事って忙しいんですか？」

「普段から研究に必要な材料を採取してもらったり、運搬車の護衛などはあるんだが、今はあの厄病神のせいで余計な仕事が増えてばかりだよ」

ヨシユアの質問に答えたマードック工房長は深々とため息をついた。その姿はたつぷりと哀愁が漂っている。

「厄病神って？」

「この街の外れに住んでいるラッセル博士の一家だよ。特にアルバード博士とその娘のエリカ博士は周囲の迷惑などをまるで考えてい

ない。完成したばかりの導力自動車をスクラップにしようわ、怪しげな実験で街中のオーブメントを停止させてしまうわ……ブツ……」

アスカが尋ねると、マードック工房長は遠い目をしてうわ言のように話し続けた。

マードック工房長の視界には目の前に立っているエステル達存在などまるで目に入っていない様子だった。

その普通でない感じにエステル達は冷汗を流す。

「じゃあ、あたし達はこれで失礼します」

「待ってくれ、君達にお願いがある！」

立ち去ろうとするエステルの肩を逃がさないとはかりにマードック工房長は強くつかんだ。

「な、なんででしょう？」

エステルはひきつった笑みを浮かべながらマードック工房長に尋ねた。

「ラッセル博士の家へ行って様子を見て来てくれないか？　そして危険な実験が行われそうだったら実力行使をしても阻止して欲しい」

「は、はい、分かりました」

マードック工房長の不気味な迫力に圧倒されたエステルは青い顔をしながらうなずくのだった。

＜ツアイスの街　ラッセル博士の家＞

マードック工房長の依頼を引き受けて中央工房を出たエステル達は、遊撃士協会に居るキリカに報告した後にラッセル博士の家に向かう事にした。

町はずれにあるラッセル博士の家は屋根に何個もアンテナがありいかにも奇妙奇天烈な外見きみようきてれつをしていた。

住人達もきつと普通ではないのだろうと感じたエステル達は冷汗をかいた。

「ここに住んでいる博士って導力自動車を暴走させて壁にぶつけて壊したって人だよ、大丈夫かな？」

「なによシンジ、ビビってるの？　まったく情けないわね」

「別にそんなわけじゃ……」

「しっ、静かに」

シンジとアスカの言い争いはヨシユアに止められた。

「どうしたの？」

「家の中から人の声が聞こえて来たような気がする」

エステルが尋ねるとヨシユアはそう答えた。

ヨシユアの言う通りアスカ達が耳を澄ますと機械音に混じって人の叫ぶような声が耳に届く。

「シンジも聞こえた？」

「うん」

「こんにちわー、遊撃士協会の者ですけど、どなたかいらっしゃいませんか！」

エステルが玄関のドアの前に立って呼びかけても返事が無い。

「鍵は掛かっていないみたいだ、開けてみようか？」

ヨシユアの問い掛けにエステル達がうなずくと、ヨシユアは静かに扉を開けた。

すると部屋の中では滝のような汗をかいたアガットが大声を張り上げながら黒いオーブメントに向かって何度も剣を振り下ろしていた。

「アガットさん!？」

「お前ら!？」

顔を合わせたエステルとアガットはお互いに驚きの声を上げた。

「あの、お姉ちゃん達はアガットさんのお知り合いの方ですか？」

固まっているエステル達に側に居たティータが声を掛けた。

シンジは柔和な笑みを浮かべてティータの質問に答える。

「うん、僕達はアガットさんの後輩で準遊撃士なんだ」

「あれ、少し前にマノリア村の近くで会わなかった？」

「あ、もしかしてあの時の遊撃士のお姉ちゃん達ですか？」

アスカに指摘されて、ティータは気が付いたようだった。

その時の事を思い出したティータはアスカ達に頭を下げて謝る。

「あの時はごめんなさい、お姉ちゃん達にお礼も言わないで駆けて行ってしまった」

「アタシも驚いちゃったけど、別に気にしてないわよ」

アスカは笑顔でティータを赦した。

「良かったあ」

アスカの言葉を聞いたティータは安心して胸をなで下ろした。
そして軽くお辞儀をして自己紹介をする。

「私、ツアイスの工房で見習いをしているティータです、よろしく
お願いします」

そんなティータの仕草を見たアスカはそっとつぶやく。

「アタシもティータみたいな可愛い妹が欲しいな」

「アスカってばあたしに甘えてばかりだもんね」

「へえ、アスカお姉ちゃんってそうなんですか」

「こらっ、何を言ってるのよエステル！」

アスカは顔を真っ赤にして反論した。

和やかな雰囲気になりかけた所に、白衣の金髪鬼——エリカ・ラッセル博士が帰って来てしまった！

エリカ博士はエステル達に囲まれているティータを見ると、目を怒らせて叫ぶ。

「あんた達、寄ってたかってティータに何をしているの！」

いきなり怒り最大値の形相で現れたエリカ博士にエステル達は目をむいて驚いた。

「さてはティータがあまりにも可愛いからって誘拐しに来た悪の手

「先ね！」

「違うんです、僕達はマードック工房長さんに言われて様子を見に来ただけなんです」

青い顔をしたシンジはあわててエリカ博士に向かって言い訳をした。

「何ですって、私の実験の邪魔をしに来たのね！」

シンジの言葉を聞いたエリカ博士はますます激昂した。

「バカ、火に油を注いでどうするのよ」

「ご、ごめん」

アスカはそう言ってシンジの口をつねった。

「お母さん、お姉ちゃん達に乱暴しないで！」

ティータが思い切り叫ぶと、エリカ博士はあわてた表情になってティータをなだめる。

「別にあたしは暴力を振るおうってワケじゃないのよ、ただティータがいじめられたんじゃないかと心配で……」

「お姉ちゃん達は遊撃士なんだよ、悪い人達じゃないよ」

「ごめんなさいティータ、機嫌を直して」

「お母さんが分かってくればいいんだよ」

「ありがとう、ティータってば本当に可愛い子ね」

さっきとは打って変わり穏やかな笑顔になってティータを抱き締めるエリカ博士の姿にエステル達は開いた口が塞がらなかった。
シンジは羨ましそうにエリカ博士とティータの親娘を見つめるアス

カの様子に気が付いたがそのアスカの瞳はとても悲しげで、声を掛ける事は出来なかった。

すっかりエリカ博士の怒りのオーラが無くなった所で、ヨシユアが尋ねる。

「それで、アガットさんはずいぶんと疲れているようですけど、何をしていますか？」

「この黒いオーブメントを切断して中を調べようと思って、特殊合金製の剣を振らせているのよ」

ヨシユアの質問に対してエリカ博士が答えて指差したのは、エステル達が謎の銀髪の少年から受け取り、ラッセル博士に届けるためにアガットに預けていた黒いオーブメントだった。

床に置かれた黒いオーブメントの表面には大きな傷が付いている。

「ほら休憩はもう十分でしょう？ 無駄話してないでさっさと続きをやりなさい！」

「あーっ、分かったよコンチクショウ！」

エリカ博士に急かされたアガットは苛立った様子で大剣を黒いオーブメントに向かって振り始めた。

部屋の中には何本も刃こぼれしたり曲ったりしてダメになった大剣が転がっている。

「最初は導力器分析機に掛けたんですけど、いきなり黒いオーブメントが鈍い光を放って周囲のオーブメントを停止させてしまったんです。その範囲はかなりの広さに及んでしまいました」

「なるほど、マードック工房長が言っていた導力停止現象ってその事だったのね」

ティータの説明にエステルは納得したようにうなずいた。
エリカ博士は面白くなさそうにアヒル口にしてつぶやく。

「直ぐに元に戻ったんだから気にする事無いじゃない」

「でも突然コンピュータの電源が落ちちゃったから徹夜でデータを打ち直しだって中央工房のみんなは泣いてたよ？」

「うわあ、それは大変そうね」

ティータの言葉を聞いて、エステルは同情するように大きく息をついた。

「それでオープメントを切断して中を見てみようって事になったんですけど、導力ノコギリは使えないからアガットさんに頼んで斬ってもらおうとしたんです」

「グズグズしているから1ヶ月経ってもあの程度しか傷を付けられてないのよ」

「1ヶ月も!？」

エリカ博士のぼやきを聞いたエステルは驚いて目を丸くした。

「でもアガットさんは遊撃士の仕事が空いた時に来てくれるので、続けてと言うわけじゃないんですけど……」

「アガットさん、僕達のせいですいません」

「これは俺が引き受けた仕事だからな、構わないさ」

謝るヨシユアに対してアガットはそう答えた。

「ふん、あんたが壊した導力車の分までギリギリと働いてもらおうわよ!」

「ああ、そうかい」

今まで何度言い返しても無視されてアガットの方が諦めたのだろう、アガットはウンザリとした顔でため息をついた。

「さあ、もう工房長の用事は済んだんでしょう？ 私は新しいオーブメントの試作で忙しいの！」

エリカ博士はエステル達を邪魔者だとばかりに追い払おうとした。しかし、今まで黙っていたアスカがエリカ博士の前にそっと歩み出て声を掛ける。

「あの、もしよろしかったら、オーブメントを見せて下さいませんか？」

「あんた、私のオーブメントに興味があるわけ？」

「はい、とても興味がありますけどやっぱりダメでしょうか……？」

こんなしおらしい態度で他人に頼み事をするアスカは珍しい。

エリカ博士は上目遣いで自分を見つめて来るアスカをしばらく凝視すると、グッと親指を上げる。

「合格！」

「へっ？」

アスカはワケが分からず、目を丸くした。

「私の助手をしてくれるなら、見せてあげても良いわよ」

「ありがとうございます」

エリカ博士の言葉を聞いたアスカはぱあっと明るい笑顔になって頭を下げた。

エステルはアスカに近づいて耳打ちをする。

「ちょっと、いきなり助手をするなんてどういう事？」

「マードック工房長さんに言われたじゃないの、危険な実験をしようとしたら止めてって」

「なるほど、アスカって頭良いわね」

エステルはアスカの言葉に感心したようにうなずいた。

どうやらエリカ博士は旧型の生体探知器に反応されなくなる機械を使っても反応する新型の生体探知器を開発中のようだ。

この種類の機械は結局いちごっことになってしまいが、セキュリティの問題もあるので放って置くわけにもいかない。

導力オーブメントの事はほとんど分からないエステルとシンジは雑用に回されたが、相応の知識があるアスカとヨシユアはサポートを果たしていた。

「アスカちゃんてば、本当に飲み込みが早いわね。正式な助手になってみない？ 私の娘にしたいぐらいだわ」

「そんなに褒めないで下さいよ」

エリカ博士に頭を撫でられたアスカは顔を赤くして照れ臭そうにしていた。

夕方を迎えるとシンジが作った料理で夕食となり、夕食の席でもアスカはエリカ博士と楽しく話していた。

そして夜も更けたのでエステル達はマードック工房長への報告は明日に回す事にして遊撃士協会へと帰る。

「……随分と長い仕事だったのね」

「すいません、つい長居をしてしまいました」

帰りを待っていた受付のキリカにそう言われたヨシユアは謝った。

「それが依頼主の希望だったのなら構わないけど、他の細かい仕事もある事も意識しておいてね」

「はい」

今日の所はおとがめ無しと言う事で、エステル達は2階に上がった。

「あはは、明日もエリカ博士の見張りをしていたら、キリカさんに怒られちゃうわね」

アスカがおどけた感じでそう言って笑い飛ばすと、エステルが真剣な表情になってアスカに告げる。

「アスカ、自分のやりたい事がみつかったんなら正直に言ってもいいんだよ」

「そうだよ、遊撃士になるだけが人生ってわけじゃないだろうし」

「ヨシユアまで何を言い出すのよ!？」

アスカは心の底から驚いた様子で聞き返した。

「アスカがエリカ博士の助手をしている時、とても楽しそうに見えるたからだよ」

「あたしはオーブメントの事はからっきしだけど、アスカならオーブメント技師になれるんじゃないかな」

ヨシユアとエステルがそう言うと、アスカは首を強く横に振って否定する。

「アタシとシンジは遊撃士になるって誓いを立てたのよ、だから途

中下車する様な事なんてしたくないわ!」

「そうだったのかい?」

「うん、カシウスさんの家に来た日の夜にね」

ヨシユアに尋ねられて、シンジは少し顔を赤くして答えた。

あの時シンジがアスカの前で大泣きしてしまったのは、アスカとシンジだけの秘密だった。

アスカは寂しそうに目を細めてそっと話し始める。

「アタシのママもね、エリカさんと同じ博士だったの」

「そうなんだ」

アスカの言葉を聞いてエステルは納得したようにうなずいた。

「だからアタシが大きくなるまでママが生きていたらこんな感じだったのかなって、憧れちゃったのよ。心配させてごめんね」

「良かった、僕はアスカとまだずっと一緒に居られるんだって安心したよ」

「ジ、シンジってば、鈍感なくせして、人をドキドキさせるような事を言うのね!」

シンジの発言を聞いたアスカは顔を真っ赤にして言い返すと、シンジも言葉のニュアンスに気が付いたのか顔を赤くした。

「じゃあ明日も遊撃士の仕事を頑張ろう!」

エステルの言葉にアスカ達はうなずき、清々しい気持ちで眠りに就いた。

第三十五話 エルモ村湯けむり事件簿 〈エリカ・ラッセル博士の消失〉

〈ツアイスの街 遊撃士協会〉

朝起きたエステル達にキリカが紹介した仕事は、またもや中央工房絡みの仕事だった。

昨日はラッセル家でのエリカ博士の実験に付き合わされて他の仕事が出来なかった事もあり、断ろうとも考えたが内容を聞いてみると護衛の仕事なのだという。

「ツアイスの街の南、トラット平原を越えた場所にエルモ村があるの。その温水ポンプが故障してしまつて温泉に入れなくなつてしまつてみんな困っているのよ」

「温泉があるの!？」

キリカの話を聞いたアスカが目を輝かせて叫んだ。

「それが温水ポンプを修理するために中央工房から技師を派遣しなくてはいけないんだけど、街道には魔物が出るから貴方達に護衛をお願いしたいのよ」

「任せて、温泉のためならアタシ達は協力を惜しまないわ!」

二つ返事で引き受けてしまったアスカに、エステルとヨシユアは驚いた様子だった。

エステルがアスカのテンションの高さに少し困惑した顔でアスカに尋ねる。

「温泉、温泉って騒いでるけど、そんなに温泉って良い物なの?」

温泉に入った事のないエステルにはピンと来ないのか、エステルはアスカに素朴な疑問をぶつけた。

するとアスカはエステル達に対して温泉について解説を始めた。

アスカは日本に来て初めて温泉を知ったと言うのにすっかり温泉が好きになってしまったんだなとシンジは苦笑した。

「ふーん、たくさんの人が一緒に入れるお風呂なんだ、それは楽しそうだね」

「ええ、エステルもきつと気に入ると思うわよ」

「でもアスカはシンジと温泉に入った事があるんだよね、裸を見られるなんてちょっと恥ずかしくなかった？」

「バ、バカね、温泉は男湯と女湯に別れているのよ！」

エステルが顔を赤らめて尋ねると、アスカもあわてて顔を真っ赤にして否定した。

「そっか、ちょっとドキドキしちゃった」

アスカの答えを聞いてエステルはホッとした表情で胸に手を当てた。

「私はエルモ村までの“護衛”の仕事を貴方達に頼んだはずなんだけど」

黙ってアスカの話す様子を見守っていたキリカがそう言うと、アスカはあわててキリカに温泉に入りたいと頼み込んだ。

キリカはそんなアスカに対して少し表情を和らげてため息をつく。

「仕方無いわね、旅館に一泊しても構わないわ。だけど、その分後でたっぷり仕事をしてもらうから」

「ありがと、キリカさん！」

キリカの言葉を聞いたアスカはぱあっと明るい表情になってエステルと手を取り合って飛び上がって喜んだ。

シンジとヨシユアは顔を見合わせて苦笑した。

キリカの話によると、護衛対象の技師は遊撃士協会で合流する予定らしい。

エステル達はじっと工房技師がやって来るのを待った。

「おはようございます」

しばらくして遊撃士協会に姿を見せたのはティータだった。

「あれ、エルモ温泉へ行くのってティータだったの？」

「あ、そうなんですけど、えっと……」

笑顔のエステルに声を掛けられたティータだったが歯切れが悪い。

「どうかしたの？」

心配そうな顔をしたシンジに言われて、ティータは話を切り出す。

「あの、エルモ村へはアガットさんがついて来てくれる事になりました」

「あら、そうだったの。では、こちらから遊撃士を派遣する必要は無くなったと言うわけね」

キリカが淡々とした口調で話すと、アスカの顔が真っ青になる。

「ちょっと、それじゃあアタシ達が温泉に行くって話はどうなるのよ!?!?」

「アスカ、ワガママ言っちゃいけないよ」

シンジが困った顔でアスカをいさめた。

ティータは自分がとてもマズイ事をしてしまったのだと思い、アスカに平謝りをする。

「アスカお姉ちゃん、本当にごめんなさい」

「別にティータが悪いわけじゃ無くて、あたし達が勝手に盛り上がっただけだから」

エステルはそう言ってティータをなだめた。

そしてティータは気まずそうな顔をしながら遊撃士協会を去って行った。

「……と言うわけだから昼間のうちは街の中での依頼をこなして、夕方になったらエルモ村へ行きなさい」

「えっ？」

ティータが立ち去った後、キリカが静かな口調で言うと、アスカは驚いた顔で聞き返した。

「アガットと2人きりにしてあげた方がティータも嬉しいでしょう？」

「なるほど、そう言う事ね」

キリカの言葉にアスカは納得したようにうなずいた。

「えっ、でも彼女はまだ12歳じゃないですか、それにアガットさんとは歳が離れてるし……」

「恋心を抱くのに年齢は関係無いわよ、それに10年経ったら歳の

差なんて問題無くなるわ」

あわてるシンジに向かってアスカがあきれた顔でため息をついた。

「10年後のティータか……どうなっているんだろうね」

エステルをつぶやきに、その場に居合わせたメンバーは成長したティータの姿に思いを馳せた。

しかし全員ある人物を想像してしまったようで、否定する様に激しく首を横に振る。

「多分ティータの性格は父親になんじゃないかな」

「そうよね、それなら大丈夫よ」

ヨシユアの意見にエステルは強く賛同した。

そしてティータの護衛の仕事がキャンセルになったエステル達は掲示板に寄せられた仕事をこなす事となった。

＜ツァイス地方　トラット平原道＞

ティータと2人でエルモ村に向かう事になってしまったアガットは頭を抱えた。

エリカ博士に知られたら止められると解っているティータはエリカ博士が徹夜の実験で疲れて寝ている間にこっそりと出て来たのだ。護衛の仕事はティータから頼まれた時、アガットはエステル達に代わってもらおうかと思ったのだが、先ほど遊撃士協会に行ったティータの話によるとエステル達はすでに別の仕事が入っているらしい。まさかティータがウソをつくはずもないと思っていたアガットはテ

イータの話を信じてエルモ村へ向けて出発した。

憂鬱なアガットの雰囲気を感じたのか、ティータが不安そうな顔でアガットに尋ねる。

「アガットさん、私が護衛をお願いして迷惑でしたか？」

「別にそんな事は無えけどよ……」

アガットがそう答えると、ティータは華やいだ笑顔になってアガットの手を握った。

「おい……」

「あっ、ごめんなさいアガットさん」

ティータは謝ってアガットの手を離れたが、表情は変わらず笑顔のままだった。

どうしてティータがそんなに上機嫌なのかアガットは解らなかったが、また黒装束のやつらに狙われたら自分がティータを守らなければならぬとアガットは気持ちを引き締めた。

街を出てしばらく経っても襲撃を受ける気配は無かった。

エリカ博士が追いかけて来る様子もなく、アガットはたまに遭遇した魔獣を蹴散らして進んで行った。

「あの、アガットさんはどうして遊撃士になったんですか？」

ティータに尋ねられたアガットは自分が遊撃士になった切っ掛けを思い出して不機嫌な顔になった。

定職に就く事が出来ずに不良のリーダーとなっていたアガットは、カシウスにこらしめられて遊撃士の道を目指す事になったのだ。アガットにして見ればあまり他人に知られたくない過去だ。

「あー、まあ、なんつうか、自分の腕で食っていくためだな。俺は両親を早くに亡くしてガキの頃から村長の世話になっていたし」

「ご、ごめんなさい、私ってば余計な事を聞いてしまって……」

「構わねえさ、俺も両親の事はほとんど覚えてねえんだ」

アガットはそう言ってティータの頭を撫でた。

頭を撫でられたティータは照れ臭そうに顔を赤くしながらも嬉しそうに目を閉じた。

「おっとすまねえな、つい妹の時と同じクセが出ちゃった」

「アガットさん、妹さんが居るんですか？」

「……ああ」

「妹さんとは、たまに会ってたりするんですか？」

「ここ何年かは、帰って無いからな」

「そんな、きっと妹さんはアガットさんに会えなくて寂しがってますよ、帰って顔を見せてあげて下さい」

「そうだな」

ティータが強く訴えると、アガットも納得した様子でうなずいた。

「もう、エルモ村まで半分を過ぎちゃいました。話をしているとあつという間ですね」

「このまま何事もなければ良いけどな」

アガットはティータが寂しそうにため息をついた事には気が付かなかった。

「助けてくださーいっ！」

アガットとティータが急いで悲鳴の聞こえた方向へ駆けつけると、

ソバカスが印象的な眼鏡を掛けたピンク色の髪をした若い女性が魔獣に囲まれていた！

「私を食べてもおおいしくなくいですよ……睡眠時間は毎日10時間しかとって無いし、お野菜が多目の食事なので血液はサラサラしてるし……ああっ、それってヘルシーでお徳って事なのかも!？」

「おいおい……」

魔獣と向き合いながらもそんな事を口走る女性にアガットは緊張を緩まされたようにため息を吐き出した。

「今助けますね、えーい！」

ティータが導力砲を放つと、魔獣は驚いて飛び退いた。

魔獣達の包囲が崩れた所にアガットとティータが突入し、襲われていた女性を守るポジションで戦闘を開始した！

襲っていた魔獣はこの辺りに生息する野良で、アガットとティータの連携の前にあっさりと倒されてしまった。

「ありがとうございます、助かりました……」

「まったく世話を掛けさせやがって」

ウンザリした顔でアガットがそう言うと、女性は頭をかきながらごまかし笑いを浮かべる。

「私、リベール通信のカメラマンでドロシーと言うんですけど、良い風景をカメラで撮りたいなあと思ったら夢中になって村から出ちゃいました」

「女の人一人で外に出るなんて危ないですよ」

「ごめんなさい、デートの邪魔をしちゃったみたいで」

「ふえっ!？」

ドロシーがそう言って謝ると、ティータは驚きの声を上げた。
アガットはあきれたような顔でドロシーに言い放つ。

「おいおい馬鹿言うな、どこがデートに見えるんだよ」

「じゃあ、ご兄妹ですか？」

「それも違う」

「そうですよ、アガットさんは私の遊撃士の仕事で私を護衛しているだけですよ!」

ティータは思いつき不機嫌な顔になって怒鳴るように否定した。
突然怒りだしたティータにアガットが不思議そうな表情になる。

「おい、どうしたんだ？」

「別にどうもしません、早くエルモ村に行きましょう!」

「まったく、街を出る時は機嫌が良かったのにわけが解らねえぜ…」

…

アガットはそう言いながら先に歩き出したティータを追いかけるのだった。

<ツアイスの街 中央工房>

遊撃士協会の掲示板に書かれた仕事のうち、エステル達はまず最初に『臨時司書の募集』と言う仕事を選んだ。

中央工房の資料室で本を整理するだけの簡単なお仕事ですと書かれていた。

「この仕事ならすぐ終わりそうね」

「そうだね、4人でやればそう時間はかからないと思うよ」

エステルとヨシュアの言葉に、アスカとシンジも同意見だった。

しかし、エステル達を待っていたのは中央工房の様々な場所に顔を出さなくてはいけない未返却の本の回収の仕事だった。

「ちょっと、話が違うじゃないの！」

アスカは机を叩いて反論したが、結局依頼を拒否する事は出来ず、エステル達は手分けして本の借主の所へ行く事になった。

「じゃあシンジはラッセル博士の家をお願いね」

「はあ!？」

突然アスカに頼まれたシンジは驚いて聞き返した。

「アタシ、やっぱりエリカさんの事がちょっと苦手と言うか……」

「僕だって、エリカさんに本の返却を迫るのは嫌だよ！」

「こんな時に頼りになるのはシンジしか居ないの、お・ね・が・い」

「頑張れシンジ！」

「健闘を祈るよ」

「とほほ……」

エステルとヨシュアにまで裏切られたシンジは肩を落としてラッセル博士の家へと向かった。

貧乏くじを引くのはいつも自分だとすぐに諦めてしまう所がシンジの長所でもあり短所でもあった。

「ごめんくださーい」

シンジが声を掛けても家の中から返事は無かった。

「もしかして、まだ寝ているのかな？」

シンジは徹夜で仕事をしていたミサトが次の日の昼まで寝ていた事があるのを思い出した。

しかし手ぶらで帰るわけにも行かない。

迷った末にシンジは玄関のドアに手を伸ばす。

「あれ、鍵が空いている……あの、エリカさん」

声を掛けながらシンジはラッセル博士の家に入るが研究室にエリカ博士の姿は無い。

シンジは階段を登るが、書齋にエリカ博士の姿は見当たらなかった。書齋の奥の部屋は寝室だが、シンジは寝室のドアを開けて中を確かめるのはためらった。

「……こっさり本を返してもらって、後で断っておけばいいよね」

シンジは直接エリカ博士と顔を合わせなくて済んでホッとしていた。回収する目的の本は、書齋の隅に無造作に山積みされていてほこりを被っている。

長い間使われていない証拠だ。

これなら黙って持って行ってもエリカ博士は気付きもしないだろう。シンジは本を回収するといそいそとラッセル博士の家を後にした。その後シンジが嬉々としてアスカに報告すると、アスカはあきれた顔でため息をつく。

「バカ、何を得意気になっているのよ。それに、黙って持って来たのはマズかったんじゃないの？　気が付いたらエリカさんが逆襲に来ると思うわよ」

「やっぱり、ダメだったかな？」

シンジが青い顔になると、アスカは明るい顔で笑い飛ばす。

「ま、シンジが回収したなんて夢にも思わないだろうから大丈夫よ。借りたのを忘れてまた借りに来るんじゃない？」

「そうだよね」

アスカの言葉を聞いて、シンジは安心した様子で胸をなで下ろした。昼を過ぎた頃に頼まれていた本の回収は終了し依頼主への報告を終えたエステル達だったが、さらに本の回収を頼まれてしまった。しかも今度はツァイスの街の外へ貸し出された本の回収だった。

「他の仕事のついででも良いって言ってくれているんだから、ここは押さえて」

「そうだよ、エルモ村に貸し出された本もあるから、温泉に入る時にでも探せば良いじゃないか」

ヨシユアとシンジの2人掛かりの説得でアスカは怒りの矛を収めた。

「それじゃ、少し早いけど今日はエルモ村へ行っちゃおうか？」

「そうね、ティータも温泉を直してくれているかしら」

エステルの提案にアスカも賛成し、いよいよ温泉に入れるかもしれないと思ったアスカは自然と機嫌が良くなっていた。

エルモ村へ向かうと遊撃士協会へ立ち寄ってキリカに報告すると、キリカは警告をエステル達に与える。

「少し前にエリカ博士の姿が家に見当たらないと言う情報が入ったわ。エリカ博士はフィールドワークにも慣れているからその点は心配ないのだけど、別の意味で心配ね」

「あつ、もしかしてアガットさんとティータが2人で出掛けた事に気が付いて……!?!?」

キリカの話聞いたエステルは驚いた顔をして声を上げた。

アスカは冷汗を浮かべながらも樂觀的な意見を述べる。

「でもさすがにエリカさんもアガットさんを半殺しにする程度で止めるとは思うけど」

「ええ、遊撃士協会は基本的に民事不介入だけど、もし民間人が巻き合いになるような事態になってしまっではいけないから」

「分かりました」

キリカの心配する言葉にヨシユアはうなずき、エステル達は急ぎ足でエルモ村へと向かう事になった。

＜ツアイス地方 エルモ村＞

エステル達がトラット平原を横切ってエルモ村に着いたのは、西の空が赤く染まり始めた時間だった。

村の入口の竹林を抜けた所にアガットが立っているのを見つけたエステル達は、安心してため息をつく。

「良かったアガットさん、無事だったんですね」

「ふう、余計な心配だったみたいね」

「……どういう意味だ？」

シンジとアスカのつぶやきを聞いたアガットは不思議そうな表情で聞き返した。

エステル達がエリカ博士が姿を消した事をアガットに説明すると、アガットは事情を理解した様だった。

「なるほどな、だがこっちは来てねえぞ」

「それじゃあフィールドワークに行ったのかな？」

「きつとアガットさんを倒すための新兵器開発のための材料を採りに行ったのよ」

「おいおい、物騒な事を言うな。本当になったらどうする」

アスカの言葉を聞いて、アガットはウンザリした表情でぼやいた。

「それにしてもアガットさん、どうしてこんな所に立っていたんですか？」

「どうやら、あいつを怒らしちゃったみたいだ」

ヨシユアの質問にアガットは困った顔で答えた。

アガットの話によると、エルモ村に着く少し前につむじを曲げてしまったティータをなだめるために村の土産物屋に入って買い物をしたのだが、店主に恋人同士だとひやかされたのだと言う。

その前にもドロシーにデートをしていると勘違いされてウンザリしていたアガットはそんな事はないだろうと強く否定したらティータは激しく怒り出してしまったらしい。

アガットの話聞き終わったアスカはあきれた表情でため息をつく。

「まったく救いようのない鈍感ね、2回もティータの気持ちを踏みにじるなんて」

「そういわれてもな……アイツは俺の事を兄みたいに思ってた憧れているだけだろう？」

「だからって、ありえないなんて言われたら傷つくわよ」

「でも俺はアイツの事を妹みたいにしか見れねえんだ」

「まあ、アガットさんの方からティータを追いかけるようになったらシスコンじゃ済まない問題になるわね」

「うるせえ、俺はシスコンでもねえ！」

アガットはアスカに向かって怒鳴って力説した。

「そう言う時は、軽くはぐらかすぐらいにするのが大人の男性の振る舞いってものよ」

「へえ、さすがアスカだね！」

エステルが感嘆の声を上げた。

調子に乗ったアスカは自慢気に語る。

「年上の男性に恋をした女の子はね、グツとおませになるものなのよ」

「アスカも加持さんに憧れていたから、気持ちが理解できるんだね」
「前から気になっていたけど加持さんって誰？」

シンジの口からもれた言葉を聞いて、エステルが尋ねた。

「えっと、僕達よりも15歳ぐらい歳の離れたお兄さんって感じの人かな」

「ふーん、俺とチビスケよりも歳が離れていそうじゃないか」

「こらシンジ、おしゃべりな男も鈍感と同じく嫌われるわよ！」

アガットがニヤケた顔でアスカを見ると、アスカはシンジの耳を思

いっそ引つ張った。

「あれ、エステルお姉ちゃん達も来てたんですか？」

エステル達が話している所に、ティータが姿を現した。

今までずっと機械をいじっていたからなのか、服には油のにおいが染み付いている。

「ティータ、温水ポンプの修理は終わったの？」

「はい、さっき終わりました」

「やった、夕食前に温泉に入れそうね！」

ティータの返事を聞いたアスカは飛び跳ねて喜んだ。

アガットはティータの前に歩み出て、ぎこちない口調で謝る。

「ティータ、さっきはその……済まなかったな、お前の気持ちも考えてやれずに」

「もう良いですよ、アガットさんが私の事を名前と呼んでくれただけで嬉しいです」

「そ、そうか？」

すっかり機嫌が直ったティータにエステル達の間にもホッとした空気が流れた。

「そうだ、温泉でアガットさんの背中を流してあげますね」

ティータの発言を聞いたエステル達はあわてた。

「温泉って混浴なの？」

「あ、室内は男湯と女湯に別れているんですけど、露天風呂は共通

なんです」

少し顔を赤くしたアスカが質問すると、ティータはそう答えた。

「ふう、それなら良かったわ」

「でも露天風呂だと、お互い裸を見られちゃうんだよね？」

アスカはホッとため息をついたが、温泉を知らないエステルは顔を赤くしたまま尋ねた。

「大丈夫よエステル、そういう所ではタオルを体に巻き付けて入るんだから」

「そっか」

やっとエステルも安心した表情になるのだった。

＜エルモ村 温泉＞

温泉に入れなくなったと言うウワサもあったおかげで旅館は空いていて、予約を取っていないエステル達もすんなりと泊まる事が出来た。

部屋に荷物を置いたエステル達はさっそく楽しみにしていた温泉に入る。

女湯はエステル、アスカ、ティータ、ドロシー、男湯はヨシユア、シンジ、アガットの貸し切りのような状態だった。

男湯のヨシユア達は会話も無くお湯の温かさを楽しんでいたが、静かな男湯には女湯からの賑やかな声がダイレクトに聞こえて来る。

「うわあ、アスカお姉ちゃんって腰が細いです！」

「本当、モデルさん顔負けのくびれですね。今度ヌード写真を撮らせて頂けませんか？」

「そんな、たいした事無いわよ」

シンジはアスカとユニゾンダンスの特訓をした時にアスカの細い腰に手を回して踊った事を思い出した。

そして遊撃士になり運動をするようになってアスカはさらに体重が減ったと話していたのを聞いていたシンジは服を着ていないアスカのウエストはどのくらい細いのだろうかと妄想を始めてしまった。

「エステルだって、いつもラフな格好をしているけど出ている所は出てるじゃない」

「そうですね、グラマラスですよ。健康的なフトモモに私も魅了されちゃいます」

「そうなのかな、あたしはあんまり意識した事無いけど。この胸だつて筋肉だろうし」

「アスカちゃんだって、揉んでもらえばエステルちゃんぐらい大きくなるかもよ」

「やめてよドロシーさん、酔っ払ったおじさんみたいな手つきで触るのは」

エステル達の会話を聞いたシンジは頭に血が昇ってしまいそうになり、ヨシユアとアガットが心配して湯船から引っぱり出した。

「おいおい、大丈夫かよ」

「すみません……」

シンジは鼻を押さえながら謝った。

「あつ私、そろそろアガットさんの背中を流しに行きますね」

「あたしも露天風呂に行ってみたい！」

「ちよつと、エステルそんないい加減なタオルの止め方じゃ暴れた時取れちゃうわよ！」

女湯の会話を聞いたアガットとヨシユアは顔を見合わせて立ちあがって腰にタオルを巻いた。

「僕はもう少し休みます……」

「そうした方が良さそうだな」

「じゃあ行ってくるよ」

休憩をするというシンジを残してアガットとヨシユアは露天風呂へと向かう。

この後ちよつとしたハプニングとショックな事件が待ち受けているなど、誰も予想していなかった……。

第三十六話 アスカとエステルの誘惑、その真意は

＜エルモ村 紅葉亭＞

念願の温泉に入ったエステル達は気分も最高潮になってもおかしくはなかったのだが、エステルは憂鬱な表情でため息をついていた。ティータはオロオロとした様子で、アスカは困った顔でエステルの背中を見つめていた。

ドロシーはそんなエステルの雰囲気を感じていないのか、のんきに和菓子をおぼっている。

「あたしってそんなに魅力が無いのかな？」

「そ、そんな事無いですよ」

「多分、ヨシユアが鈍感なだけだってば」

落ち込んだエステルがポツリとつぶやくと、ティータとアスカはフオローを入れた。

露天風呂に入った時、やはりアスカの心配した通りヨシユアの目の前でエステルの胸元に巻き付けていたタオルが緩んで外れてしまったのだ。

しっかりと裸をヨシユアに見られてしまい叫んで胸を手で隠したエステルだが、ヨシユアは顔色を変えず、まるで幼い妹に対するかのようにエステルのタオルの乱れを直した。

エステルの叫び声を聞いた紅葉亭の女将が駆けつけるなど騒ぎになり、迷惑を掛けてしまったと気まずい雰囲気になってしまったエステル達はあわてて温泉を出た。

そして部屋に戻ったエステルは寂しげに窓から月を眺めてため息をついていたのだった。

「せっかく羽を伸ばせると思ったのに、すっかり気分が盛り下がっちゃったわね……」

「エステルちゃんの事だから、美味しい夕ご飯を食べれば機嫌が直るよ」

困った顔でつぶやくアスカをドロシーは笑顔で励ました。

「でも、エステルお姉ちゃんがそんな簡単に立ち直るとは思えませんけど」

「そうよ、乙女心は繊細なのよ!」

ティータの意見にアスカも同意してうなずいた。

夕食の時間になり、少し元気の無いエステルをアスカは少し強引に連れ出した。

しかし夕食を食べ始めてしばらくすると、アスカの心配をよそにエステルはすっかり機嫌を直してしまった。

ヨシユアにあの料理が美味しい、この料理がおいしいと陽気に勧めている姿を見てアスカは力が抜けて肩を落とす。

「ドロシーさんの言う通り花より団子だったのね……」

「まあエステルが元気になったからよかったじゃないか」

シンジは気を落としたアスカを慰めた。

「それにしても、浴衣を着ていると苦しくてたまらないわね、あんまり食べられそうにないわ」

「そういえば、アスカが浴衣を着る所なんて初めて見たよ」

「お風呂から出た後に紅葉亭の女将さんに着付けてもらったのよ」

アスカの話によれば、エステルとドロシーも試着したらしいのだが

夕食をお腹一杯食べられなくなるので辞退したらしい。
その話を聞いたシンジは苦笑した。

「どう、アタシは黒髪じゃないから浴衣なんて似合わないかな？」

「そんな事無いよ、アスカは何を着ても可愛いつて！」

「なんだか適当に褒められてるって気がするのよね、しっかり見てから言いなさいよ」

アスカに言われてシンジはじつくりとアスカの浴衣姿を見つめた。
食い入るように見つめられ、アスカは少し顔を赤らめながらシンジの言葉を待つ。

「もしかして、腰に何か巻いているの？」

「ええ、アタシってウェストが細すぎるからタオルの上から帯を締めてるんだけど、そんな所は鋭いのね。もっと浴衣の色とか柄だとかを褒めなさいよ」

「ご、ごめん」

「でもシンジもアタシと会った頃の朴念仁じゃ無くなって来たってわけね」

そう言っアスカはどことなく嬉しそうに微笑んだ。

シンジはアスカがタオルを巻き付けている事を知ってもしかして下着も着けていないのではとその後夕食の最中もアスカの胸元にチラチラと視線を送っていた。

夕食が終わった後エステル達は卓球場へと移動し、軽く汗を流してそれぞれの部屋へと戻った。

部屋に戻って寝る支度をしていたシンジは、再びアスカに露天風呂へと入らないかと誘われた。

「でも、夜も遅いし女将さんの迷惑になるんじゃない？」

「シンジはエステルが叫んじゃった騒ぎのせいで露天風呂に入り損ねちゃったんでしょう？　女将さんをお願いして入れるようにしてもらったの」

「そっか、じゃあヨシユアとアガットさん呼んで来るね」

部屋に戻ろうとしたシンジの腕をアスカがつかんで引き止める。

「ちょっと、余計なのが居たら落ち着いて入れないじゃない」

「ええっ!？」

叫び声を上げそうになったシンジの口をアスカが手で押さえる。

「そんなに驚く事無いでしょう、それともシンジはアタシとお風呂に入るのが嫌なの？」

「別にそうじゃないけど……」

「じゃあ用意して露天風呂まで来て、ヨシユア達に見つからないようにね」

アスカの言葉にうなずいたシンジは顔を赤くしてドキマギしながら部屋の中へと戻った。

「シンジ、アスカは何の用だったの？」

「い、いや何でも無かったよ。じゃあ、僕は夜風にでも当たって来るから……」

シンジは機敏な動きでヨシユアの目を盗み、タオルをつかんで部屋を出て行くとした。

しかし別のタオルを手に持ったヨシユアに呼び止められる。

「そのタオルはまだ湿ってるよ、こっちなら乾いている」

「あ、ありがとう」

ヨシユアにはお見通しだったようだ、シンジは顔を赤くしてヨシユアにお礼を言って出て行った。

露天風呂にシンジが行くと、タオルを体に巻いたアスカが湯船のふちにある岩に仁王立ちしてシンジを待っていた。

背中から月明かりを背に受けているアスカの姿はいつものアスカより美しく見える。

「あれ、灯りは点いていないの？」

「良いじゃない、月明かりだけの方がムードがあって」

月が出ているとはいえ、低い場所はほとんどが影になってしまっていた。

シンジは足元を注意しながらアスカに近づいた。

途中で腰に巻いたタオルが引っ掛かりほどけそうになったシンジはあわてて手で押さえた。

アスカはそんなシンジの様子を見て笑い飛ばす。

「どうせ暗くて見えないから大丈夫よ」

湯船にたどりついたシンジは、体を温めるために湯船へと入った。夜風で体が冷えているはずなのに、顔だけはすでに火照っている。シンジが湯船に入ると、立っていたアスカも湯船に身を沈める。

「せっかく温泉に入っているのに、やっぱりタオルなんか着ていると邪魔で仕方無いわね」

「アスカ!？」

いきなりそうつぶやいて体に巻いていたタオルに手を掛けたアスカ

を見て、シンジは驚きの声を上げた。

「多分物影で暗くて見えないわよ」

「いや、しっかり見えるって!」

「じゃあシンジがあっちを向けばいいじゃない」

「まったくアスカってば勝手なんだから……」

シンジはそう言ってアスカに背中を向けた。

しかしアスカは一気にシンジとの距離を詰めて接近する。

「シンジ、怒っちゃった?」

「ちよつとアスカ、近いし当たってるって!」

アスカの吐息と温かい感触を感じたシンジは硬直させたまま叫んだ。

「触ってるのはアタシの腕よ、何を想像したのかしら?」

「アスカ、からかうのもやりすぎじゃないかな、さっきから様子が変わだよ。いったいどうしたの?」

「ふう、解っちゃったか」

アスカは降参したようにため息をついたが、シンジの肩に置いた手は離さなかった。

以前は体の接触を嫌がっていたシンジだったが、アスカの手を振り払う事はしなかった。

「シンジ、ファーストの事はどう思っているの? 今でも好きだったりする?」

「えっ、どうしていきなり綾波の事を聞くの?」

「ルーアン地方でテレサ先生に“天使”の特徴を聞いた時、もしかしてファーストもこの世界にやって来たんじゃないかって、そんな

予感がしたのよ」

「……まさか、使徒に飲み込まれたのは初号機と弐号機だけだし、それに綾波なら僕達に声を掛けるはずだよ」

シンジはアスカの言葉を聞いてバカバカしいと思ったのか鼻で笑った。

だがアスカは真剣な口調で話を続ける。

「やっぱりシンジは離れてしまってもファーストの事を信じているのね」

「別にアスカが考えている好きとは違う、一緒に使徒と戦った仲間だからだよ」

「アタシね、あれからたまに不安になるのよ。シンジがファーストに再会して優しくされたら、ファーストの所へ行ってしまうんじゃないかって。せっかくシンジと気持ちを通じ合ったと思ったら今度は自分だけを見て欲しいなんて、アタシってワガママよね」

アスカが涙声でそう言うと、シンジは後ろを向いたまま強く左右に首を振る。

「それぐらいどんな女の子だってそう思うんじゃないかな」

「アタシがシンジを繋ぎ止めるにその……色仕掛けでもしようかなって……」

「だからアスカは僕を誘うような事をしたんだね」

「でも離れたら、シンジもファーストの事みたいにアタシを忘れちゃったりするのかしら」

以前としてアスカの声は震えていた、まるで本当にシンジとの別れを予感しているかのようだった。

「大丈夫、僕はアスカ以外の子を好きになったりしないしアスカから離れる事もないよ。あの日の夜に約束したじゃないか」

「じゃあもう一度約束して、お願い」

「うん、約束するよ」

シンジはそのアスカの不安を振り払うかのように強く言い切った。

「ありがとうシンジ、じゃあおやすみ」

アスカはそう言うのと、シンジの首筋に軽く唇を当てて立ち去った。シンジもアスカが去った後、首筋に手をやって感触を思い返す。

「アスカってば、心配性だな。でも、安心してくれたみたいで良かった」

シンジはこの時自分の意思でアスカと離れるとは夢にも思っていなかった。

そのころエステルも浴衣を着てヨシユアに会いに訪問していた。

「どうしたのエステル、浴衣なんか着て」

「アスカが着ているのを見てあたしも着てみたくなっちゃった。ねえ、ちよつとその辺を散歩しない？」

「いいけど、多分露天風呂にはシンジとアスカが居ると思うよ」

「あつ、あたしは別に庭園で充分なのよ」

エステルは少しあわてて首を左右に振った。

ヨシユアはエステルの後について部屋を出たが、前に行くエステル歩き方がいつもと違う事に気が付いた。

しばらく歩いて立ち止ったエステルは振り返ってヨシユアに尋ねる。

「どうかな、あたしの浴衣姿って？」

「うん、とっても似合ってるよ」

ヨシユアが穏やかな笑顔を浮かべてそう言うと、エステルはウンザリとした顔でため息をつく。

「あたしってそんなに色気が無いかな？」

「えっ？」

エステルに尋ねられて、ヨシユアは驚いて聞き返した。
するとエステルは顔を赤くしてモゴモゴと話出す。

「その……チラリズムって言うのを試してみたんだけど……」

「きつとエステルが悪いんじゃないかって、僕がいけないんだよ」

ヨシユアが暗い顔でうつむくと、エステルは心配そうに声を掛ける。

「もしかしてヨシユアは病気なの？」

「ええっ？」

エステルに尋ねられたヨシユアは驚いてしまった。

「アスカに聞いたんだけど、そういう病気があって、それを治療するためのお薬やお医者さんも居るらしいって」

「別に病気ってわけじゃないけど」

「それじゃあ、ヨシユアは女性に興味が無い種類の人なの？」

「……それもアスカから聞いた話？」

「うん」

エステルの返事を聞いたヨシユアは深々とため息をついた。

どう説明をしたらいいものかとしばらく悩んでからゆっくりと話し始める。

「僕とエステルは上手くやっているじゃないか、だから無理して関係を変えたりなんかする事は無いと思う」

「そ、そうよね、でもアスカとシンジはどうなるんだろう?」
「どうって?」

「その、あつあつ、とか、らぶらぶ、とか、いちゃいちゃしちゃったりなんかして……」

エステルは顔を赤くしてそう言うと、ヨシュアは苦笑する。

「2人とも自然な感じで付き合っているんだし、誰かが見ている前でそんな事はしないと思うよ。遊撃士としての振る舞いもあるだろうし」

「そうよね、変な事を気にしちゃってごめん!」

エステルは謝ると、笑顔になってヨシュアに手を振って立ち去って行った。

しかしエステルが去るとヨシュアは暗い顔でポツリとつぶやく。

「ごめんエステル、僕はまだ君の事を直視できないんだ……」

<ツァイスの街 遊撃士協会>

エルモ村で一泊したエステル達は紅葉亭の女将にお礼を言って、テイータとアガットと一緒に朝一番でツァイスの街に戻る事になった。お土産屋に寄れない事をアスカは少し不満そうだったが、シンジが

またエルモ村に来る事が出来るじゃないかとなだめた。

ドロシーは朝が弱いのか起こしても起きなかったので、女将に事付けを頼んで紅葉亭を出た。

アスカもエステルも悩みが解決したのか実に晴れやかな表情で帰り道を歩く。

「お姉ちゃん達、何か楽しそうですね」

「ふふ、そうみえる？」

ティータに尋ねられたアスカは含みを持たせた笑顔でそう答えた。

エステル達は遊撃士協会で報告し、ティータとアガットと別れる予定だった。

しかしエステル達はキリカから衝撃的な事実を聞かされる。

なんとエリカ博士の姿が昨日から見えないと言うのだ。

アスカはあまり心配していない様子で自分の意見をキリカに述べる。

「エリカ博士の事なんだから材料集めに夢中になって一晩ぐらい帰って来ないとかあるんじゃないの？」

「そうだと良いのだけど。あなた達、ラッセル博士の家に行って調べて来てくれないかしら」

「分かりました」

キリカの頼みをヨシユアはすぐに了承した。

「お母さん……」

「大丈夫よ、ひょっこり帰って来るって」

少し不安そうな顔になるティータをアスカは笑顔で慰めた。

ラッセル博士の家に到着したエステル達はまず周囲の様子を確かめた。

街の中にあるラッセル博士の家は足跡を追いかけるのは難しいが、家の入口を確認すると、争ったような足跡は無い。

入口のドアに鍵が掛かっていない事は自分で姿を消したかどうかの判断材料にはならなかった。

エリカ博士はあまり戸締りとか気にしないので貴重な発明が盗まれたらどうするのかとマードック工房長の頭痛のタネのなっていたようだ。

家の中に入って最初に異変に気が付いたのはアガットだった。

エリカ博士に預けてあるはずの黒いオーブメントがどこにも見当たらないと言うのだ。

「シンジ、昨日本を取りに来た時はあの黒いオーブメントはここにあったの？」

「そう言えば、無かったかもしれない」

「んもう、頼りないわね」

エステルは質問にあいまいに答えたシンジに、アスカはため息をついた。

そして1階の詳しい調査をエステルとヨシュア、アガットに任せたアスカとシンジはティータと2階の書斎に上がった。

部屋の状況はシンジが本の回収に来た時と変わらないように見えた。

「部屋に誰も居なかったから、僕は物音をたてないように静かに本を持ち帰って来たんだ」

「その時、エリカさんは寝室で寝ていたの？」

「それが、僕は寝室に誰か居るような気配は感じたけど帰ってしまったからわからないんだ」

シンジの返事を聞いたアスカは興奮してシンジの胸倉をつかむ。

「シンジ、どうしてその時よく調べなかったのよ！　きっと奥の寝室に犯人がきつと潜んで居たのよ！」

「だって寝ているエリカさんを起こしてしまったらマズイと思って」
ブツブツとシンジが言い訳をすると、アスカは青筋を立てて怒鳴る。

「黒いオーブメントが無かったんでしょ！？　そこで異変を察知しなさいよ、遊撃士としての洞察力が足りないわ！　エリカさんに何かがあったらシンジのせいよ！」

「ご、ごめん、僕が悪かったんだ……」

シンジは真っ青な顔になって、うつむいてしまおうと見ていたティータがアスカの前に割って入る。

「アスカお姉ちゃん、そんなにシンジお兄ちゃんを責めないで！」

「あっ……そうよね言い過ぎたわ、許してシンジ」

アスカが謝ってシンジの肩に手を掛けると、シンジは気持ちを落着けて顔を上げてアスカに微笑む。

「もう気にしてないよ、それだけアスカがエリカさんを心配してるって事だよね」

「ティータが一番辛いはずなのに、気を遣わせちゃったわね」

シンジとアスカが寝室に入ると、エリカ博士がベッドで寝ていた形跡があった。

だが抵抗して乱れた様子が見ると、エリカ博士は眠らされたまま連行されたのではないかと推測された。

「数人がかりでエリカさんは連れ去られたんだ、くそっ、僕があ

時に気が付いていれば」

「いいえ、シンジに見つかったらきつとシンジも連れ去られるなり口封じのために何かされていたかも……シンジが無事でよかったわ」

アスカはそう言うのと安心したようにシンジの手を握った。

1階に戻ってアガット達に寢室を調べた結果を報告すると、腕組みをしたアガットは悔しそうな表情でぼやく。

「畜生、あのオーブメントを狙っていたやつらが居るのに俺がここを離れちまった」

「どういう事ですか？」

ヨシユアに質問されたアガットはエステル達にルーアン地方から自分をつけ狙う狼型魔獣の群れとそれを率いる黒装束の男の話をした。エステル達もクローネ峠の国境で狼型魔獣の群れと戦った事があり、黒装束の男とは顔を合わせているので相手の強さは分かっている。

「じゃあ、お母さんはあの人達に連れて行かれちゃって事ですか？」

「オーブメントも無くなっているし、間違いないだろう」

ティータの推測にアガットは確信を持つてうなずいた。

エリカ博士がさらわれた事に疑いが無くなると、ティータは緊張の糸が切れたように声を上げて泣き始める。

アスカはそんなティータの頭を胸に抱き手で背中をさすって安心させようとしていた。

「こうなったら遊撃士協会に報告して目撃情報を集めるしかないな」
「分かったわ」

アガットの提案にエステルはためらうことなく賛成し、エリカ博士

誘拐事件として公開捜査が行われる事になった。

しかしエリカ博士を白昼堂々と連れ去っている場面を目撃されていたらとうの昔に騒ぎになっているわけで、街の人々から有力な証言は得られなかった。

「寝ている大人の女性を目立たないように連れ去るなんて、無理難題よ」

アスカは半ばヒステリーになってそうぼやいた。

「空でも飛んで行っちゃったとか？」

「それは逆に目立つと思うけど……」

エステルの意見にシンジは冷汗を浮かべてツツコミを入れた。考えを巡らせていたヨシユアはポツリとつぶやく。

「もしかして街のみんなの目には見えていたんだけど、見えていなかったのかもしれない」

「なるほど、敵も考えたな」

アガットはヨシユアの言葉で気がついたのか、感心したようにうなずいた。

エステルは訳が分からないと言った様子でヨシユアに尋ねる。

「ねえ、いったいどういう事？」

「多分行ってみれば犯人の目星は付くと思うよ」

エステルの質問にヨシユアはそう答えて、中央工房へと向かうように提案するのだった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7882q/>

アスカ・ブライト！ ～空の軌跡～

2011年11月17日17時37分発行